一般国道
２１０号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第９集

鷹取五反田遺跡 I

福岡県浮羽郡吉井町大字鷹取所在遺跡の調査

上巻

―弥生時代　本文編―

1998

福岡県教育委員会

一般国道
２１０号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第９集

鷹取五反田遺跡 Ⅰ

たかとりごたんだ

福岡県浮羽郡吉井町大字鷹取所在遺跡の調査

上巻

―弥生時代　本文編―

1998

福岡県教育委員会

（1）鷹取五反田遺跡全景．1（南東から　1990）

（2）鷹取五反田遺跡全景．2（上が北　1990）

（1）鷹取五反田遺跡全景．3（北から　1994）

（2）鷹取五反田遺跡全景．4（北西から　1994）

(1) 二次加熱を受け黒斑が消失した弥生土器（表　91号竪穴住居跡出土）

(2) 二次加熱を受け黒斑が消失した弥生土器（裏　91号竪穴住居跡出土）

序

福岡県教育委員会では建設省九州地方建設局の委託を受けて、昭和55（1980）年度から一般国道210号浮羽バイパスの建設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。調査は現在も継続中ですが、浮羽町・吉井町におきましては、部分的な一般供用も行なわれています。

この報告書は、昭和62（1987）年度に発掘調査を実施した浮羽郡吉井町大字稲崎所在の稲崎Ａ・Ｂ遺跡、および平成２・５・６（1990・1993・1994）年度に発掘調査を実施した吉井町大字鷹取所在の鷹取五反田遺跡の記録です。当該地は筑後川と耳納山麓に挟まれた沖積平野に位置する肥沃な地勢であり、今回の調査によって、前者ではおもに古墳時代の、後者ではおもに弥生時代中期と古墳時代後期の集落遺跡を確認することができました。

本書が、地域史の研究や文化財保護思想の普及と活用の一助になれば幸甚に存じます。

発掘調査および出土遺物の整理作業や報告書作成にあたって、ご協力いただいた多くの方々に対しまして深甚の謝意を表します。

平成10年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　光安　常喜

例　言

1．この報告書は、昭和62（1987）年度および平成２・５・６（1990・1993・1994）年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録で、一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第９集である。

2．本書に記録した稲崎Ａ・Ｂ遺跡は、一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財発掘調査第６・７地点にあたり浮羽郡吉井町大字新治字塚本・高畑に、鷹取五反田遺跡は一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財発掘調査第９地点にあたり浮羽郡吉井町大字鷹取字五反田・中ノ坪に所在する。

3．鷹取五反田遺跡の報告は平成９・10（1997・1998）年度の２カ年に分けるが、平成９年度は弥生時代遺構編、平成10年度は弥生時代包含層編および古墳時代以降編からなる。

4．本書に掲載した遺構図は、稲崎Ａ・Ｂ遺跡については小池史哲が、鷹取五反田遺跡については井上裕弘・木下修・小田和利・水ノ江和同・日高正幸・矢野和昭が作成した。

5．本書に掲載した遺構写真は、稲崎Ａ・Ｂ遺跡については小池が、鷹取五反田遺跡については井上・木下・小田・水ノ江が、遺物写真は北岡伸一を中心に井上・木下・小池・水ノ江が撮影した。なお、空中写真はフォト大塚ならびに空中写真企画に委託した。
　なお、使用した方位はすべて座標北である。

6．出土遺物の整理・復原作業は九州歴史資料館において岩瀬正信の、実測作業は文化課太宰府事務所において平田春美の、図面浄書作業は文化課太宰府事務所と文化課甘木事務所の豊福弥生・塩足里見の指導と協力によりそれぞれ実施した。

8．出土遺物・写真・図面等については、すべて九州歴史資料館および福岡県文化課太宰府事務所に保管している。

9．本書の執筆・編集は稲崎Ａ・Ｂ遺跡については小池が実施した。鷹取五反田遺跡については、執筆は井上・木下・小田・水ノ江がそれぞれに分担し、編集は水ノ江が実施した。

本　文　目　次

[鷹取五反田遺跡（上巻）]

Ⅰ　はじめに
1．調査の経緯と組織……1
2．遺跡の位置と歴史的環境……6
Ⅱ　発掘調査の記録―弥生時代編―
1．遺跡の概要……9
2．竪穴住居跡……11
3．掘立柱建物跡……91
4．甕棺墓……94
5．石棺墓……124
6．土壙墓……127
7．貯蔵穴……128
8．土　坑……135
9．円形周溝状遺構……189
10．谷　部……205
11．その他の遺物……205

[稲崎A・B遺跡（下巻）]

Ⅰ　はじめに……213
Ⅱ　稲崎A遺跡の調査……216
Ⅲ　稲崎B遺跡の調査……223
Ⅳ　おわりに……226

巻頭図版目次

巻頭図版1　(1)　鷹取五反田遺跡全景.1（南東から　1990）
　　(2)　鷹取五反田遺跡全景.2（上が北　1990）
巻頭図版2　(1)　鷹取五反田遺跡全景.3（北から　1994）
　　(2)　鷹取五反田遺跡全景.4（北西から　1994）
巻頭図版3　(1)　二次加熱を受け黒斑が消失した弥生土器（表　91号竪穴住居跡出土）
　　(2)　二次加熱を受け黒斑が消失した弥生土器（裏　91号竪穴住居跡出土）

図版目次

［鷹取五反田遺跡（下巻）］

図版1　(1)　鷹取五反田遺跡第1次調査全景.1（北から　1990）
　　(2)　鷹取五反田遺跡第1次調査全景.2（北西から　1990）
図版2　(1)　鷹取五反田遺跡第1次調査全景.3（上が南　1990）
　　(2)　鷹取五反田遺跡第1次調査全景.4（上が南　1990）
図版3　(1)　鷹取五反田遺跡第3次調査全景.1（北から　1994）
　　(2)　鷹取五反田遺跡第3次調査全景.2（北西から　1994）
図版4　(1)　鷹取五反田遺跡第3次調査全景.3（上が南　1994）
　　(2)　鷹取五反田遺跡第3次調査全景.4（上が南　1994）
図版5　(1)　1号竪穴住居跡（北西から）
　　(2)　2号竪穴住居跡（北東から）
図版6　(1)　3号竪穴住居跡（北から）
　　(2)　4号竪穴住居跡（北東から）
図版7　(1)　11号竪穴住居跡および3号土坑.1（西から）
　　(2)　11号竪穴住居跡および3号土坑.2（南東から）
図版8　(1)　12号竪穴住居跡（南東から）
　　(2)　13号竪穴住居炉跡（北東から）
図版9　(1)　1～15号竪穴住居跡（北東から）
　　(2)　15号竪穴住居跡（東から）

図版10 (1) 16号竪穴住居跡（北から）
(2) 17号竪穴住居跡（北から）
図版11 (1) 18号竪穴住居跡（北西から）
(2) 19号竪穴住居跡（南から）
図版12 (1) 21号竪穴住居跡（北から）
(2) 21号竪穴住居炉跡（南西から）
図版13 (1) 23号竪穴住居跡（東から）
(2) 23号竪穴住居跡屋内土坑（北から）
図版14 (1) 28号竪穴住居跡（南から）
(2) 28号竪穴住居跡遺物出土状態.1（北から）
図版15 (1) 28号竪穴住居跡遺物出土状態.2（南から）
(2) 28号竪穴住居跡遺物出土状態.3（南西から）
図版16 (1) 29号竪穴住居跡（南から）
(2) 29号竪穴住居跡土層断面（南西から）
図版17 (1) 29号竪穴住居跡遺物出土状態.1（北東から）
(2) 29号竪穴住居跡遺物出土状態.2（南から）
図版18 (1) 30号竪穴住居跡（南から）
(2) 32号竪穴住居跡（南から）
図版19 (1) 34・35号竪穴住居跡および1号甕棺墓（東から）
(2) 35号竪穴住居跡および1号甕棺墓（東から）
図版20 (1) 62号竪穴住居跡（北から）
(2) 63号竪穴住居跡（北から）
図版21 (1) 64号竪穴住居跡（東から）
(2) 79号竪穴住居跡（北から）
図版22 (1) 82号竪穴住居跡（南から）
(2) 83号竪穴住居跡（西から）
図版23 (1) 83・84号竪穴住居跡（西から）
(2) 83号竪穴住居跡遺物出土状態（南西から）
図版24 (1) 84号竪穴住居跡（南から）
(2) 84号竪穴住居跡遺物出土状態（南から）
図版25 (1) 91号竪穴住居跡（南西から）
(2) 91号竪穴住居炉跡（北から）
図版26 (1) 92～94号竪穴住居跡（東から）

(2)　92号竪穴住居跡遺物出土状態.1（西から）
図版27　(1)　92号竪穴住居跡遺物出土状態.2（南から）
(2)　92号竪穴住居跡遺物出土状態.3（西から）
図版28　(1)　96号竪穴住居跡（西から）
(2)　96号竪穴住居跡遺物出土状態（西から）
図版29　(1)　102号竪穴住居跡（東から）
(2)　103号竪穴住居跡（南西から）
図版30　(1)　106号竪穴住居跡（北西から）
(2)　107号竪穴住居跡（北東から）
図版31　(1)　113号竪穴住居跡（南から）
(2)　113号竪穴住居跡完掘状態（南から）
図版32　(1)　113号竪穴住居炉跡（西から）
(2)　115号竪穴住居炉跡（南から）
図版33　(1)　115号竪穴住居跡（南から）
(2)　115号竪穴住居跡完掘状態（南から）
図版34　(1)　方形竪穴状遺構（南から）
(2)　3号掘立柱建物跡（南西から）
図版35　(1)　1号甕棺墓（南から）
(2)　2号甕棺墓（南から）
図版36　(1)　3～6号甕棺墓（東から）
(2)　3号甕棺墓（南東から）
図版37　(1)　4号甕棺墓（北西から）
(2)　5号甕棺墓（北から）
図版38　(1)　5号甕棺墓人骨出土状態（北から）
(2)　6号甕棺墓.1（北から）
図版39　(1)　6号甕棺墓.2（西から）
(2)　6号甕棺墓.3（西から）
図版40　(1)　7号甕棺墓（北東から）
(2)　8A号甕棺墓標石（西から）
図版41　(1)　8A号甕棺墓（東から）
(2)　8B号甕棺墓（南から）
図版42　(1)　9号甕棺墓（北から）
(2)　10号甕棺墓（北から）

図版43 (1) 11号甕棺墓（東から）
(2) 12号甕棺墓（南から）
図版44 (1) 13号甕棺墓（南から）
(2) 14～16号甕棺墓（北西から）
図版45 (1) 14号甕棺墓（北西から）
(2) 15・16号甕棺墓（北西から）
図版46 (1) 17号甕棺墓（南から）
(2) 18号甕棺墓（北東から）
図版47 (1) 19号甕棺墓（南から）
(2) 20号甕棺墓（南西から）
図版48 (1) 21号甕棺墓.1（東から）
(2) 21号甕棺墓.2（北から）
図版49 (1) 21号甕棺墓.3（北西から）
(2) 21号甕棺墓人骨出土状態（東から）
図版50 (1) 22号甕棺墓（西から）
(2) 23号甕棺墓（南西から）
図版51 (1) 1号石棺墓.1（南から）
(2) 1号石棺墓.2（南から）
図版52 (1) 1号貯蔵穴（北から）
(2) 2号貯蔵穴（北から）
図版53 (1) 3号貯蔵穴（北東から）
(2) 4号貯蔵穴（北東から）
図版54 (1) 5号貯蔵穴土層断面（南から）
(2) 5号貯蔵穴.1（北西から）
図版55 (1) 5号貯蔵穴.2（南東から）
(2) 1号土坑（北から）
図版56 (1) 2号土坑（南から）
(2) 5号土坑（南から）
図版57 (1) 6号土坑（北東から）
(2) 8号土坑（北から）
図版58 (1) 9号土坑（西から）
(2) 17号土坑土層断面（西から）
図版59 (1) 18～20号土坑（北西から）

(2) 23号土坑（北から）
図版60 (1) 24号土坑（北から）
(2) 24号土坑遺物出土状態（東から）
図版61 (1) 25号土坑（南東から）
(2) 26号土坑（北西から）
図版62 (1) 27号土坑（北東から）
(2) 28号土坑および20号甕棺墓.1（東から）
図版63 (1) 28号土坑および20号甕棺墓.2（南から）
(2) 30号土坑（南から）
図版64 (1) 31号土坑土層断面（南から）
(2) 31号土坑（南から）
図版65 (1) 33号土坑（南東から）
(2) 34～37号土坑（南から）
図版66 (1) 34号土坑土層断面（西から）
(2) 34号土坑（南東から）
図版67 (1) 35号土坑土層断面（南西から）
(2) 35号土坑（南西から）
図版68 (1) 36号土坑土層断面（北西から）
(2) 36号土坑（北西から）
図版69 (1) 37号土坑土層断面（北西から）
(2) 37号土坑（北西から）
図版70 (1) 38号土坑土層断面（南東から）
(2) 38号土坑（北から）
図版71 (1) 39号土坑（西から）
(2) 40号土坑（南から）
図版72 (1) 41号土坑.1（西から）
(2) 41号土坑.2（西から）
図版73 (1) 41号土坑.3（北西から）
(2) 41号土坑.4（北西から）
図版74 (1) 1～4号円形周溝状遺構（北から）
(2) 1号円形周溝状遺構（西から）
図版75 (1) 2号円形周溝状遺構北半分.1（北から）
(2) 2号円形周溝状遺構北半分.2（南から）

図版76 (1) 2号円形周溝状遺構南半分（北から）
(2) 2号円形周溝状遺構土層断面（東から）
図版77 (1) 3号円形周溝状遺構（南西から）
(2) 3号円形周溝状遺構および17号甕棺墓（南西から）
図版78 (1) 5号円形周溝状遺構.1（北から）
(2) 5号円形周溝状遺構.2（南東から）
図版79 竪穴住居跡出土土器.1
図版80 竪穴住居跡出土土器.2
図版81 竪穴住居跡出土土器.3
図版82 竪穴住居跡出土土器.4
図版83 竪穴住居跡出土土器.5
図版84 竪穴住居跡出土土器.6
図版85 竪穴住居跡出土土器.7
図版86 竪穴住居跡出土土器.8
図版87 甕棺.1
図版88 甕棺.2
図版89 甕棺.3
図版90 甕棺.4
図版91 甕棺.5
図版92 甕棺.6
図版93 土坑出土土器.1
図版94 土坑出土土器.2
図版95 土坑出土土器.3
図版96 土坑出土土器.4
図版97 土坑出土土器.5
図版98 土坑出土土器.6
図版99 貯蔵穴・円形周溝状遺構出土土器
図版100 (1) 弥生時代の石器.1（石鏃・剥片）
(2) 弥生時代の石器.2（石庖丁）
図版101 (1) 弥生時代の石器.3（石庖丁）
(2) 弥生時代の石器.4（石剣・石斧・軽石）
図版102 (1) 弥生時代の石器.5（砥石）
(2) 弥生時代の石器.6（砥石）

図版103 (1)　弥生時代の石器.7（砥石）
(2)　弥生時代の石器.8（砥石）
図版104 (1)　弥生時代の石器.9（磨石）
(2)　弥生時代の石器.10（台石）
(3)　弥生時代の石器.11（台石）
図版105 (1)　92号竪穴住居跡出土投弾形土製品群№1
(2)　92号竪穴住居跡出土投弾形土製品群№2～6
図版106 (1)　弥生時代の土製品.1
(2)　弥生時代の土製品.2
図版107 (1)　弥生時代の土製品.3
(2)　弥生時代の土製品.4
図版108 (1)　弥生時代の鉄器（表）
(2)　弥生時代の鉄器（裏）
図版109 (1)　発掘調査風景.1（調査区西端部　西から　1990）
(2)　発掘調査風景.2（調査区東端部　南から　1994）

[稲崎A・B遺跡（下巻）]

図版110 (1)　稲崎A・B遺跡周辺航空写真（国土地理院提供）
(2)　稲崎A遺跡全景
図版111 (1)　稲崎A遺跡近景（北西から）
(2)　1号土坑（南西から）
図版112 (1)　大溝と支流A・B（南東から）
(2)　大溝と支流A・B（北西から）
図版113 (1)　大溝堆積状況
(2)　出土石器
図版114　出土土器
図版115 (1)　稲崎B遺跡遠景（東北東から）
(2)　稲崎B遺跡全景（東から）
図版116 (1)　南側調査区（東から）
(2)　住居跡状遺構と柱穴様ピット群（西から）
図版117 (1)　小溝（東から）
(2)　出土土器

挿　図　目　次

［鷹取五反田遺跡（上巻）］

付　図　鷹取五反田遺跡全体図（1/300）
第１図　鷹取五反田遺跡の現況（1997.11撮影）……1
第２図　国道201号浮羽バイパス用地内の各調査地点（1/75,000）……2
第３図　鷹取五反田遺跡周辺地形図（1/3,000）……3
第４図　鷹取五反田遺跡年度別調査地点（1/2,000）……4
第５図　鷹取五反田遺跡周辺主要遺跡分布図（1/50,000）……8
第６図　鷹取五反田遺跡基本層序（1/60）……9
第７図　鷹取五反田遺跡遺構配置図（1/1,200）……10
第８図　１・２号竪穴住居跡実測図（1/60）……12
第９図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……13
第10図　２・３号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……14
第11図　３・４・17号竪穴住居跡実測図（1/60）……17
第12図　４号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……18
第13図　11・14号竪穴住居跡実測図（1/60）……19
第14図　12号竪穴住居跡実測図（1/60）……20
第15図　13号竪穴住居炉跡実測図（1/20）……20
第16図　15・16号竪穴住居跡実測図（1/60）……21
第17図　16号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……22
第18図　18・19号竪穴住居跡実測図（1/60）……23
第19図　18・19号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……24
第20図　21・22・26号竪穴住居跡実測図（1/60）……25
第21図　21～23号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……26
第22図　23・25号竪穴住居跡実測図（1/60）……27
第23図　25号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……28
第24図　25号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……29
第25図　25～27号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……30
第26図　27・29号竪穴住居跡実測図（1/60）……32
第27図　28・30号竪穴住居跡実測図（1/60）……34
第28図　28号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……35

第29図　28号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……36
第30図　28号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/4）……37
第31図　28号竪穴住居跡出土土器実測図.4（1/4）……38
第32図　29号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……40
第33図　29号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/6）……41
第34図　29号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/4）……42
第35図　30号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……44
第36図　30号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……45
第37図　30号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/4）……46
第38図　30号竪穴住居跡出土土器実測図.4（1/4）……47
第39図　30・32号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……48
第40図　32・34・35号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……49
第41図　32・58号竪穴住居跡実測図（1/60）……51
第42図　34・35号竪穴住居跡実測図（1/60）……52
第43図　62～64号竪穴住居跡実測図（1/60）……53
第44図　62～64号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……54
第45図　79・82号竪穴住居跡実測図（1/60）……56
第46図　79・82号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……57
第47図　82号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……58
第48図　83・113号竪穴住居跡実測図（1/60）……60
第49図　83号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……61
第50図　84・91号竪穴住居跡実測図（1/60）……63
第51図　84号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……64
第52図　84号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……65
第53図　91号竪穴住居炉跡実測図（1/20）……67
第54図　91号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……67
第55図　92～94号竪穴住居跡実測図（1/60）……68
第56図　92号竪穴住居跡遺物出土状況および炉跡土層断面実測図（1/20）……69
第57図　92号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）……70
第58図　92号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）……71
第59図　93号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……72
第60図　94号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……74
第61図　96・99号竪穴住居跡実測図（1/60）……76

第62図　96・99号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……77
第63図　100・102号竪穴住居跡実測図（1/60）……79
第64図　102号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……80
第65図　102・103号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……81
第66図　103・106号竪穴住居跡実測図（1/60）……83
第67図　107・122号竪穴住居跡実測図（1/60）……84
第68図　106・107号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……85
第69図　107号竪穴住居炉跡出土土器実測図（1/4）……86
第70図　113号竪穴住居炉跡実測図（1/20）……86
第71図　115号竪穴住居跡実測図（1/60）……88
第72図　115号竪穴住居炉跡実測図（1/20）……88
第73図　113・115・122号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……89
第74図　方形竪穴状遺構実測図（1/60）……91
第75図　3号掘立柱建物跡実測図（1/60）……92
第76図　方形竪穴状遺構および3号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）……93
第77図　土壙墓・甕棺墓配置図（1/1,600）……94
第78図　1～4号甕棺墓実測図（1/20）……95
第79図　1～4号甕棺実測図（1/8）……97
第80図　5・6号甕棺墓実測図（1/20）……99
第81図　5・6号甕棺実測図（1/8）……101
第82図　7・8A号甕棺墓実測図（1/20）……102
第83図　7号甕棺実測図（1/8）……103
第84図　8A号甕棺墓掘りかた内出土土器実測図（1/4）……104
第85図　8B・9・10号甕棺墓実測図（1/20）……105
第86図　8A・8B・9号甕棺実測図（1/8）……107
第87図　10～12・15・19号甕棺実測図（1/8）……109
第88図　11～14号甕棺墓実測図（1/20）……110
第89図　13号甕棺実測図（1/8）……111
第90図　14号甕棺実測図（1/8）……112
第91図　15・16号甕棺墓実測図（1/20）……113
第92図　16号甕棺実測図（1/8）……114
第93図　17・19・20号甕棺墓実測図（1/20）……116
第94図　17・20号甕棺実測図（1/8）……117

第95図　18号甕棺墓実測図（1/20）……118
第96図　21号甕棺墓実測図（1/20）……120
第97図　22・23号甕棺墓実測図（1/20）……122
第98図　18・21～23号甕棺実測図（1/8）……123
第99図　1号石棺墓実測図（1/20）……124
第100図　8・9号土壙墓実測図（1/20）……125
第101図　9号土壙墓出土土器実測図（1/4）……126
第102図　貯蔵穴・円形周溝状遺構配置図（1/1,600）……128
第103図　1・2号貯蔵穴実測図（1/40）……129
第104図　3・4号貯蔵穴実測図（1/40）……130
第105図　1～4号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……131
第106図　5号貯蔵穴実測図（1/40）……133
第107図　5号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……134
第108図　1～3号土坑実測図（1/40）……136
第109図　1～5号土坑出土土器実測図（1/4）……137
第110図　4・8号土坑実測図（1/40）……138
第111図　5・6・9・10号土坑実測図（1/30）……139
第112図　6号土坑出土土器実測図.1（1/4）……141
第113図　6号土坑出土土器実測図.2（1/4）……142
第114図　6・7号土坑出土土器実測図（1/4）……143
第115図　8～10号土坑出土土器実測図（1/4）……145
第116図　11・13・14号土坑実測図（1/40）……146
第117図　11・13・14号土坑出土土器実測図（1/4）……147
第118図　15～17号土坑実測図（1/40）……149
第119図　16・17号土坑出土土器実測図（1/4）……150
第120図　17号土坑出土土器実測図.1（1/4）……151
第121図　17号土坑出土土器実測図.2（1/4）……152
第122図　18・19号土坑実測図（1/40）……153
第123図　18号土坑出土土器実測図.1（1/4）……154
第124図　18号土坑出土土器実測図.2（1/4）……155
第125図　20号土坑実測図（1/40）……156
第126図　22・23号土坑実測図（1/40）……157
第127図　19・20・22・23号土坑出土土器実測図（1/4）……158

第128図 24～26号土坑実測図（1/40）……159
第129図 24・25号土坑出土土器実測図（1/4）……161
第130図 26・27号土坑出土土器実測図（1/4）……162
第131図 27・28号土坑実測図（1/30）……163
第132図 28号土坑出土土器実測図（1/4）……164
第133図 29号土坑実測図（1/40）……165
第134図 29号土坑出土土器実測図（1/4）……166
第135図 30・31号土坑実測図（1/60）……167
第136図 30・31号土坑出土土器実測図（1/4）……168
第137図 33～36号土坑実測図（1/60）……171
第138図 33号土坑出土土器実測図（1/4）……172
第139図 37号土坑実測図（1/40）……174
第140図 38・39号土坑実測図（1/40）……175
第141図 34・37・38号土坑出土土器実測図（1/4）……176
第142図 38号土坑出土土器実測図（1/4）……177
第143図 40号土坑実測図（1/60）……178
第144図 41号土坑実測図（1/60）……179
第145図 40・41号土坑出土土器実測図（1/4）……181
第146図 41号土坑出土土器実測図.1（1/4）……182
第147図 41号土坑出土土器実測図.2（1/4）……183
第148図 41号土坑出土土器実測図.3（1/4）……184
第149図 41号土坑出土土器実測図.4（1/4）……185
第150図 41号土坑出土土器実測図.5（1/4）……186
第151図 41号土坑出土土器実測図.6（1/4）……187
第152図 鷹取五反田遺跡調査区東端部遺構配置図（1/400）……188
第153図 1・3号円形周溝状遺構実測図（1/60）……190
第154図 2号円形周溝状遺構実測図（1/60）……191
第155図 1・2号円形周溝状遺構出土土器実測図（1/4）……193
第156図 2号円形周溝状遺構出土土器実測図.1（1/4）……194
第157図 2号円形周溝状遺構出土土器実測図.2（1/4）……195
第158図 2号円形周溝状遺構出土土器実測図.3（1/4）……196
第159図 4号円形周溝状遺構実測図（1/60）……197
第160図 5号円形周溝状遺構実測図（1/60）……折込

第161図　6号円形周溝状遺構実測図（1/60）……199
第162図　3・5・6号円形周溝状遺構出土土器実測図（1/4）……200
第163図　土製品実測図.1（1/2）……201
第164図　土製品実測図.2（1/2）……202
第165図　土製品実測図.3（1/2）……203
第166図　弥生時代の石器実測図.1（1～5は1/2　6～10は1/3）……206
第167図　弥生時代の石器実測図.2（1～5は2/3　6～17は1/2）……207
第168図　弥生時代の石器実測図.3（1/3）……208
第169図　弥生時代の石器実測図.4（1/3）……209
第170図　弥生時代の石器実測図.5（1/4）……210
第171図　竪穴住居跡および土坑出土鉄器実測図（1/2）……211

［稲崎A・B遺跡（下巻）］

第172図　稲崎A・B遺跡周辺地形図と圃場整備施行後の現況図（1/3,000）……214
第173図　稲崎A遺跡遺構配置図（1/300）……215
第174図　1号土坑実測図（1/30）……216
第175図　大溝・大溝支流土層図（1/60）……217
第176図　大溝出土土器実測図.1（1/3）……218
第177図　大溝出土土器実測図.2（1/3）……219
第178図　大溝出土土器実測図.3（1/3）……220
第179図　大溝出土土器実測図.4（1/3）……222
第180図　大溝支流A出土土器実測図（1/3）……223
第181図　包含層等出土遺物実測図.1（1/3）……224
第182図　包含層等出土遺物実測図.2（1/3）……225
第183図　包含層等出土遺物実測図.3（1/3）……226
第184図　稲崎B遺跡遺構配置図（1/300）……227
第185図　住居跡状遺構実測図（1/60）……227
第186図　小溝土層実測図（1/60）……227
第187図　出土土器実測図（1/3）……228

第1表　国道210号浮羽バイパス用地内の各調査地点一覧……2
第2表　92号竪穴住居跡出土投弾形土製品観察表……204

Ⅰ　はじめに

1．調査の経緯と組織

一般国道210号浮羽バイパスは、浮羽郡内の交通混雑の緩和と、地域産業経済の発展を目的として、昭和48（1973）年度から事業化した片側２車線の大規模なバイパスである。田主丸町豊城から浮羽町山北までの総延長14.0㎞のうち、浮羽町と吉井町の一部においては現在暫定対面２車線で供用を開始しており、地域住民の生活に密着した道路となっている（第１図）。

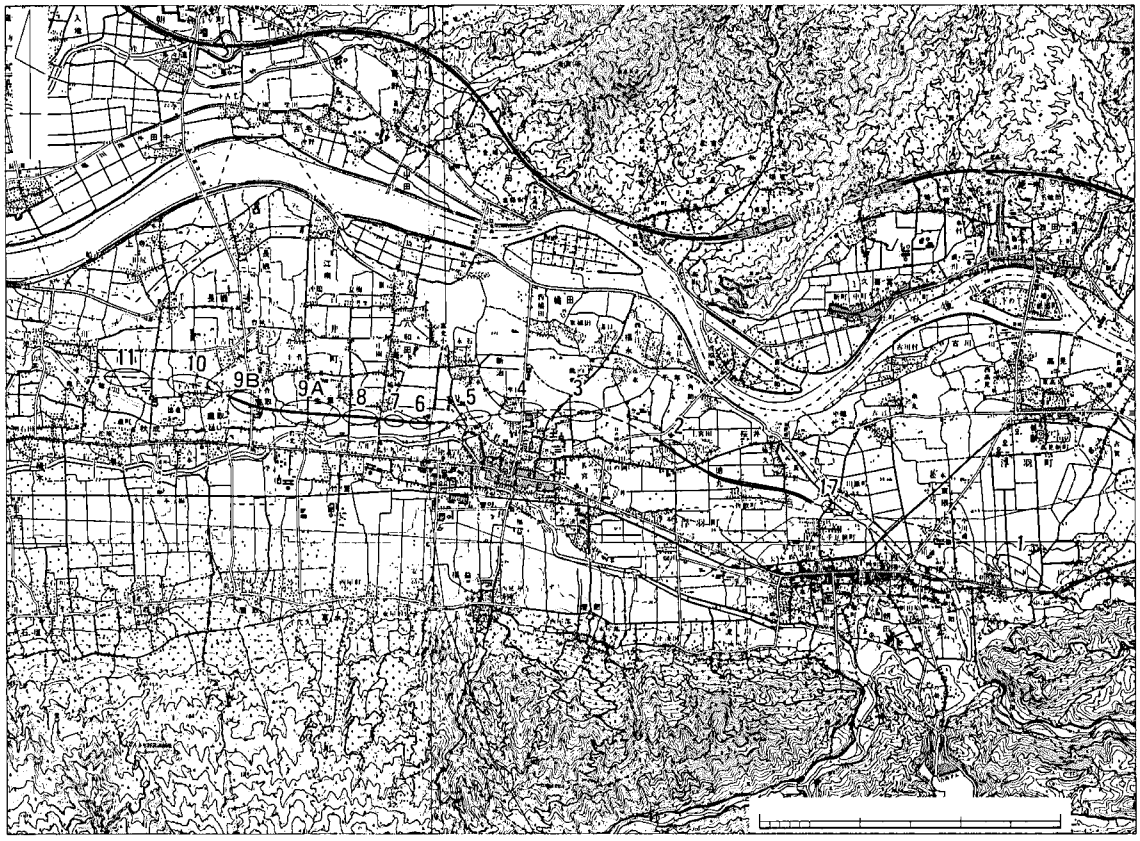
さて、この浮羽バイパスの建設に先立ち、昭和47（1972）年２月３日付けで建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所（以下「福岡工事事務所」とする）から福岡県教育庁管理部（現．指導第二部）文化課（以下「文化課」とする）に、「一般国道210号浮羽～田主丸間バイパス建設予定地内の文化財の有無について」という調査依頼があり、まづそれに基づき浮羽町所在の塚堂遺跡群の発掘調査が昭和54（1979）年度から同57（1982）年度までの４カ年に亘って実施された。その後、昭和61（1986）年４月２日付けで福岡工事事務所から再度「埋蔵文化財の分布調査について」という調査依頼が文化課にあり、文化課は塚堂遺跡を除く16地点の発掘調査必要箇所を回答した。現在まで、この回答による16地点についての調査を随時協議しながら実施しているが、それら調査地点の所在地は第２図を、その概要については第１表を参照していただきたい。

本書に掲載した浮羽バイパス９-B 地点「鷹取五反田遺跡」は、平成元～２（1989～1990）

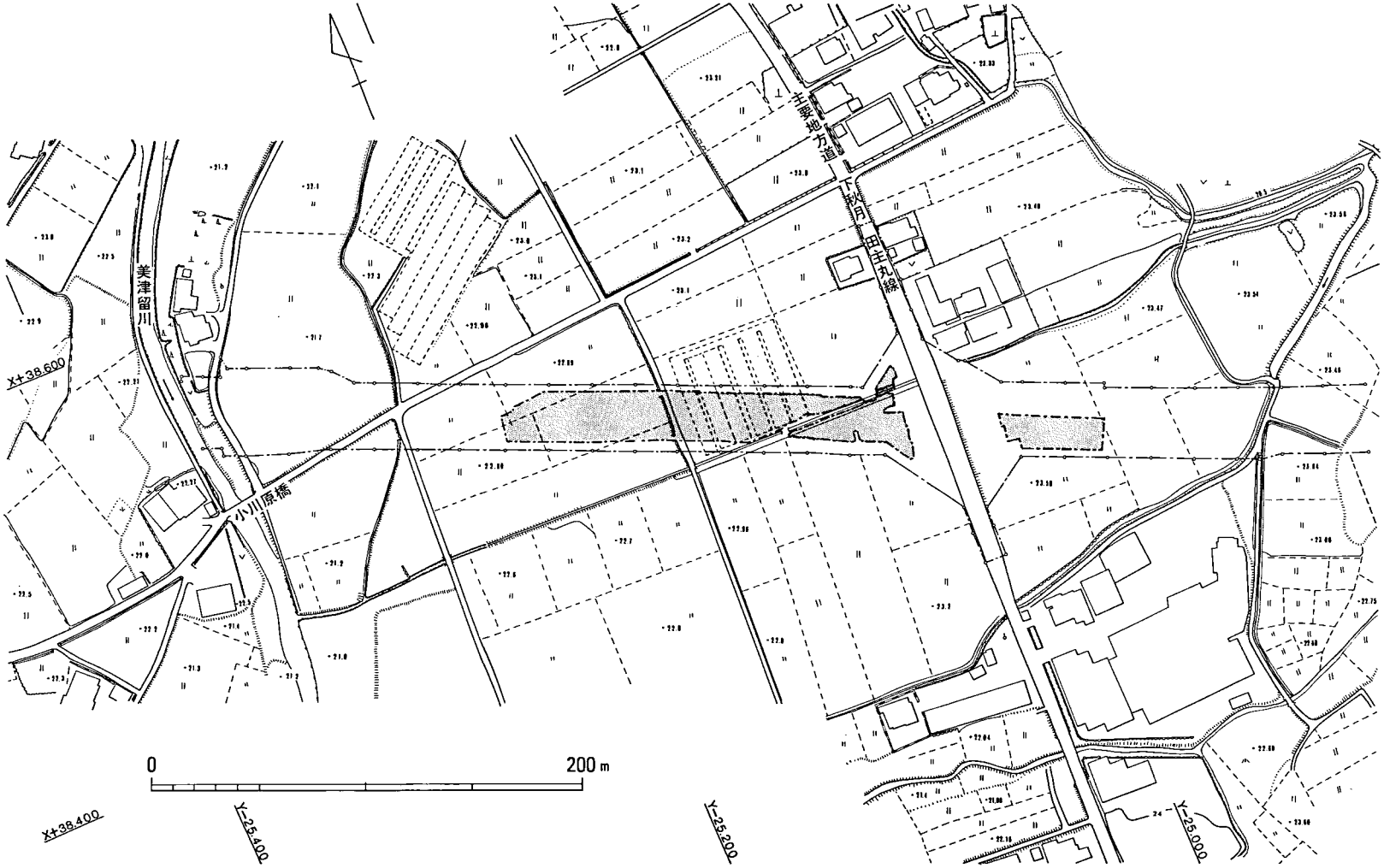
第１図　鷹取五反田遺跡の現況（1997.11撮影）

地点	町名	工区と地点名	遺跡名	対象面積㎡	発掘面積㎡	調査年度	報告書年度
1	浮　羽	9．日永	日永	19,000	16,800	S61	H4•5
2	吉　井	7．塚堂	塚堂	18,479	12,768	S54-57・59-61	S57-59•62
3	吉　井	7．能楽	—	5,100	試掘のみ	H6	—
4	吉　井	6•7．三牟田	堂畑	8,400		H8～	
5	吉　井	6．新治	仁衛門畑Ⅱ	8,400	3,000	H7～9	
6	吉　井	6．稲崎A	稲崎A	6,300	1,600	S62	H9
7	吉　井	6．稲崎B	稲崎B	4,900	520	S62	H9
8	吉　井	6．清宗	—	2,400	試掘のみ	H元	—
9A	吉　井	5•6．上菅A	堺町・大碇	21,000	18,000	H元•2	H5
9B	吉　井	5•6．上菅B	鷹取五反田	14,000	7,420	H2•5•6	H9•10
10	田主丸	5．船越A	船越高原	25,000		H8～	
11	田主丸	5．船越B	船越二ノ上	20,000	18,500	H6～9	H10予定
12	田主丸	5．植木		19,200			
13	田主丸	5．常盤		15,000			
14	田主丸	5．野田A		14,800			
15	田主丸	5．野田B		10,800			
16	田主丸	5．野田C		13,500			
17	浮　羽	7．朝田	—	2,400	試掘のみ	H6	—

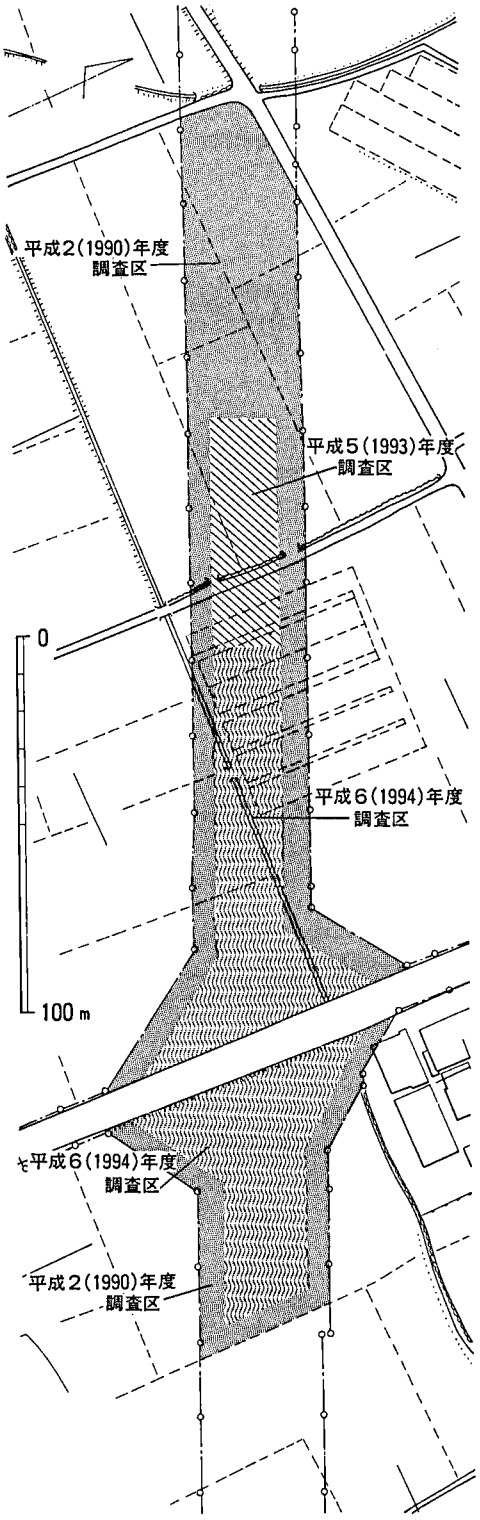
第１表　国道210号浮羽バイパス用地内の各調査地点一覧



第２図　国道201号浮羽バイパス用地内の各調査地点（1/75,000）



第３図　鷹取五反田遺跡周辺地形図（1/3,000）



第4図　鷹取五反田遺跡年度別調査地点（1/2,000）

年度に発掘調査が実施され平成5（1993）年度に報告書が刊行された浮羽イパス9−A地点「堺町・大碇遺跡」とともに、平成元（1989）年12月に吉井町大字生葉〜鷹取間の約1.3kmに亘って行なった試掘調査の結果、本調査が必要になった地区である。周辺では福岡県甘木農林事務所が県営圃場整備事業を実施しており、その関連から福岡国道事務所・甘木農林事務所・吉井第四改良区と随時協議を重ねながら、平成2（1990）年4月15日より発掘調査を開始した。

当初は、平成2（1990）年度中に調査の対象となった約14,000㎡の全面発掘を予定していたが、弥生時代中期後半〜後期前半、古墳時代後期、古代の3時期の多数の遺構が複雑に切り合う状況から、大幅な調査期間の延長が予想された。しかし、同時進行していた圃場整備事業との関係から、バイパス本線の両側に付設する用排水路部分の調査だけは当該年度中に終了しなければならなかったために、変則的ではあったが、調査途中より用排水路部分およびその工事に必要な用地、すなわちバイパス本線の中央部を除く両側の幅7m分を先行して調査することとなった。その結果、第4図に図示したように、平成2（1990）年度の調査を第1次（1990.4.15〜11.28）とし、平成5（1993）年度を第2次（1993.10.26〜12.10）、平成6（1994）年度を第3次（1994.5.26〜10.26）とした。調査面積は7,420㎡。なお、平成5（1993）年度の第2次調査については、第1次調査において完掘していなかった部分の補足調査であり、新たな遺構を検出した調査ではなかった。

発掘調査および報告書作成に関係した福岡国道事務所と福岡県文化課の組織構成は、下記のとおりである。またこの期間中、吉井町教育委員会には様々な面において多大なご配慮を賜りましたことを記して感謝申しあげます。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

	平成2(1990)年度	平成5(1993)年度	平成6(1994)年度	平成9(1997)年度
事務所長	中垣　光弘	長谷部正和	佐竹　芳郎	藤本　聡
副所長	岩田　秀人	宮崎　暢隆	中馬　昌昭	兼武征二郎
	横溝　敏治	中空　進	中空　進	別府　五男
建設監督官	梅田　正信	野鶴　博任	野鶴　博任	有家　信義
	山田　茂利	平川　澄雄	平川　澄雄	柴田　智
調査第一課長	並河　良治			
調査第二課長	中川　蔵太	西原　広寿	西原　広寿	田中　義高
調査係長	松尾　義信	島　義博	芹口　臣也	沓掛　孝
建設技官	竹下　卓宏	神崎　博章	桜井　俊郎	島田　隆一
工務課長	肥後橋譲治	久原　義宣	渕　幸一	河野　良行
工務第一係長	笹山　勝之	田中　秀明	逆瀬川方久	梶原　俊之
工務第三係長	小島　一郎	逆瀬川方久	田口　仁	斎藤　敬嗣

福岡県教育委員会

総括	平成2(1990)年度	平成5(1993)年度	平成6(1994)年度	平成9(1997)年度
教育長	御手洗　康	御手洗　康	光安　常喜	光安　常喜
教育次長	濱地　甫伯	光安　常喜	松枝　功	松枝　功
	亀谷　陽三			
指導第二部長	月森清三郎	月森清三郎	丸林　茂夫	竹若　幸二
文化課長	六本木聖久	森山　良一	松尾　正俊	石松　好雄
参事兼文化財保護室長		石松　好雄	柳田　康雄	柳田　康雄
課長補佐	安野　義勝	国武　康友	清水　圭輔	城戸　秀明
課長技術補佐	石松　好雄			井上　裕弘
参事補佐	柳田　康雄	柳田　康雄	井上　裕弘	橋口　達也
	井上　裕弘	井上　裕弘	橋口　達也	木下　修
	副島　邦弘	副島　邦弘	馬田　稔弘	中間　研志
	木下　修		池辺　元明	新原　正典
庶務				
管理係長	池原　脩二	毛屋　信	杉光　誠	黒田　一治
事務主査		東　勇治	安丸　重喜	鶴我　哲夫
主任主事	沢田　俊夫	沢田　俊夫	久保　正志	田中　利幸

調査	平成2(1990)年度	平成5(1993)年度	平成6(1994) 年度	平成9(1997)年度 (平成9年度は報告)
課長技術補佐				井上　裕弘
参事補佐	井上　裕弘 木下　　修			木下　　修
技術主査				小田　和利
主任技師	小田　和利		水ノ江和同	水ノ江和同
技師		水ノ江和同		
文化財専門員	日高　正幸		矢野　和昭（調査補助員）	

2．遺跡の位置と歴史的環境

[遺跡の位置]

鷹取五反田遺跡は、福岡県浮羽郡吉井町大字鷹取字五反田318・328・343番地および字中ノ坪349番地他に所在する。本遺跡の所在する吉井町は、日本屈指の穀倉地帯である筑後平野の南東部に位置する。遺跡の南側には標高700～800mの耳納（水縄）山脈が立ちはだかり、八女郡とは一線を画している。耳納山脈の北麓には筑紫次郎の異名をとる筑後川によって形成された広大な沖積平野が広がっている。江戸時代には天領日田に抜ける街道筋として、また商人の町として栄え、現在でも国道210号および水路沿いには白壁づくりの町並みが残っており、平成9年2月に国の重要伝統的建造物群保存地区（全国で44番目）に選定され、往時の繁栄を今に伝えている。

本遺跡は筑後川と耳納山脈のほぼ中間に位置し、北側の美津留川と南側の巨瀬川に挟まれた標高23m程の扇状低地部に立地する。また、調査区の西端部には河原石が露出しており、氾濫原の様相を呈する（図版1～4）。

[歴史的環境]

ここでは、近年調査された浮羽郡内の弥生時代の遺跡を中心に述べることとし、古代～歴史時代の遺跡については、平成10年度の報告書でふれることにしたい（第5図）。

まず、吉井町内の遺跡からみていくと、国道210号浮羽バイパス建設に伴い調査された塚堂遺跡がある。塚堂遺跡は標高32m程の微高地に立地し、古墳時代前期を主体とする集落遺跡であるが、弥生後期前半～終末期の竪穴住居跡・土坑・円形周溝等も調査されている。同バイパス建設に伴い調査された大碇遺跡は鷹取五反田遺跡の約500m東方にあり、標高26m程の微高地に位置する。弥生時代（前期後半～中期前半）の遺構として、竪穴住居跡・貯蔵穴・土坑・環濠および甕棺墓が調査された。

次に、東側の浮羽町に目を向けると圃場整備に伴って調査された田島北遺跡・田島南遺跡があり、両遺跡は標高46m程の微高地に位置する。田島北遺跡では縄文～歴史時代に至る遺構が調査され、弥生時代の遺構として竪穴住居跡・貯蔵穴・土坑・甕棺墓がある。田島南遺跡でも住居跡・土坑・甕棺墓などが調査されている。また、同じ微高地の北側に位置する北淀遺跡では弥生時代前～中期の住居跡・貯蔵穴・甕棺墓が調査された。耳納山脈北麓の平野部に位置する沖出遺跡は古墳時代を主体とする集落跡であるが、弥生時代後期後半の竪穴住居跡も調査されている。筑後川中流域左岸の丘陵突端部（標高48m）に立地する岩野遺跡では、弥生時代中期を主体とする甕棺墓・木棺墓・土壙墓・石棺墓からなる墓地群が調査されている。その他に、隈上川上流右岸に位置する賀茂神社境内遺跡では、弥生時代後期後半の竪穴住居跡が、同川中流左岸の微高地に立地する雷遺跡では弥生時代中期の土坑が調査されている。

特筆される遺跡として、浮羽バイパス建設に伴い調査された日永遺跡がある。日永遺跡は標高52m程の扇状平地に立地し、弥生時代後期から奈良時代に至る集落跡が調査された。弥生時代の遺構として、竪穴住居跡及び埋納遺構があり、埋納遺構からは広形銅矛・広形銅戈がセットで木箱に入れられた状態で出土した。吉井町清宗より出土したと伝えられる細形銅戈と共に、この一帯は弥生時代青銅器の埋納遺跡が見られる地域として注目されよう。

稲崎A•B遺跡に近接する同時代の遺跡として、生葉1号墳と大碇遺跡がある。前者は古墳時代初頭期の三周溝を有する22×18mの方墳で、墳丘や主体部は遺存しない。後者は包含層だけであるが、やはり古墳時代初頭期に属する。

浮羽郡内では圃場整備に伴い多数の遺跡が調査されたが、文化財調査報告書未完のものが大半を占め、速やかな刊行が切望される。

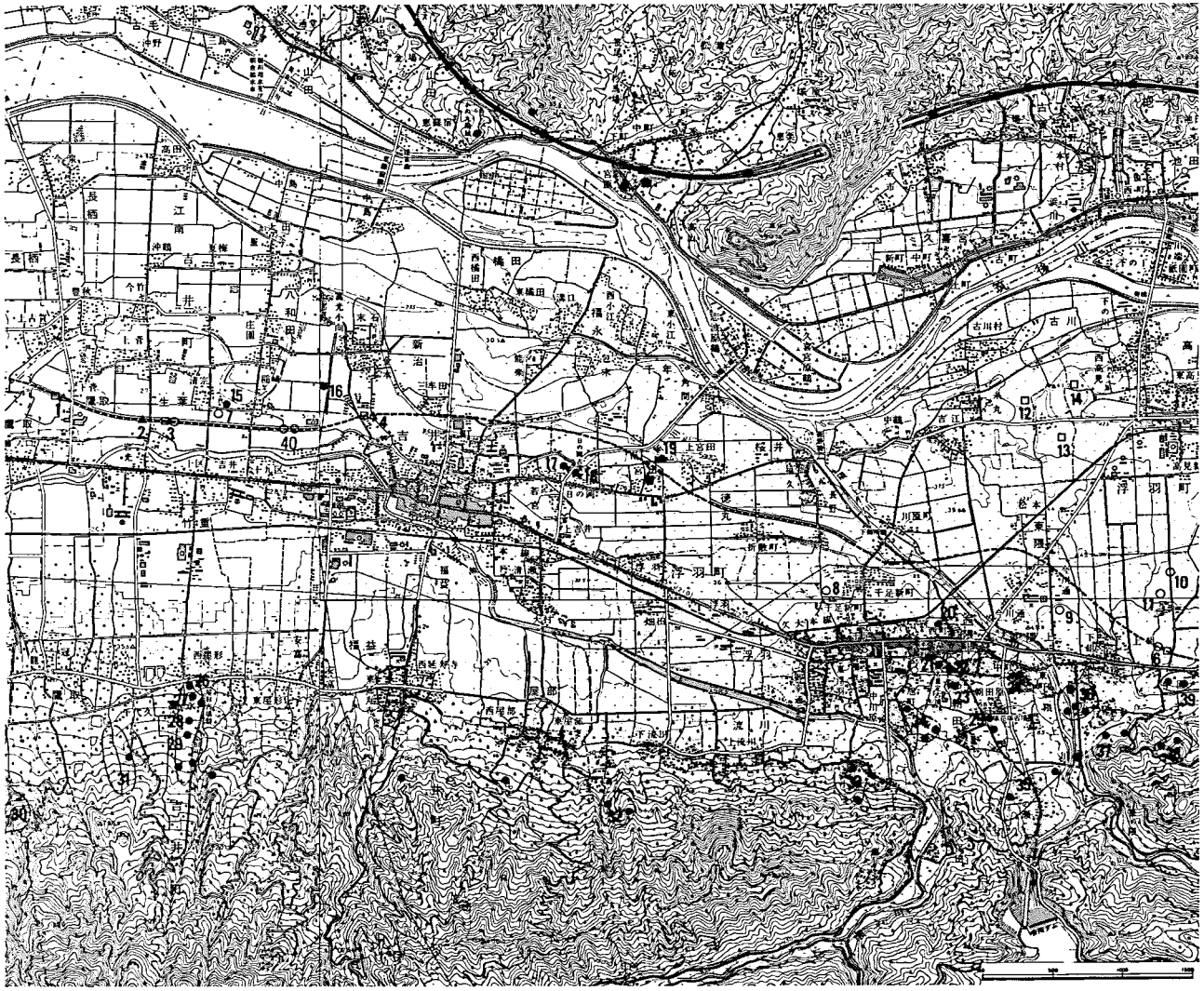
［参考文献］

『塚堂遺跡Ⅰ』（浮羽バイパス関係文化財調査報告第1集） 1983 福岡県教育委員会
『塚堂遺跡Ⅱ』（浮羽バイパス関係文化財調査報告第2集） 1984 福岡県教育委員会
『塚堂遺跡Ⅲ』（浮羽バイパス関係文化財調査報告第3集） 1984 福岡県教育委員会
『塚堂遺跡Ⅳ』（浮羽バイパス関係文化財調査報告第4集） 1985 福岡県教育委員会
『堺町・大碇遺跡』（浮羽バイパス関係文化財調査報告第8集） 1994 福岡県教育委員会
『田主丸古墳群』（田主丸町文化財調査報告書第2集） 1985 田主丸町教育委員会
『沖出遺跡Ⅰ』（浮羽町文化財調査報告書第3集） 1987 浮羽町教育委員会
『岩野遺跡』（浮羽町文化財調査報告書第5集） 1990 浮羽町教育委員会
『吉井町遺跡群―生葉地区遺跡Ⅰ』（吉井町文化財調査報告書第5集） 1990 吉井町教育委員会
『田島北遺跡』（浮羽町文化財調査報告書第6集集） 1991 浮羽町教育委員会
『日永遺跡Ⅰ』（浮羽バイパス関係文化財調査報告第6集） 1993 福岡県教育委員会
『日永遺跡Ⅱ』（浮羽バイパス関係文化財調査報告第7集） 1994 福岡県教育委員会

1 鷹取五反田遺跡
2 堺町遺跡
3 大碇遺跡
4 仁衛門畑遺跡
5 塚堂遺跡
6 日永遺跡
7 生葉地区遺跡群
8 雷遺跡
9 大口遺跡
10 沖出遺跡Ⅰ区
11 沖出遺跡Ⅱ区
12 田島北遺跡
13 田島南遺跡
14 北淀遺跡
15 生葉1号墳
16 女塚古墳
17 月岡古墳
18 日岡古墳
19 塚堂古墳
20 西隈上古墳
21 楠名古墳
22 重定古墳
23 法正寺古墳
24 矢次郎丸古墳
25 塚花塚古墳
26 珍敷塚古墳
27 原古墳
28 鳥船塚古墳
29 古畑古墳
30 森原古墳群
31 千代久古墳群
32 手白古墳群
33 小坂古墳群
34 菰ノ上古墳群
35 一ノ瀬古墳群
36 山北古墳群
37 谷ノ口古墳群
38 清水古墳群
39 峠古墳群
40 稲崎A・B遺跡

凡　例

	集　落	墓　地
縄文時代	◇	
弥生時代	□	■
古墳時代	○	●
奈良・平安時代	△	▲



第5図　鷹取五反田遺跡周辺主要遺跡分布図（1/50,000）

Ⅱ　発掘調査の記録　―弥生時代遺構編―

1．遺跡の概要

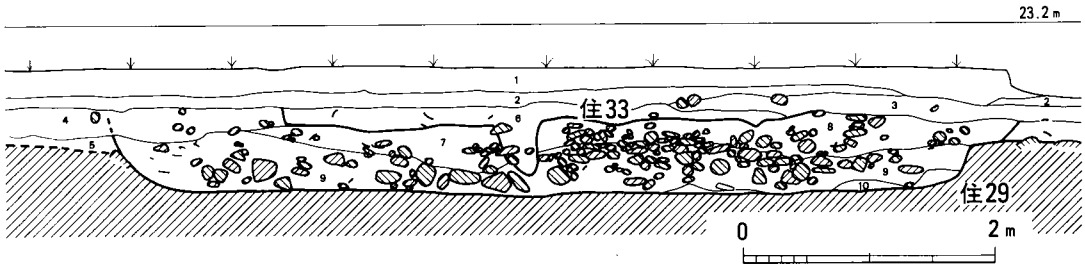
遺跡は福岡県浮羽郡吉井町大字鷹取字五反田328・343・349番地外、および字中ノ坪349番地他に所在し、西流する筑後川の支流である美津留川と、南側の美津留川に注ぐ小さな流れに挟まれ、西、南側に若干傾斜する標高23.5m～22.8mの微高地上に立地する。調査地点は県道下秋月・田主丸線をまたいで西側300m、東側50mの範囲、幅30mで全面調査を実施した。検出された遺構は主に弥生時代から古墳時代にかけての集落及び墓地関係のもので、県道の西側に集中し東側にはほとんど存在しない。また、調査地点西端と美津留川の間約140mは試掘から河原石等が多量にみられることから氾濫原であり、調査区西端で検出された谷状遺構は、この氾濫原に続くのであろう（図版1～4）。

調査は国土座標軸に合わせて10m間隔のグリッドを設定し、東西方向にアルファベットでA～W、南北方向に1～13の番号を付した（第7図）。調査面積は7,420㎡。

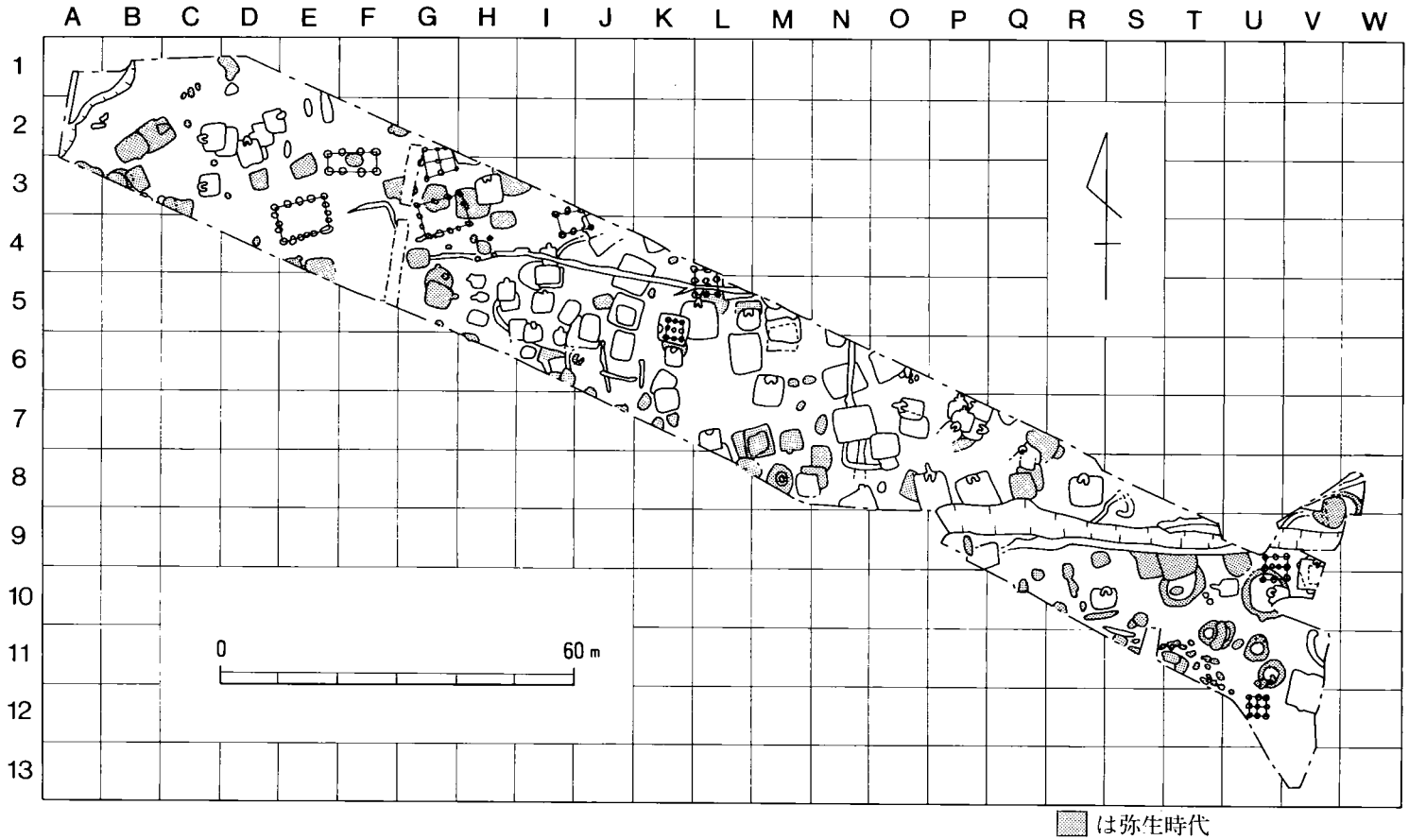
弥生時代の遺構は竪穴住居跡47軒、掘立柱建物跡1棟、方形竪穴状遺構1基、貯蔵穴5基、土坑40基、円形周溝状遺構6基、甕棺墓24基、土壙墓2基、石棺墓1基で中期後半から後期前半に属す。古墳時代後期から奈良時代の遺構は竪穴住居跡78軒、掘立柱建物跡5棟以上、土坑1基、溝状遺構18条、土壙墓6基、中世では土壙墓1基が検出された。また、弥生時代から古墳時代にかけての多くの柱穴が存在する。遺構は調査区全域にわたるが、弥生時代の墓地群（甕棺墓・土壙墓・石棺墓）は1・2・22・23号甕棺墓の4基を除き、調査区の東側T-U11区に集中する。

［基本層序］

第6図はH-I3区北壁の土層断面図である。断面図には2軒の竪穴住居跡が見てとれる。上位は古墳時代後期の33号竪穴住居跡、下位は弥生時代の29号竪穴住居跡である（図版16）。このうち遺跡にのる土層は1層から5層の5枚である。1層は灰白色の耕作土で厚さ15～20cm。2



第6図　鷹取五反田遺跡基本層序（1/60）



第7図　鷹取五反田遺跡遺構配置図（1/1,200）

層は黄褐色の水田床土で厚さ５～10cm。３層は紫褐色粘質土で河原石も含み厚さ15cm。この層は遺跡の西側には堆積しない。４層は暗茶灰色土で粘質に富む。厚さ25cm前後だが南、東側ほど厚く堆積する。古墳時代の遺構はこの土層を掘込んでいる。５層は灰黄色砂質土。砂質が強く、南側では礫層に変わる。弥生時代の遺構はこの土層を掘込んでおり、遺跡の中央部より西側では竪穴住居跡の床面や壁に河原石の突出が見られ、F～H区では全面に拡がる。東側調査区では灰黄色砂質土が暗灰色砂質土に変化する（第103図　１号貯蔵穴土層図)。６層は古墳時代の33号竪穴住居跡の埋土で緑灰色土。断面中から須恵器の破片が出土。７・８層は弥生時代の29号竪穴住居跡上部の埋土で、７層は黒褐色を呈し、８層はより暗く、河原石が多い。９層は住居跡下部の埋土で、暗紫褐色を呈し多量の河原石が充つる。21・25・28号竪穴住居跡の埋土も同様であり、美津留川の氾濫によるものと考えられる。10層は床面に密着した炭化物層。

なお、遺構面までの深さは中央部から西側では60cmほどであるが、東側の県道付近では旧地形が南側谷部に傾斜しているため1.5m～２mと深くなる。

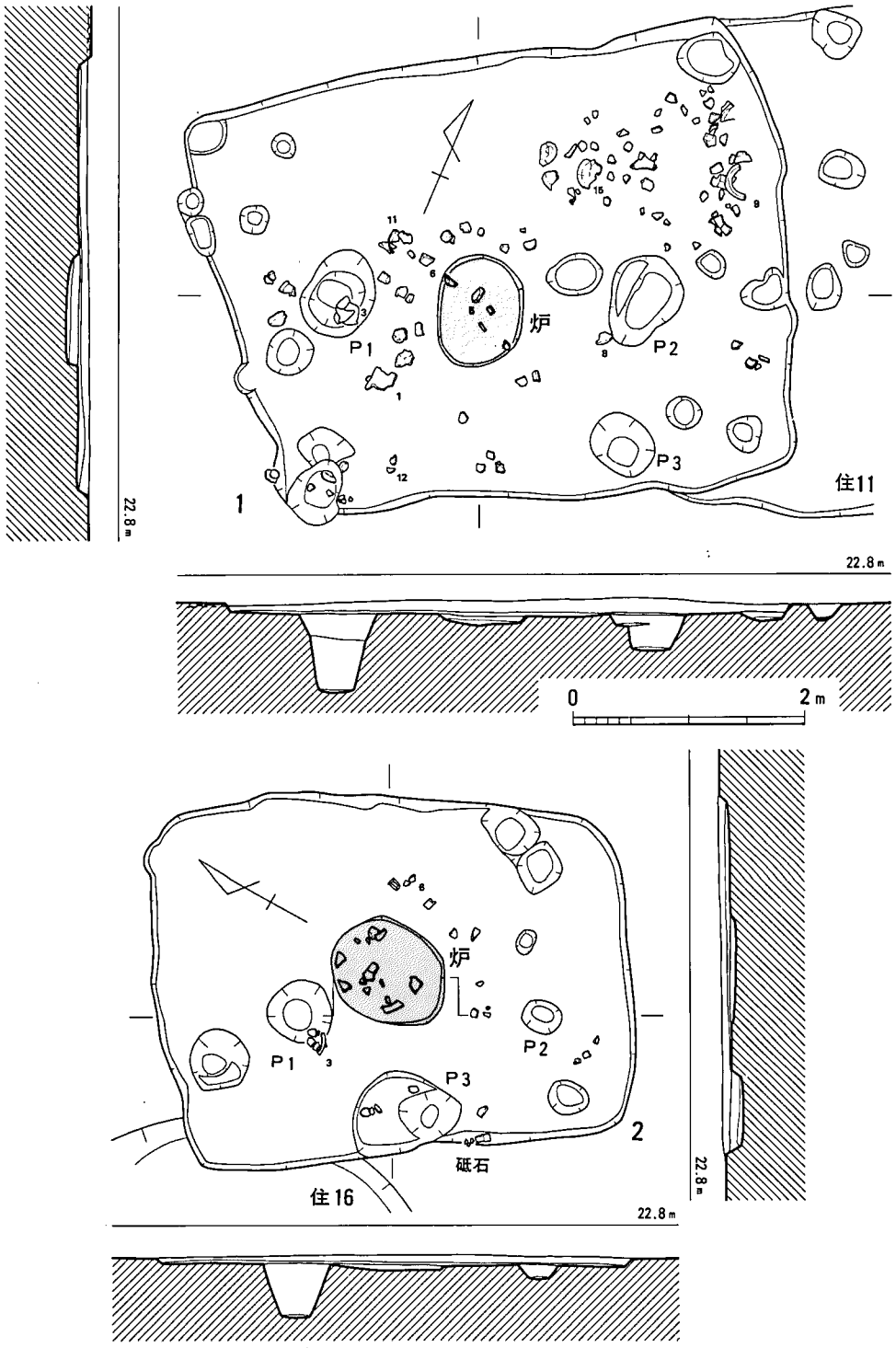
２．竪穴住居跡

弥生時代中期後半から後期前半の竪穴住居跡が47軒検出された。平面形は隅丸方形・隅丸長方形・不整方形・長円形を呈し、長軸４m前後の小型のものと長軸６m程のやや大型のものがあり、長軸を東西に取っている。主柱穴は２本を基調とし、柱間の中央に炉跡が掘り込まれるタイプのものである。分布状況は遺跡西側のA～I区、中央部のL～O区にやや纏まる。東側では102・106号の２軒のみで、両者とも円形周溝状遺構と切りあう。各遺構との切り合いによる新旧関係は以下のとおりである（古→新)。

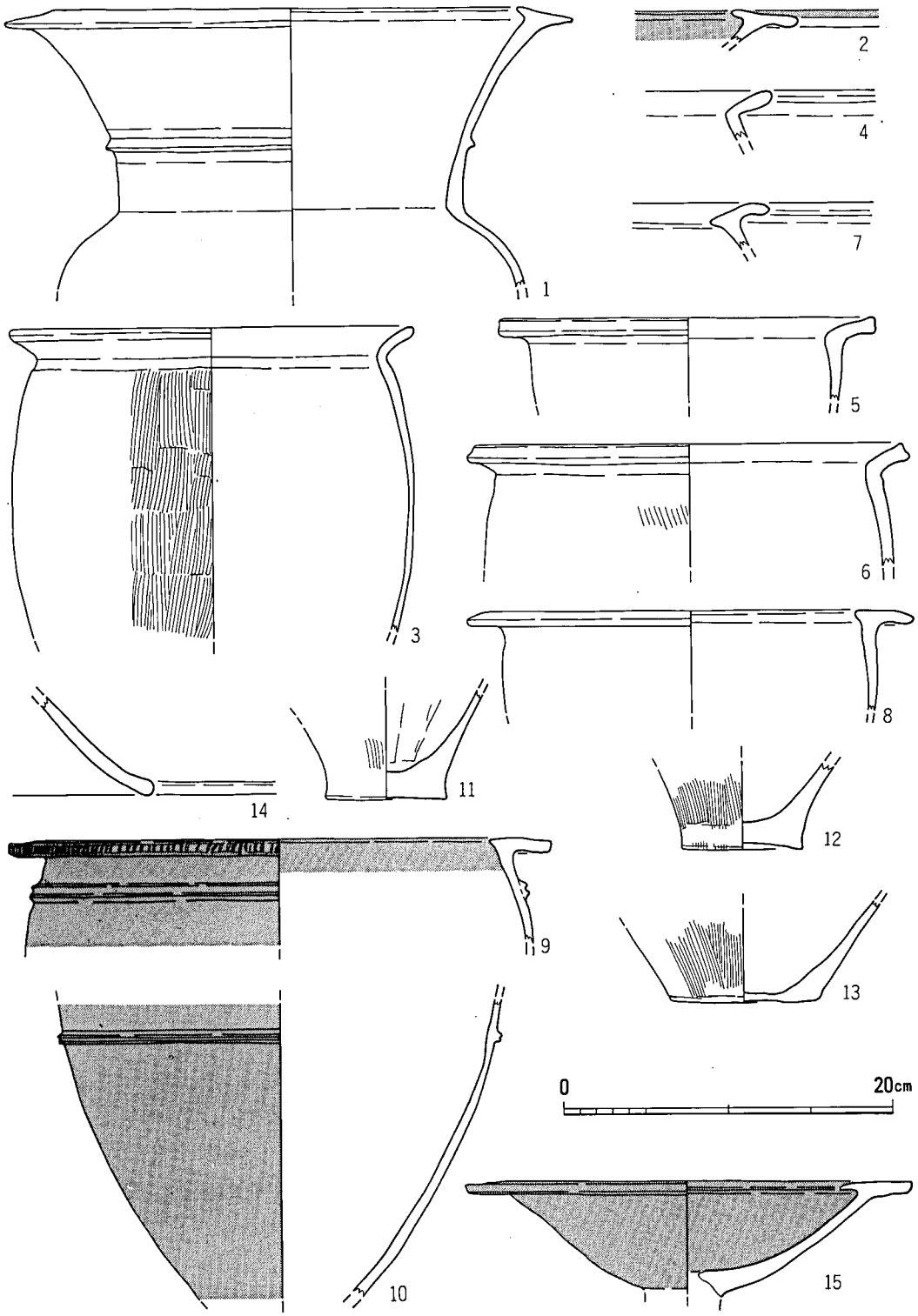
11住→１住　16住→２住・３住　17住→４住　11住→３土　14住→16住　35住→34住・１甕
12土→63住　93住→99住　113住→83住　24土→84住　26土→82住　122住→107住
29土・５円→106住　６円→102住

１号竪穴住居跡（図版５　第８図）

B２区にあり、弥生時代の11号竪穴住居跡を切った状態で検出された長方形プランの住居跡で、中央に炉跡を付設し、主柱穴は中央の２本（P1・2）である。炉跡は楕円形プランをなし、炉跡内には炭化物や焼土が少量堆積していた。床面下は砂礫層のため、暗茶褐色土で貼り床して叩き締めていた。竪穴住居跡の規模は、5.0×3.95m、壁高は残りのよい北壁で14cmを測る程度で全体として削平が著しい。出土遺物としては、壺・甕・高坏など多数の弥生土器片が床面に散乱した状態で検出された。

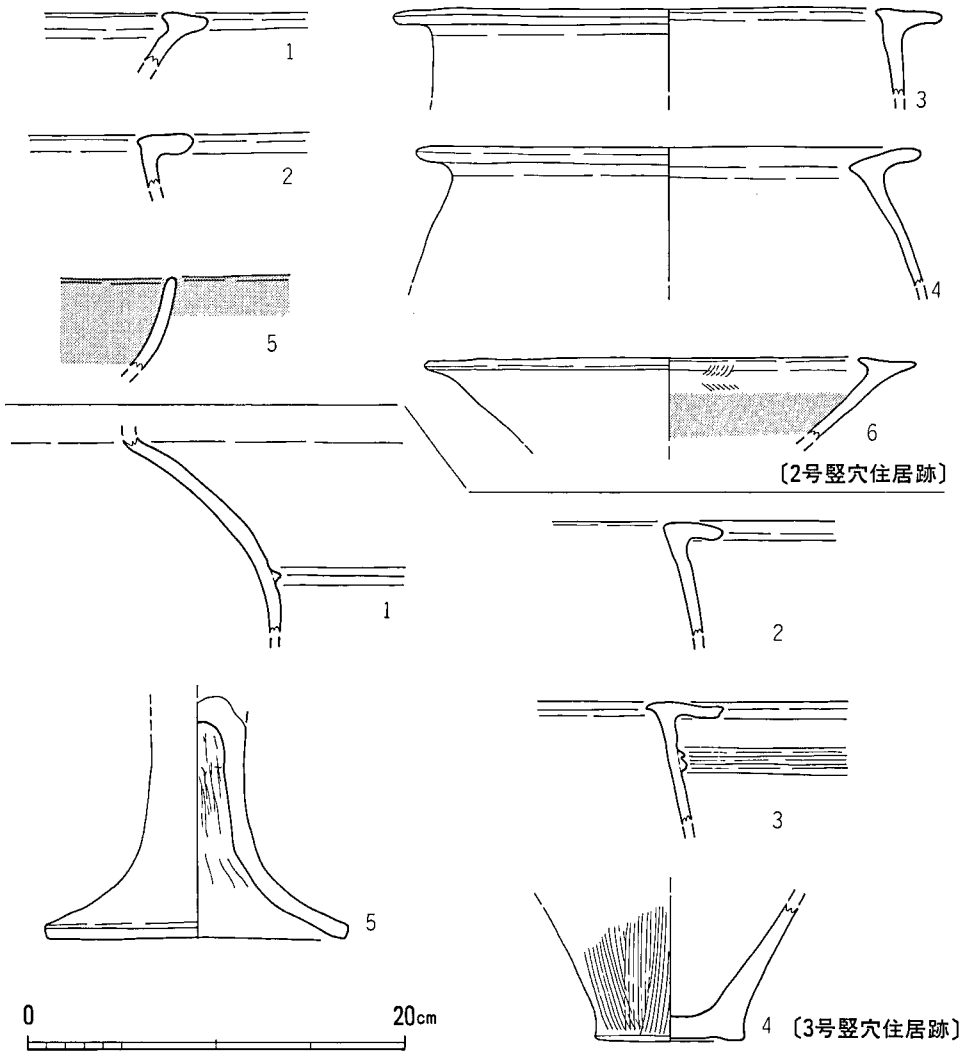


第8図　1・2号竪穴住居跡実測図（1/60）



第9図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

土器（第９図１～15）１・２は鋤先状口縁の壺で、２は外面が磨滅しているものの、内外とも丹塗りされた土器である。１は大きくラッパ状に外反した口頸部を有し、肩の張った胴部に続き、頸部下半には１条の三角突帯文を巡らしている鋤先状口縁の壺である。復原口径は35cmを測る。３～13は甕の破片資料で、３・４が「く」字状口縁、５・６が逆「L」字状口縁、７～９が「T」字状口縁の甕の破片で、10は「M」字状突帯文を有す胴部下半、11～13は平底の底部資料である。13は外面ハケ、内面ナデ調整した底部付近の資料であるが、壺の底部と思われる。調整手法は、全体に器面の風化が著しいため不明なものが多いが、３・６・11～13は外面ハケ、内面ナデて仕上げている。９・10は丹塗り土器で、外面全体と９の口縁部内面に塗布がみ



第10図　２・３号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

られる。復原口径は３が24.6cm、５が23cm、６・７が27cm、９が33cm、底径は11・12が7.3cm、13が9.2cmを測る。14は高坏の裾部の破片、15は鋤先状口縁の高坏の坏部の破片資料である。15の復原坏部径は27.3cmを測り、内外とも丹塗り磨研された作りのよい土器である。色調としては黄褐色ないしは淡黄褐色が多く、11～13のような灰黄褐色を呈すものもある。焼成はいずれも良好である。

２号竪穴住居跡（図版５　第８図）

Ｂ３区にあり、１号住居跡の南側に位置して、16号竪穴住居跡の一部を切った状態で検出された長方形プランの小型の竪穴住居跡である。炉跡はほぼ中央にあり、主柱穴は中央よりやや西壁に偏るがＰ１・Ｐ２の２本で、北壁に対して南壁が若干短い住居跡である。１号竪穴住居跡と同様、床面下が砂礫層のため貼り床をしている。中央の炉跡には少量の炭化物と焼土が堆積していた。竪穴住居跡の規模は、4.13×3.2m、壁高は残りのよい北壁で８cmと浅く、削平が著しい住居跡である。出土遺物としては、壺・甕・高坏などの弥生土器破片少量とサヌカイト製の石鏃１点、砥石１点が床面から出土した。

土器（第10図１～６）１は鋤先状口縁の壺の口縁部小破片である。２～４は「T」字状口縁の甕の破片資料で、復原口径は３が29cm、４が27cmを測り、調整は２が内外ともナデて仕上げている他は、器面が風化しているため不明である。５・６は高坏の坏部の破片で、５が内湾気味に外反する単口縁、６が鋤先状口縁の高坏の坏部の資料である。復原口径は６が26cmを測る。５は内外とも丹塗り磨研した土器である。色調は２～４が淡黄白色、１・５が暗橙色、橙色を呈し、焼成良好である。

石器（第167図１・第166図５）第167図１はサヌカイト製の石鏃で、Ｐ３から出土。第166図５は床面から出土した頁岩製の砥石で、破損後も使用されている。

３号竪穴住居跡（図版６　第11図）

Ｂ３区にあり、16号竪穴住居跡を切った状態で検出された方形プランの竪穴住居跡で、南壁と東壁の大半は発掘区域外のため未掘である。東側には２号竪穴住居跡が近接している。未調査部分を多く残すので不明な点が多いが、東壁コーナーにはベット状遺構を持ち、炉跡は不明であるが、主柱穴はＰ１と未掘の柱からなる２本と考えられる。床面は１～３号住居跡と同様、床面下が砂礫層のため貼り床しており、西壁側で一段下がるがその性格等は分からない。竪穴住居跡の規模は、現存部で2.8×2.65m、壁高は残りのよい北壁で26cmを測る。平面プランはおそらく方形になろう。出土遺物としては、壺・甕・高坏などの弥生土器破片少量と黒曜石製の石鏃１点である。

土器（第10図１～５）１は壺の胴部上半、２・３は甕の口縁付近、４は甕の底部、５は高坏

の脚部の破片資料である。1は胴部に1条の三角突帯文を巡らし、内外ともナデて仕上げている暗黄褐色を呈す土器である。2・3は「T」字状口縁を有し、3の口縁下には「M」字状突帯文がめぐる。4は平底で外面ハケ、内面ナデ仕上げで、底径は8㎝を測る。5はラッパ状に開く高坏の脚部の資料で、内外ともナデて仕上げており、柱状部内面にはシボリ痕が著しい。復原裾部径は16㎝を測る。色調は1が暗黄褐色、2・3が暗橙色、4が淡黄白色、5が橙褐色を呈し、焼成はかなり良好である。

石器（第167図2）腰岳産黒曜石製の石鏃で、基部を大きく欠損する。しかし、抉りの部分はわずかに残る。

4号竪穴住居跡（図版6　第11図）

C3区にあり、17号竪穴住居跡を切った状態で検出された不整長方形プランの竪穴住居跡で、未調査地区を多く残すため、不明な点が多い。主柱穴は2本柱と思われ、炉跡も不明である。床面は他の住居跡と同様、床面下が砂礫層のため暗茶褐色土で貼り床して堅く叩き締めている。竪穴住居跡の規模は、6.55×3.4m、壁高は残りの良い北壁で15㎝を測る。出土遺物としては、甕の破片、サヌカイト製の石鏃1点などが床面に散乱した状態で検出された。

土器（第12図1～9）1～3は逆「L」字状口縁、4・5は「く」字状口縁、6～8は「T」字状口縁の甕の破片資料、9は甕の底部資料である。4・5の口縁端部はつまみ上げ気味に仕上げており、口縁下には1条の三角突帯文が巡っている。調整は8が胴部外面ハケ、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデの他は、全体に器面の風化が著しく不明である。復原口径は2が26㎝、3・7が31㎝、5が36.4㎝、8が36.7㎝、9は平底で底径6㎝を測る。色調は1・9が淡黄白色、4～6淡黄褐色、2が暗橙色、3が暗黄褐色、7が暗黄褐色、8が灰黄褐色を呈し、焼成は比較的良好である。

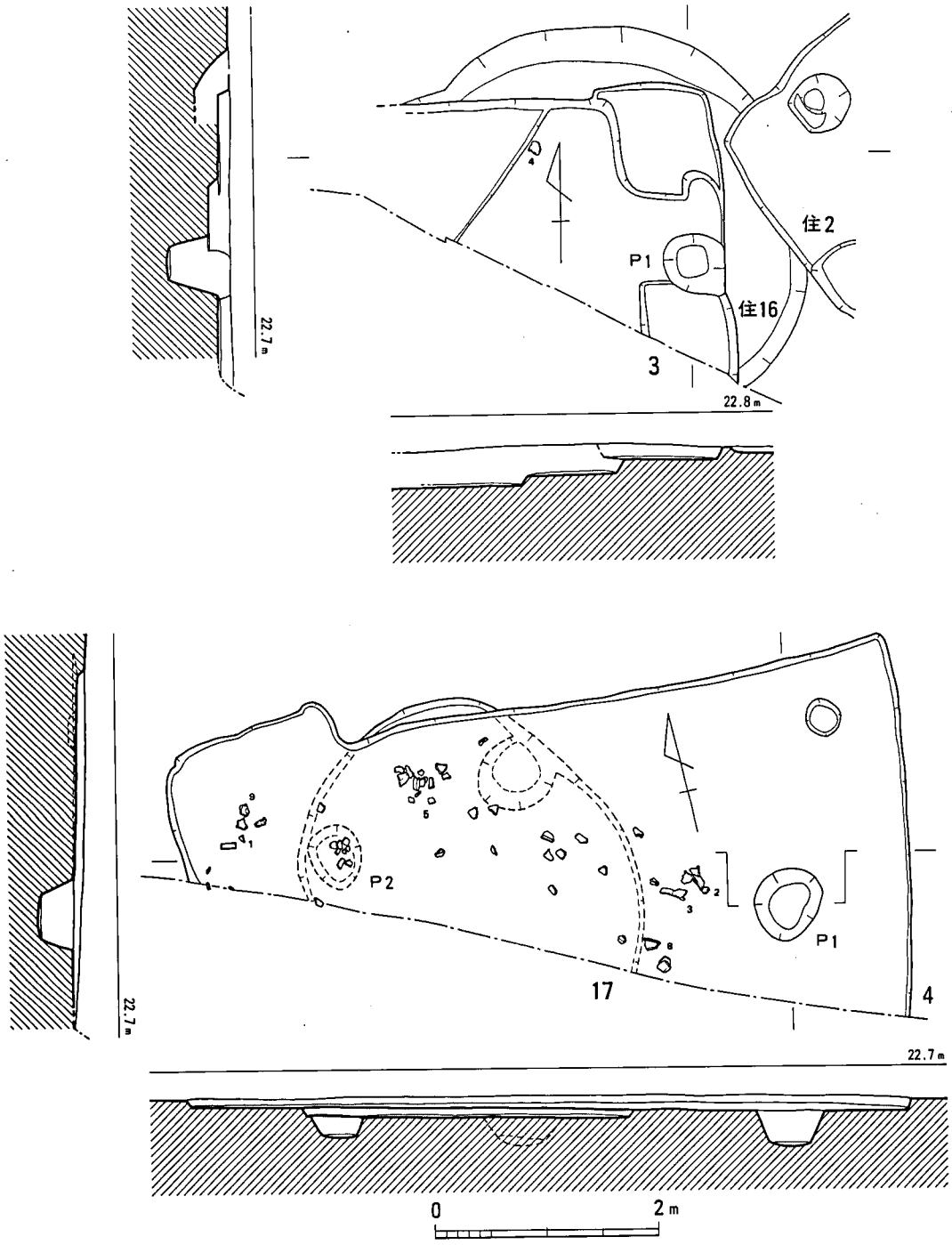
石器（第167図3）ほぼ完形のサヌカイト製石鏃。

11号竪穴住居跡（図版7　第13図）

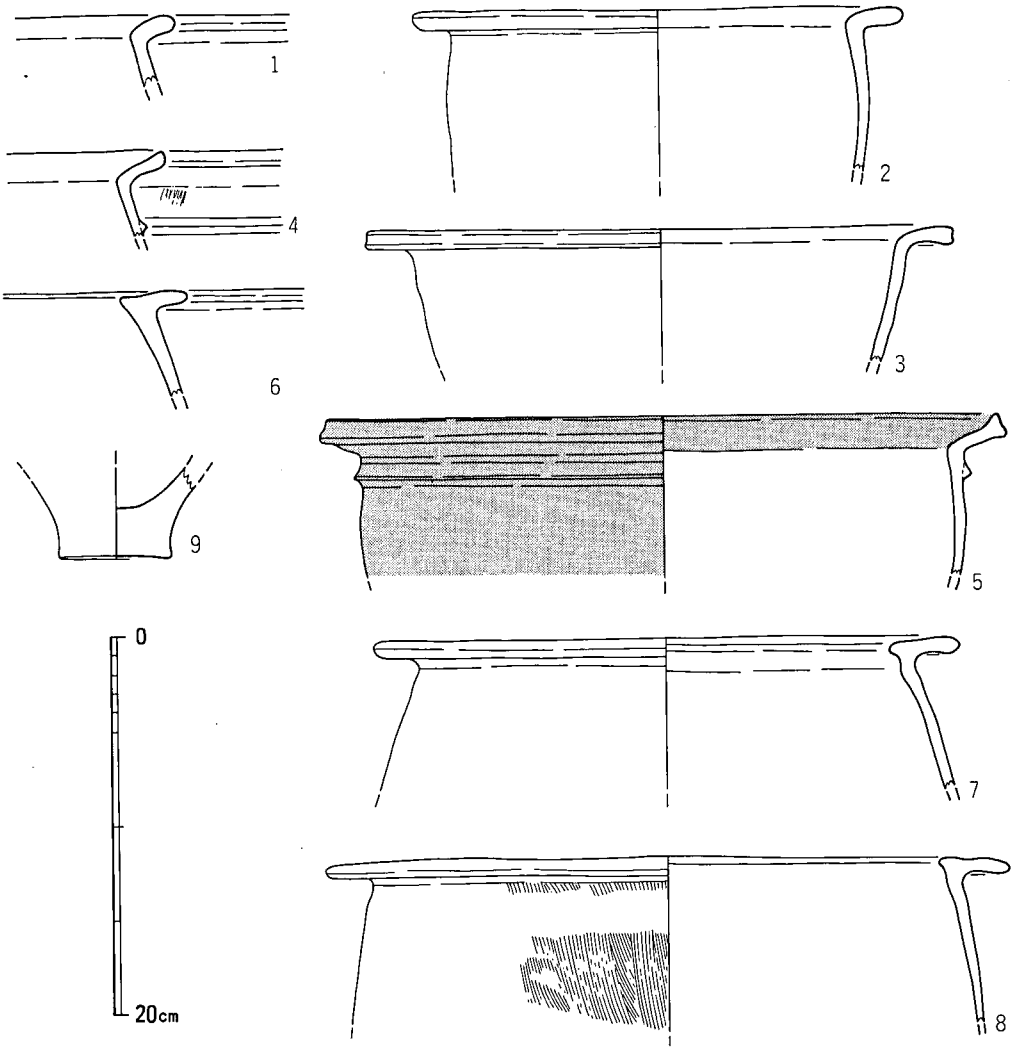
B-C2区にあり、西壁側を1号竪穴住居跡に、東壁側を3号土坑に切られた状態で検出された不整長方形プランの竪穴住居跡で、主柱穴は主軸にあるP1と未発見のため不明であるが、2本柱と思われ、炉跡は中央部に付設されている。炉跡内には炭化材や焼土が少量堆積していた。床面下は砂礫層のため貼り床をしている。竪穴住居跡の規模は6.1×4.0mで、出土遺物は何等出土していない。

12号竪穴住居跡（図版8　第14図）

C1-2区において検出された2本の主柱穴と炉跡からなる住居跡で、削平のため住居の壁



第11図　3・4・17号竪穴住居跡実測図（1/60）

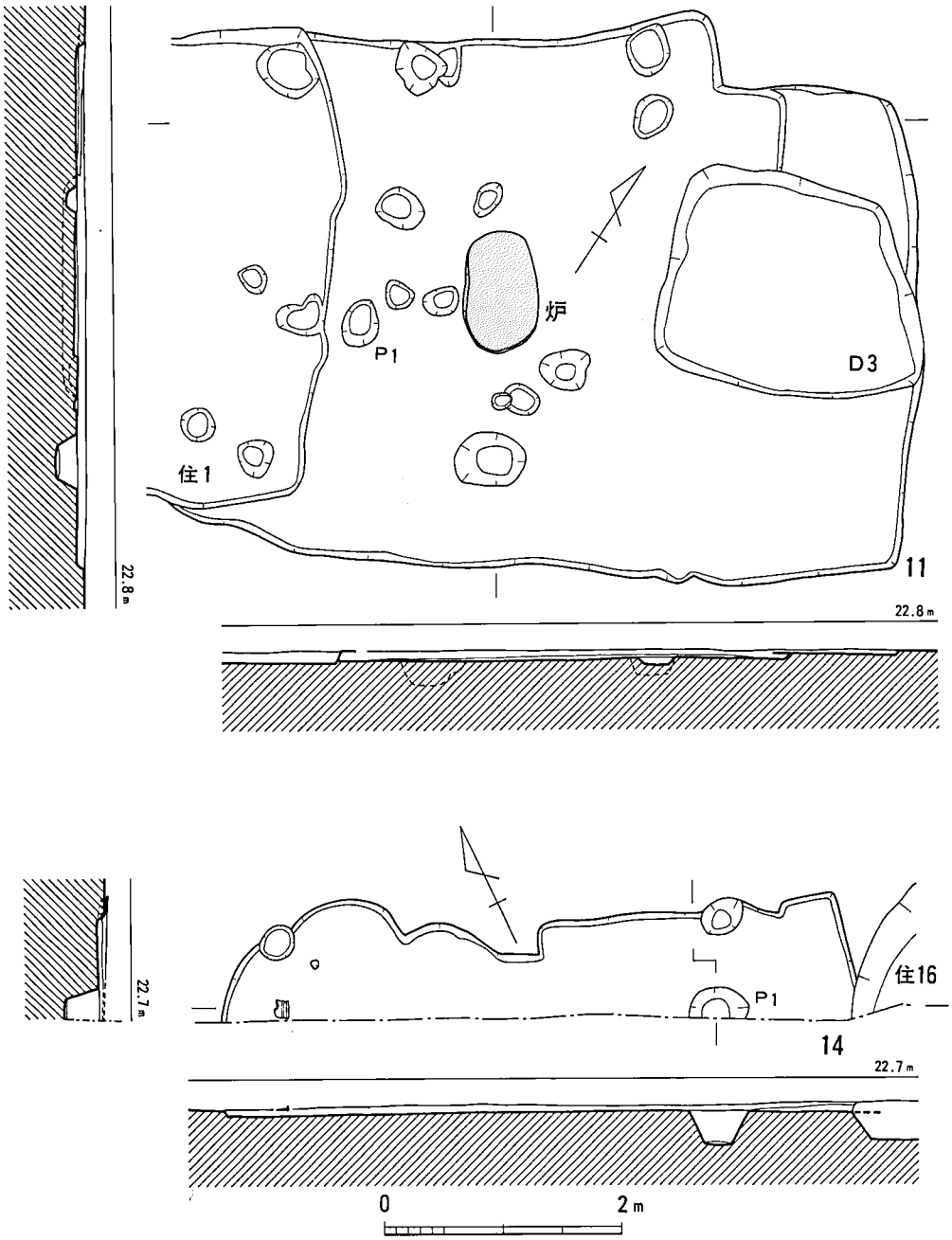


第12図　4号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

は全て消失している。したがって、住居跡のプランや規模などは不明である。柱間は2.2m、炉跡は楕円形プランを呈し、炉内には炭化物や焼土が堆積していた。床面は削平が著しいためか、確認できない。出土遺物は何等出土していない。

13号竪穴住居跡（図版8　第15図）

C2区から検出された炉跡だけの住居跡で、西側には弥生時代の11号竪穴住居跡、北側には12号竪穴住居跡がある。住居跡のプラン、規模、柱穴、出土遺物などは不明である。炉跡は楕円形プランを呈し、長径1.4m、短径1.3m、深さ18cmを測る。炉内には炭化物や焼土が堆積し

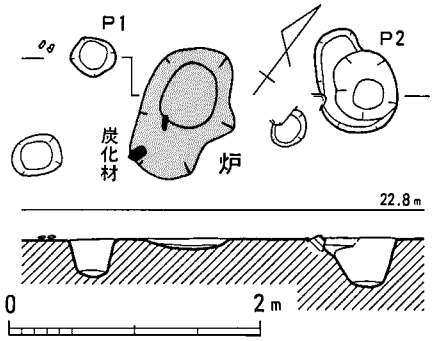


第13図　11・14号竪穴住居跡実測図（1/60）

ていた。

14号竪穴住居跡（図版９　第13図）

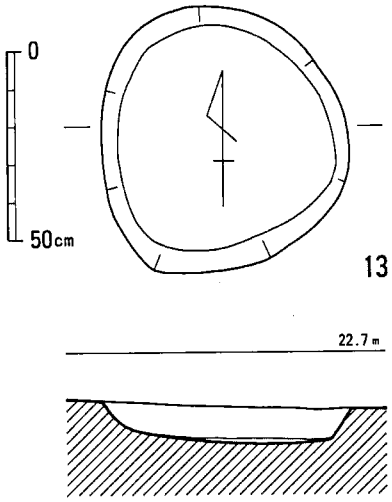
Ａ３区にあり、その大半は路線外のため未発掘であり、竪穴住居跡のプラン、規模などは明確にできないが、楕円形プランの16号竪穴住居跡に切られている状況と北壁から東壁の形状からすれば、楕円形プランを呈す竪穴住居跡の可能性が高い。調査部分が狭少のため、炉跡や柱穴等は不明と言わざるをえない。現存部での規模は、5.3×1.0m、壁高６㎝を測る。出土遺物としては甕形土器の口縁部破片等があったが、整理作業の過程で紛失しており、発見後改めて報告したい。また、Ｐ１内から炭化種子が出土している。



第14図　12号竪穴住居跡実測図（1/60）

15号竪穴住居跡（図版９　第16図）

Ｄ３区にあり、７号竪穴住居跡の南側から検出された方形プランの竪穴住居跡で、炉跡は検出されておらず、主柱穴についてはＰ１・Ｐ２の２本柱の可能性があるが、両者とも浅く必ずしも確定できない。床面下は他の住居跡と同様、砂礫層のため暗茶褐色土で貼り床し、叩き締めている。竪穴住居跡の規模は、3.15×3.05mを測り、壁高は８㎝と浅く、削平が著しい。出土遺物は小破片が数点出土しただけである。



第15図　13号竪穴住居炉跡実測図(1/20)

16号竪穴住居跡（図版10　第16図）

Ｂ３区にあり、２・３号竪穴住居跡に切られた状態で検出された長楕円形プランの竪穴住居跡で、南壁と西壁は路線外のため未発掘である。主柱穴は明確ではないが、周壁に巡るＰ１・Ｐ２・Ｐ３の可能性もある。炉跡については調査範囲内では確認できていない。この住居跡の床面も、砂礫層のため貼り床して叩き締めて作り出している。竪穴住居跡の規模は、4.05×3.6m、壁高は残りの良い北壁で30㎝を測る。出土遺物としては、壺・甕などの弥生土器破片が埋土中から少量出土した。

土器（第17図）１は短頸の広口壺で、口縁部には紐通し孔が穿孔されている。調整手法は器

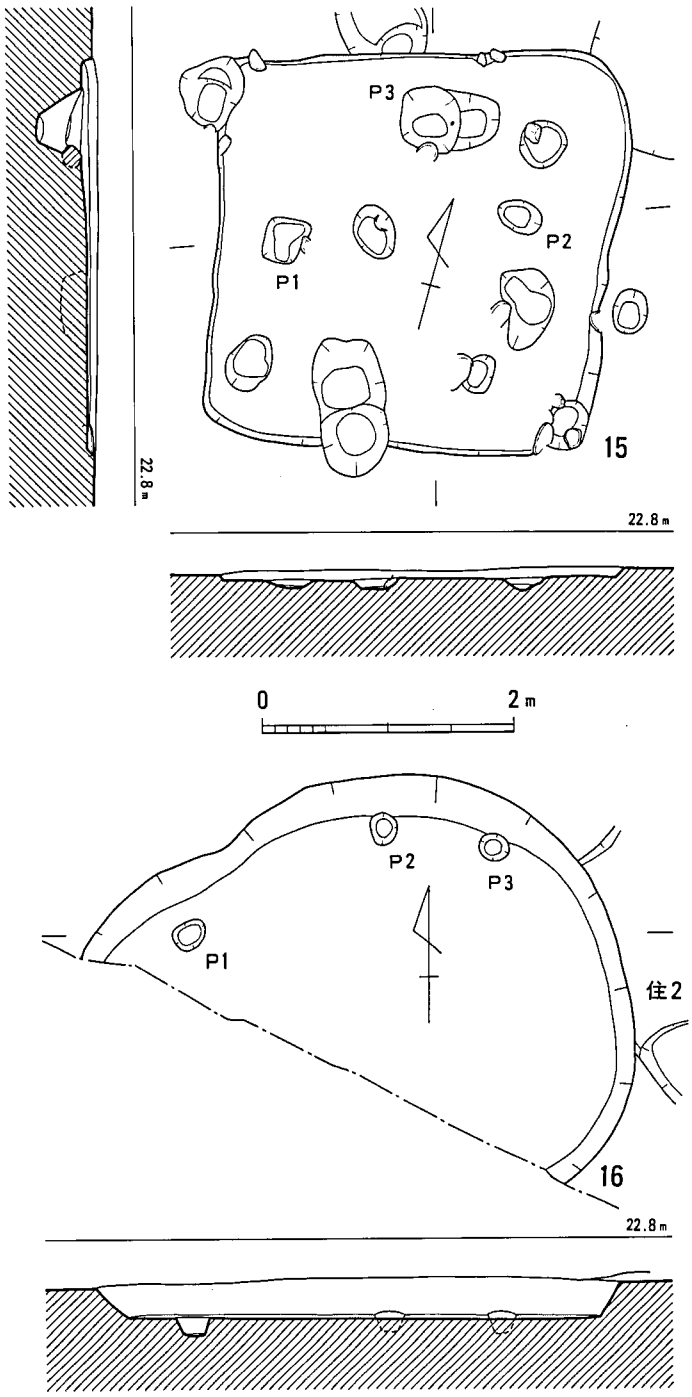
面風化のため不明である。復原口径は16cmを測る。2・3は甕の口縁部付近の破片資料で、2は「く」字状、3が「T」字状口縁、4は平底の底部資料である。2の口縁下には2条の三角突帯文が貼付されている。調整は2・3が内外ともナデ、4は外面ハケ、内面ナデて仕上げている。復原口径は2が44cm、4は底径8cmを測る。色調は2が淡橙褐色の他は淡黄褐色を呈し、焼成も良好である。

17号竪穴住居跡（図版10　第11図）

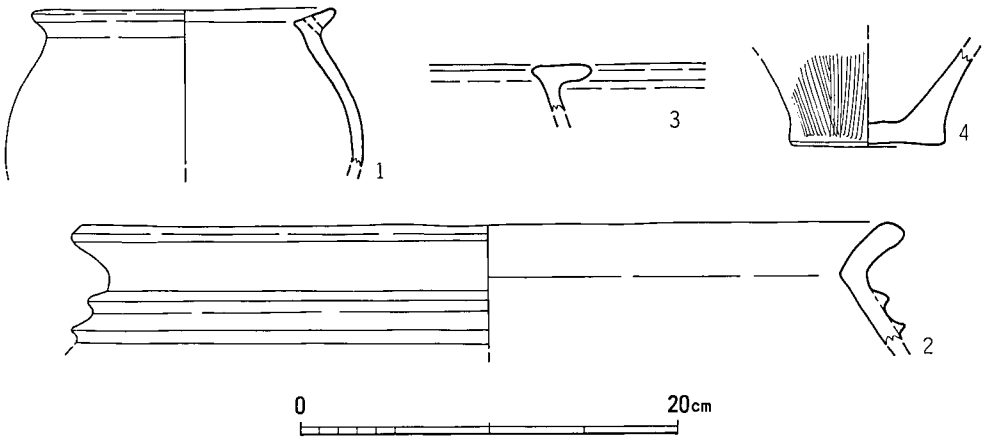
C3区にあり、4号竪穴住居跡に切られた状態で検出された楕円形プランの竪穴住居跡で、南壁側は路線外のため未発掘である。床面には2個のピットが穿たれているが明確な主柱穴や炉跡は確認できていない。床面は下層が砂礫層のため暗褐色土で貼り床して作り出している。竪穴住居跡の規模は、3.2×2.35m、壁高は10cmを測る。出土遺物は何等出土していない。

18号竪穴住居跡（図版11　第18図）

E3区で、15号竪穴住居跡の4m東側に位置する。平面形は



第16図　15・16号竪穴住居跡実測図（1/60）



第17図　16号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

隅丸長方形を呈し、長軸4.18m、短軸3.19m、残存高18cmと本跡においては小型の竪穴住居跡である。炉跡は径88cmの円形を呈し、床面のやや西寄りに掘り込まれている。なお、床面には5個程のピットがあるが、主柱穴は判然としない。床面直上から砥石・黒曜石原石が出土している。長軸方位はN-66°-Eを示す。

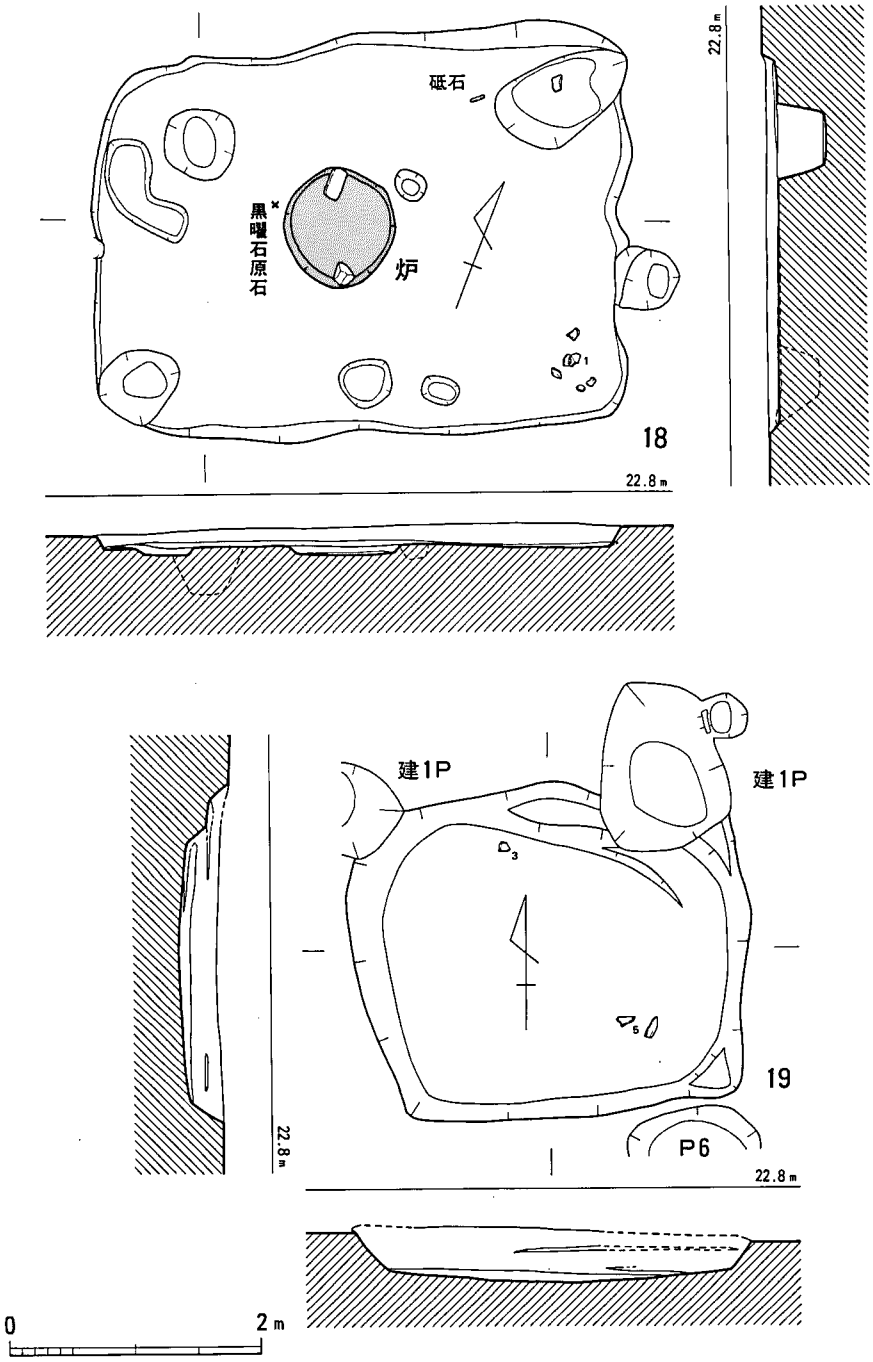
土器（第19図1～5）1は鋤先状口縁壺で、口径は23.0cmに復原した。口縁部平坦面は外方に傾斜しており、内外面とも丹を塗布している。2～4は逆「L」字形口縁の甕であるが、内面にも突出している。2は口唇部に刻み目を付しており、頸部のやや下位には「M」字形突帯文を貼付する。外面には丹を塗布している。口径は2が29.8cm、3は32.2cm、4は34.0cmに復原した。5は蓋の摘み部破片で、摘みは内窪み。外面はハケ目による。摘み部径は6.4cmを測る。

石器（第166図6）頁岩製の砥石で、12.2×2.3×1.7cmを測る。両端部とも欠損しているが、欠損後も使用されている。

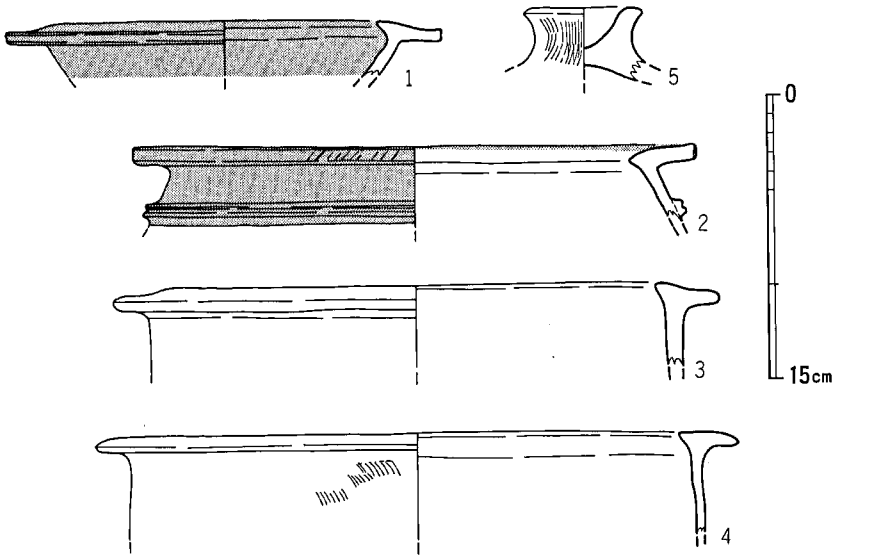
19号竪穴住居跡（図版11　第18図）

F3区に位置し、1号掘立柱建物跡に切られる。平面形は不整方形を呈し、長軸3.24m、短軸2.66m、残存高43cmを測る。床面には炉・柱穴がみられないことから竪穴住居跡とするよりも竪穴とした方が妥当かと思われる。長軸方位はN-82°-Wを示す。

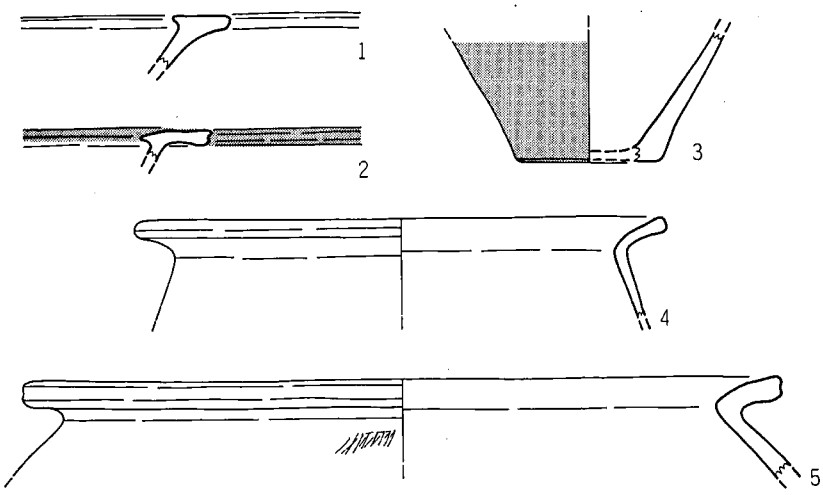
土器（第19図1～5）1・2は鋤先状口縁壺の小片であるが、1の発達度合いは弱い。2は口縁部平坦面に丹を塗布している。3は底部破片であるが、外面に丹を塗布していることから壺の底部になろう。遺存状態は悪く、器面調整不明。復原底径7.6cmを測る。4・5は「く」字形口縁の甕であり、4は口唇部が丸く、5は口唇部に面を有する。4の器壁は薄く、口径は4



第18図　18・19号竪穴住居跡実測図（1/60）

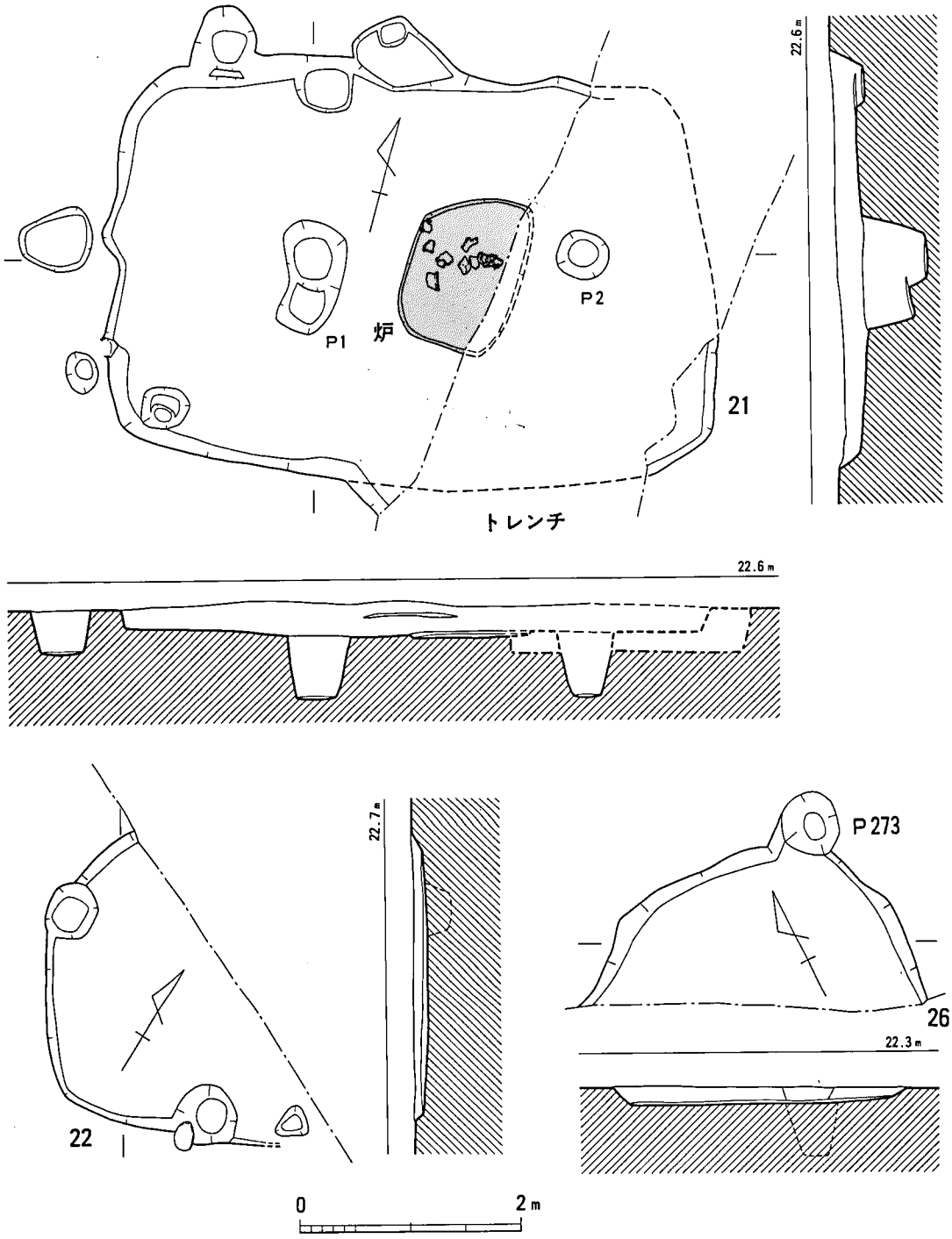


〔18号竪穴住居跡〕

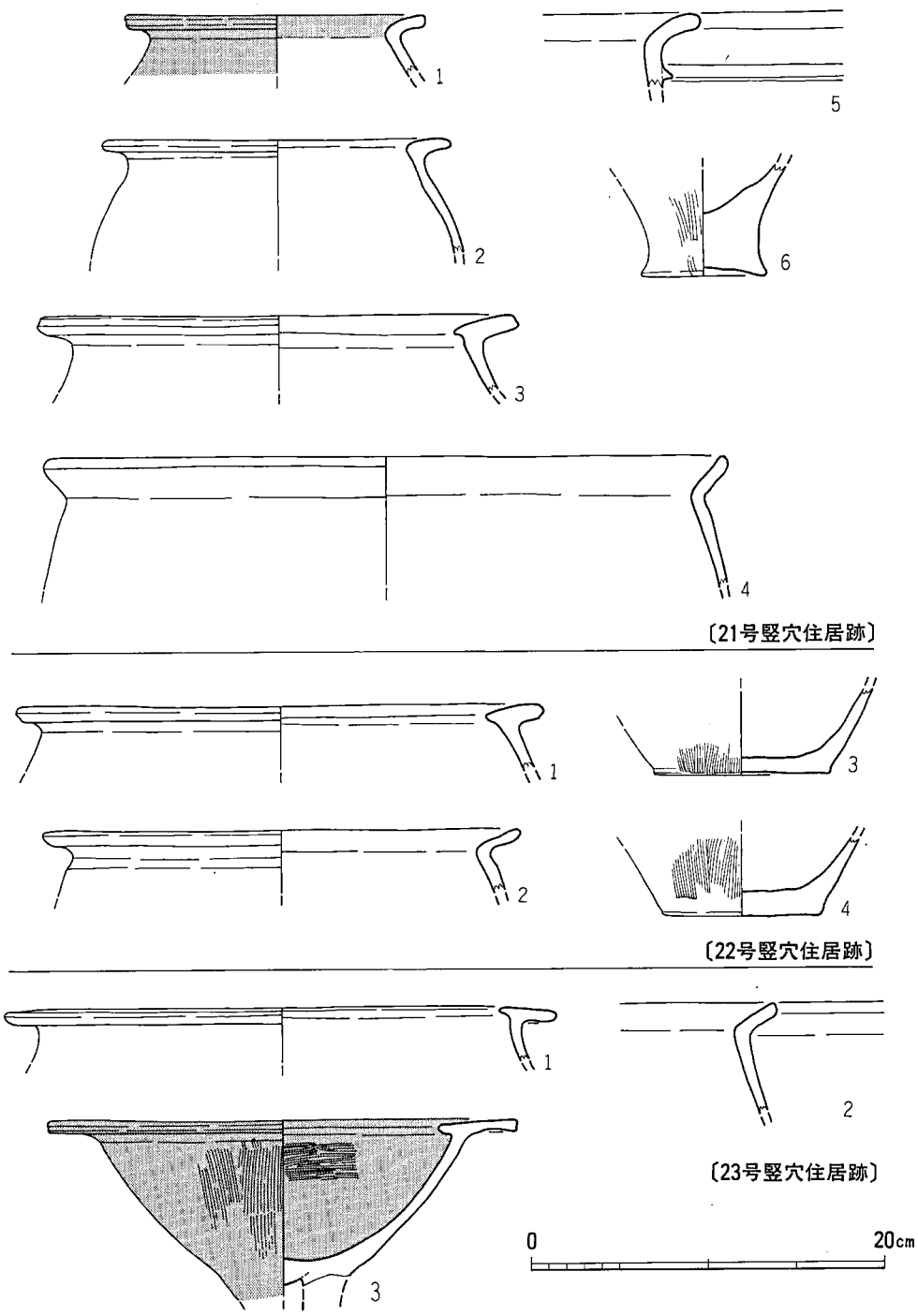


〔19号竪穴住居跡〕

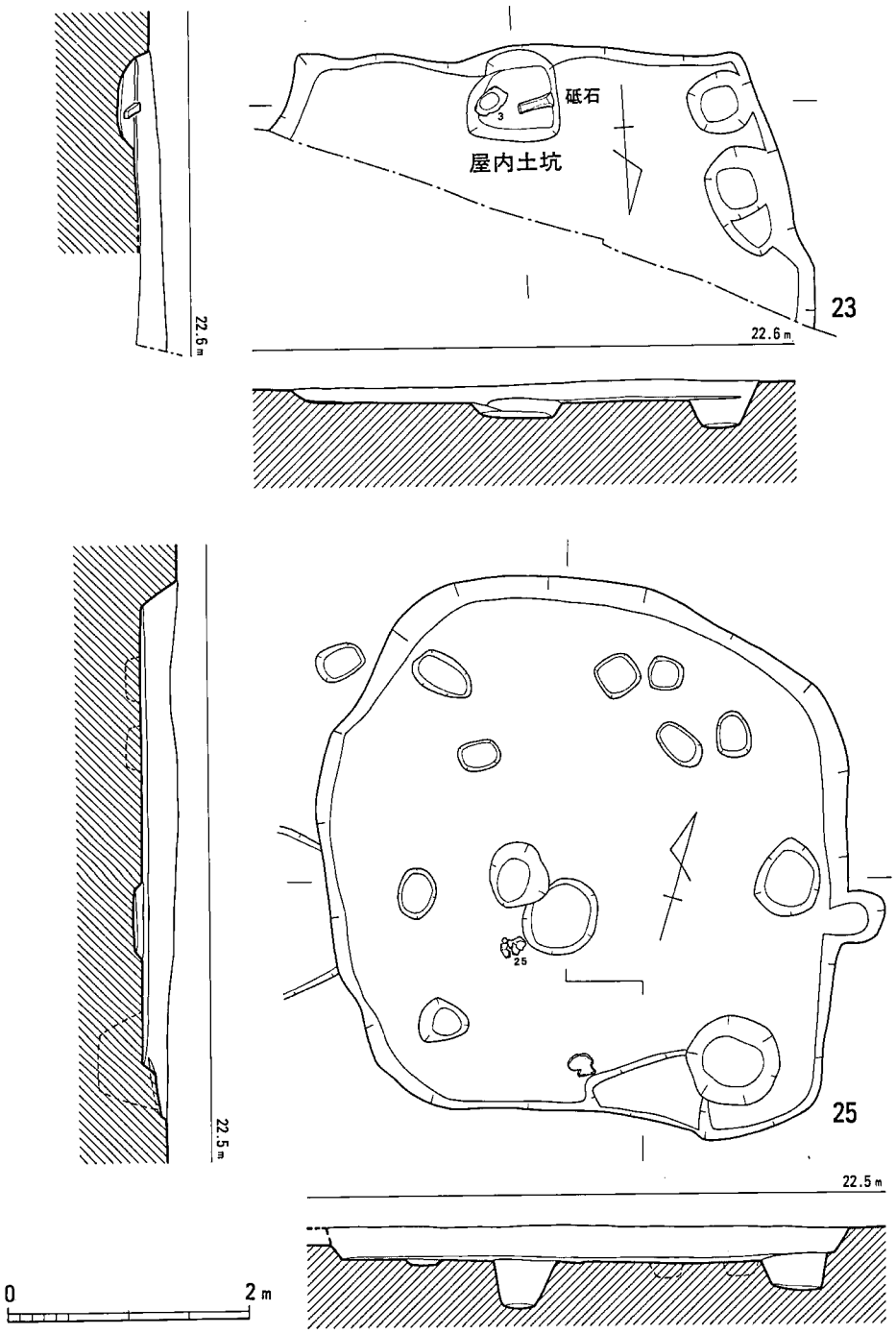
第19図　18・19号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



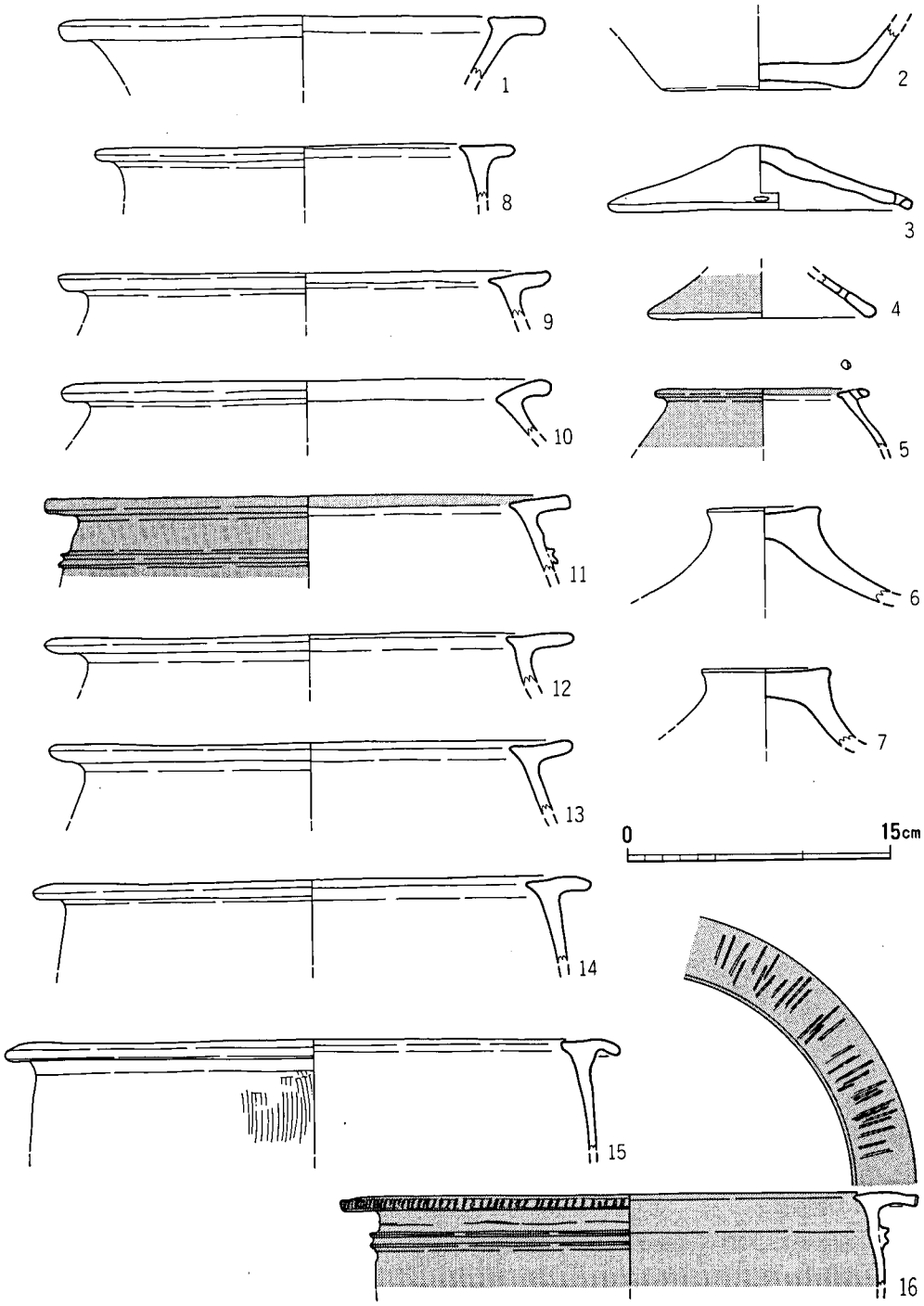
第20図　21・22・26号竪穴住居跡実測図（1/60）



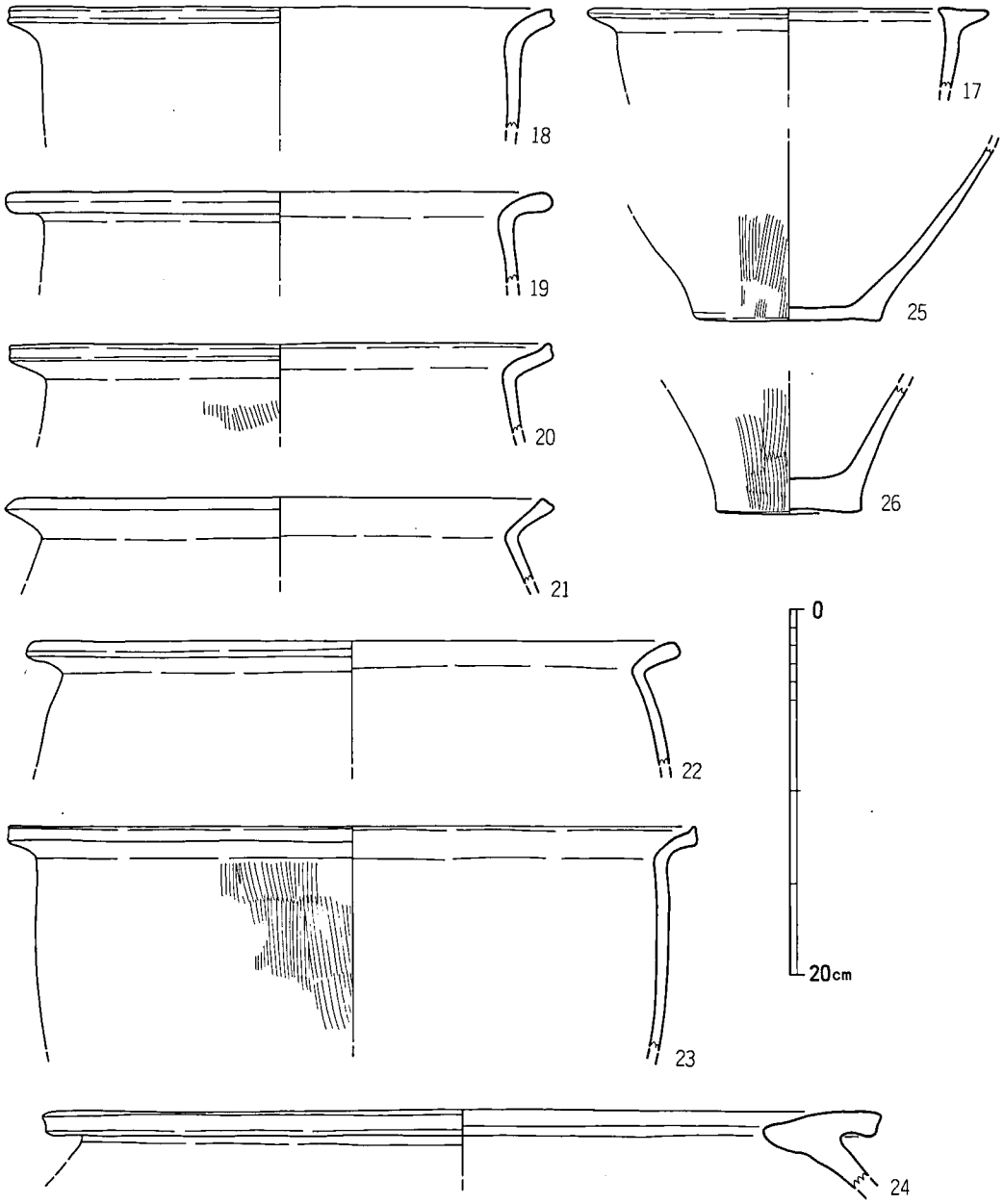
第21図　21～23号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



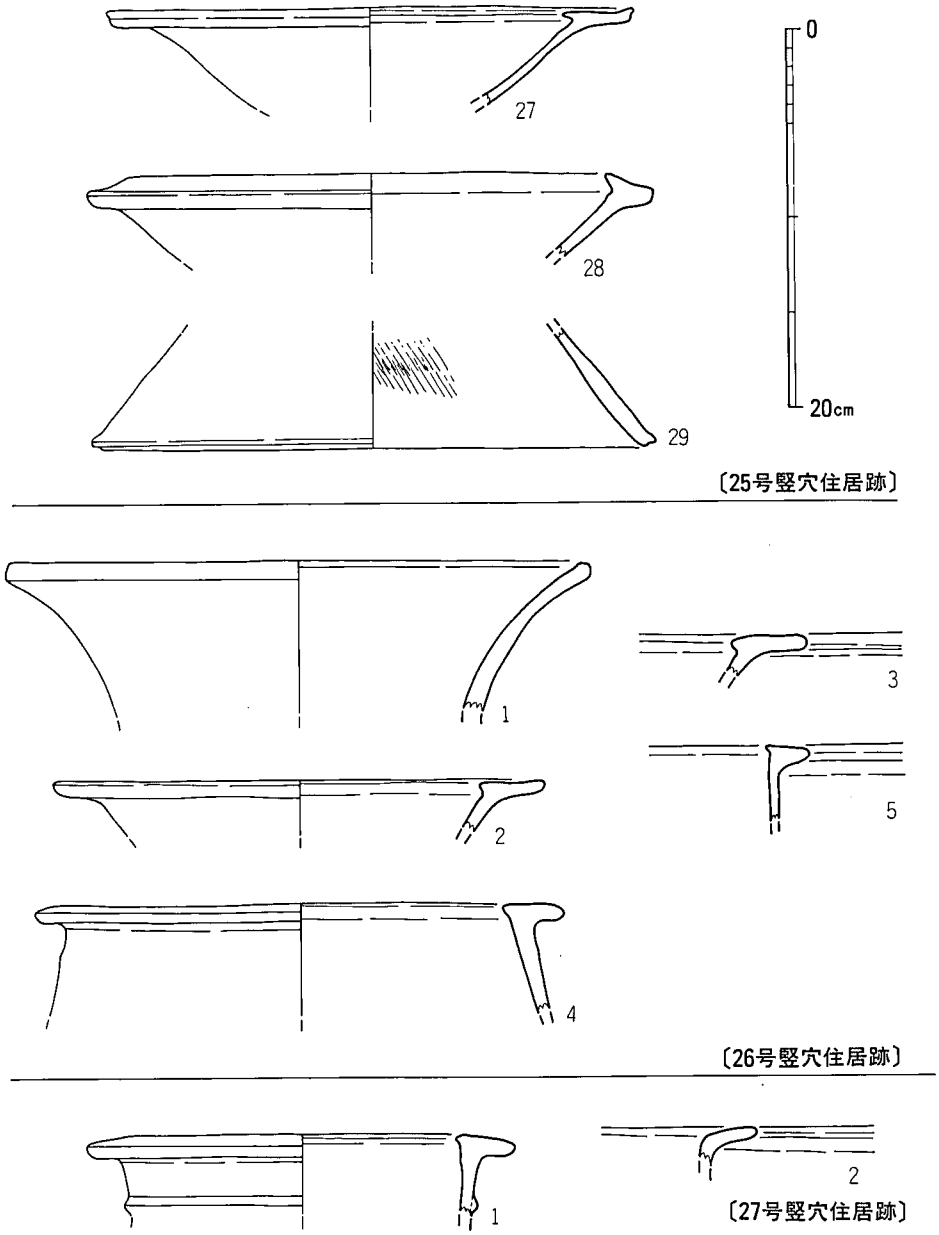
第22図　23・25号竪穴住居跡実測図（1/60）



第23図　25号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）



第24図　25号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）



第25図　25～27号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

が28.2cm、5は40.4cmに復原した。

21号竪穴住居跡（図版12　第20図）

F–G 3区で、19号竪穴住居跡の4m南東側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸5.5m、短軸3.8m、残存高30cmの規模を呈する。床面には径50cm前後の主柱穴が2個あり、柱間は2.45mを測る。長軸方位はN–78°–Eを示し、東西棟の竪穴住居跡である。炉跡は床面のやや東寄りにあり、長軸1.43mの不整形を呈するが、東壁部分が試掘トレンチにより失われるため短軸は不詳。炉内には割合多くの土器片が入っていた。

土器（第21図1～6）1は無頸壺で、口縁部は「く」字形に屈曲する。口縁部内面から外面にかけて丹を塗っている。口径は17.0cmに復原した。2・3は逆「L」字形口縁の甕で、復原口径は2が19.8cm、3は26.6cm。3の傾きはもう少し起きるか。4は「く」字形口縁の甕で、口縁は内湾し、口唇部は丸く納める。5は如意状口縁の甕で、緩く外反する。頸部の下位に三角突帯文を貼付している。6は底部破片で、上げ底を呈する。

22号竪穴住居跡（第20図）

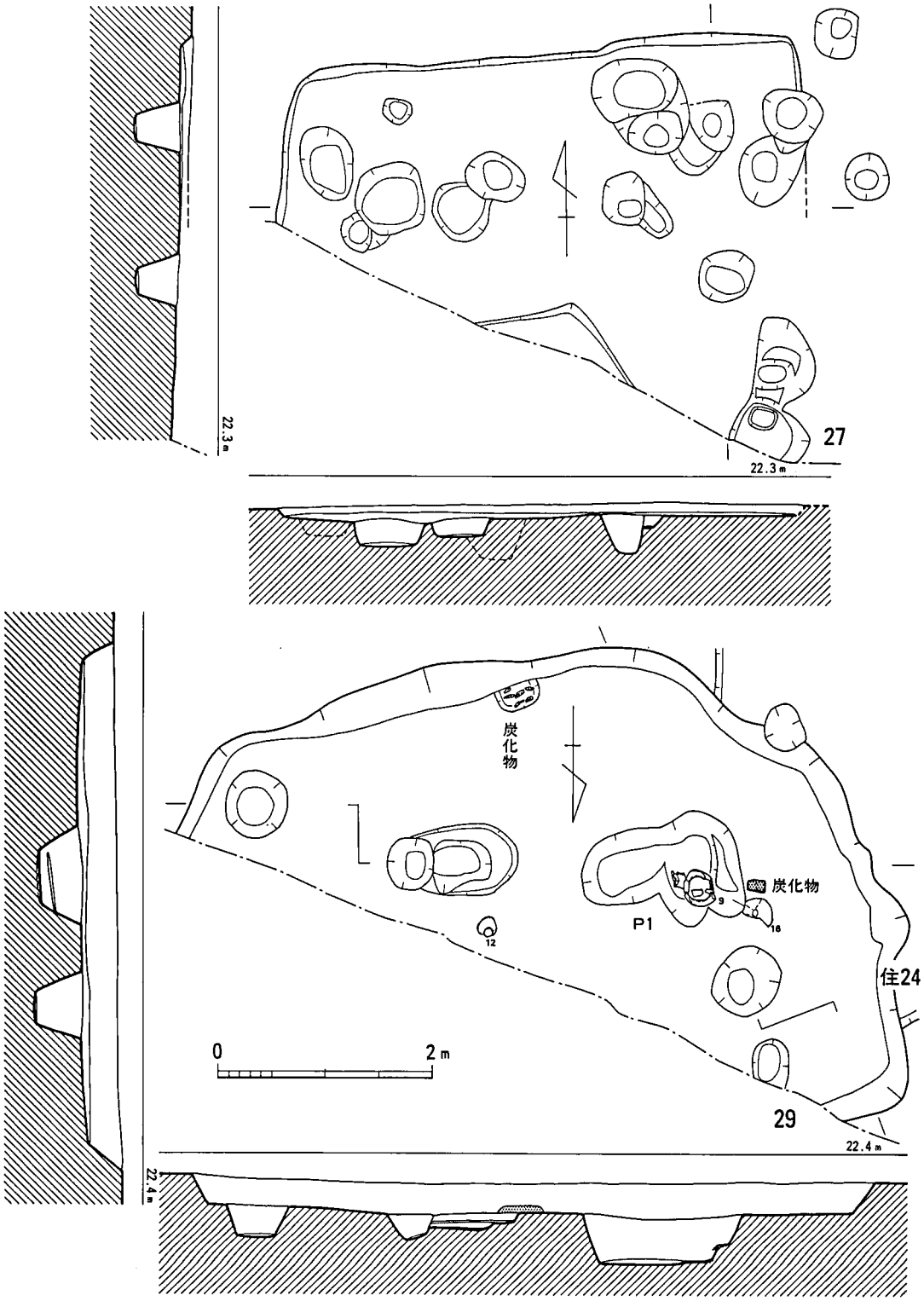
F–G 2区で、21号竪穴住居跡の5.5m北側に位置する。西壁と南壁部分を検出した程度で、大半が調査区外にある。そのため、平面形は隅丸長方形を呈すると思われるが、詳細は不明。また、検出範囲内では炉跡・主柱穴はみられない。一応竪穴住居跡としたが、別の遺構の可能性がある。

土器（第21図1～4）1は逆「L」字形口縁の甕で、内側にも突出する。2は「く」字形口縁の甕であるが、頸部を強く撫でつけている。口径は1が30.0cm、2は27.0cmに復原した。3・4は平底の底部破片で、甕若しくは鉢になろう。外面はハケ、内面にはナデが施される。底径は3が10.0cm、4は9.0cmを測る。

23号竪穴住居跡（図版13　第22図）

G–H 3区で、22号竪穴住居跡の7.5m北西に位置する。南壁部分を検出した程度で、大半が調査区外にあるため詳細は不明。南壁長3.64m、残存高18cmで、平面形は隅丸長方形を呈するものと思われる。南壁中央には76cm方形の屋内土坑が掘り込まれ、浮いた状態ではあるが砥石が2点出土している。

土器（第21図1～3）1は甕の口縁部破片で、内面への突出の度合いは著しい。2は「く」字形口縁甕の小破片。口唇部は面を有する。摩滅により器面調整不明。3は高坏で、口縁部は鋤先状を呈する。復原口径は26.6cm。器面調整は外面ハケ目、内面ヘラミガキによる。内外面には丹を塗布している。



第26図　27・29号竪穴住居跡実測図（1/60）

石器（第168図１・2）１は砂岩製の砥石で、両面ともかなり使い込まれている。26.0×7.1×3.2cmを測るほぼ完形品。２は片岩系の砥石で、両面ともかなり使い込まれており、最も薄い部分で６mm。22.0×9.4×2.0cmを測る。

25号竪穴住居跡（第22図）

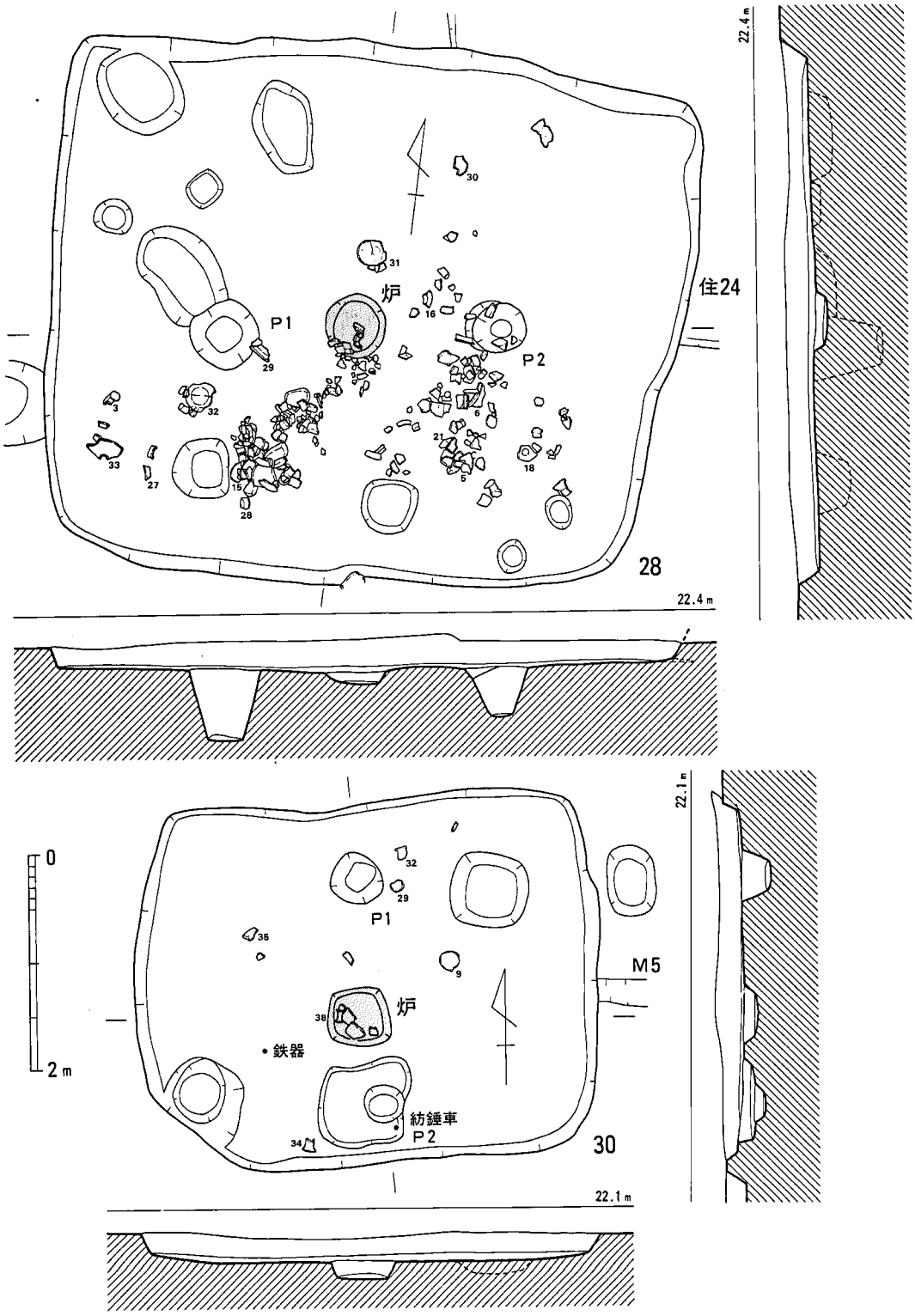
Ｇ３に位置し、９号掘立柱建物跡に切られる。平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、長軸4.4m、短軸4.32m、残存高28cmと本跡においては小型の竪穴住居跡である。床面には大小12個のピットが存在するが、断面を切ったピットを主柱穴と仮定した場合、東側ピットは住居壁に寄りすぎており、西側ピットは中央寄りである。また、他のピットは浅く、いずれも主柱穴とはみなし難い。

土器（第23～25図１～29）１は壺の口縁部破片で、逆「L」字形を呈する。口縁部平坦面は水平である。口径は27.8cmに復原した。２は上げ底の底部破片で、壺の底部になろう。底径は11.2cm。３・４は陣笠形の蓋で、口径は３が17.4mcm、４は13.1cm。ともに２箇所に紐結びのための円孔を穿っている。５は無頸壺の口縁部破片で、口縁部に２孔を有する。外面は丹を塗布している。６・７は富士山形の蓋で、何れも摘み部付近の破片。８～16は逆「L」字形口縁の甕で、10は内傾する。11・16は頸部のやや下位に「M」字形突帯文を貼付している。16は口唇部に刻み目を施し、口縁部平坦面には暗文がみられる。口径は８が24.0cmで、15は35cmに復原した。18～23は「く」字形口縁の甕で、18は頸部から緩く外反する。19・22の口縁端部はやや肥厚し、20・23は跳ね上げている。24の口縁部は内側に大きく突出する。口径は46.0cmに復原した。17は口径が22.0cmと小振りであり、頸部から内湾気味であることから鉢になろう。25・26は底部破片で25が平底、26は若干の上げ底である。底径は25が10.0cm、26は8.0cm。27・28は高坏の坏部破片で、27は鋤先状、28は「T」字形を呈する。口径は27が28.0cm、28は30.0cmに復原した。29は脚部の破片で、器台になろう。復原脚径は30.0cm。

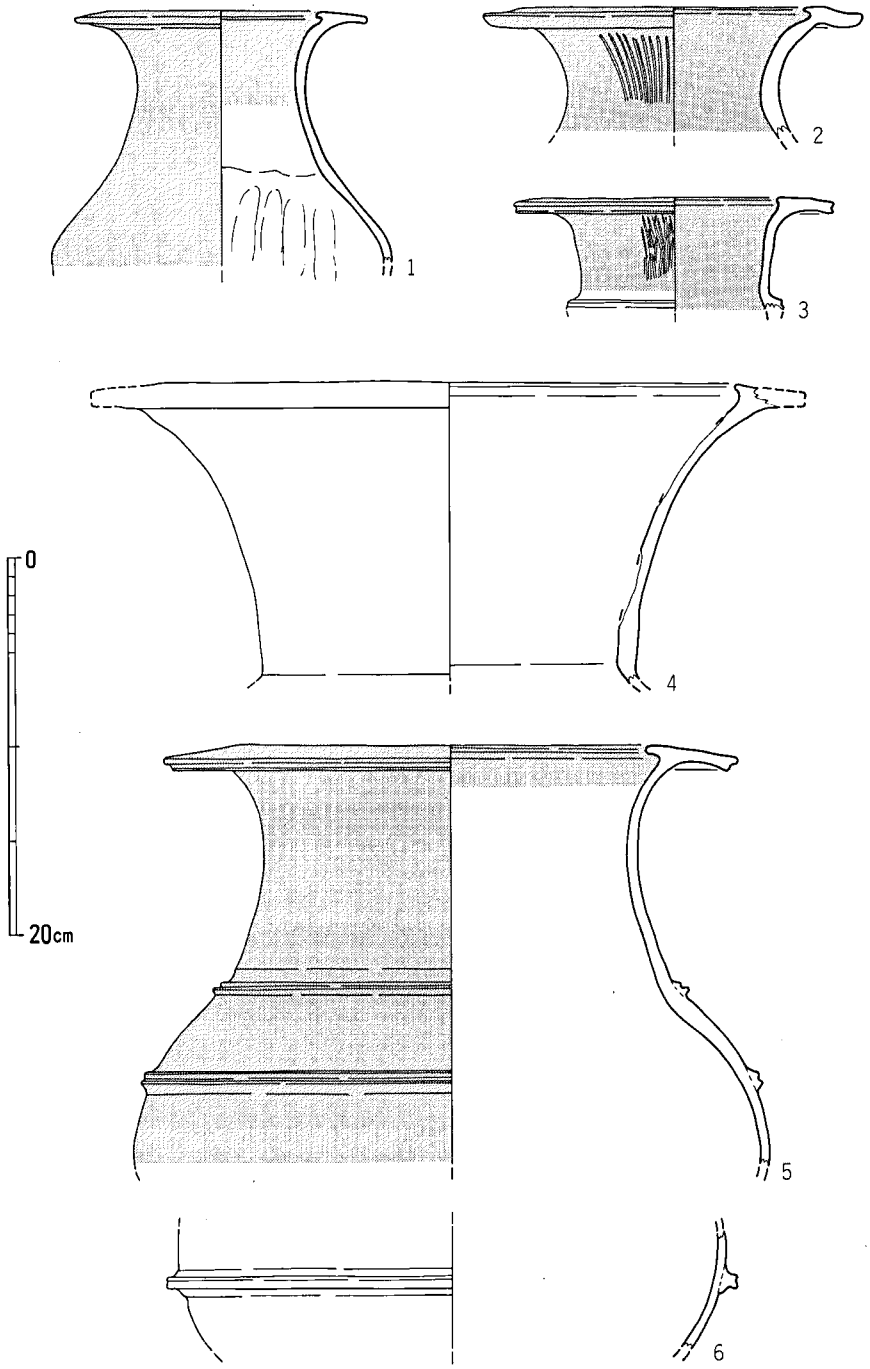
26号竪穴住居跡（第20図）

Ｅ４区で、18号竪穴住居跡の13.5m南側に位置する。北壁部分の検出で、大半が調査区外に伸びる。北壁が丸みを帯びることから平面形は小判形を呈するか。検出範囲内では炉跡・柱穴は確認されていない。

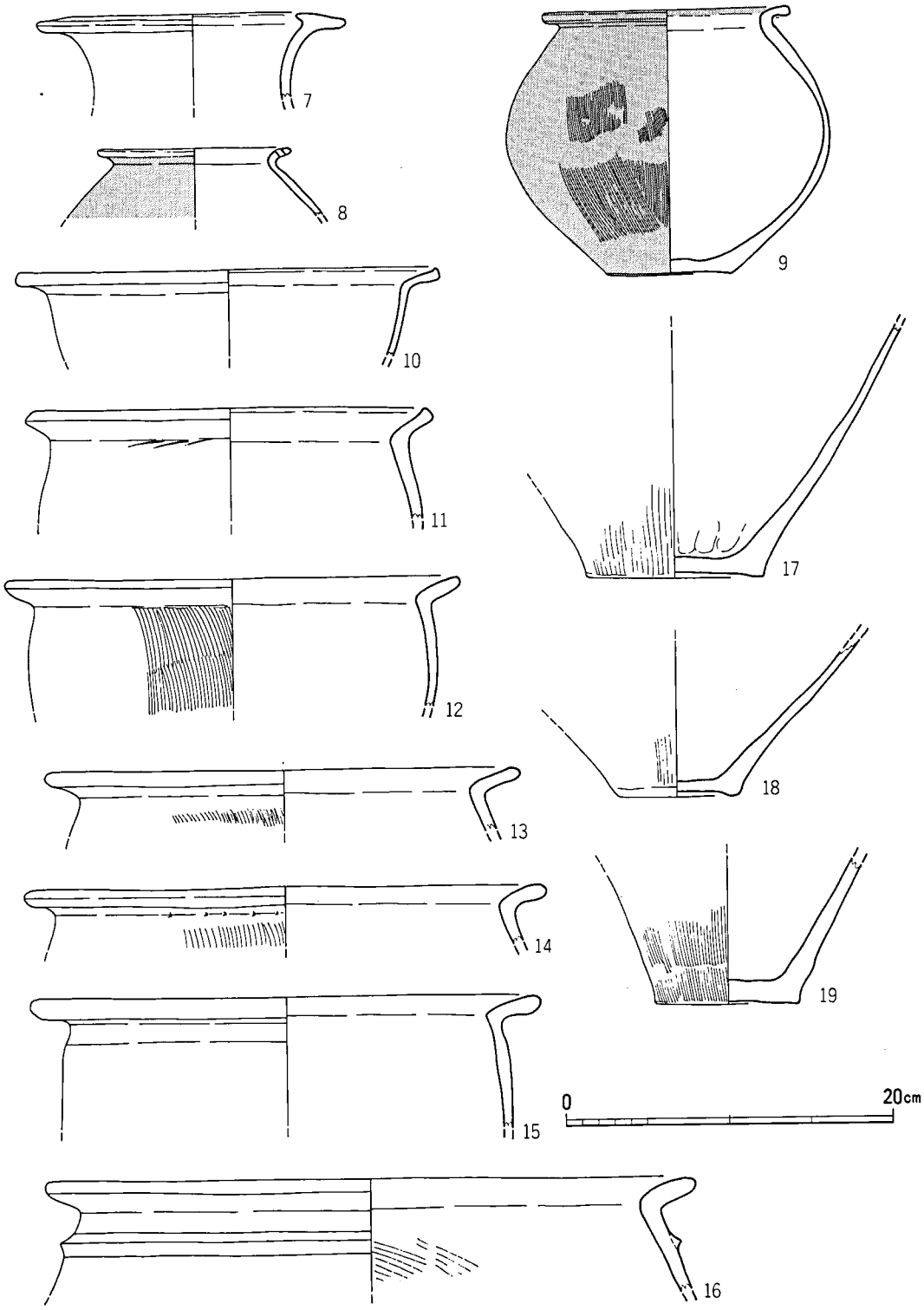
土器（第25図１～５）１は広口壺の口縁部破片で、口唇部は丸くおさめる。復原口径は30.0cm。２・３は鋤先状口縁壺の破片で、内面への突出度合いは弱い。２の口径は26.0cm。４・５は逆「L」字形口縁の甕で、４は復原口径28.0cm。



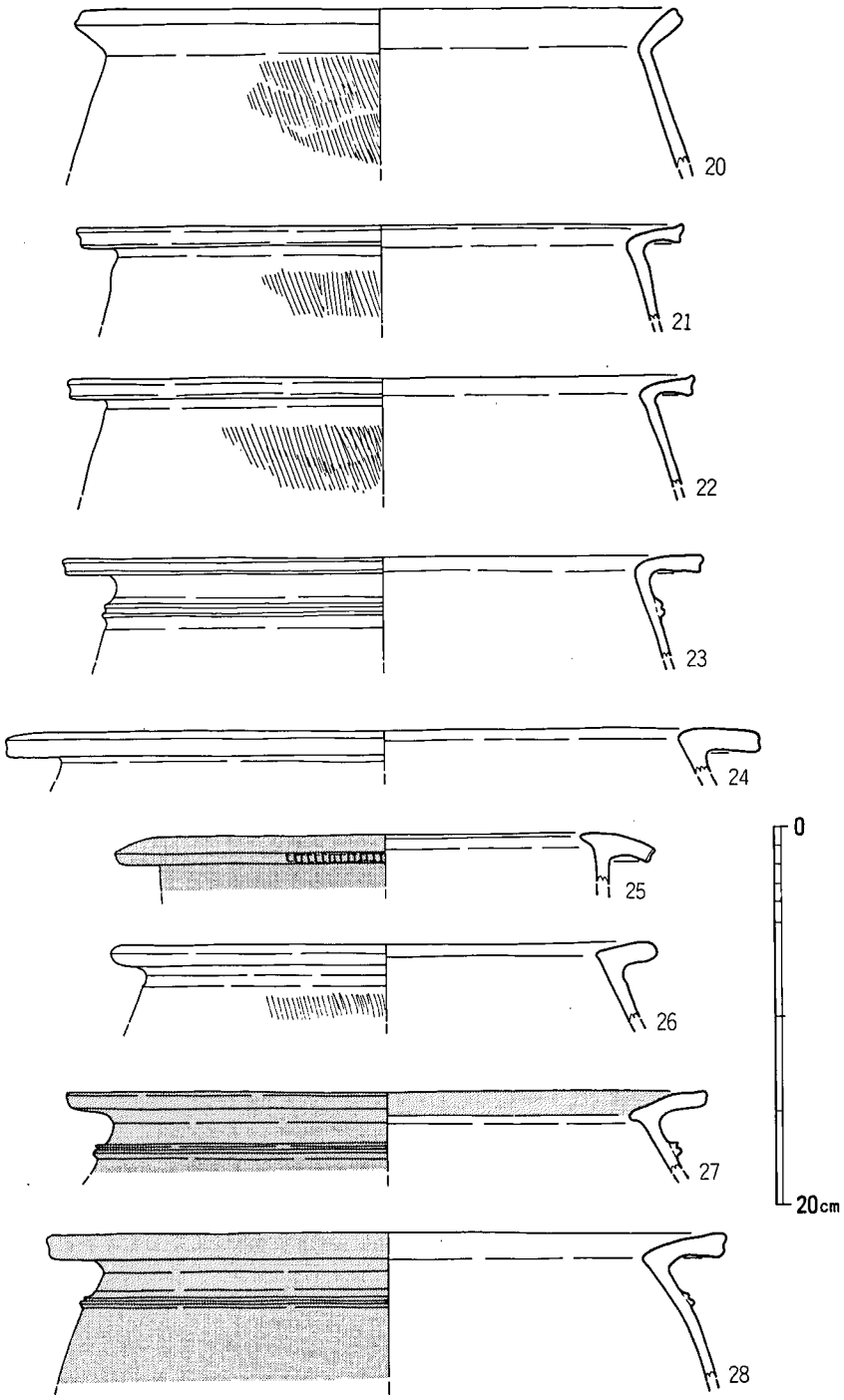
第27図　28・30号竪穴住居跡実測図（1/60）



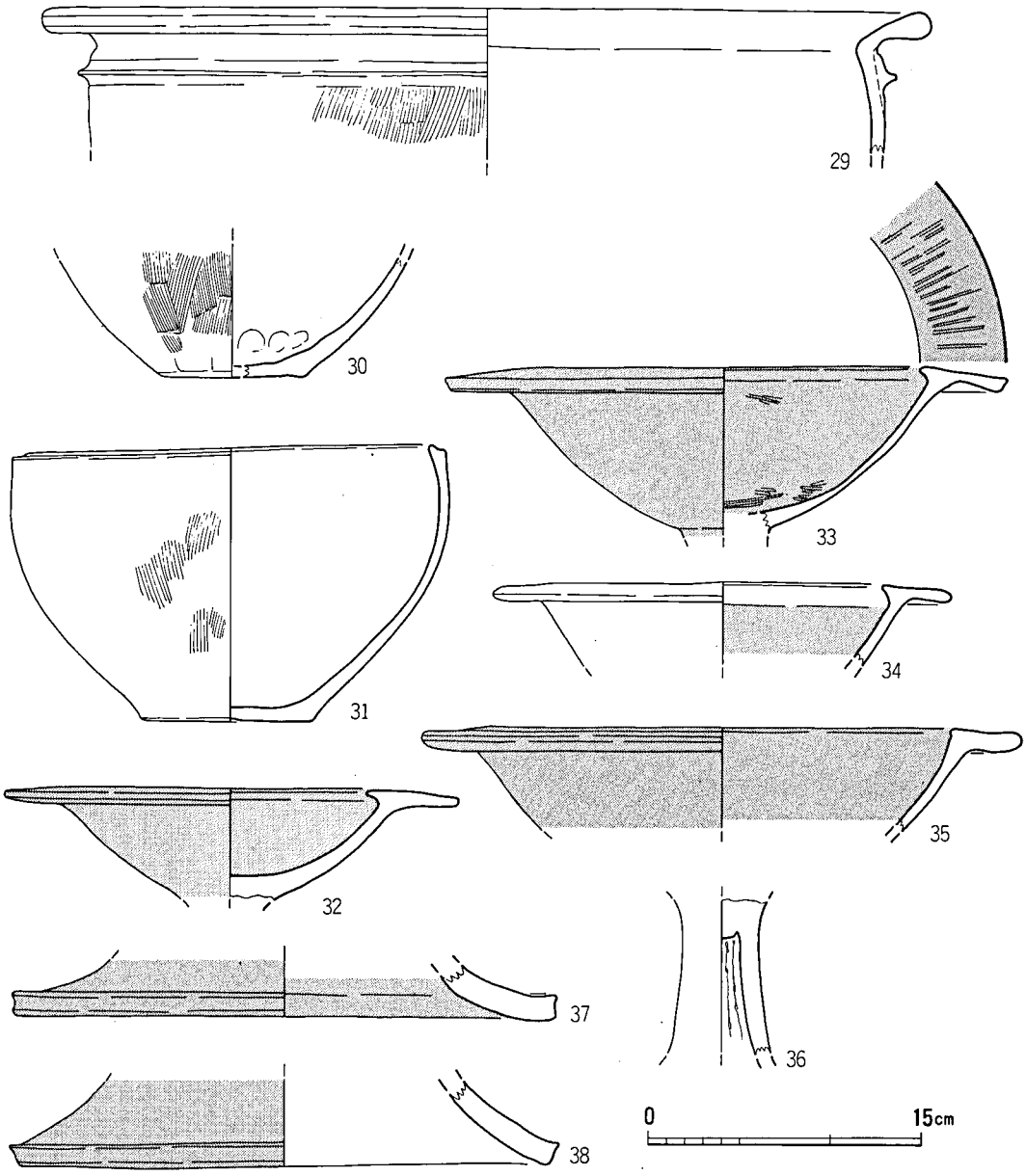
第28図　28号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）



第29図　28号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）



第30図　28号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/4）



第31図　28号竪穴住居跡出土土器実測図.4（1/4）

27号竪穴住居跡（第26図）

E 4－5 区で、26号竪穴住居跡の東隣に位置する。北壁部分の検出で、大半は調査区外に伸びる。北壁長4.6m、残存高10cmである。北壁側にはピットが十数個あるが、壁際に寄りすぎていることから主柱穴とは成り得ない。また、炉跡についても不詳。

土器（第25図 1・2） 1 は逆「L」字形の口縁部破片で、復原口径は22.6cm。頸部の下位に三角突帯文を貼付する。傾きからして鉢になろう。 2 は甕の口縁部小片で、「く」字形に折れる。摩滅により器面調整はいずれも不明。

28号竪穴住居跡（図版14・15　第27図）

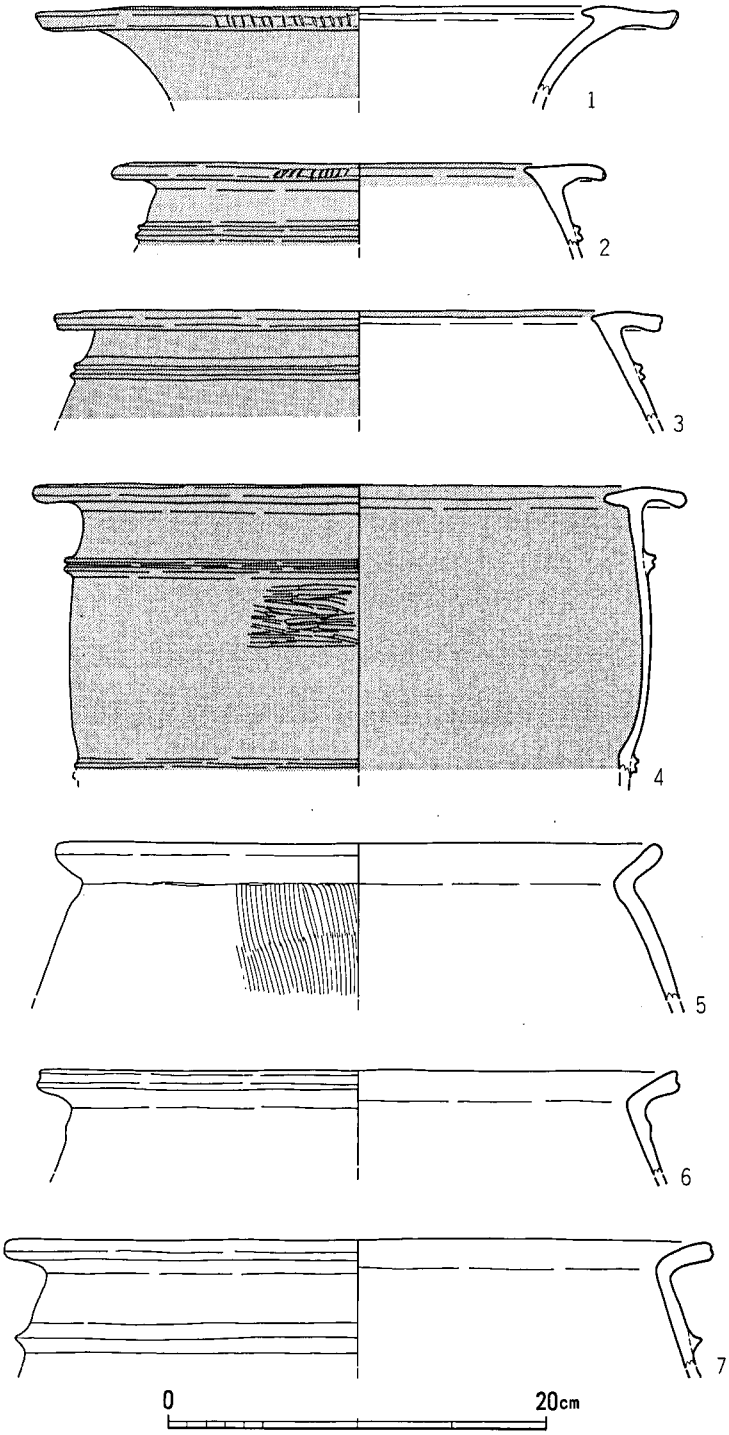
G–H 3 区に位置し、古墳時代の24・33号竪穴住居跡及び 9 号掘立柱建物跡に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸5.92m、短軸5.08m、残存高30cmで、本跡においては比較的大型の竪穴住居跡である。主柱穴は 2 個で、径55～66cm、深さ46～66cmとしっかりしており、柱間は2.56mを測る。長軸方位はN-87°-Eを示し、東西棟の竪穴住居跡である。炉跡は主柱穴間にあり、床面のほぼ中央に位置する。径54cmの正円を呈し、床面を10cm程掘り窪めたものである。埋土中からは多量の土器が出土しているが、床面から浮いた状態であることから住居廃絶後に投棄されたものと判断される。

土器（第28～31図 1 ～38） 1 ～ 5・7 は鋤先状口縁壺で、 1 ～ 3・7 は小型で、4・5 は大型品。1・5 の体部はＳ字形に屈曲している。 3 は頸部に、 5 は頸部と胴部上位に「M」字形突帯文を貼付する。 6 は壺の胴部破片で、「M」字形突帯文を貼付している。また、 1 ～ 3・5 は器面に丹を塗布している。口径は 1 が15.5cm、 5 は30.4cmに復原した。8・9 は無頸壺で、口縁部は鈎形に屈曲する。 8 は口縁部の 2 箇所に円孔を空けている。 9 は器高16.1cm、口径15.2cm、底径7.8cmを測る。器面調整は外面ハケ目、内面ナデによる。8・9 とも外面には丹を塗布している。10は鉢で、口縁端部は上方に立つ。復原口径25.4cm。11～16・20は「く」字形口縁の甕で、11の端部は跳ね上げている。12～16の口唇部は丸く納めており、15は頸部を強く撫る。16は頸部のやや下位に三角突帯文を貼付する。復原口径は11が24.0cm、13は29.0cm、16は40.0cm。17～19は甕の底部破片で、若干の上げ底を呈する。21～24の甕は口縁部を水平に折り曲げるもので、口縁端部が若干窪む。23は頸部の下位に「M」字形突帯文を貼付し、外面には丹を塗布している。25～29は逆「L」字形口縁の甕で、口縁部平坦面は25を除き内傾する。25は口唇部に刻み目を付し、頸部はもう少し内傾しよう。29は復原口径が49.0cmと大きい。27・28は頸部下位に「M」字形突帯文を、29はシャープな三角突帯文を貼付する。また、25・27・28は外面に丹を塗布している。30・31は鉢で、31の口唇部は中央が窪む。器高14.9cm、復原口径23.8cm、底径9.6cmを測る。32～35は高坏の坏部破片で、32～34の口縁部は内面にも突出する。何れも外面には丹を塗布している。33の口縁部上面には、暗文状のミガキが施される。36は高坏

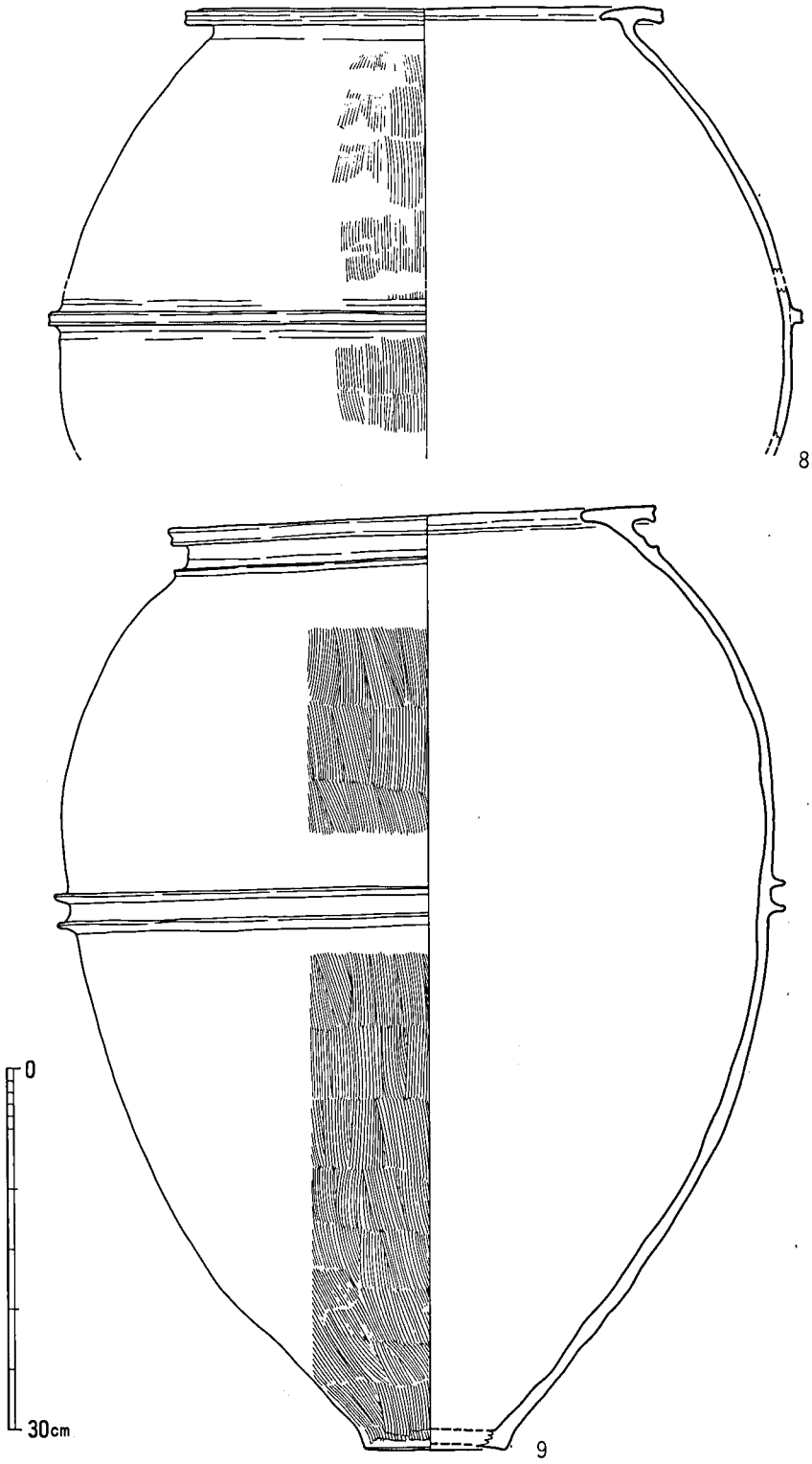
の脚柱部破片。37・38は脚裾部の破片であるが、脚径が30cm前後と大きく、器肉が厚いことから大型器台になろう。外面には丹を塗布している。

29号竪穴住居跡（図版16・17　第26図）

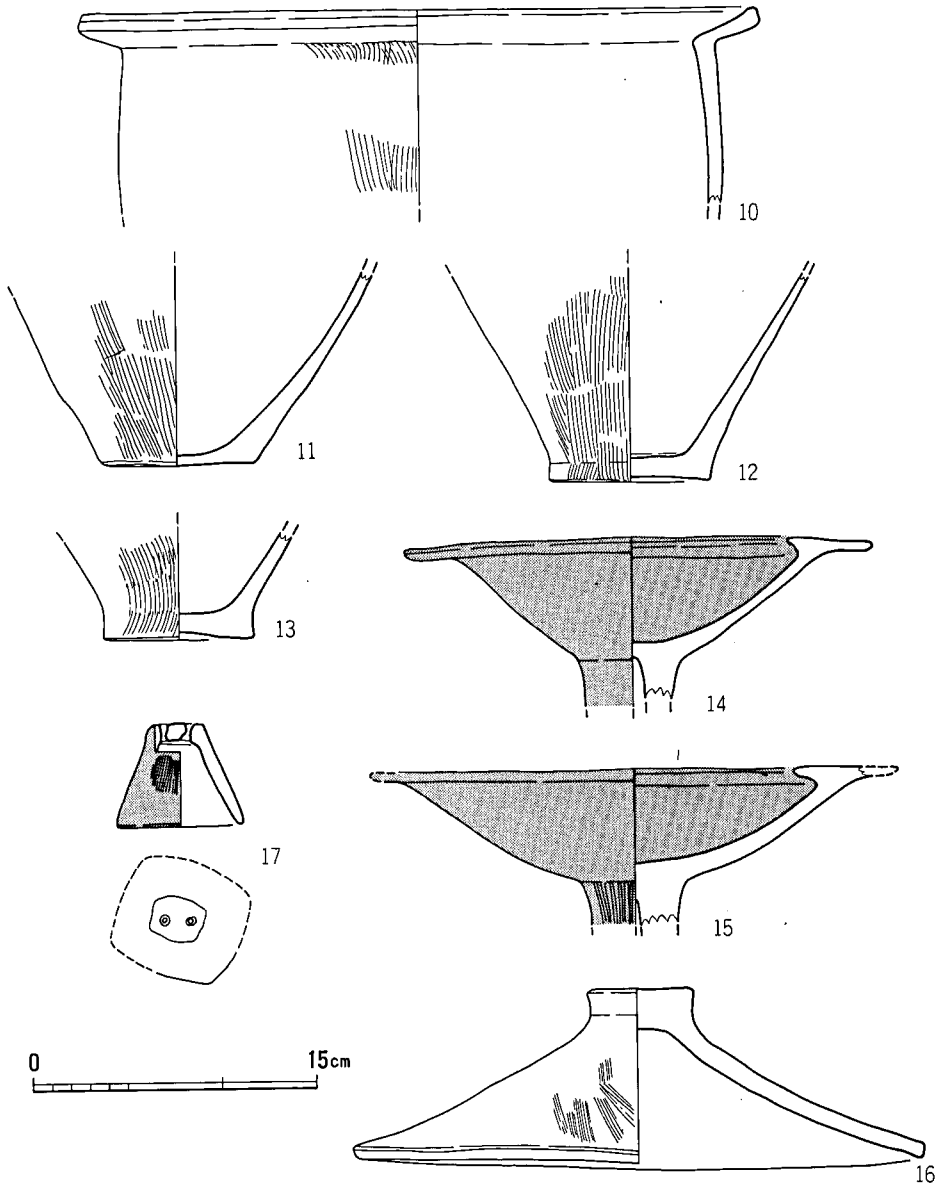
H-I 3 区に位置し、古墳時代の24号竪穴住居跡に切られる。南壁から西壁部分にかけての検出で、残り半分は調査区外にある。平面形は不整長方形を呈し、長軸6.2m以上、短軸4.8m、残存高32cmと本跡においては大型の竪穴住居跡である。埋土中には河原石が多く入っており、河原石を除去して竪穴住居跡と判明した次第である。また、当住居は焼失家屋であり、床面には炭化材・炭が遺存していた。土器が入っているピット（P 1）が主柱穴で、対になるピットと炉跡は区外に位置するものと考えられる。埋土中から土器・投弾、埋土上層から石庖丁が出土している。



第32図　29号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）



第33図　29号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/6）



第34図　29号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/4）

土器（第32～34図１～17）１は鋤先状口縁壺の破片で、復原口径は34.0cmを測る。口唇部には刻み目を付しており、外面は丹を塗布している。２・３は逆「L」字形口縁の甕で、頸部が締まる。２は口唇部に刻み目を付しており、頸部下位に「M」字形突帯文を貼付する。ともに外面は丹塗りである。４の口縁部は内側に大きく突出し、「T」字形を呈する。頸部下位と胴部中位に「M」字形突帯文を貼付しており、内外面とも丹を塗布している。器面調整はヘラミガキで、精良な胎土を使用している。５～７・10は「く」字形口縁の甕で、端部の形状は５が丸く、６・７は面を有し、10は跳ね上げている。７は頸部の下位に三角突帯文を貼付している。８・９の口縁部は「T」字形を呈し、よく締まった頸部から球状の胴部に移行する。９は器高78.1cm、口径40.4cm、底径11.7cmの大型品であり、甕棺として製作されたものと思われる。８は胴部にコ字形突帯文を貼付するのみであるが、９は頸部下位に１条、胴部中位にシャープな三角突帯文を２条貼付する。11～13は甕の底部破片で、11が平底、12・13は若干の上げ底を呈する。底径は11・13が8.0cm、12は8.6cmを測る。14・15は高坏で、口縁部は鋤先状を呈する。ともに内外面には丹を塗布している。口径は14が24.8cmで、15は34cmほどになろう。16は富士山形の蓋で、器高9.6cm、口径30.4cm、摘み径5.6cmを測る。口縁部の内外面には煤が遺存しており、二次加熱を受けている。17は断面台形を呈し、器高5.5cm、上面径2.8cm、裾部径6.7cmを測る。上面には２箇所に穿孔しており、外面には丹彩を施している。埋土上層の出土である。

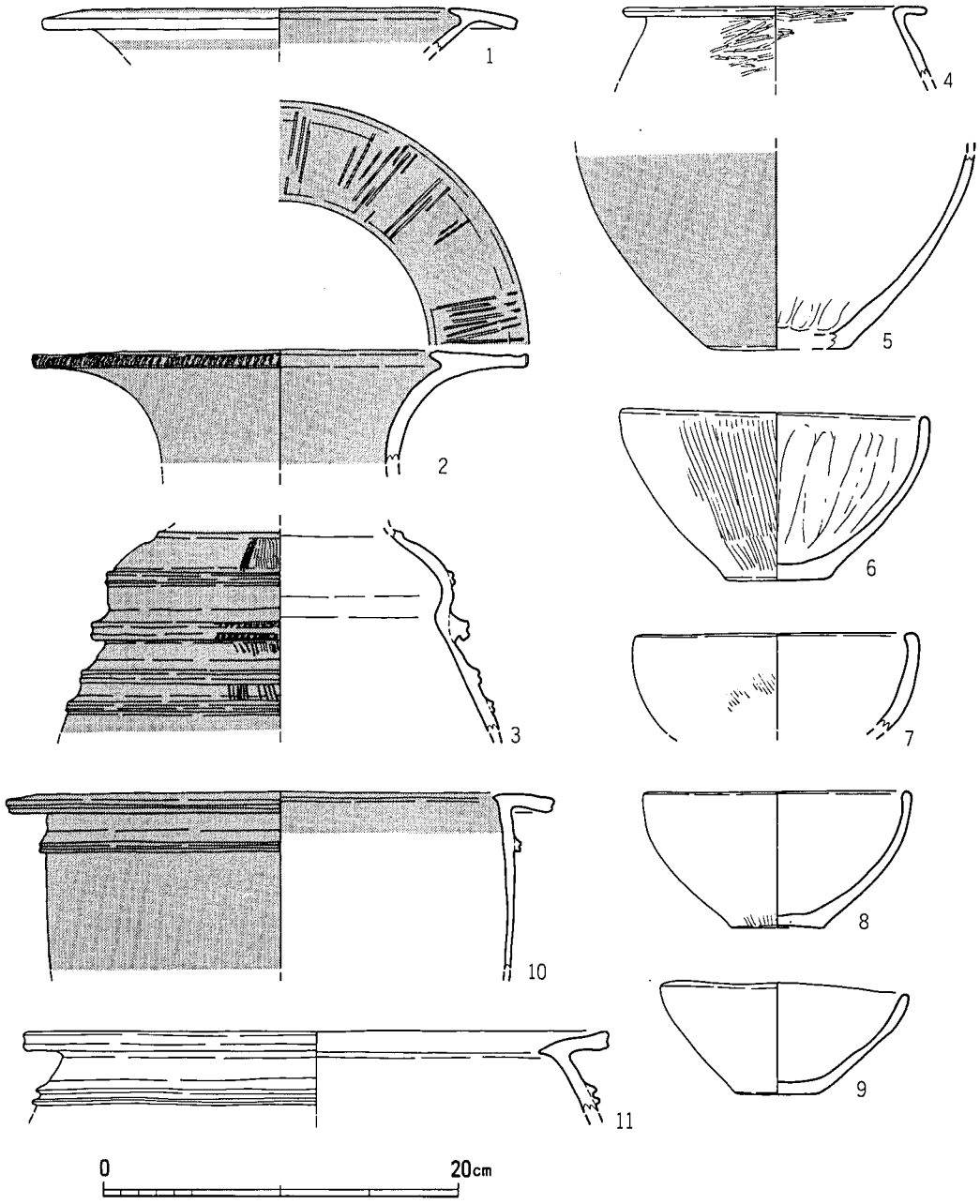
石器（第167図６）片岩系の石庖丁で、摩滅が著しく研磨痕などは見られない。

土製品（第163図９・10）２点とも投弾形土製品で、９は一端を欠くが、残長4.45cmの大型品。整形後に丁寧なナデ仕上げ。径2.3cm、重さ16.7ｇ＋α。10は床面出土の完形品。上部は両側から抉りを入れ尖らす特徴がある。長さ4.4cm、径2.45cm、重さ21.1ｇを測る。両者とも暗茶褐色を呈す。他に、２個体分の破片が埋土より出土した。

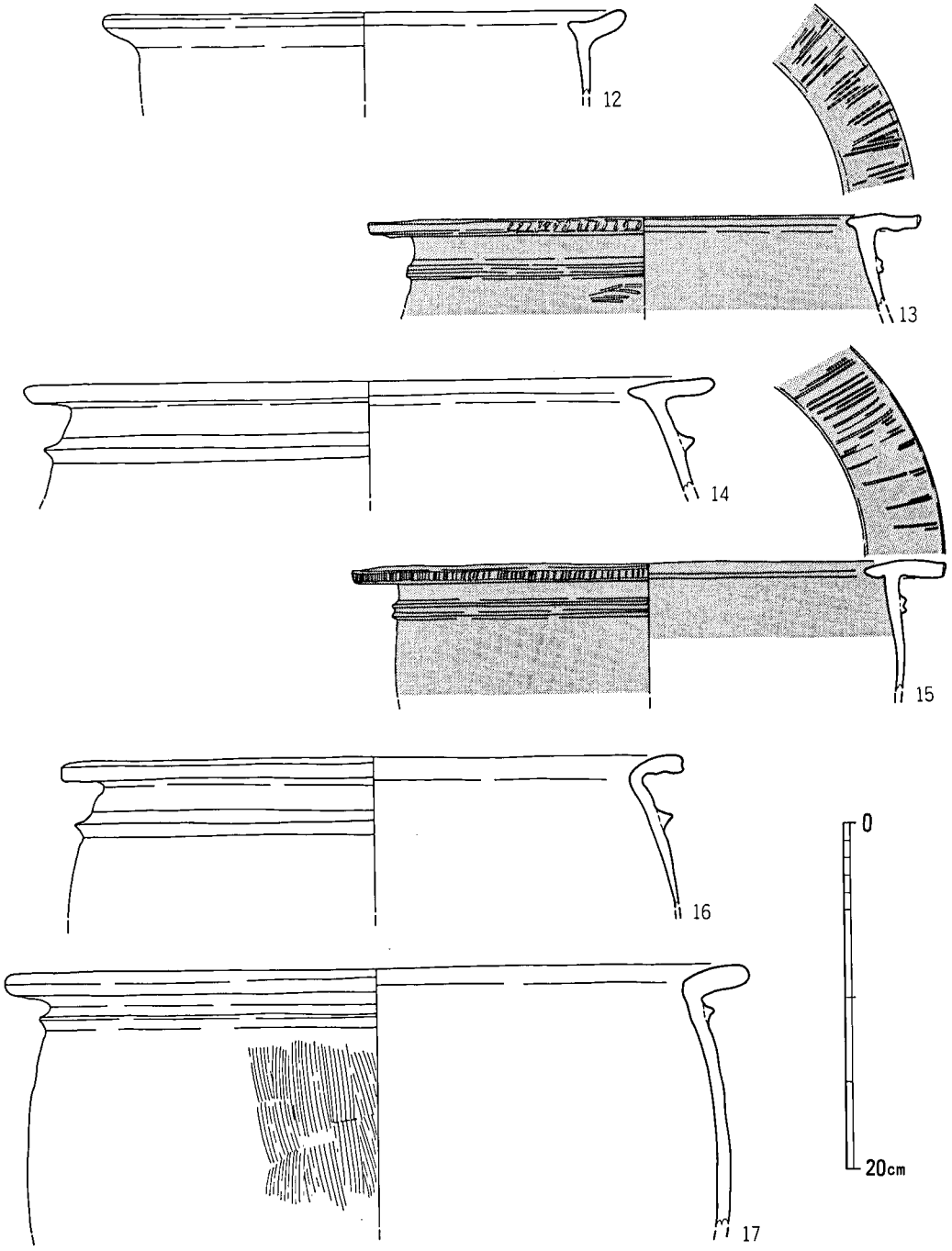
30号竪穴住居跡（図版18　第27図）

Ｇ４区に位置し、５号溝に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸4.27ｍ、短軸3.35ｍ、残存高24cmと本跡においては小型の竪穴住居跡である。主柱穴は２個で、径34～44cm、深さ25cmで、柱間は2.14ｍを測る。長軸方位はN-87°-Eを示し、柱穴が長軸に対して直交して配されることから南北棟で、妻入りになるものと考えられる。炉跡は主柱穴間に配されるが、やや南壁寄りである。57cmの隅丸方形を呈し、床面を14cm掘り込んでいる。竪穴住居跡の埋土上位からは鉄滓・土製紡錘車が出土している。

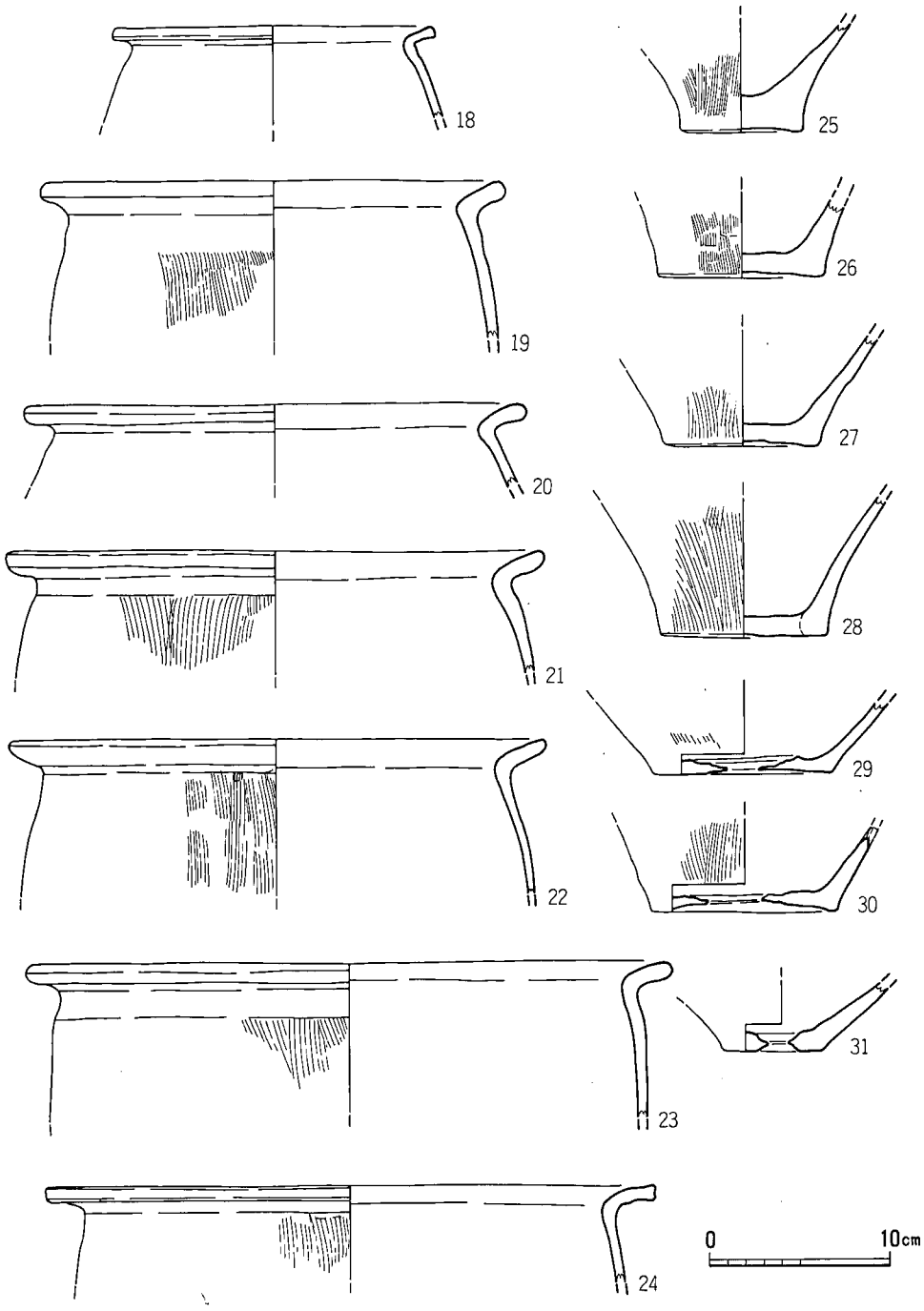
土器（第35～39図１～44）１・２は鋤先状口縁壺で、口径は１が27.0cm、２は28.0cmに復原した。２の口縁部平坦面の幅は5.5cmと広く、口唇部に刻み目を付している。３は無頸壺と広口壺を合体させたような瓢形の複合壺の胴部破片である。胴部には５条の突帯文を付しており、合体部位の「M」字形突帯文は太めで、両端部に刻み目を付している。外面には丹を塗



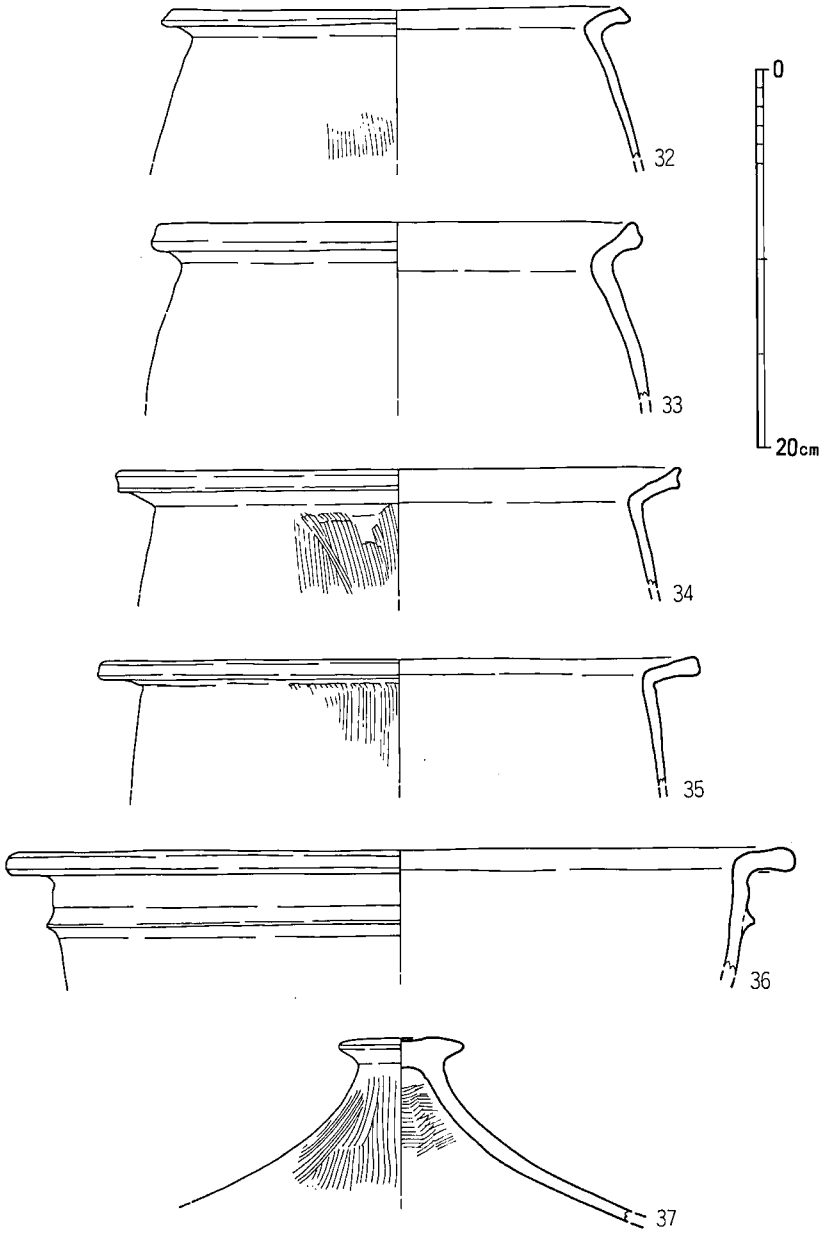
第35図　30号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）



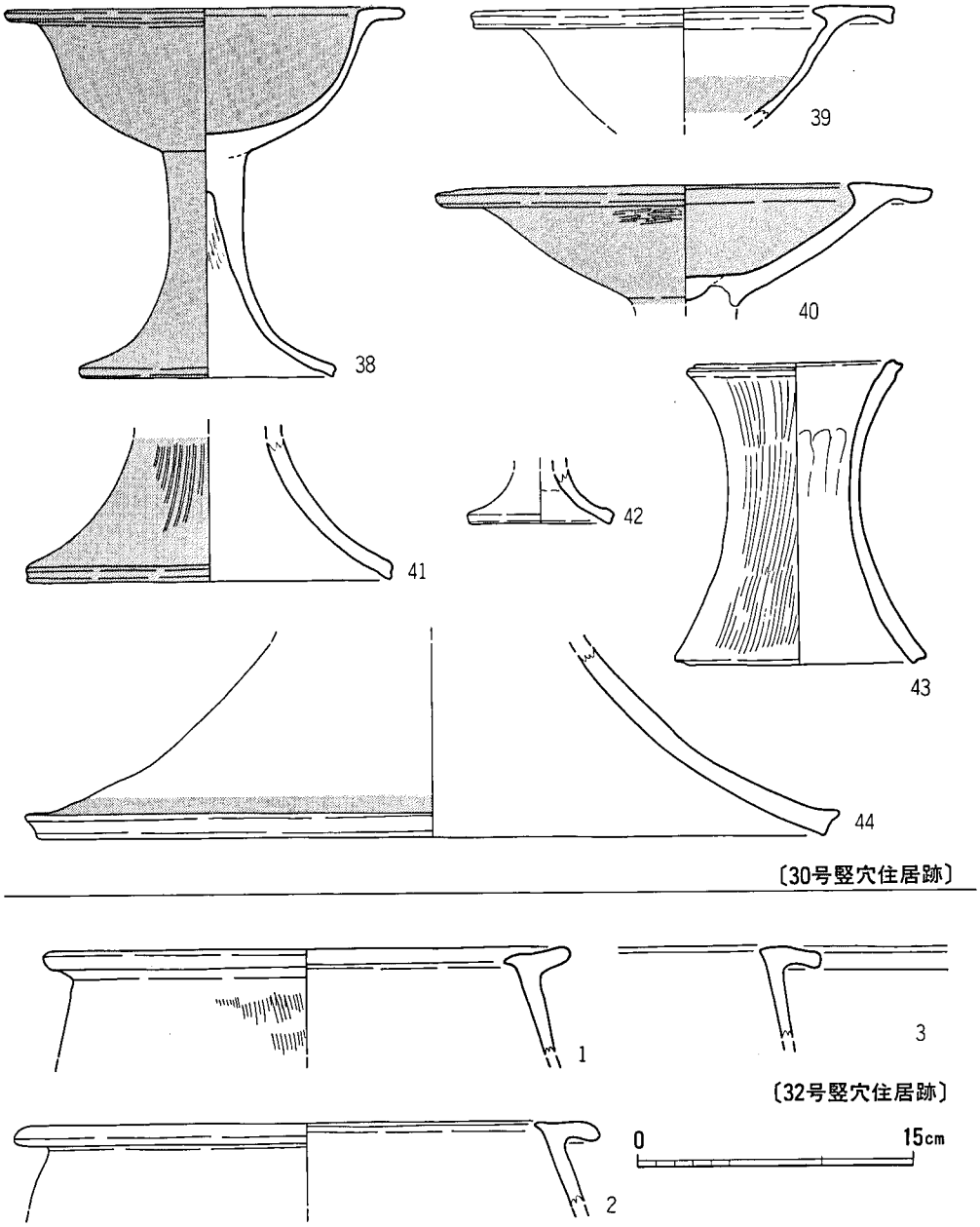
第36図　30号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）



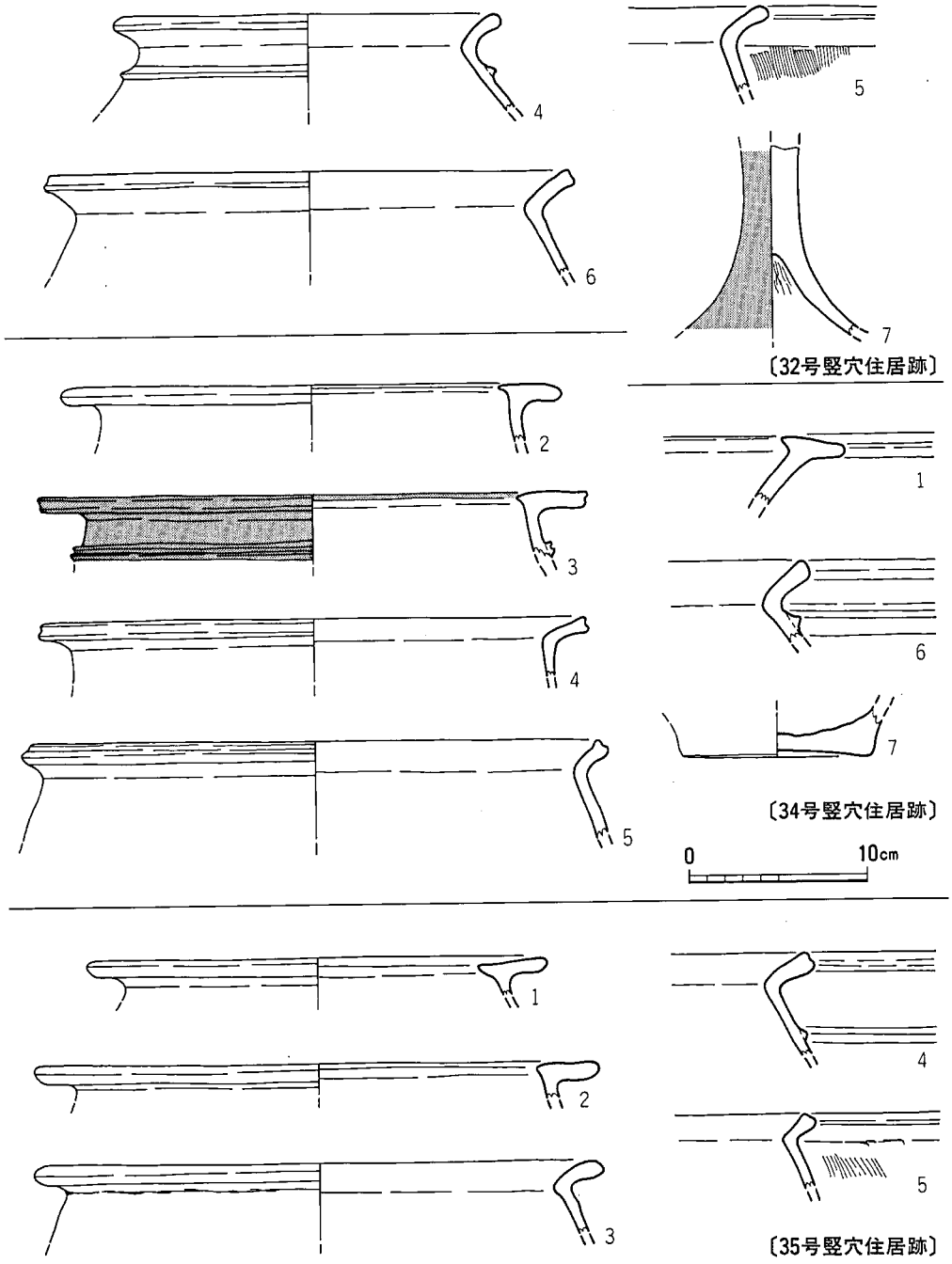
第37図　30号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/4）



第38図　30号竪穴住居跡出土土器実測図.4（1/4）



第39図　30・32号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第40図　32・34・35号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

布する。4は無頸壺で、口縁部を水平に折り曲げている。口径は17.2cmに復原した。6～9は鉢で、6～9の口唇部は丸く納めている。8・9は口径が15cmほどの小型品。5は外面に丹を塗布している。10・11・13～15は逆「L」字形の甕で、11・14は口縁部平坦面がやや内傾する。また、14・15の内面への突出度合いは大きい。14は頸部下位に三角突帯文を、10・13・15は「M」字形突帯文を貼付しているが、11は三角突帯文を2条貼付し、みかけ「M」字形突帯文としている。13・15の口唇部には刻み目を施しており、10・13・15は外面に丹を塗布している。口径は31～34cm前後のものである。12の甕は頸部内面の屈曲部が三角形に突出するものである。16～24・32～36は「く」字形口縁の甕で、17・19～23・36は口唇部を丸く納める。16・18・24・35は口唇部に面を有するもので、32～34は端部を跳ね上げている。口径は18が18.0cm、19～22・32～35は26～30.0cm、23は36.0cmに復原した。36は頸部下位に三角突帯文を貼付しており、口縁部はもう少し外傾するものと思われる。25～28は甕の底部破片で、25～27は若干の上げ底を呈する。26は底径9.3cm。29～31は穿孔を施した底部破片で、焼成後に穿孔している。37は蓋で、摘み部の端部は外方に突出する。38～42は高坏で、38は逆「L」字形口縁、39・40は鋤先状口縁を呈する。38は器高20.0cm、復原口径20.8cm、脚径13.6cmを測り、坏部は深めである。41は脚径19.6cmの破片。42は小型品で、脚部のみ遺存する。脚径7.8cm。38は坏部内面から脚部外面にかけて丹を塗布している。39～41も丹塗り品である。43は鼓形器台で、器高16.3cm、口径11.7cm、底径13.5cmを測る。底部外面は二次的に加熱を受けている。44は大型器台の脚裾部で、復原脚径は42.8cm。外面の一部に丹塗りを留める。

土製品（第163図2・11）2は暗赤褐色の紡錘車で、図の左辺がやや直線状になり、右断面は丸い。径3.2cm、厚さ1.5cm、孔径0.45cm、重さ15.3g。11は床面出土の投弾形土製品の半欠品で、径2.4cm。

32号竪穴住居跡（図版18　第41図）

H4区で、28号竪穴住居跡の東隣に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸3.9m、短軸2.72m、残存高30cmであり、本跡においては小型の竪穴住居跡である。床面に柱穴がみられないことから掘り込みを伴わないものか、竪穴外に存在したものであろう。炉跡は床面の中央にあり、径73cmの隅丸方形を呈し、床面を14cm掘り込んでいる。炉跡の南壁中央には円形のピットが掘り込まれており、屋内土坑になるか。

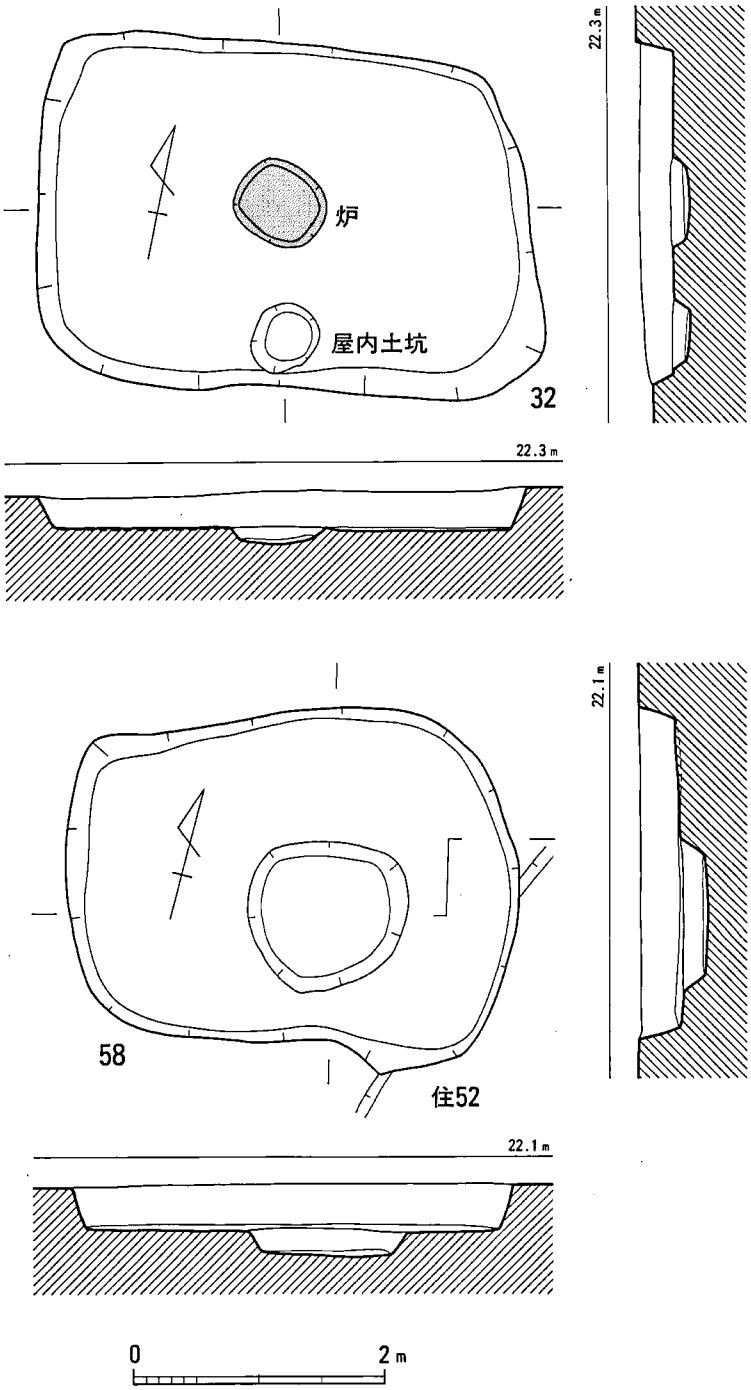
土器（第39図1～3　第40図4～7）1～3は逆「L」字形口縁の甕で、1は内傾する。口径は1が28.6cm、2は32.0cmに復原した。4～6は「く」字形口縁の甕で、4の頸部下位には三角突帯文を貼付している。7は高坏の脚柱部破片で、外面には丹を塗布している。全体的に摩滅が著しく、器面調整不明のものが多い。

34号竪穴住居跡（図版19　第42図）

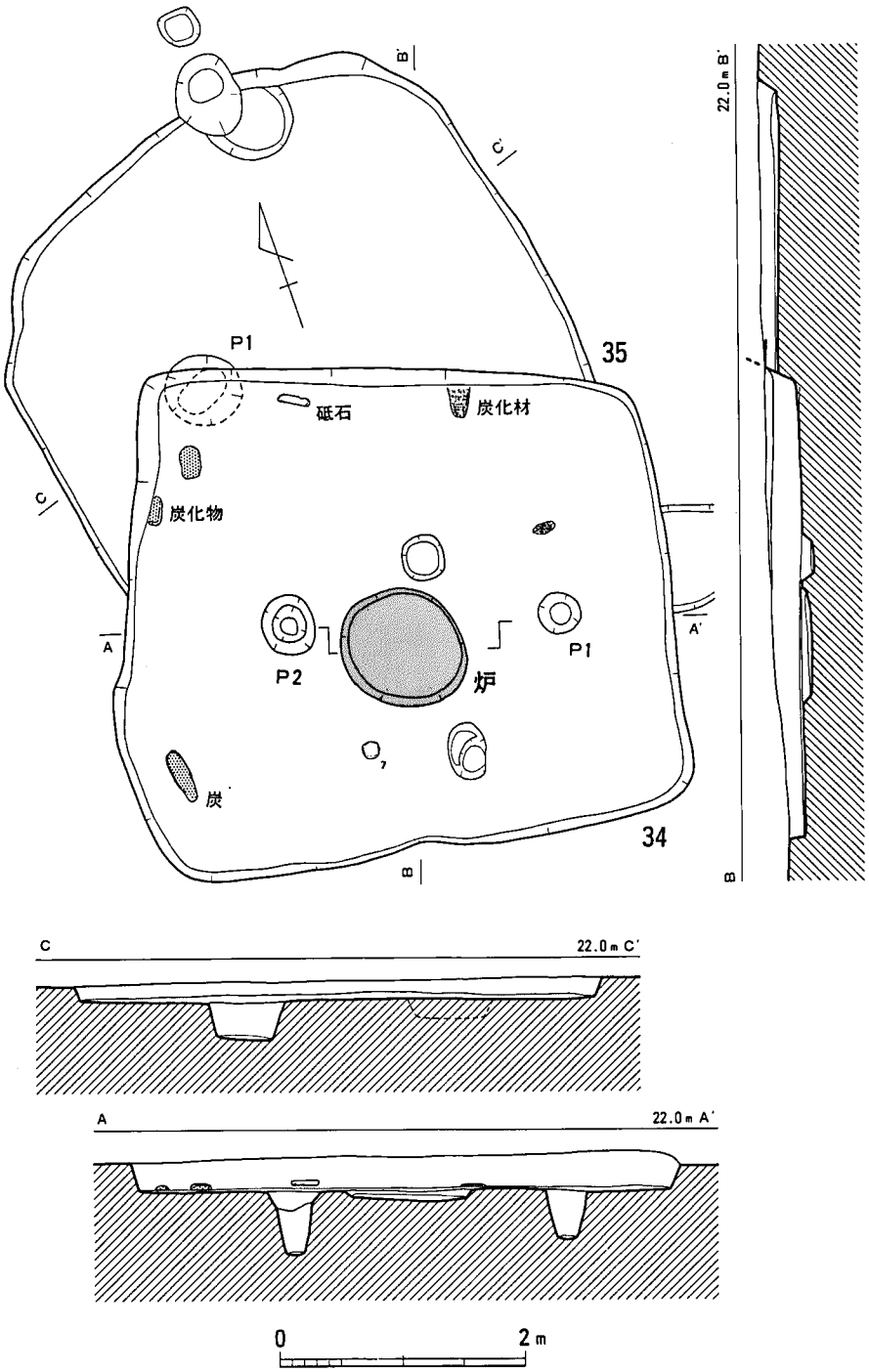
Ｇ５区に位置し、35号竪穴住居跡を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、長軸4.42m、短軸4.02m、残存高27cmの規模で、本跡においては小型の竪穴住居跡である。長軸方位はN-75°-Wを示し、東西棟の竪穴住居跡である。主柱穴は２個で、径33～42cm、深さ38～50cmとしっかりしている。柱間は2.22mの距離を有する。炉跡は主柱穴間にあり、１m前後と大きめである。床面には炭化材・炭化物が遺存しており、当竪穴住居跡は焼失家屋と判断される。床面から浮いた状態で石庖丁・砥石が出土している。

土器（第40図１～７）

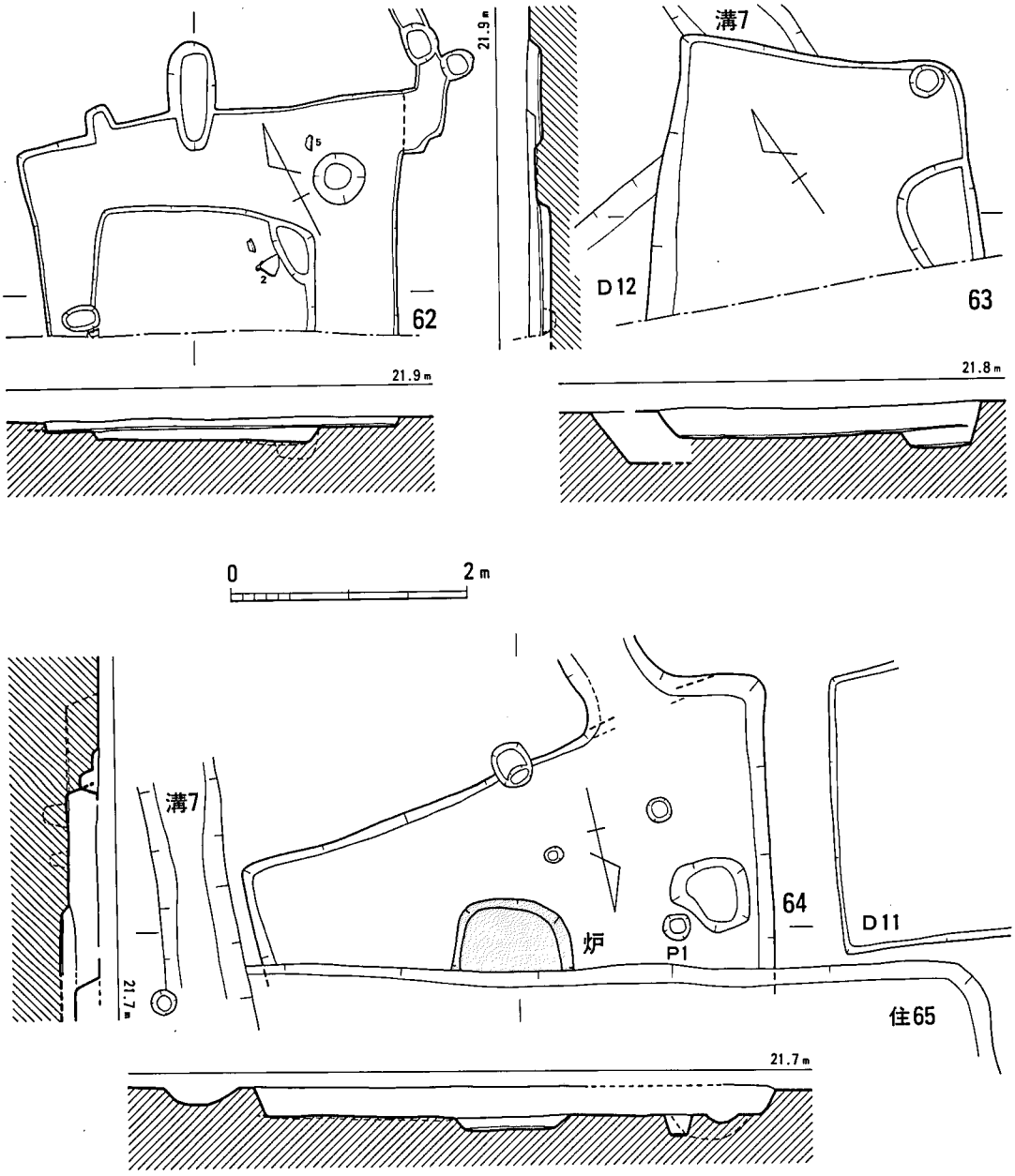
１は鋤先状口縁壺の口縁部小片である。２・３は逆「L」字形口縁甕で、３の頸部下位には「M」字形突帯文を貼付し、外面は丹塗りである。２の復原口径は28.2cm。４～６は「く」字形口縁甕で、５の端部は上方に跳ねて



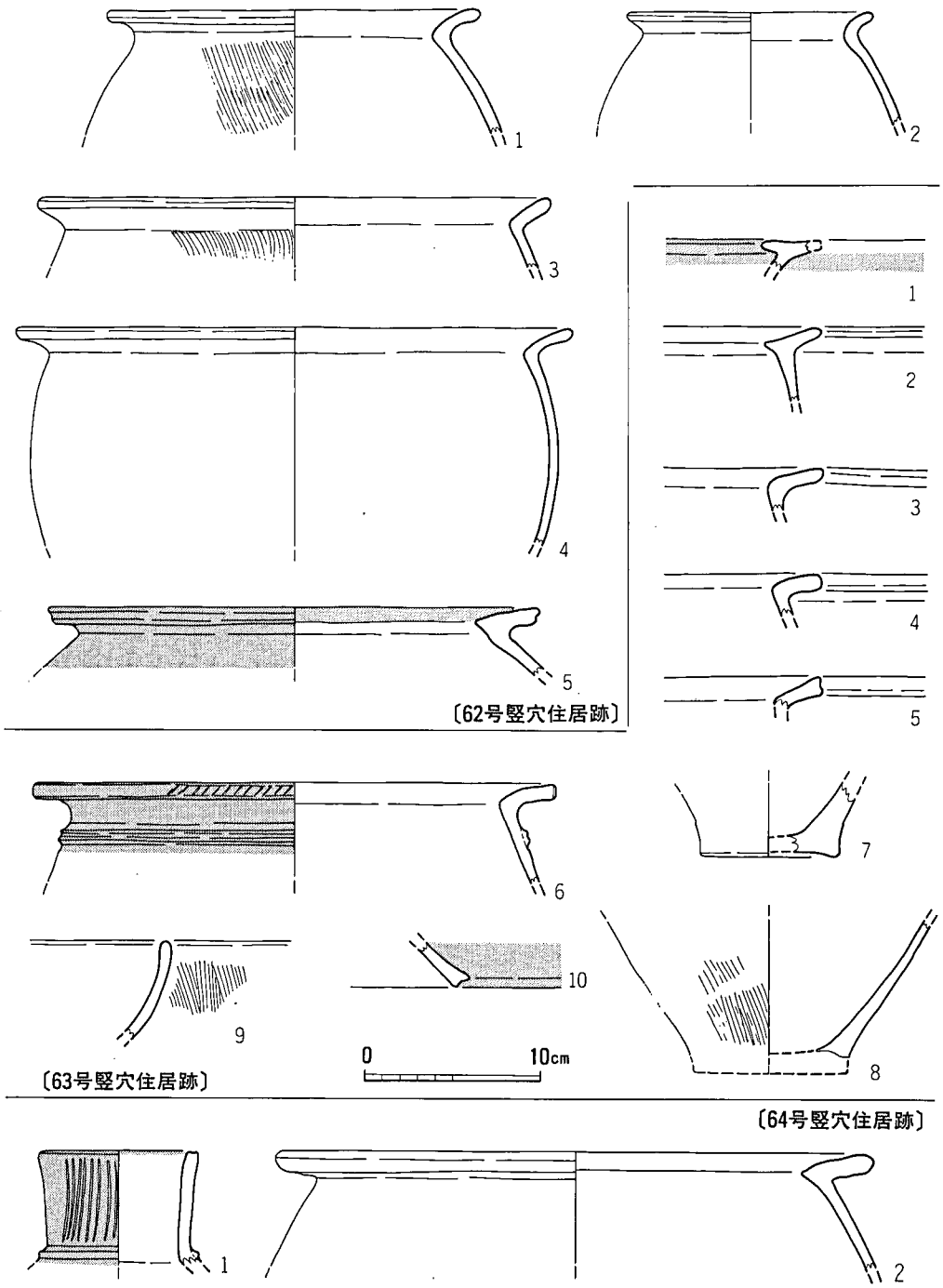
第41図　32・58号竪穴住居跡実測図（1/60）



第42図　34・35号竪穴住居跡実測図（1/60）



第43図　62～64号竪穴住居跡実測図（1/60）



第44図　62～64号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

いる。6は頸部直下に三角突帯文を貼付している。7は平底の底部破片で、底径は10.6cm。

石器（第167図7　第166図9）第167図7は輝緑凝灰岩製の石庖丁で、欠損後の研ぎ直しなどは認められない。第166図9は片岩系の砥石で、かなり先端部まで使用されるが、それほど長期的な使用ではなさそう。24.8×6.1×2.6cmを測る。

35号竪穴住居跡（図版19　第42図）

G5区に位置し、34号竪穴住居跡に切られ、北壁部分を残す程度である。北壁が丸みを帯びることから平面形は長円形を呈するものと思われる。残存長3.4m、短軸4.3m、残存高16cmを測る。残存部位では、柱穴は主柱穴と考えられるP1のみで、炉跡は検出されていない。なお、この住居跡の北東埋土を掘り込んで、1号甕棺墓が埋設されている。

土器（第40図1～5）1・2は逆「L」字形口縁甕で、1の内面への突出度合いは大きい。3～5は「く」字形口縁甕で、4は頸部のやや下位に三角突帯文を貼付する。口径は1が26.0cm、2は31.9cm、3は32.0cmに復原した。

58号竪穴住居跡（第41図）

J5区に位置し、古墳時代の52号竪穴住居跡に切られる。平面径は長円形を呈し、長軸3.7m、短軸2.65m、残存高4cmと小型の部類である。床面には長径1.28m、短径1.16mの土坑が掘り込まれているが、柱穴・炉跡がみられないことから別遺構と考えられる。埋土中から石庖丁が2点出土している。

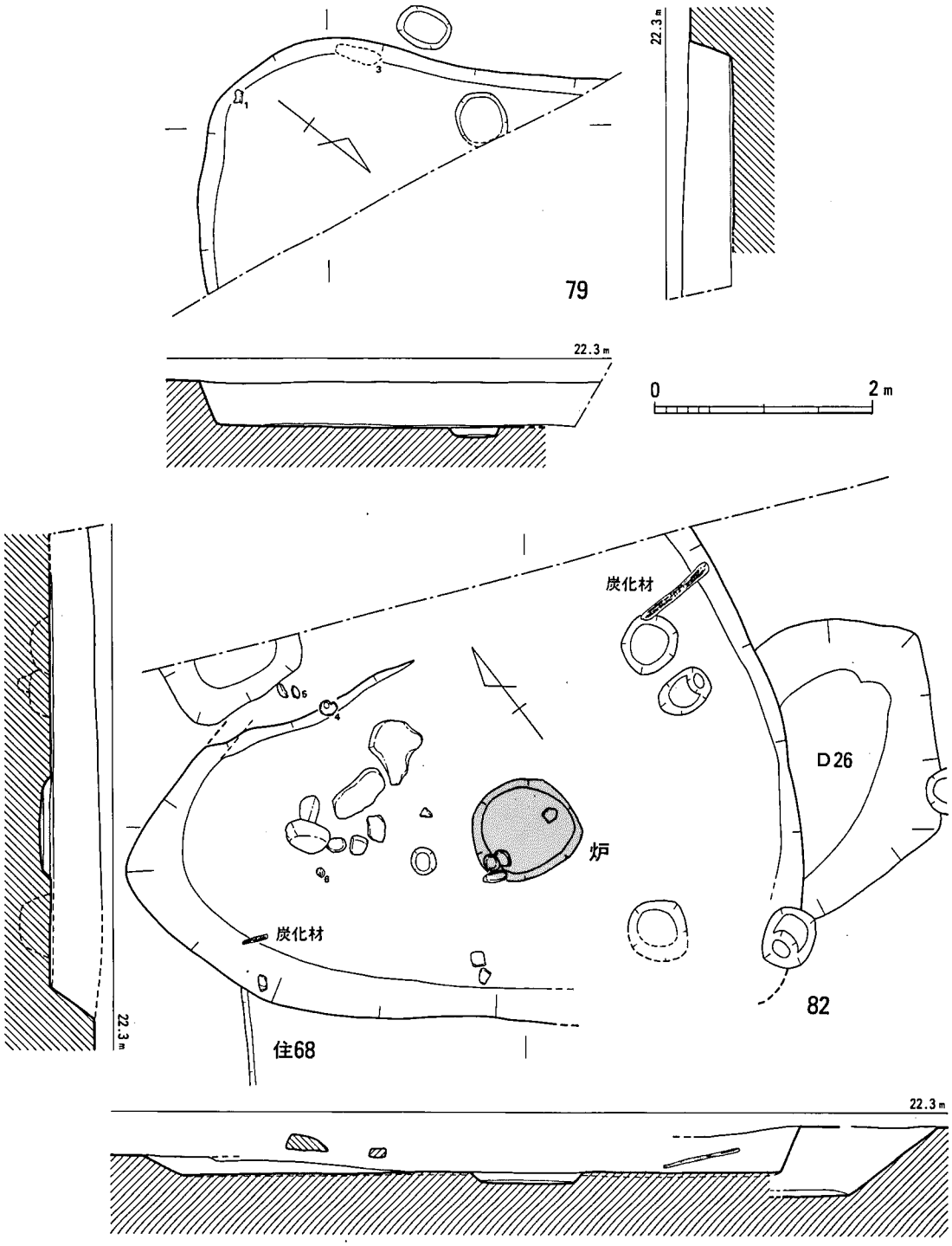
石器（第167図8・9）8は輝緑凝灰岩製、9は粘板岩製の石庖丁。いずれも欠損後の研ぎ直しは認められない。

62号竪穴住居跡（図版20　第43図）

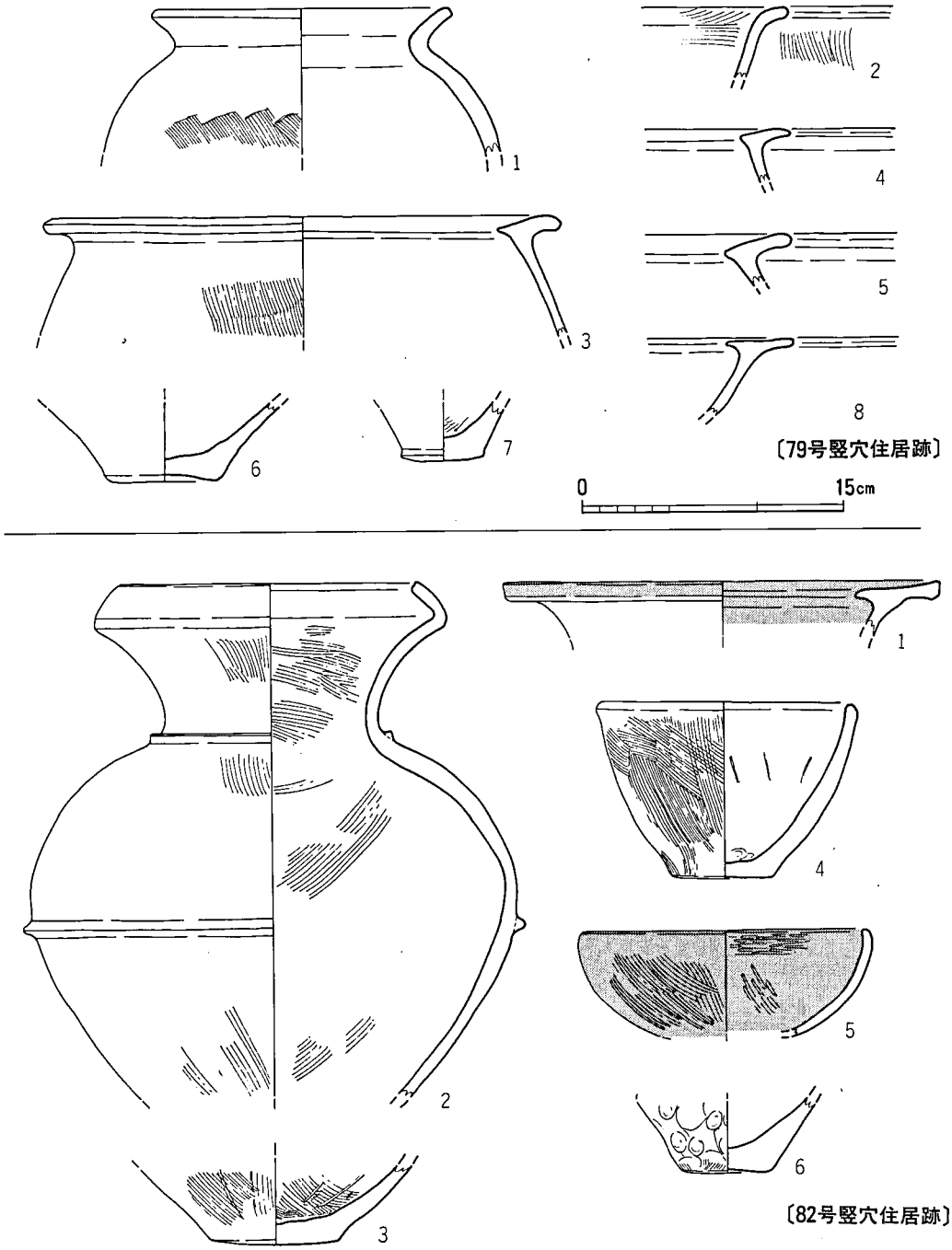
J6区で、調査区の中央南半部に位置する。北壁側の検出で、南半部は調査区外にある。北壁長3.24m、残存高5cmを測り、方形若しくは長方形を呈するものであろう。検出部位において主柱穴・炉跡は検出されていない。また、床面中央には一辺1.8mの浅い竪穴が掘り込まれているが、当竪穴住居跡に付随するものか明かではない。遺物の出土はそのほとんどが埋土中からのもので、砥石もある。

土器（第44図1～5）1～4は「く」字形口縁の甕で、口唇部を丸く納める。1・2・4は内湾気味に外反する。5は逆「L」字形口縁の甕であるが、口縁部平坦面は内傾する。外面には丹を塗布している。口径は2が9.0cm、3は29.2cm、5は28.0cmに復原した。

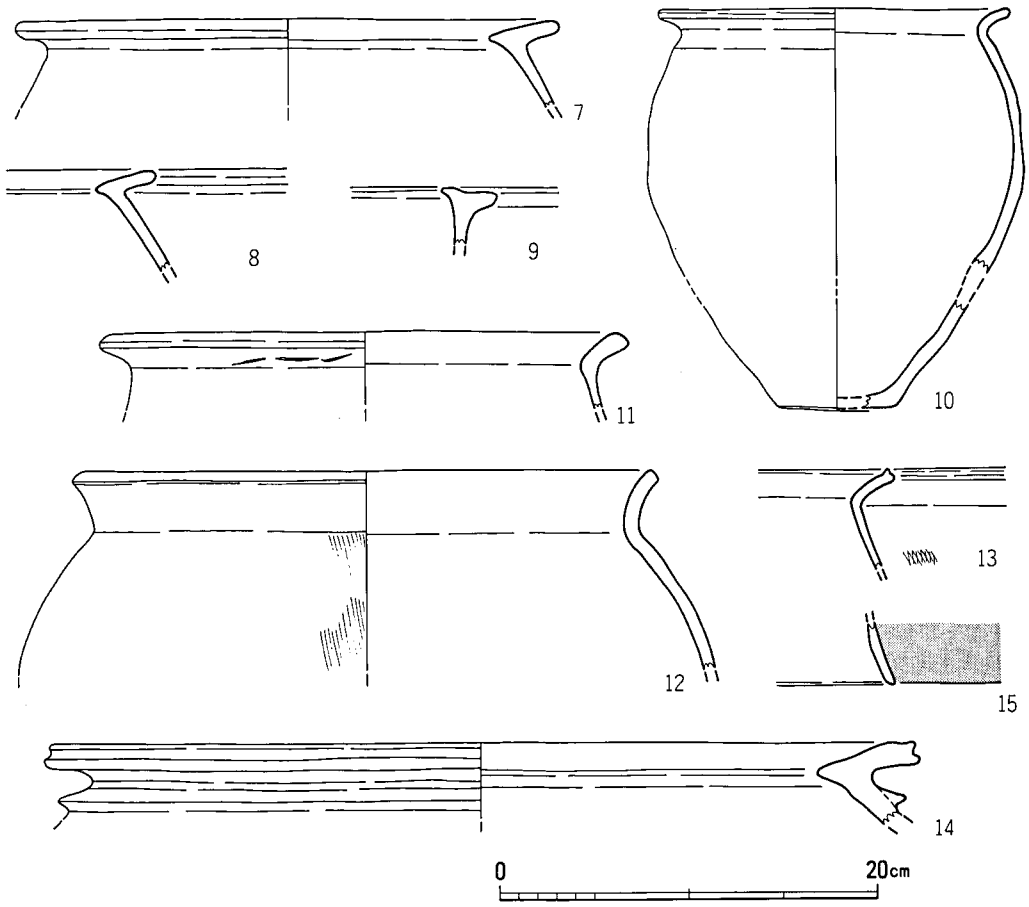
石器（第166図7）頁岩製の砥石で、著しい欠損により本来の形態は不明。1面のみ使用が認められる。



第45図　79・82号竪穴住居跡実測図（1/60）



第46図　79・82号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第47図　82号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

63号竪穴住居跡（図版20　第43図）

I 6 区に位置し、12号土坑、7 号溝を切っている。北東壁側の検出で、南西壁は調査区外にある。北東壁長2.3m、残存高24cmの規模で、平面形は隅丸長方形を呈するか。検出部位においては主柱穴・炉跡は確認されていない。東壁に接してピットが掘り込まれており、屋内土坑になるか。

土器（第44図 1 ～10）1 は鋤先状口縁の小片であるが、壺の口縁部になるか。2 ～ 6 は「く」字形口縁の甕で、2 は内面にも突出する。6 は口唇部に刻み目を付し、頸部下位には「M」字形突帯文を貼付する。口径は29.8cmで、口唇部から突帯文にかけての外面に丹を塗布している。7・8 は甕の底部破片。9 は鉢の口縁部破片で、口唇部は丸く納める。10は高坏の裾部破片で、外面は丹塗りである。

64号竪穴住居跡（図版21　第43図）

I６区に位置し、古墳時代の65号竪穴住居跡に切られる。南壁部分の検出で、大半は調査区外にある。南壁長4.68m、残存高23cmを測り、平面形は歪な方形を呈するか。床面にはピットが４個あるが、主柱穴は西壁よりのＰ１になろう。径23cm、深さ16cmの大きさである。２本柱と考えられるが、対の柱穴は調査区外に位置する。炉跡は床面の中央にあり、１ｍ前後の大きなものである。出土土器はいずれも埋土中からである。

土器（第44図１・２）１は直口壺の口縁部破片で、口縁部は直立する。頸部に三角突帯文を貼付しており、外面は丹塗り。口径は8.8cm。２は逆「L」字形口縁甕で、口縁部平坦面はやや内傾する。口径は34.0cmに復原した。

石器（第167図５）５は腰岳産黒曜石による縦長剥片。右側縁には一部自然面を残し、左側縁全体に亘って細かい剥離痕が見られる。この剥離痕は意図的な加工によるものではなく、使用によって作られたものである。したがって、スクレイパーではなく、使用による微細剥離痕を有する縦長剥片として位置づけるべきであろう。

79号竪穴住居跡（図版21　第45図）

Ｑ７区に位置し、３ｍ南東に82号竪穴住居跡がある。南壁部分の検出であり、大半が調査区外にあるため詳細は不明。調査部位においては主柱穴・炉跡は検出されていない。埋土中から鉄鉋が２点出土している。

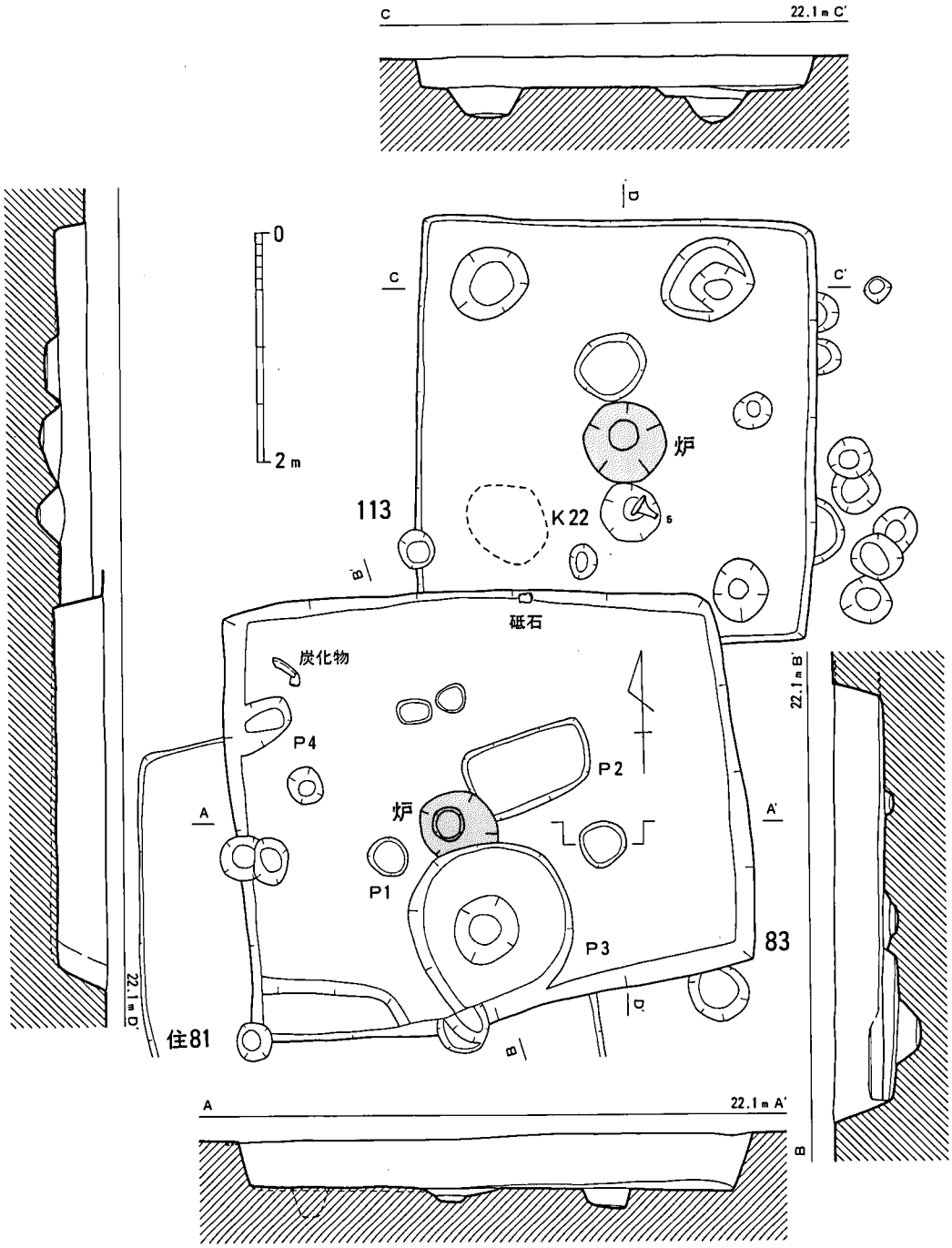
土器（第46図１～８）１は「く」字形口縁の甕で、頸部はよく締まっている。復原口径は17.2cm。２は如意形口縁の甕で、混入したものであろう。４・５は逆「L」字形口縁を呈し、口縁部平坦面は内傾する。６・７は底部破片で、６は胴下半部が開いているので壺の底部になろう。７は底径が4.8cmと小型のもので、鉢になるか。８は高坏の口縁部小片で、鋤先状を呈する。

鉄器（第171図３・４）３は残存長6.0cm、幅0.8cm、厚さ0.2cmを測る。基部は丸く、先端が尖ることから鉋になろう。４は先端部を欠き、先端部から２cmの部位で屈曲する。４も鉋で、残存長6.3cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを測る。

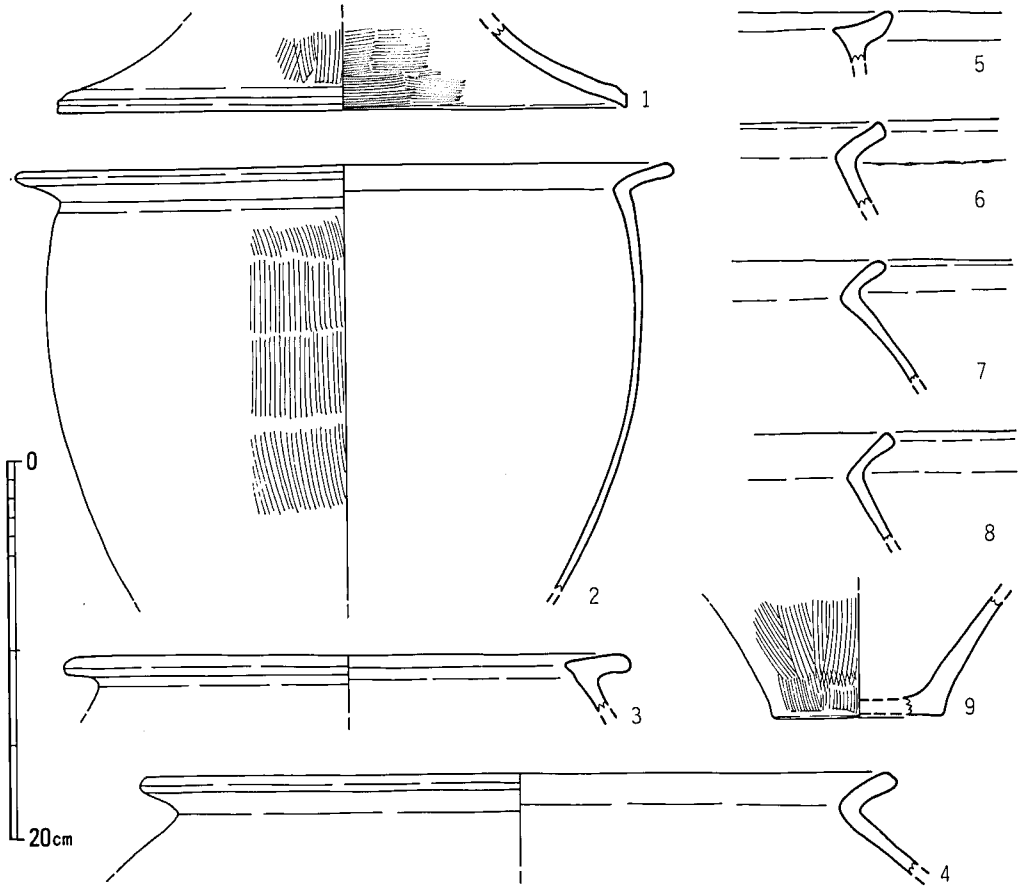
82号竪穴住居跡（図版22　第45図）

Q-R７区に位置し、古墳時代の68号竪穴住居跡に切られ、弥生時代の26号土坑を切っている。平面形はおむすび形を呈し、長軸6.18m、短軸2.3m程、残存高42cmを測る。床面にはピットが数個あるが、主柱穴は判然としない。炉跡は床面の中央にあり、径１ｍ前後の大きなものである。当竪穴住居跡は焼失家屋で、床面には炭化材・炭化物が遺存していた。埋土より磨製石鏃が出土。

土器（第46図１～６・第47図７～15）１は鋤先状口縁壺の破片で、復原口径は25.2cm。外面



第48図　83・113号竪穴住居跡実測図（1/60）



第49図　83号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

には丹を塗布している。2は袋状口縁壺で、口縁部外面に稜を有する。頸部と胴部中位に「コ」字形突帯文を貼付する。口径は17.0cmに復原した。3は壺の底部破片で、底面はやや丸みを帯びる。4は鉢で、器高10.0cm、口径14.2cm、底径5.9cmに復原した。5は体部が丸みを帯びることから椀とした。内外面には丹を塗っている。6は鉢の底部破片で、外面には指頭圧痕がみられる。第47図7～9は逆「L」字形口縁の甕で、7・8は内傾する。9は内面にも突出する。10～13は「く」字形口縁の甕で、10は推定器高21.3cm、復原口径18.6cm、復原底径6.2cmを測る。11・12の口縁端部は面を有し、13の端部は窪んでいる。14は逆「L」字形口縁の甕で、口縁部平坦面は内傾する。口縁端部は凹形に窪み、頸部直下に三角突帯文を貼付する。15は外面に丹を塗布していることから高坏の脚裾部になろう。

石器（第167図4）結晶片岩もしくは蛇紋岩製の磨製石鏃で、先端部は欠損。湾曲する茎部にはわずかに面を作る。4.3×1.8×0.2cm。

83号竪穴住居跡（図版23　第48図）

83号竪穴住居跡はＭ８区に位置し、古墳時代の81号竪穴住居跡に切られ、弥生時代の113号竪穴住居跡を切る。弥生時代の115号竪穴住居跡とも北西３ｍで近接するが、この一帯は弥生時代の遺構が少ない地区である。平面プランは4.5×3.8ｍの西壁にやや開く台形を呈し、81号住居に削平されながらも、壁高は最高で48cmを測る。床面においていくつかのピットを検出したが、そのサイズや深さや位置関係から、いずれが本住居の主柱穴に相当するのか判然としなかった。70×55×12cmの炉跡はほぼ中央部において確認できたが、南壁に接してやはり床面において検出された145×135×28cmの土坑状遺構（Ｐ３）にわずかではあるが切られていた。また、南西隅には114×45×９cmの高まりがあるが、これは地山の削りだしによるもので、粘土などを置いたものではない。北西隅の小ピット（Ｐ４）からは、少量ではあるが炭化米61ｇが出土している。埋土は部分的に砂を含む黒褐色土で、パンケース１箱弱の遺物の多くはここから出土するが、いずれも小さい破片で摩滅も著しい。床面からは第49図２・４の土器や第163図３の有孔土製円盤が、北壁に接して第167図８の砥石が出土している。

土器（第49図）１は高坏の裾部で、復原径30cm。内外面ともにハケ目が施され、先端部の浅い凹線が特徴的。２は口径38.4cm、残存器高23cm。全体にやや摩滅するが、外面にはハケが、内面にはナデが施される。３～８は摩滅が著しく器面調整不明。３は復原口径30cmの甕口縁部で、二次加熱により淡赤褐色に変色する。４は復原口径40cm。５～８の甕の口縁部のうち、５は二次加熱により淡赤褐色に変色する。９は復原底径９cmの甕底部で、内面には炭化物が付着する。

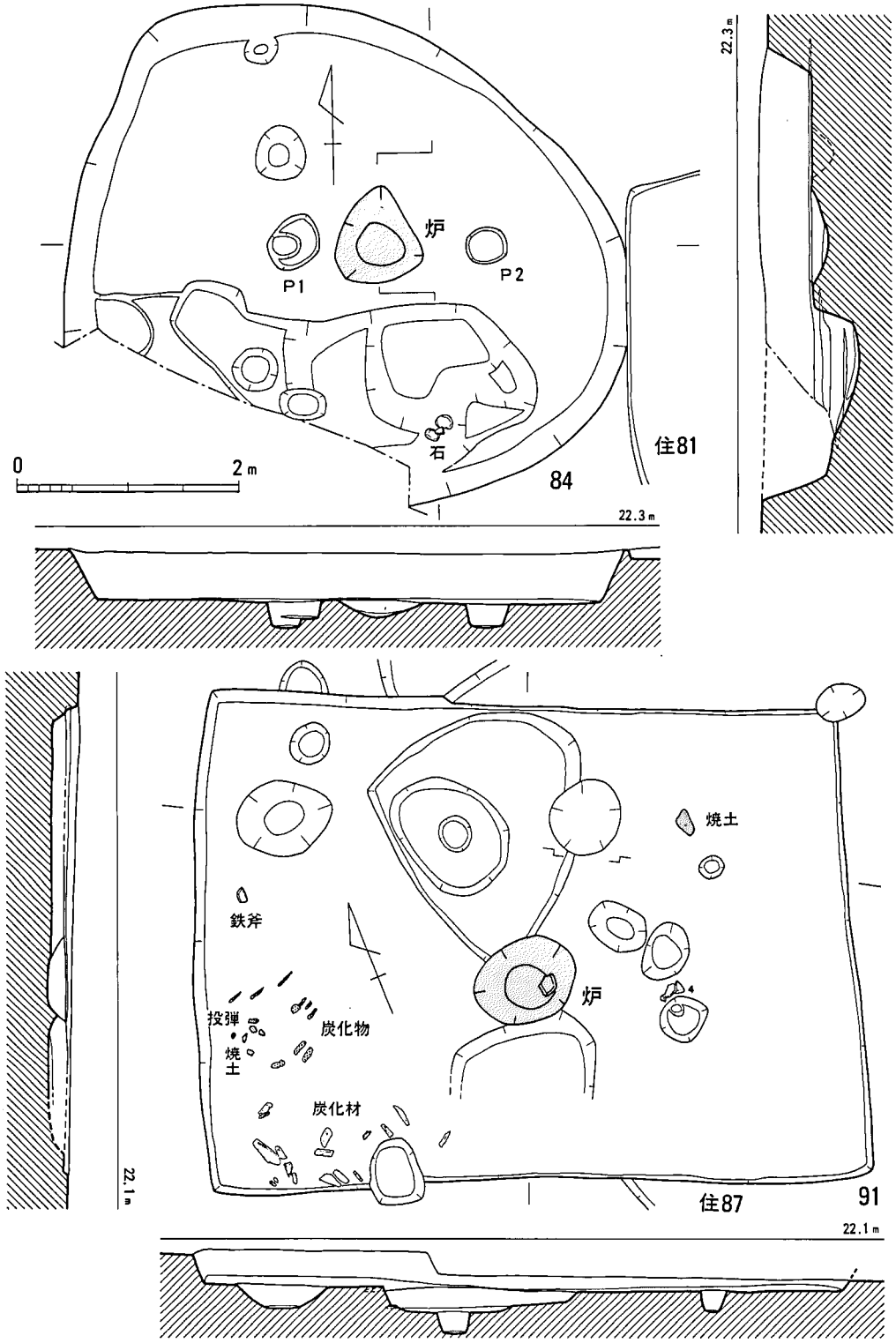
土製品（第163図３）径3.2cm、厚さ1.4cm、孔径６mm、重さ15.4ｇの有孔土製円盤で、１面は平坦面になる。

石器（第166図８）11.9×5.4×2.9cmの砂岩製の砥石。長軸方向の一端は欠損するが、その後も４面が使用されつつも、一部に自然面も残す。

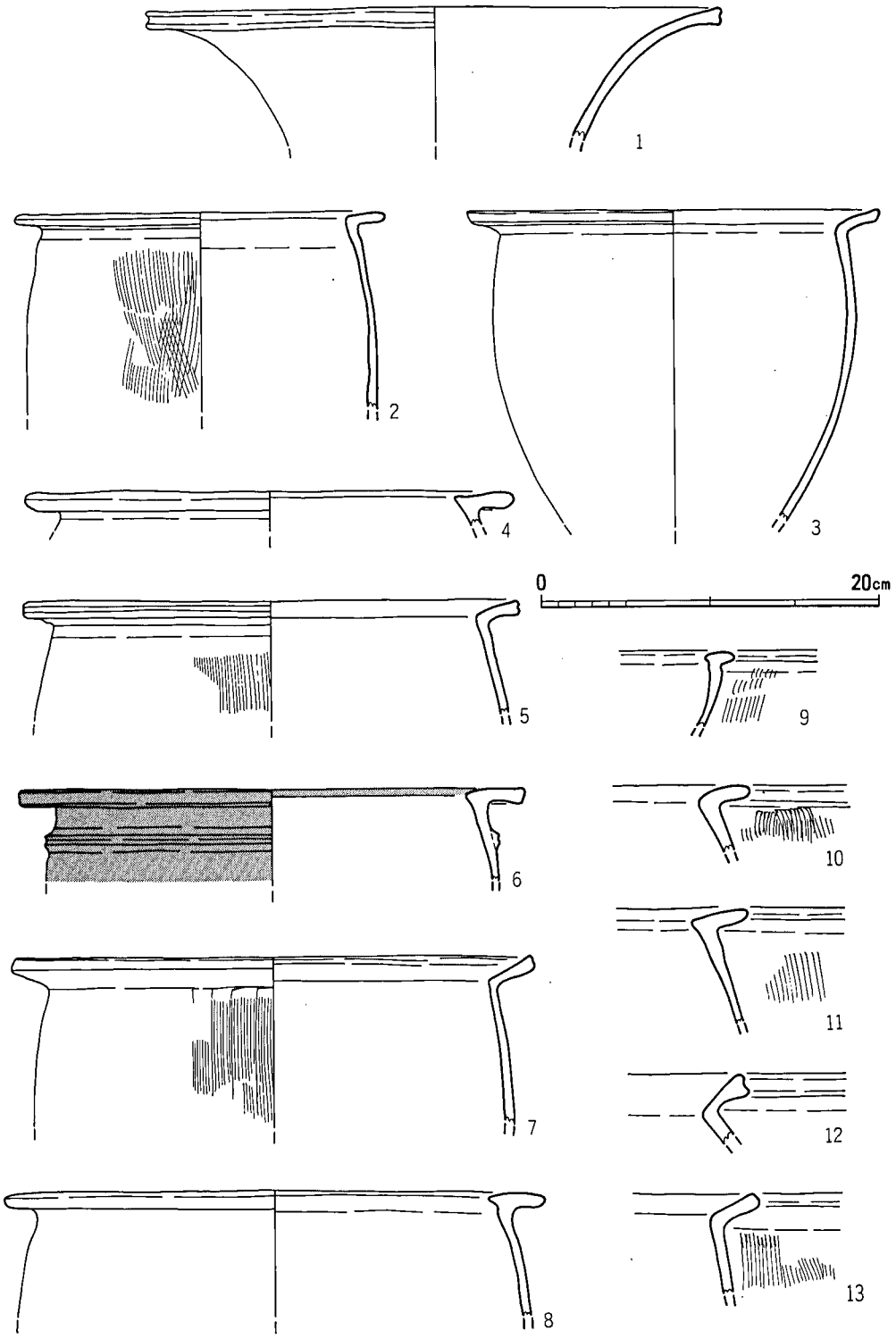
84号竪穴住居跡（図版23・24　第50図）

調査区の中央部南側Ｍ８区で検出された東西5.15ｍ、南北3.65＋αｍの長円形の住居跡で、東壁の一部を81号竪穴住居跡に切られ、南側は調査区外である。壁高40cm以上と比較的残りが良く、床面も硬く締まる。住居のやや東側に深さ14cmほどの炉跡が、その両側に主柱穴２本（Ｐ１・２）がある。住居内南側の東西方向の落ち込みは住居より新しく、磨製石剣切先が出土。なお、この住居の埋土で24号土坑が検出された。遺物は壺・甕・高坏及び、磨製石剣・土製投弾・土製勾玉等が出土。

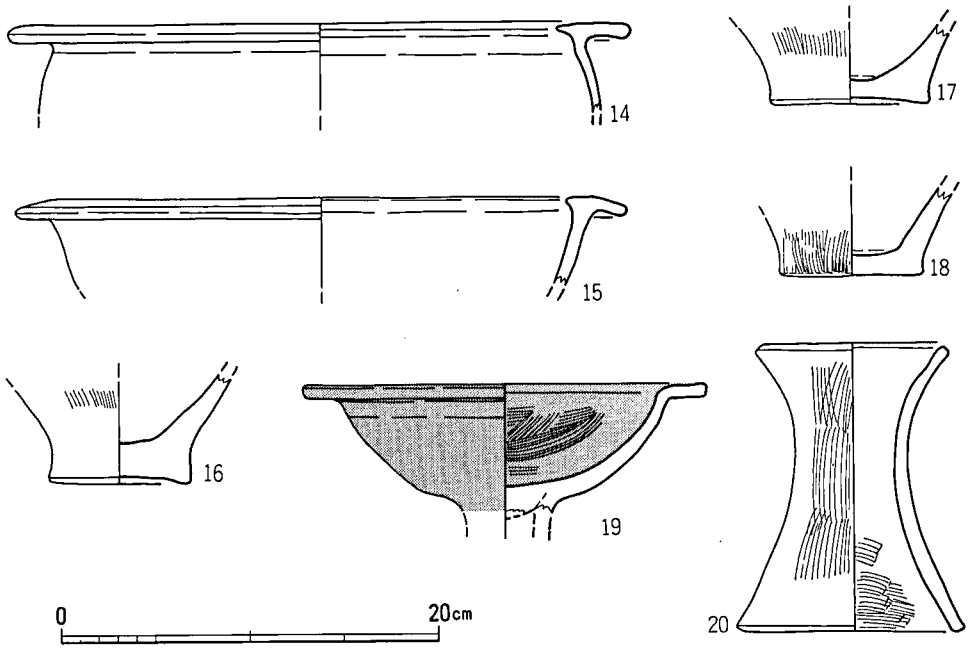
土器（第51・52図）１は広口口縁の壺。２～15は甕で、逆「L」字状口縁部を呈すもの（２・６・８・14・15）と「く」字状のものがあり（３・５・７・10～13）、いずれも胴部の膨らみが少ない。６は口縁部直下に「M」字状の突帯文を有す丹塗土器で復原口径30cm。７は跳上げ口縁。



第50図　84・91号竪穴住居跡実測図（1/60）



第51図　84号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）



第52図　84号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）

16～18は甕の底部で16・17は上げ底。19は内外面とも丹塗りの高坏の坏部で、幅広の平坦な口縁部を有し、内面には細かいハケ目が残る。復原口径21.4cm。20は器台で外面及び内面下部は粗いハケ目調整。器高15.3cm。2・3・5～7・13・14・16～20は床面出土。時期は中期後半？。

石器（第166図1）粘板岩製の磨製石剣の切先で、先端部はわずかに欠損しており、また研ぎ直しのためか先端部の形態は丸い。

土製品（第163図7・15・16）7は器面は風化しているが、丁寧に仕上げられた勾玉の完形品。断面は丸いが、長方形状に近い感じがする。図は頭部より9mm下に穿かれた径13mmと細い孔から吊した状態のもので、長3.35cm、最大径0.95cm、重さ4.1g。色調は灰褐色から淡黒灰色を呈し、埋土より出土。15・16は投弾形土製品。両者とも上層出土で、ラクビーボール状を呈す。15は16に比べ胴部が球形に近く、端部も丸みを持つ。長4.9cm、径2.8cm。16は面取り状に整えられるため断面は不整の球形で、下面は平坦に近くなる。長5.3cm、径2.4～2.7cm、重さ27.7gを測る。色調は15が黒褐色、16は灰褐色。

91号竪穴住居跡（図版25　第50図）

91号竪穴住居跡はO8区に位置し、古墳時代の87号竪穴住居跡に大きく切られるが、全体の平面プランは十分に確認できた。この一帯は弥生時代の遺構が特に少ない地区である。平面プランは5.9×4.5mの長方形を呈し、先述したように87号住居跡に大きく削平されながらも、壁高

は最高で35cmを測る。床面においていくつかのピットを検出したが、そのサイズや深さや位置関係から、いずれが本住居の主柱穴に相当するのか判然としない。93×76×12cmの炉跡はほぼ中央部において確認できたが、やはり床面において検出された浅い土坑状遺構を切っている。炉跡は第53図に図示したように大きく4層に分かれ、全体に炭化物が含まれる砂質土であるが、第2層については炭化物の純層である。炉跡底面は赤く焼けて硬化している。本住居南西隅床面では約1mの範囲で長さ10～20cm程度の炭化材がかなり纏まって検出されたが、ここからだけの検出であるため、本住居の上部構造に関連した施設のものかどうかは判然としない。遺物の出土は少量・小破片で摩滅も著しいが、第54図3・4・7は床面から出土した。第171図1の鉄斧も床面からの出土。

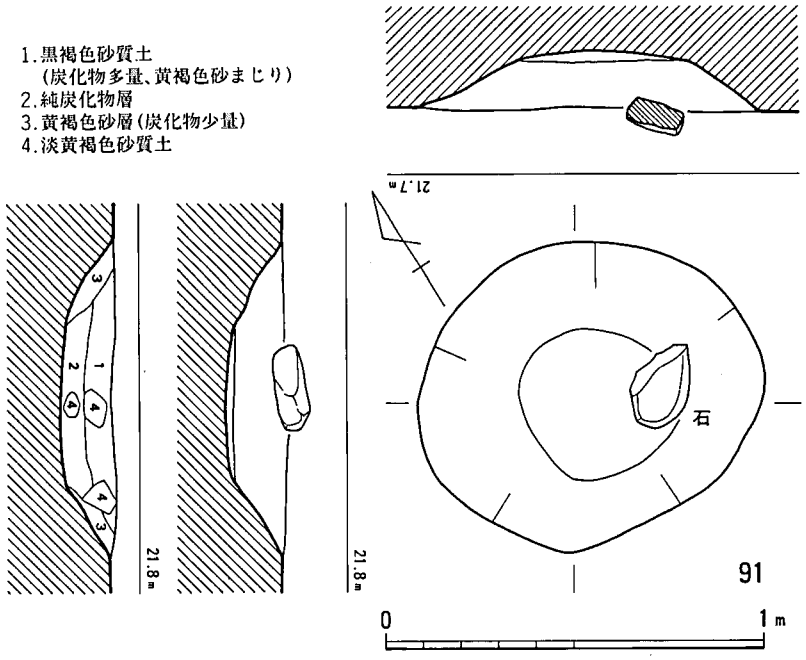
土器（第54図）甕の口縁部を中心に8点を図示したが、全体に摩滅が著しく4・5・7・8のみ外面のハケ目が観察される。4は復原口径23cm。全体の1/4ほどが残存するが、巻頭図版3にも示したように、破片2/3には大きな黒斑が残るが、1/3は二次加熱を受け淡く赤褐色に変色はするもののあるべき黒斑は存在しない。おそらくは、破損した1/3のみが二次加熱を受けることで黒斑が消えてしまったものと考えられる。黒斑が生焼けの結果であることの証明として注目されよう。5の復原口径は35cmで、頸部に突帯文が貼り付けられる。口縁端部は凹線状にわずかに窪む。6は復原口径32cm。7は復原口径14cmの小型甕。

土製品（第163図17）床面出土の投弾形土製品の完形品。長3.9cmと小型で、不明瞭な整形時の稜が残る。灰色から黒褐色の色調を呈し、径2.4cm、重さ17.4g。

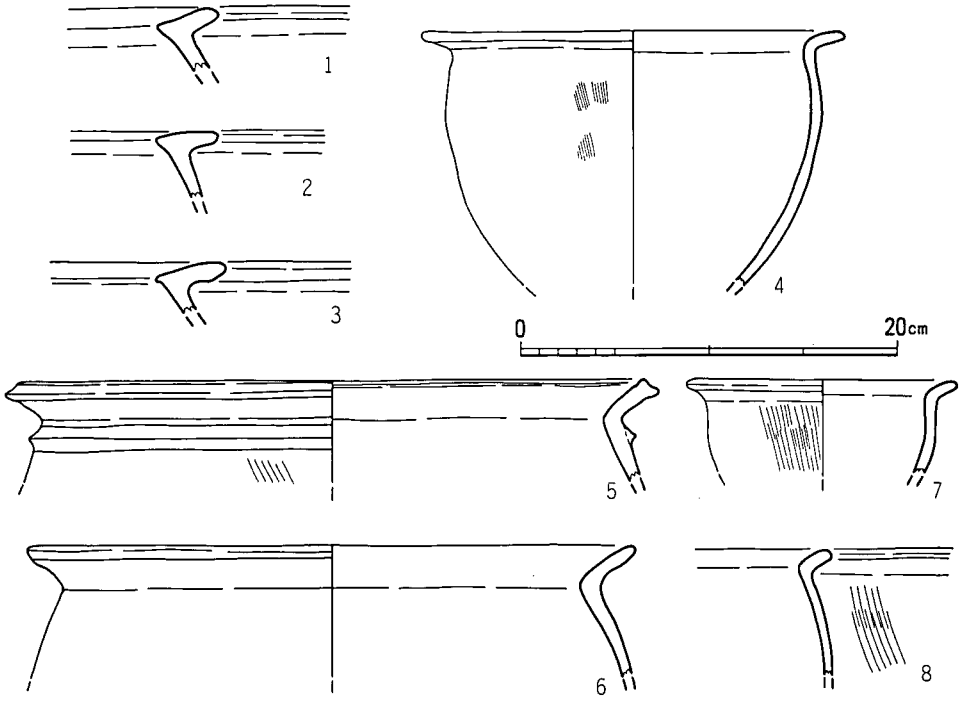
鉄器（第171図1）長さ8.8cm、刃部幅5.6cm、袋部幅4.2cmを測る袋状鉄斧。刃部の角度は30°と割合鋭利である。刃部から2.7cmの部位で袋部を折り曲げており、鍛造品と考えられる。

92号竪穴住居跡（図版26・27　第55・56図）

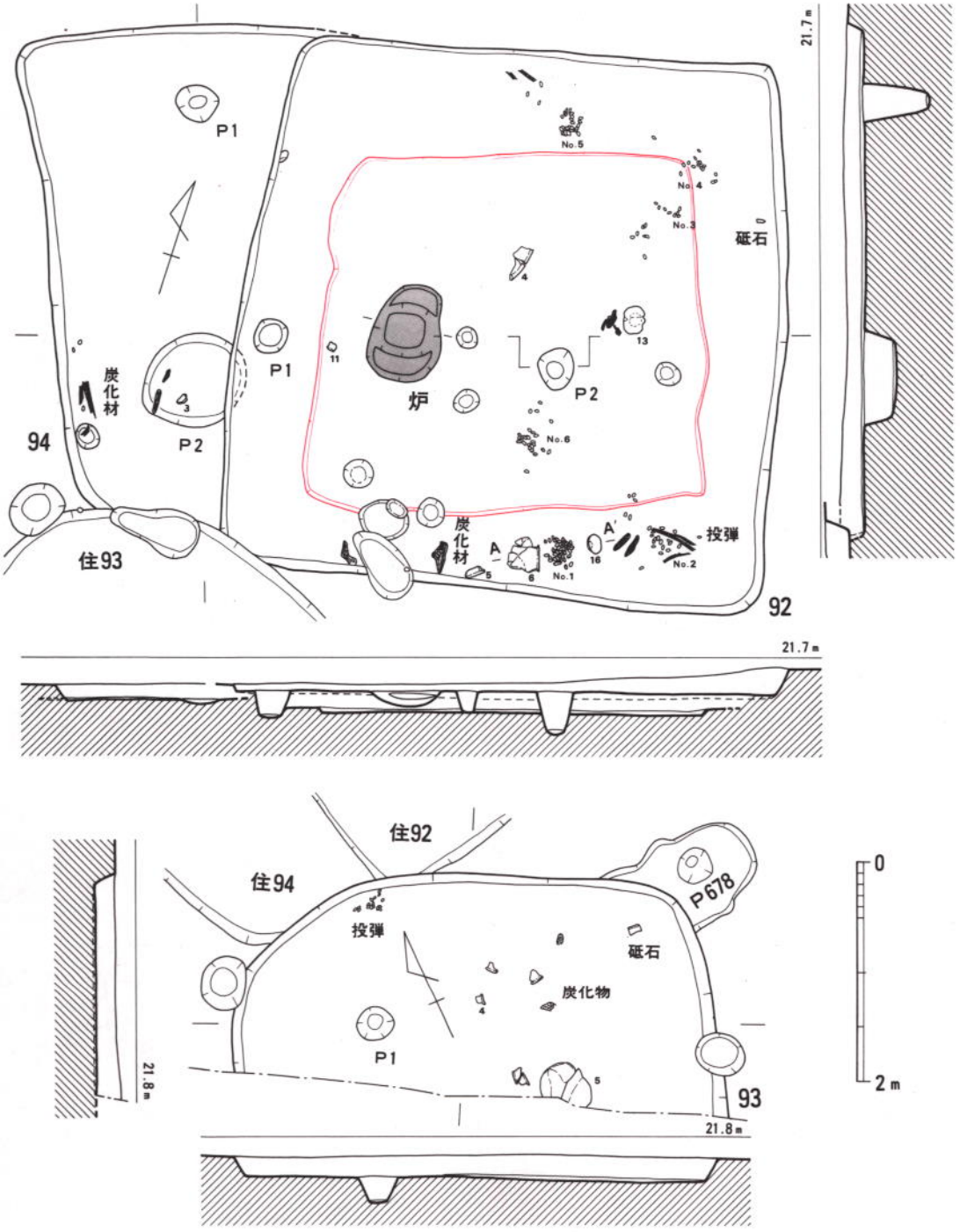
L-M8区で検出された住居で、南東隅を93号竪穴住居跡に切られ、94号竪穴住居跡を切る。東西4.95m、南北4.85mのほぼ正方形を呈し、硬く締まった床面の中央西側に炉跡、その1m両側に主柱穴（P1・2）があるが、位置的に住居の西側に片寄りすぎている。94号竪穴住居床面のレベルは遺構検出時では92号竪穴住居跡より浅く、その床面を当住居が切っていると判断したが、炉跡や柱穴から検討すると92・94号竪穴住居は同一の住居である可能性が考えられる。炉跡は長円形プランで、長径90cm、深さ14cm。第56図は炉内の土層図で2層は炭化物を多く含む暗茶灰色土、3層は炉の下部に堆積する炭化物層である。南側床面には炭化物や炭化材が遺存する。なお、赤で表示した線は床面より20cm下層で検出された掘込みで、位置的には92号竪穴住居跡の中心に収まり、住居に関連した遺構であろう。注目すべきは住居の床面で出土したNo.1～6の投弾形土製品群（総計129点）で、No.1・2は住居の南辺部、No.3～5は北東部、No.6は中央南側で検出された。特にNo.1・5・6は径20cm前後の範囲に20～40個が整然と置かれた状態で



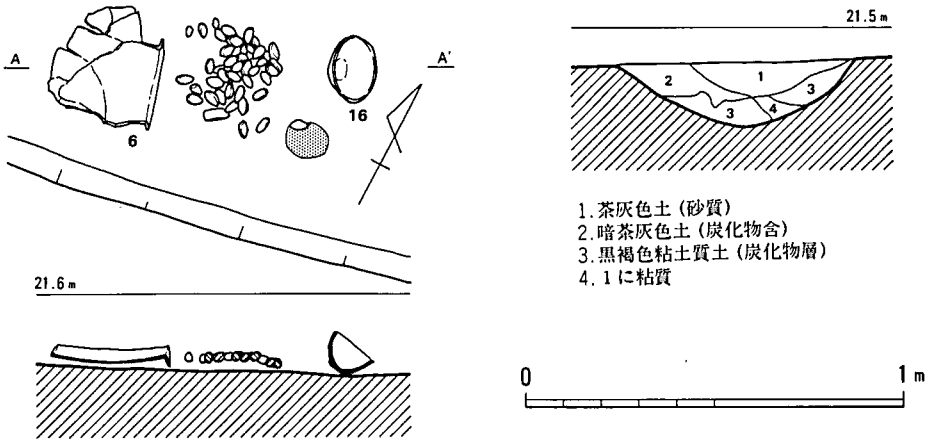
第53図　91号竪穴住居炉跡実測図（1/20）



第54図　91号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第55図　92～94号竪穴住居跡実測図（1/60）



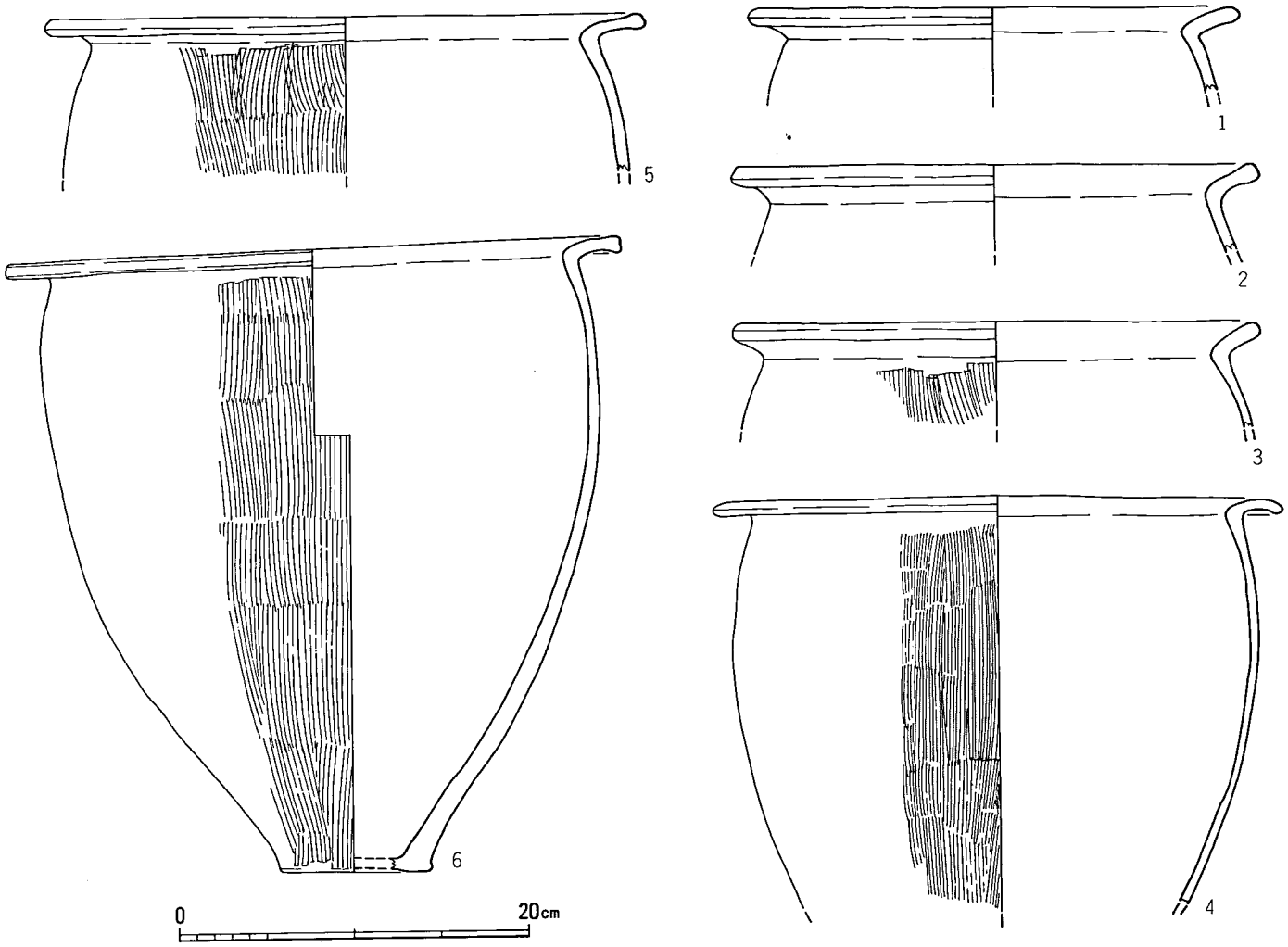
第56図　92号竪穴住居跡遺物出土状況および炉跡土層断面実測図（1/20）

出土した。第56図は住居の南側で出土したNo.1群の出土状態で、6の甕と16の鉢の間に41個がほぼ同一のレベルで置かれている。このほかに、多量の土器や、砥石・土製紡錘車等が出土した。

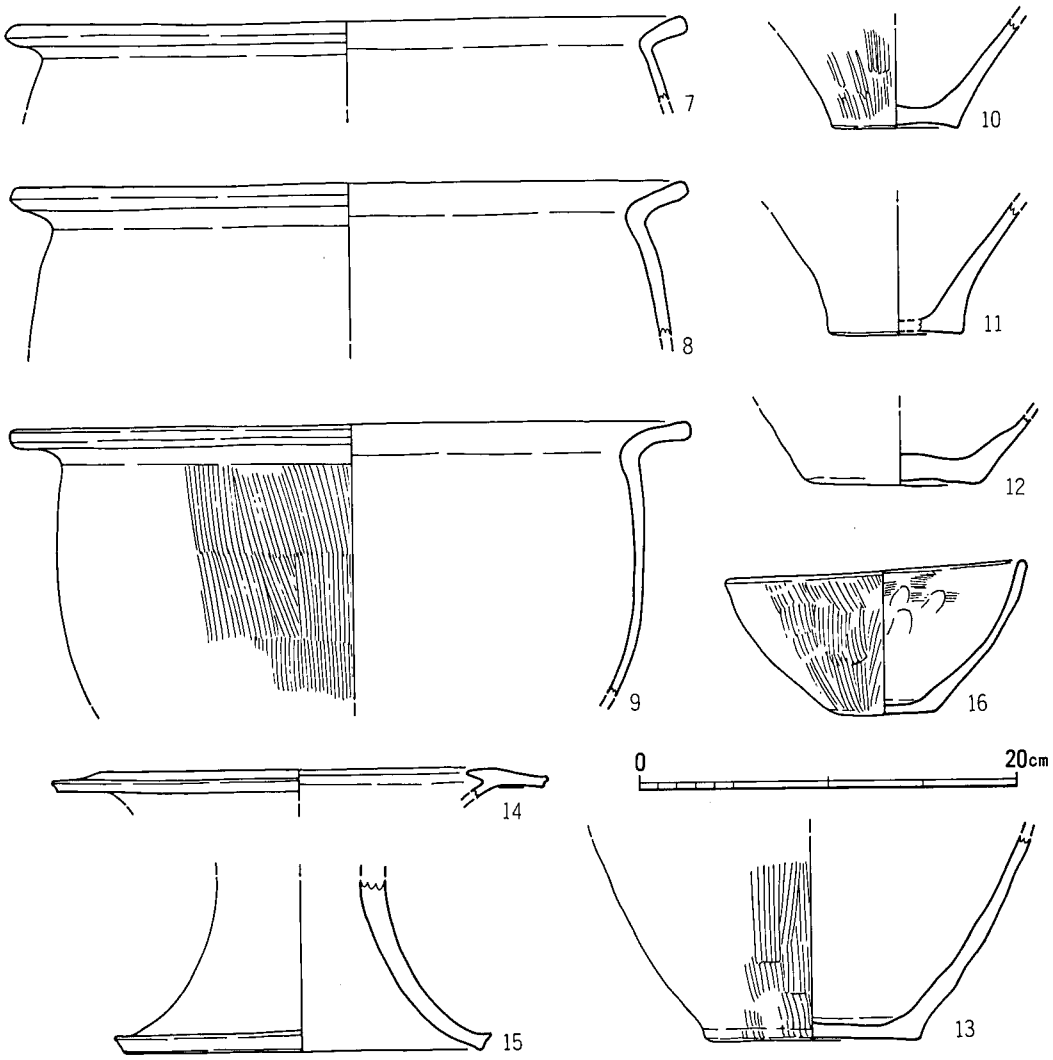
土器（第57・58図）1～9は甕。浅い「く」字状を呈す口縁部を持ち、胴部の最大径を口縁部のやや下位に持つものが多いが、4の口縁部は下方に垂れる。また、口唇端部を丸く収めるもの（1・3・4）と平坦ないし若干窪ますものがある。6は口径34.8cm、器高35.8cm、底径8.8cmを測る。外面全体にやや荒いハケ目を施し、二次的な加熱を受け、ススが付着する。10～13は底部で底径9.3cmの12は壺であろう。径11.5cmと大形の13は、内外面とも強い二次的加熱を受けている。14、15は高杯。14は鋤先状口縁を有す。15は脚部片で、径20cm。16は口径16cm、器高8.25cm、底径5.2cmを測る鉢の完形品。口唇部を丸く収め、胴部中央が薄作りである。外面は全体にハケ目が残り、内面上部はハケ目をナデ消す。色調が他の土器と異なり白味を帯びた褐色を呈す。1・2・9は住居の下層より出土。時期は中期後半。

石器（第168図3・4）3は頁岩製の砥石で、欠損により端部がわずかに残るだけであるが、長軸に平行する3面が使用される。4は頁岩製の砥石で、8.3×2.5×2.4cmを測る。かなり小さいがこれで完形品。

土製品（第163図5　第163～165図18～71）5は床面出土で、ソロバン玉状を呈す紡錘車。孔がやや片寄り、右断面は尖りぎみである。径4.5～4.7cm、厚さ1.23cm、孔径0.65cm、重さ21.2gを測る。18から71は投弾形土製品で、大部分が黒灰色の色調を呈す。18～41はNo.1群で、総計41点出土した。18が最小で長3.9cm、最大は41で長4.5cmを測るが4.2cm以下の小型品が多く、断面は球形に近い。18・25・30は片端部が潰れた特徴を持ちので他のグループにも目立つ。26はハケ目、32の上右側はナデ調整が丁寧に施される。37・38には工具痕が残る。42～51は

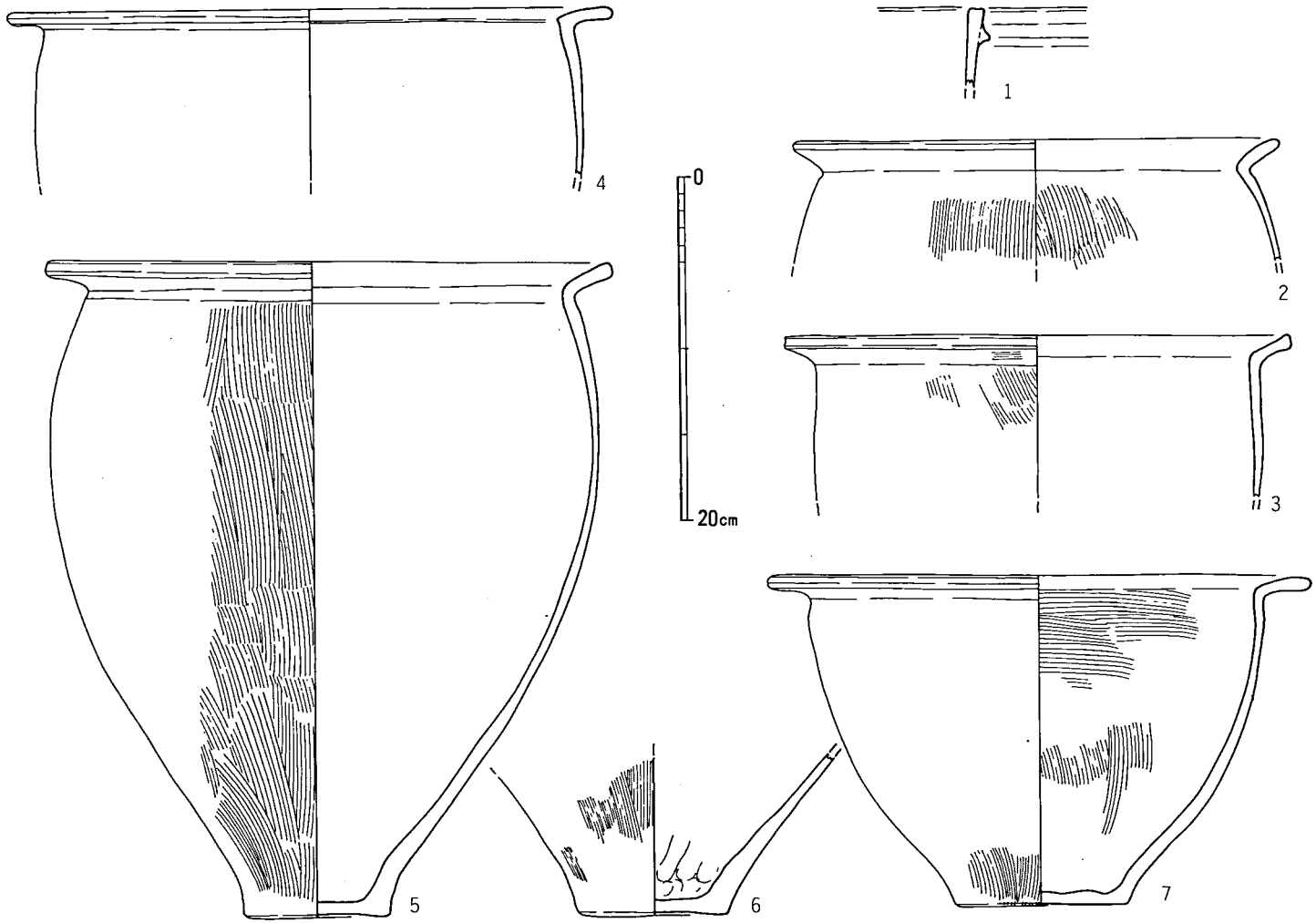


第57図　92号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/4）



第58図　92号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/4）

No.2群で、総計29個体出土した。42・43が4.15cmと小さく、それ以外は44の4.4cm以上あり、51は4.6cmを測る。43・44・46・49は一方の端部を斜めに整形する特徴があり、43の下端部は窪む。46・49は工具痕が溝状に残り、42の左辺は直線状になる。52～55はNo.3群で８個体出土した。遺存度が悪く、53のみがほぼ完形品の資料である。56～61はNo.4群で12個体出土した。59が最小で長4.2cm、57は径2.35cmと細身で細かい整形痕が残る。62～67はNo.5群で、15個体出土した。全体的に不細工な作りが目立ち、65のように瘤状に突き出たり、長円形に近い断面を持つもの（67）がある。また、61・65は上下両端部を、67は下端部のみを斜めに整形し表面に沈



第59図　93号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

線が見られる。68～71は№6群で、15個体出土した。70は径2.7cm以上の大型品で、上端部を斜めに整形する。なお、投弾形土製品の計測値は第２表を参照されたい。

93号竪穴住居跡（図版26　第55図）

L-M８区で検出され、92・94号竪穴住居跡を切る。南半分は調査区外であるが、東西4.44ｍの隅丸方のプラン。主柱穴と考えられるＰ１以外には柱穴は無く、炉も未検出である。壁高20cm内外で、一部炭化物が残る床面はあまり締まっていない。住居の北東隅から投弾状土製品が狭い範囲で纏まって検出された他、甕や砥石が出土した。

土器（第59図）１は長頸壺の口縁部破片。口唇上端部はやや凹み、直下に突帯文を有す。２～５は甕。「く」字状の口縁部を有す２・３・５と逆Ｌ字状の４とがある。２・４の口唇部は丸く収める。５は口径32.6cm、器高37.2cm、底径8.4cmを測る甕で、胴上半部がやや張り底部がすぼまる器形。外面全体にハケ目調整を施す。また、内外面の一部にはススが付着する。６は底径8.4cmの甕の底部で底部内半に指の圧痕が残る。７は逆「L」字状口縁の鉢。やや肥厚させた口縁部から薄での胴部を有す。復原口径31.3cm、器高19.1cm、底径9.6cmを測り、色調は92号竪穴住居跡出土の鉢と同様に白黄褐色を呈す。時期は中期後半。

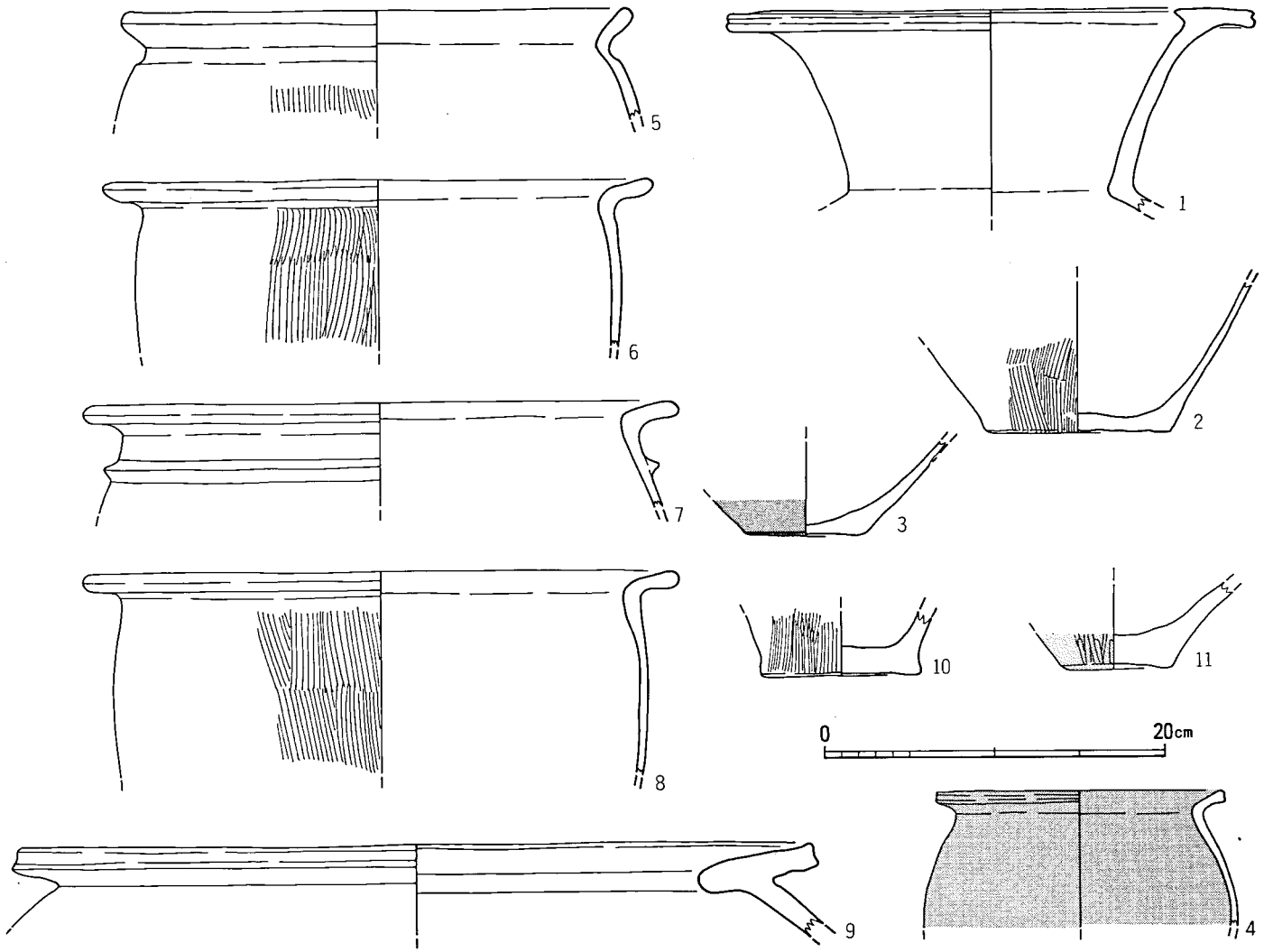
石器（第168図５）砂岩製の砥石で、欠損した端部以外の５面はすべて砥石面として使用されている。13.2×6.1×4.5cmを測る。なお、欠損後は使用されていない。

土製品（第165図72～76）投弾形土製品が15個体以上が出土したが、小破片が多く５点を図示した。92号竪穴住居跡と異なり色調が黄から赤褐色を呈す。72は残長4.1cm、径2.45cm。73は半欠品で径2.4cm。74～76は細身の一群で、74の径2.4cm、75は残長4.4cm、径2.2cm、重さ16.4ｇ。76は残長4.7cm、重さ19.1ｇを測る。

94号竪穴住居跡（図版26　第55図）

92号竪穴住居跡に切られた、南北4.3ｍの方形プランの住居で、壁高は12cmを残すにすぎない。床面は硬く締まり、炭化材が若干残る。Ｐ２は90cm、深さ25cmの円形土坑で炉ではない。前述したとうり92号竪穴住居跡と同一の住居の可能性が強く、同一とすると東西6.6ｍ、南北4.85ｍの長方形プランの住居となる。遺物は壺・甕・軽石のほか、北側床面下層より投弾状土製品（第165図93～97）が出土した。また、種類は不明だが炭化した顕果植物の殻が遺存した。

土器（第60図）１は鋤先状の広口口縁壺。口縁部先端はやや下がり、端部は凹線状になる。復原口径31cm。２・３は壺の底部。３は床面出土で、底径7.2cmの丹塗土器。４は胴部の張りが強いので、無頸壺であろう。内外面とも丹塗りで、復原口径17cm。５～９は甕。５は屈曲の強い口縁部を有し、胴部との境に明瞭な稜を持つ。６～８はやや「く」字状を呈す口縁部で７は三角突帯文を直下に有す。９は口径46cmの大型の甕で、甕棺に使用された甕の残りが廃棄され



第60図　94号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

たらしい。10・11は底部。11は外面に丹塗り、ミガキの痕跡があり壺であろう。3を除いて住居の埋土上層より出土。時期は中期後半。

石器（第166図4）軽石であるが、特に使用や加工の痕跡は認められない。

96号竪穴住居跡（図版28　第61図）

調査区の中央北端、L5区で検出された。北東部は78号、南側は54号の古墳時代の住居跡に切られるが、東西4.9m、南北3.3＋αmの隅丸方形の住居跡で床面は東、南側にやや傾斜する。P1・2とも20～30cmと浅く主柱穴とは考え難い。また、炉跡も不明である。床面は良く締まり、20～40cm大の河原石が見られる。土器のほか、台石や土製丸玉が出土した。

土器（第62図1～6）1・2とも「く」字状口縁の甕。1は口唇部が肥厚し、2に比べて屈曲が強い。2の頸部にはハケの工具痕が残る。3は径10.8cmと大型で部厚な底部。外面は密なミガキを施しているところから壺であろうか。4・5は甕の底部。5は2.4cmと厚く、台状の底部。6は鋤先状口縁の高杯。内端部が外端部に比べて部厚く、外に傾く。内面から口縁部にかけては丹塗りで、口縁部平坦部には平行する暗文を施す。口径31cm。時期は中期後半。

石器（第170図2）自然石をそのまま利用した作業の台石で、1面は敲打や研磨によりやや窪んでいる。

土製品（第163図）埋土より出土した手づくねの土玉で、やや扁平な完形品。上下より位置をずらして穿孔するが未貫通。黄褐色を呈し、径2.0～2.2cm、厚さ1.8cm、孔径0.35cm、重さ6gを測る。

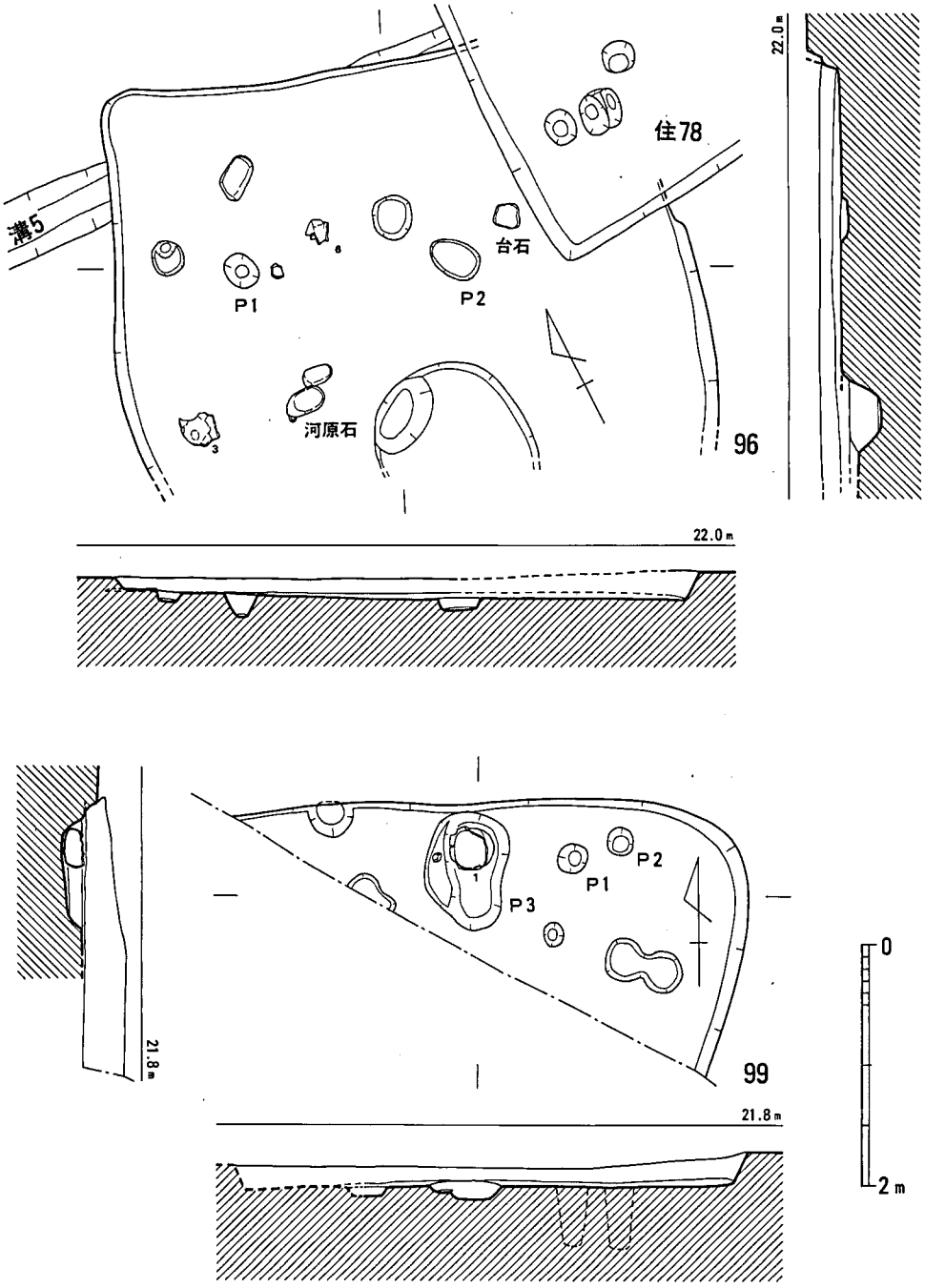
99号竪穴住居跡（第61図）

L8区で、93号竪穴住居跡の下層で検出された。一辺4.25m以上の隅丸方形プランであるが、その大部分は調査区外にある。P1・2は深さ50cmの柱穴であるが、位置的には主柱穴の可能性が少ない。住居の北壁中央に南北1m、東西0.7m、深さ20cmのピット（P3）があり、壁際に1の甕が埋置されていた。埋土から軽石が出土。

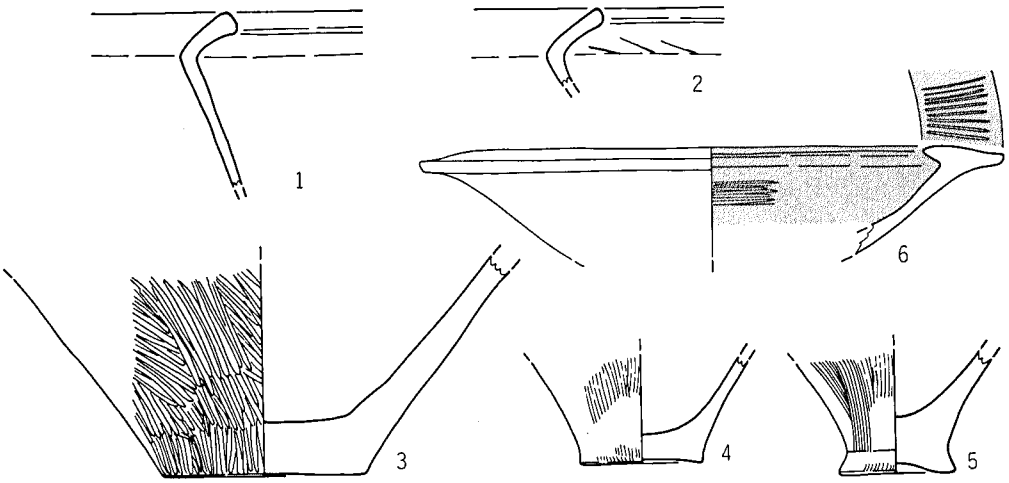
土器（第62図1・2）1はP3から出土したほぼ完形の甕。逆「L」字状口縁で、内外端部とも丸く収める。胴部は口縁部やや下位で最大径を持ち、徐々にすぼまりながら底部に移行し、底部外端部は突出する。外面はハケ目、内面はナデ調整。口径37.8cm、器高37.2cm、底径8.5cmを測る。色調は黄褐色を呈し、胎土には雲母・角閃石を含む。2は高坏の脚部で径20.3cm。時期は中期後半。

石器（第169図9）軽石であるが全面が丁寧に磨かれ投弾状になる。7.2×4.9cm。

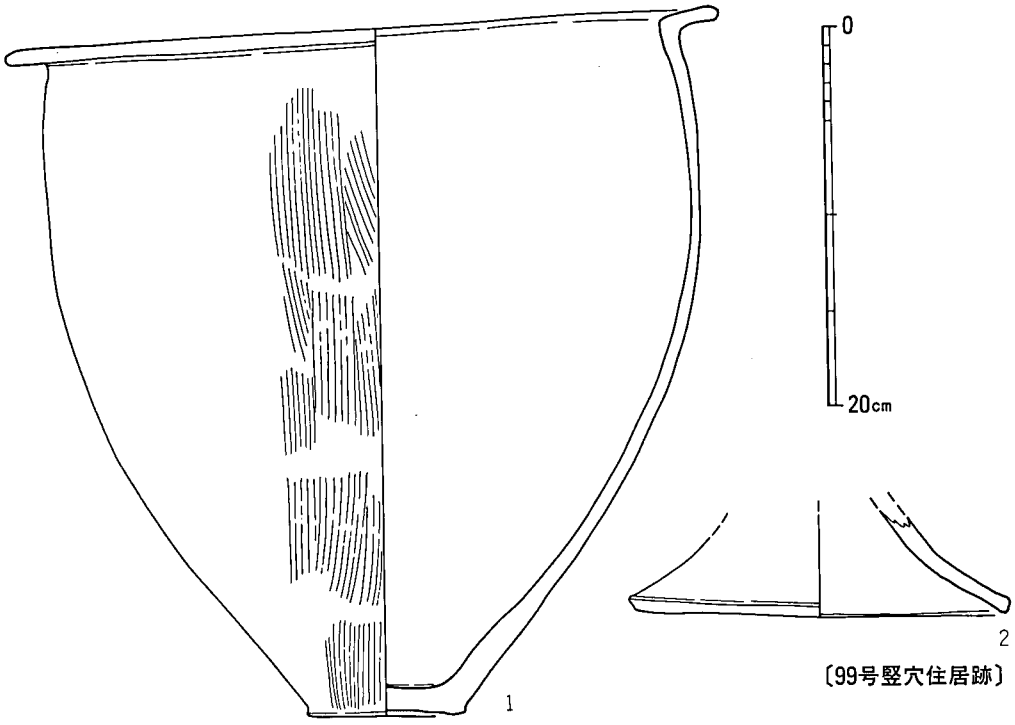
100号竪穴住居跡（第63図）



第61図　96・99号竪穴住居跡実測図（1/60）



〔96号竪穴住居跡〕



〔99号竪穴住居跡〕

第62図　96・99号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

調査区中央部の北端Ｌ５区で検出された。南側を古墳時代の77号竪穴住居跡に、北東部はＰ746に切られる。方形プランの住居で東西4.3ｍを測る。住居に伴うピットは東側の３個であるが主柱穴とは考え難い。床面の北側にある石は台石の可能性がある。住居内からは弥生時代の磨滅した小土器片が若干出土したのみである。

102号竪穴住居跡（図版29　第63図）

調査区の東端Ｖ５区で検出された。西辺を101号竪穴住居跡に切られ、下層に６号円形周溝状遺構が巡る。西側の東西辺が3.5ｍ、東側は5.5ｍ、東西5.2ｍと隅丸台形のプランを呈す。住居の中央西側に偏して径１ｍ、深さ10cm前後の炉跡があり、炉内には径35cm、深さ30cmのピットがある。P1・2とも壁に近いが、掘込みが50cmちかくあるところから主柱穴と考えられる。遺物は炉跡の北側から東側床面に完形品の壺・甕・鉢が纏まったほか、石庖丁・砥石・台石が出土。

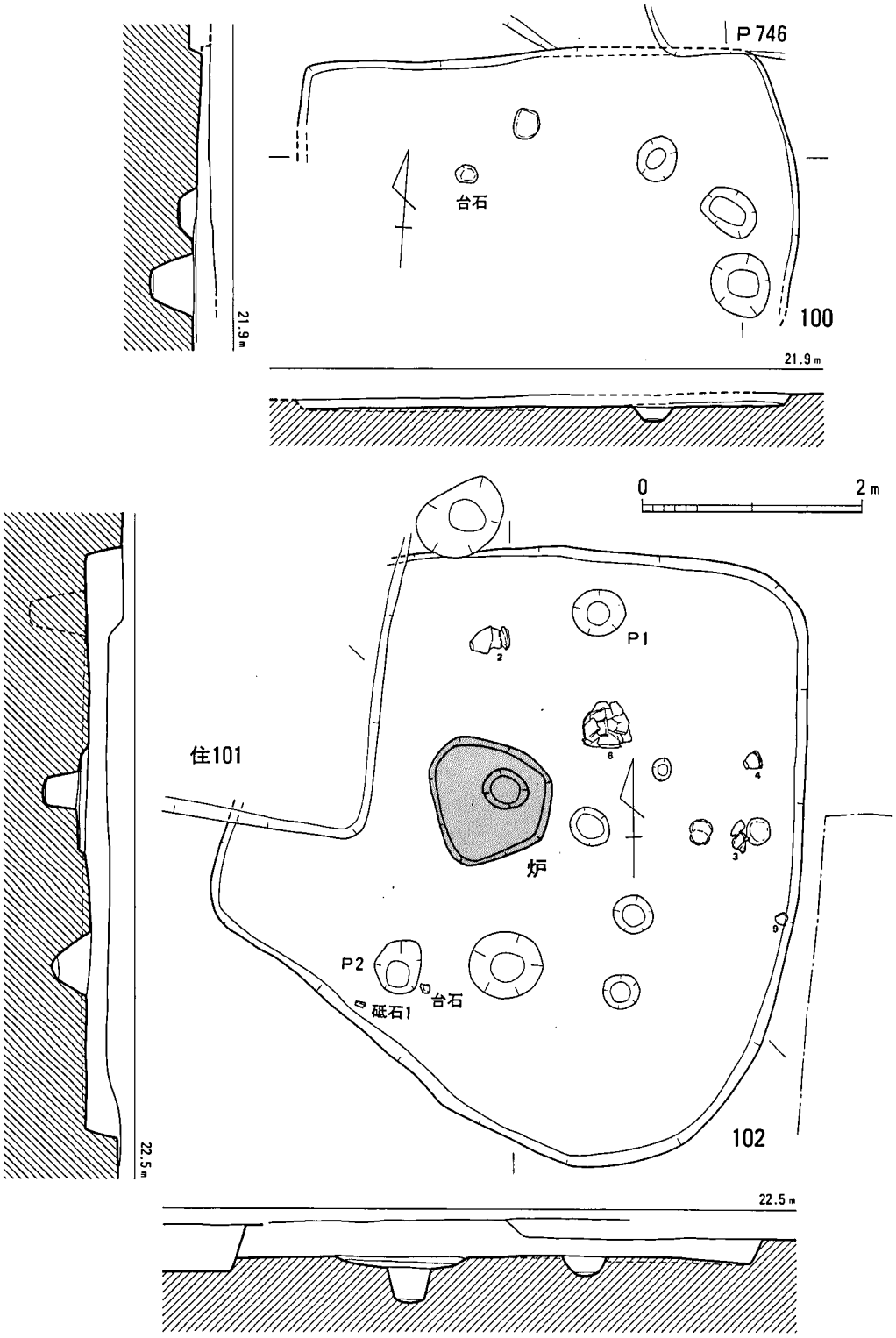
土器（第64図１～６　第65図７～12）１・２は袋状口縁壺の完形品で、大小２者がある。１は短い頸部を有し、その直下および胴部中央にだれた山形の突帯文を持つ。胴部下半には二次的な大きな穿孔がある。外面は斜め、ないし横方向のハケ目調整。口径10cm、器高22.9cm、底径7.5cm。２は１に比べ長く直立する頸部で、胴部上半に最大径を有す。山形の突帯文は頸部から胴部に反転するやや下位と、胴部上半に巡らす。外面口縁部を除いて縦方向のハケ目、内面は胴部中央に横方向の粗いハケ目が残る。口径14cm、器高33.3cm、底径8.6cm。３は壺の底部で径８cm。４～８は甕。４は最大径を口縁部に持つ小型の甕で、内湾する口縁部は明瞭な稜線を有し、内外面とも工具による整形痕が残る。胴部下半にはススが付着。口径・器高とも16.6cm。５は内外面とも丹塗り。６は緩く屈曲する「く」字状口縁で、最大径を胴部上半部に持つ。外面の頸部以下および内面は口縁部にも横方向のハケ目調整。口径29.3cm、器高32.6cm、底径8.6cm。９はやや外反する短い口縁部を有す小型の鉢で、内外面とも荒いハケ目調整。復原口径13.1cm、器高10.3cm、底径7.1cm。10は内湾する口縁部を有す丹塗りの椀。11も椀で、口唇部は10に比べ丸い。時期は中期末。

石器（第167図11　第168図６　第170図３）第167図11は粘板岩製の石庖丁で、欠損が著しくまた摩滅も著しい。第168図６は砂岩製の砥石で、欠損が著しく端部のみが残る。平坦な２面のみ使用される。第170図３は片岩系の石材。作業の台石としたが、あるいは手に持って使用したものかもしれない。平坦な２面が使用されている。

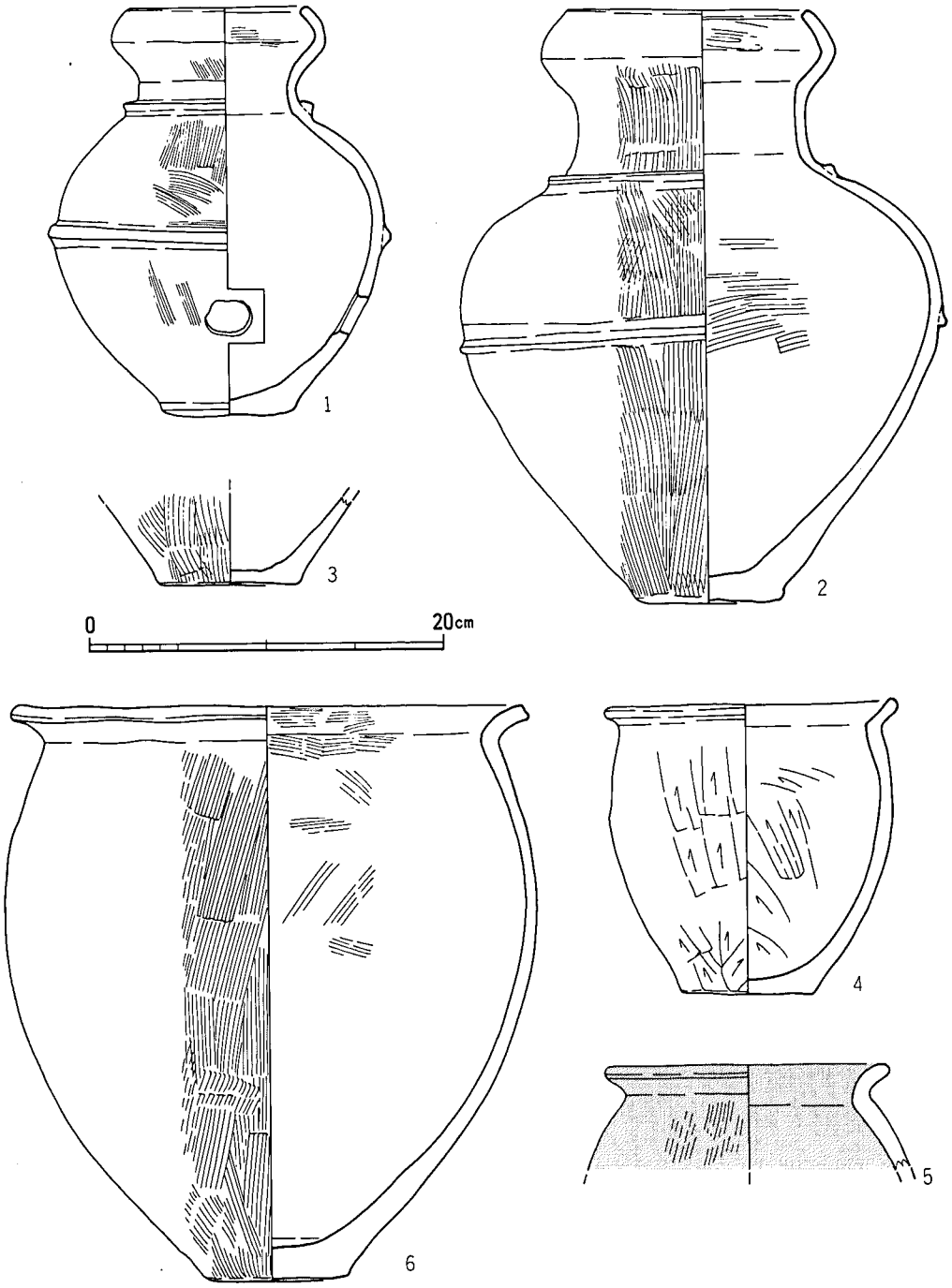
鉄器（第171図５）５は鉈で、先端部の欠損は新しいものである。残存長8.1cm、幅1.3cm、厚さ0.45cmを測り、裏面は丸く窪んでいる。

103号竪穴住居跡（図版29　第66図）

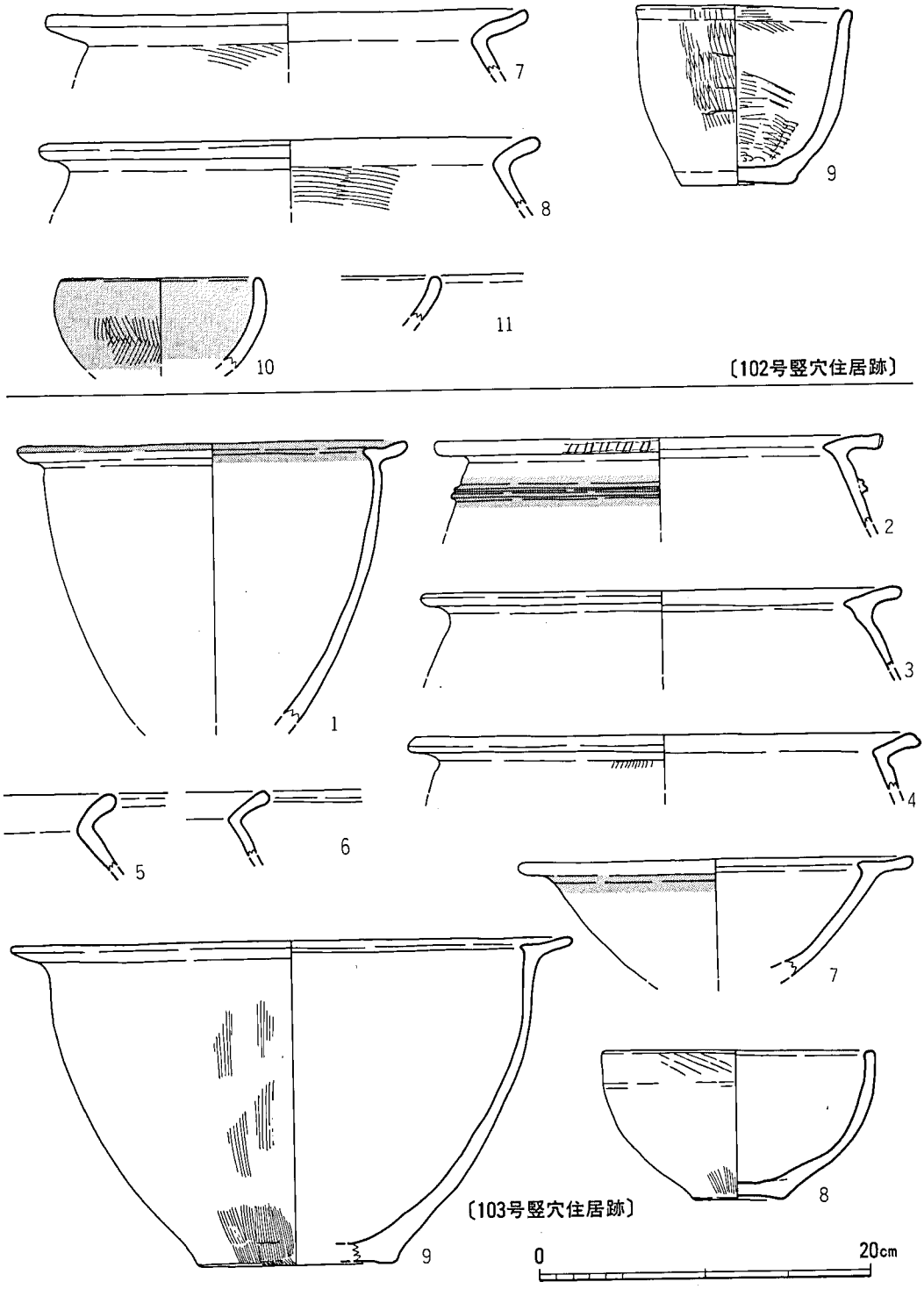
調査区の中央部北側のＯ６区で検出された住居跡で、古墳時代の75号竪穴住居跡の下層にあ



第63図　100・102号竪穴住居跡実測図（1/60）



第64図　102号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第65図　102・103号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

る。東西に壁の一部を残す一辺6.15mの方形プランの住居で、中央東側に片寄って1.1m×0.7m、深さ15cmの長方形の炉跡がある。炉内には焼土、炭が残る。炉跡の西側にあるP1が主柱穴であろう。遺物は甕・高坏・鉢が出土した。

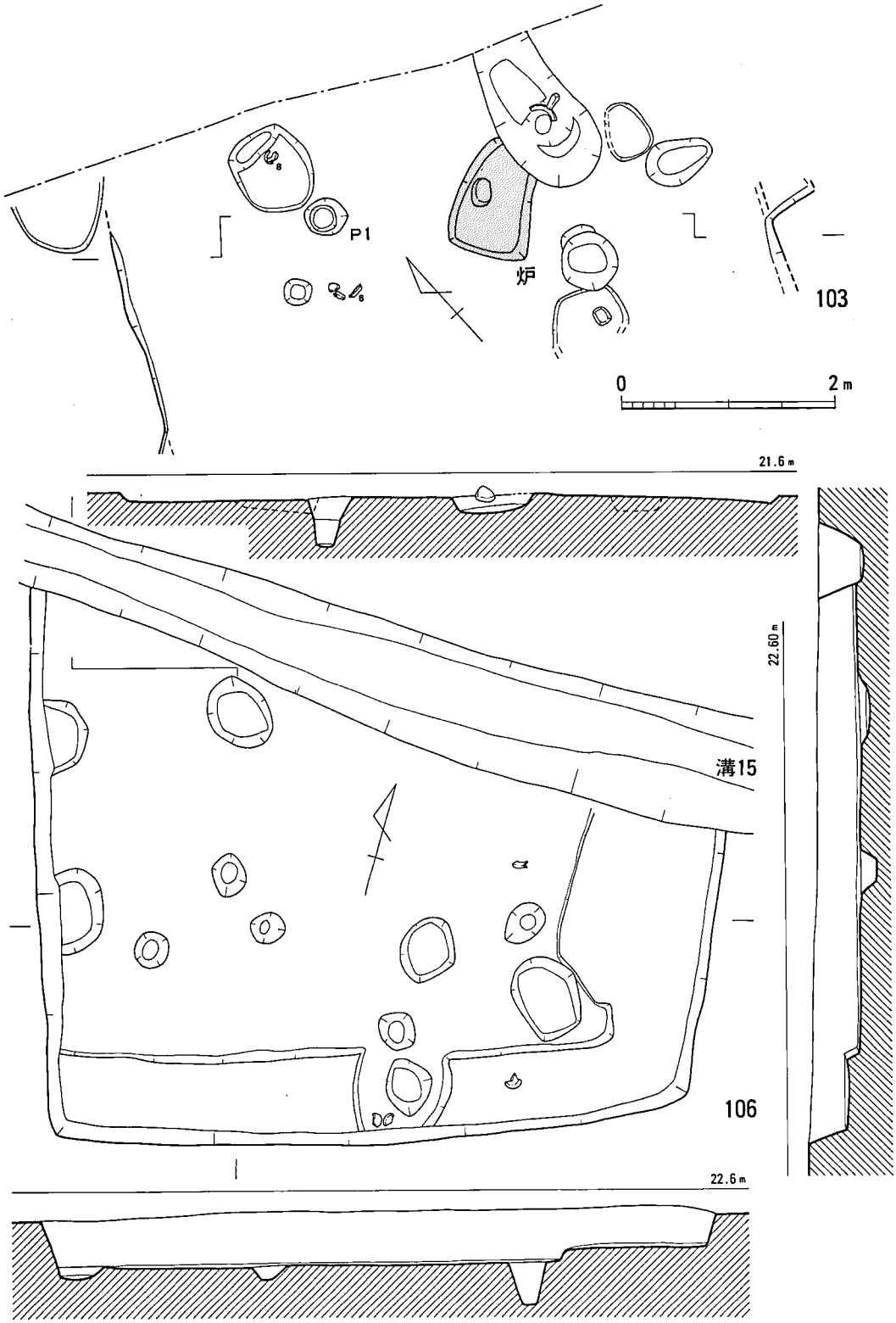
土器（第65図1～9）1～6は甕。1は逆「L」字状口縁部で上部が凹み、内側にやや張りだす。胴部がそのまますぼまる器形で底部を欠く。口径23.6cmと小さく、9とは器形、口縁部の形態が類似するが深みがあるので甕とした。二次的に加熱を受けている。2は口縁部直下に「M」字状の突帯文を持つ丹塗土器。口唇部には浅い刻み目状の工具痕がある。3～6は「く」の字状口縁部で胴部が張る器形の甕で6は床面より出土。3は口唇部内側が内側にやや張りだす。7は高坏で、口縁部形態は甕の1と類似するが、より平坦に近い。口縁部直下まで丹塗り。口径24cm。8・9は鉢。8は小型の完形品でやや内弯し丸く収めた口唇部から丸みのある胴部、上げ底の底部を有す。胴部上半はハケ目、底部付近はミガキを施す。口径は16.5cm、器高9.1cm、底径5.6cmを測る。P2出土。9は復原口径34cmの大形品で底部を欠損する。胴部上半から底部付近までハケ目調整。6・8以外は埋土内出土。中期末の時期であろう。

106号竪穴住居跡（図版30　第66図）

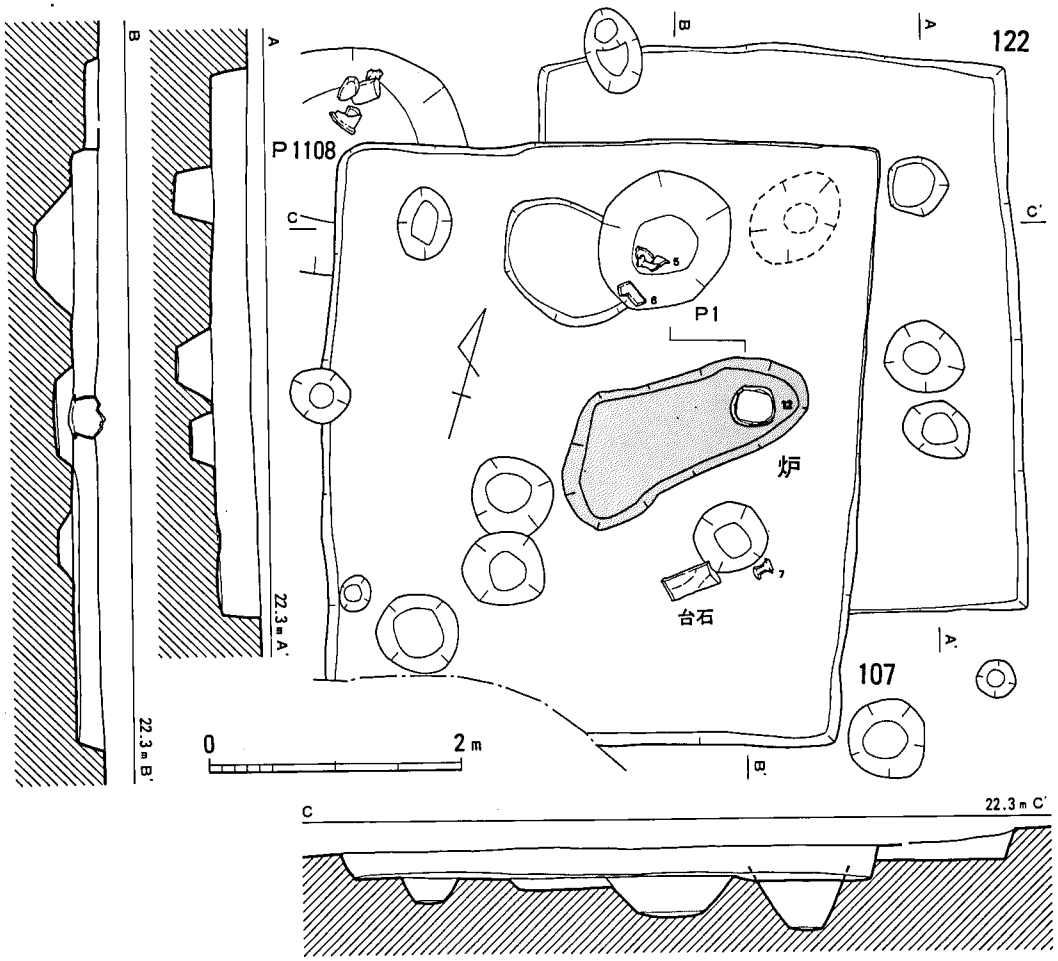
106号竪穴住居跡はT9区に位置し、現代の用水路や古墳時代の15号溝に大きく切られるが、弥生時代の5号円形周溝状遺構や29号土坑は切るという先後関係を有する。したがって、本住居北側1/3は遺存しないため全体的な規模を把握することはできないが、東西方向については6.5mを測ることができる。南北方向についても5.2mまでは測ることができるため、またベッド状遺構の位置関係などから、おそらくは南北方向に長い長方形プランであったと考えられる。炉跡や主柱穴は確認できず、また貼り床的な床面構造も検出できなかったため竪穴住居跡という遺構の性格に疑問を持った。しかし、全体的な平面プランや、南壁に幅70cmと東壁に幅140cm程度のベッド状遺構が付設されていることから、やはり竪穴住居跡が妥当な見解ではないかという認識に至った。ベッド状遺構については地山の削り出しによって作出されたもので高さ10cm程度と低く、南壁では中央部が90cm幅で切れ、そこにピットが掘られる。壁高が最大で52cmとかなり深い。埋土は暗褐色砂質土で、遺物はパンケース1箱弱と少なかった。床面からは甕の口縁部や高坏の脚部が出土しており個別に原位置をチェックして取り上げたが、その後の整理作業中に不注意のため紛失しており、発見された場合は平成10年度の古墳時代編に掲載したい。なお、図示した遺物は第68図1・2の土器と第166図10の石庖丁の3点だけである。

土器（第68図1・2）1は甕の口縁部で床面からの出土。摩滅により器面調整不明。2は埋土から出土した器台の裾部で、端部は凹線文がめぐり、外面には丹と縦方向の暗文状のミガキが施される。

石器（第167図10）埋土から出土した粘板岩製の石庖丁の破片で、端部には欠損後の研ぎ直



第66図　103・106号竪穴住居跡実測図（1/60）

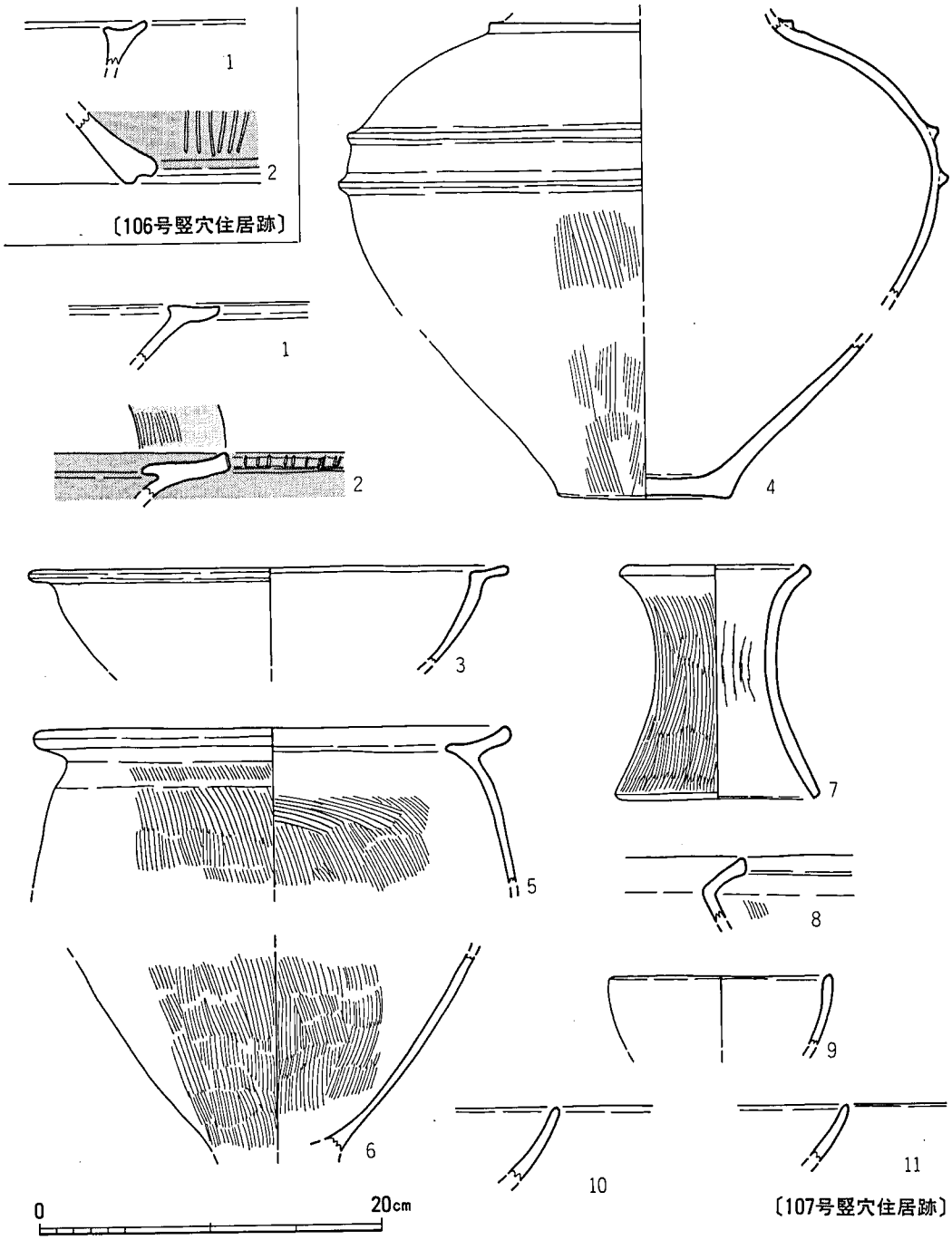


第67図　107・122号竪穴住居跡実測図（1/60）

しの痕跡が窺える。

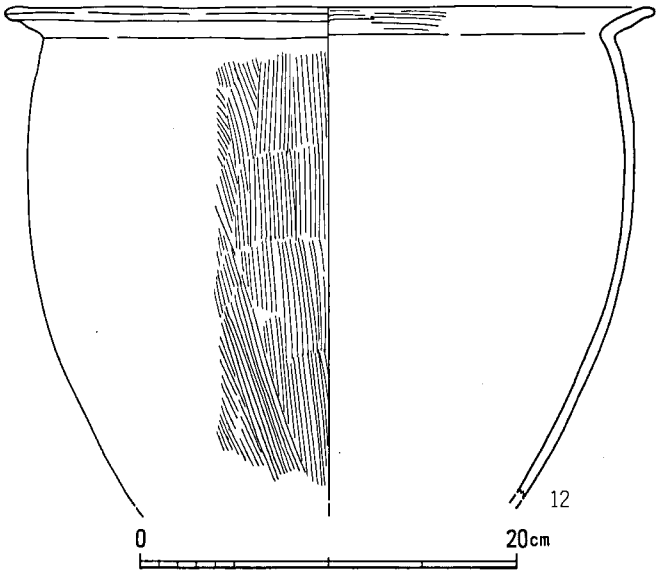
107号竪穴住居跡（図版30　第67図）

107号竪穴住居跡はＱ８区に位置し、現代の用水路に一部切られ、弥生時代の122号竪穴住居跡やP1108を大きく切る。古墳時代の121号竪穴住居跡ともかなり近接するが、切り合い関係にはない。平面プランは4.8×4.3ｍのほぼ正方形に近い長方形を呈し、壁高は最高で19㎝を測る。床面においていくつかのピットを検出したが、そのサイズや深さや位置関係から、いずれが本住居の主柱穴に相当するのか判然としない。少なくとも、整然とした２本柱や４本柱ではなかったようである。本住居の中央部より東方向に細長く延びる212×87×18㎝の浅い土坑状遺構が見られるが、埋土に焼土が比較的多く含まれることから炉跡と考えられる。他の住居の

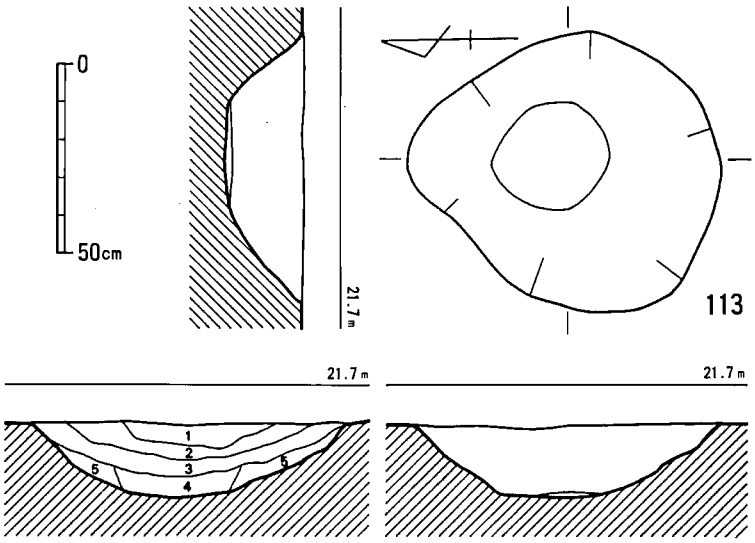


第68図　106・107号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

炉跡とは異なるが、位置的な特徴や焼土の存在から、炉を廃絶する際に掘り広げたものとも考えられる。なお、この炉跡の埋土に接するように第69図に図示した底部付近のみ欠損する甕が、倒立して据えられていた。甕自体は二次加熱を受けて赤褐色に変色しているが、炉の埋土直上にあることや、炉自体は使用の明確な痕跡が窺えないことから、炉とこの甕との関係については不明である。なお、底部の欠損は住居使用時のものではなく、後世の削平によって本住居跡自体が削平された時のものである。遺物はパンケース1箱分が出土したが、図示した土器のうち床面からは第68図7、P1からは2・5・6・8が出土した。また、床面からは重量17kgの作業台石も出土した。第165図77の投弾状土製品は埋土からの出土。



第69図　107号竪穴住居炉跡出土土器実測図（1/4）



第70図　113号竪穴住居炉跡実測図（1/20）

土器（第68図1～11第69図）1は壺もしくは高坏の口縁部である。摩滅により調整不明。2は丹塗の壺の口縁部で、端部は刻まれ上面にはハケ目が窺える。3は復原口径28cmの高坏坏部。4は壺の胴部と底部で、最大腹径は36cm。頸部に1条の、胴部に2条の突帯文が貼り付けられ、外面にはハケ

目が施されるが丹塗ではない。5・6は同一個体で、復原口径28cmの甕。内外面ともにハケ目が施され、内側へ突出する「く」字状口縁が特徴的。7は復原口径11cmの器台で、外面にはハケ目が、内面にはナデとシボリ痕が観察され、裾部は二次加熱によって赤褐色に変色する。9～11はボウル状鉢の口縁部で、いずれも器面調整はナデ。第69図は炉跡上に倒立していた復原口径35cmの底部のみが欠損する甕で、外面胴部と、内面口縁部にハケが施される。二次加熱により外面は大きく赤褐色に変色する。

石器（第170図1）40.1×19.2×7.1cmのほぼ長方形に近い緑色片岩製の作業台石。かなりの重さのため、容易に持ち運ぶことはできそうにない。全体的に均等に使用されたのではなく、随所に集中的に使用された痕跡が見られるが、その目は粗く、木の実の粉砕や石器の粗い研磨に使用されたものと考えられる。

土製品（第165図77）小型で完形の投弾形土製品。両端部とも丸く収め、指頭による整形痕がわずかに残る。茶から黒褐色を呈し、長4.1cm、径2.2cm、重さ16.8gを測る。

113号竪穴住居跡（図版31　第48・70図）

113号竪穴住居跡はM8区に位置し、南壁の一部を83号竪穴住居跡に切られる。また、弥生時代の115号竪穴住居跡とは北西1mに、古墳時代の112号竪穴住居跡とは北東1mに近接するが切り合い関係はない。83号住居跡に切られている部分は掘削が深く、その部分の113号住居跡は残らない。平面プランは3.7×3.5mのほぼ正方形を呈し、壁高は最高で24cmを測る。床面においていくつかのピットを検出したが、そのサイズや深さや位置関係から、2本柱あるいは4本柱のどちらの柱構造も想定される。2本柱の場合は炉跡を中心に対向して近接する、径約50cm、深さ約20cmの2つの柱である。4本柱の場合は4隅にある径約60～70cm、深さ約30～40cmの4つの柱である。もっとも、南西隅の柱については、第98図の壺が埋設されていたため22号甕棺墓として本書では別に報告しているが、4本柱の一つとしてもよさそうである。本住居中央部で検出された炉跡は第70図に図示したように、81×71×17cmの円形プランで、第1層は住居埋土と同じ褐色砂質土、第2層は炭化物を少量含む茶褐色砂質土、第3層は炭化物の純層、第4層は炭化物を少量含む暗灰色砂質土、第5層は地山が崩れた灰色砂質土である。埋土などの堆積状況から、中央部のみ最低1回は掘り返した可能性が窺える。住居埋土は褐色砂質土。大きめのポリ袋1枚程度の遺物の多くはこの埋土からの出土で、炉跡に接する南側のピット上部からは第73図6の高坏脚部が出土した。

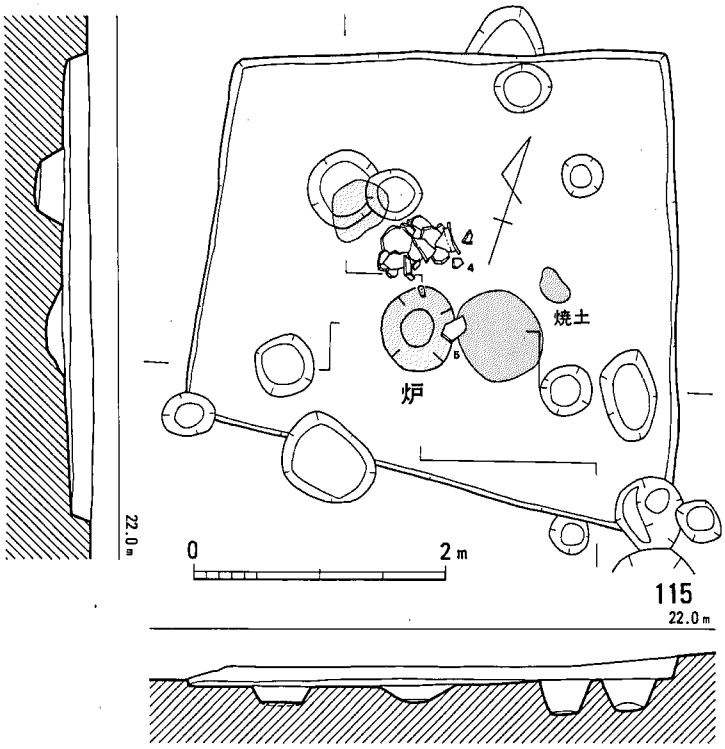
土器（第73図1～6）1～5は埋土からの出土で、いずれも摩滅が著しく器面調整がわかるのは4の甕外面のハケ目のみ。1の甕は復原口径33cm。5は甕の口縁部で、端部に刻み目が施される。6は裾径18.8cmの高坏脚部で、外面のみ丹塗である。器面調整は外面全体と、内面の裾部のみハケが施され、内面の坏部に近いところでは、ナデられてはいるもののシボリ痕が残

る。

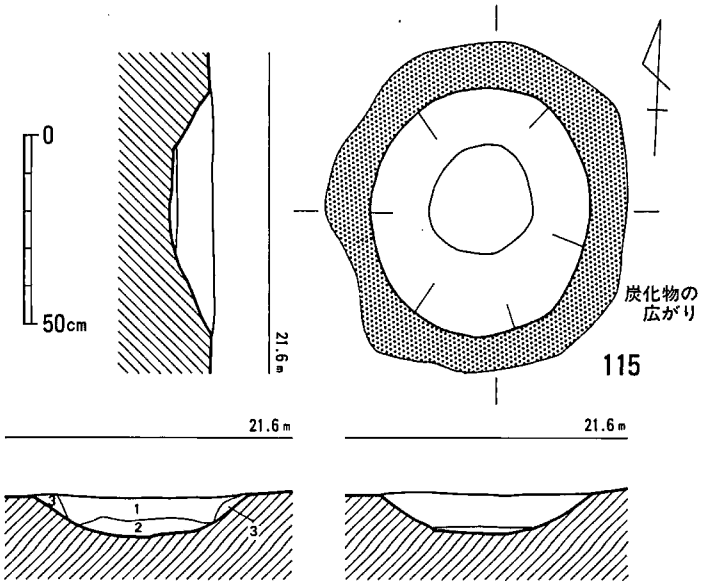
115号竪穴住居跡

(図版33　第71・72図)

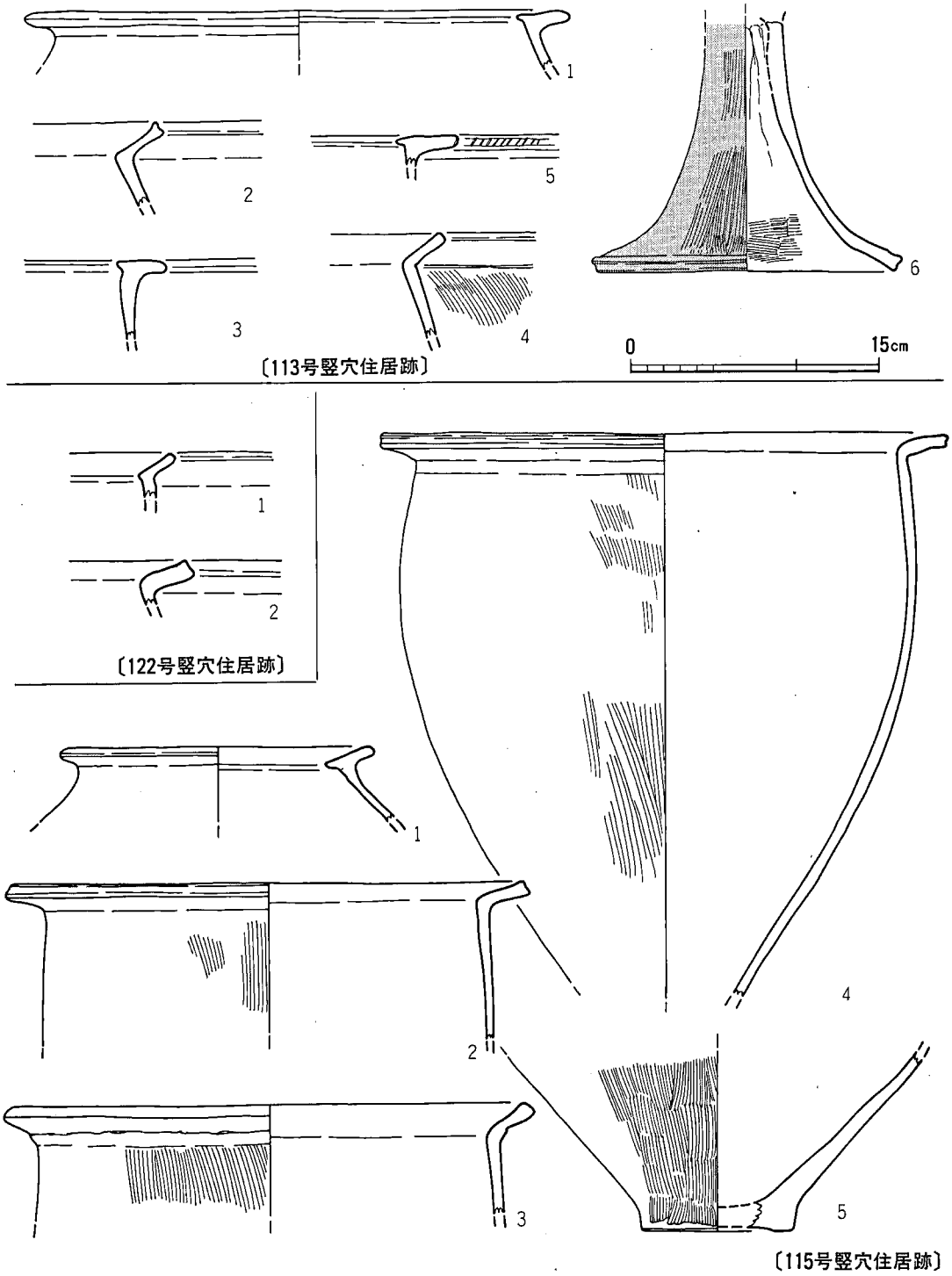
115号竪穴住居跡はM9区に位置し、弥生時代の92号竪穴住居跡とは西1mに、同じく弥生時代の113号竪穴住居跡とは南東1mに近接するが、他の遺構とは切り合い関係にない。平面プランは3.9×3.5mのややいびつで正方形に近い方形を呈し、壁高は最高で23cmを測る。床面においていくつかのピットを検出したが、そのサイズや深さや歪んだ平面プランに対応した位置関係から、4本柱の柱構造が想定される。柱の径は約35～60cmとややバラツキがあるが、深さは約20～30cmの範囲におよそ纏まる。本住居中央部のやや南寄りで検出された炉跡は第72図に図示したように、65×57×10cmの円形プランで、第1層は炭化物を多量に含む黒褐色砂質土で、この炭化物は炉跡を中心に炉跡を覆うように90×80cmの範囲でごく薄く広がる。第2層



第71図　115号竪穴住居跡実測図（1/60）



第72図　115号竪穴住居炉跡実測図（1/20）



第73図　113・115・122号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

は炭化物を少量含む黒褐色砂質土、第３層は炭化物を少量含む灰褐色砂質土である。この炉跡の埋土には焼土がほとんど含まれず、また炉跡面が特に明瞭に焼けた痕跡も窺えないが、そのかわりに本住居の床面において、径30～70cmの広がりで３カ所の焼土の集中が検出された。炉跡との関係については今一つ不明瞭であるが、あるいは炉跡の焼土を掻き出した可能性も否定できない。なお、本住居の床面からは全体的に薄く炭化物の広がりが検出されたが、炭化材などは特に確認されておらず、住居の焼失による炭化物の広がりかどうかは判然としない。遺物の出土はパンケース１箱弱と少ないが、第73図４・５は床面からの出土である。特に４については、炉跡の横からほぼ定形に復原できる状態で出土した。また、埋土からは第166図12の石庖丁や、第169図７の磨石が出土した。

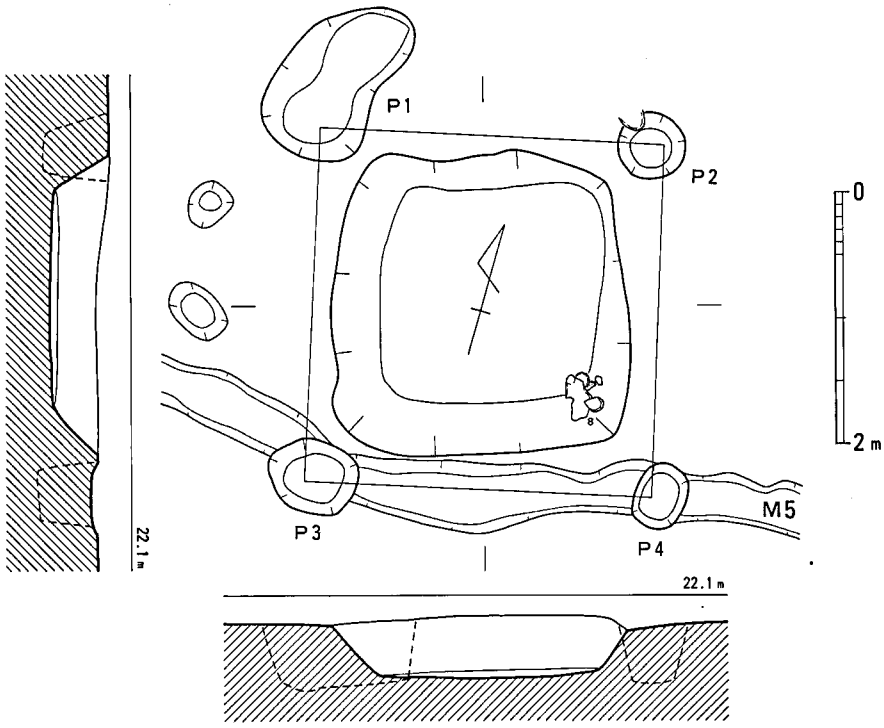
土器（第73図１～５）１は復原口径19cmの甕口縁部で、内外面ともに器面調整はナデ。２は復原口径31cm、３は復原口径32cmの甕で、器面調整は外面がハケ、内面がナデ。４は底部付近がわずかに欠損するだけの口径34.3cmの甕で、外面にはハケ、内面にはナデが施される。二次加熱により外面は全体的に赤褐色に変色する。また炭化物の付着が内外面に窺える。５は炉跡上面から出土した壺の底部で、復原底径は９cm。外面のハケ目は明瞭に残る。内面の器面調整にはナデが施される。

石器（第166図12　第169図７）12は輝緑凝灰岩製の石庖丁の破片で穿孔が１つだけ見られる。刀部は細かく剝離しており、よく使用されている。第169図７は自然石を利用した磨石で、使用痕は２面だけで敲打の痕跡はない。

122号竪穴住居跡（第67図）

122号竪穴住居跡はＱ９区に位置し、弥生時代の107号竪穴住居跡や古墳時代の68・121号竪穴住居跡に大きく切られ、全体の１/３程度しか遺存しない。特に、107号住居による削平は深く広く行なわれているため、西壁や南壁の大部分は失われ、炉跡の痕跡もまったく窺えない。それでも遺存の状況が幸運にも「L」字状になっているため、4.4×3.7ｍの正方形に近い平面プランであることがかろうじてわかる。壁高は最高で31cmを測る。本住居の床面や107号住居の貼り床を除去した時点でいくつかのピットを検出したが、そのサイズや深さや位置関係から、どのような柱構造であったのか推定することは難しい。埋土は黒褐色砂質土で遺物の多くはこれに含まれるが、それでもポリ袋１枚程度と極めて少ない。図示できる土器は床面のピットから出土した甕の口縁部２点だけで、それも復原口径を推定することも難しい小片ばかりである。

土器（第73図１・2）１・２とも床面において検出されたピットから出土した甕の口縁部で、復原口径が推定できないほどの小片である。また、いずれも摩滅により器面調整も不明。ただ、１については比較的小型の土器と推定される。２の口縁部端面は凹線状に窪むのが特徴的である。



第74図　方形竪穴状遺構実測図（1/60）

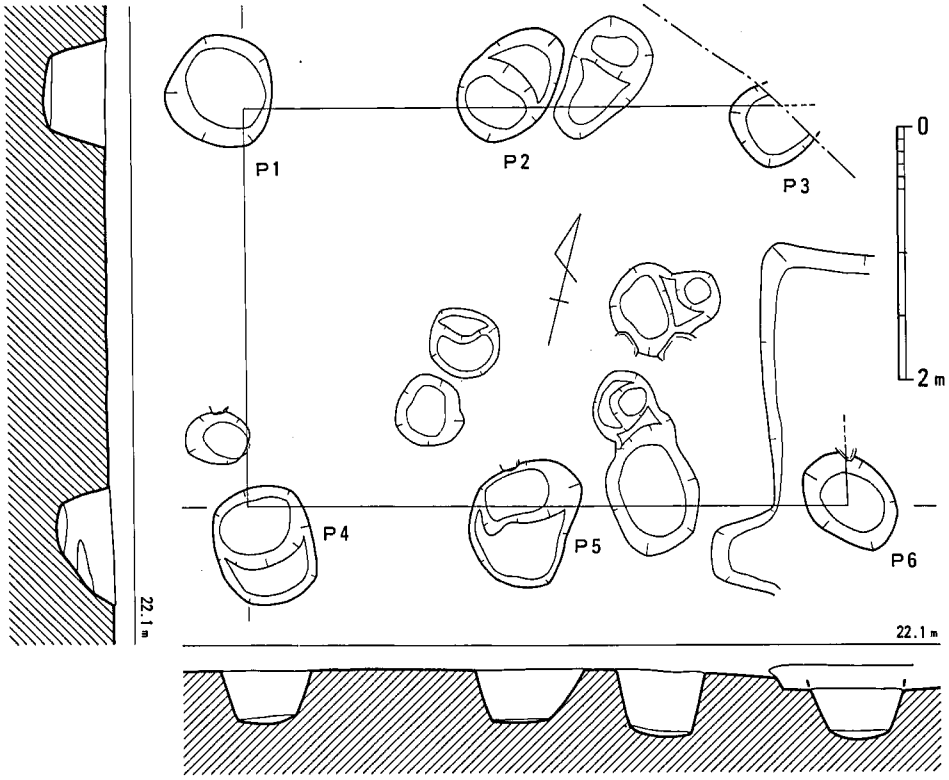
3．掘立柱建物跡

弥生時代の掘立柱建物跡は2棟検出され、2号掘立柱建物跡および3号掘立柱建物跡として調査時点では遺構番号を付した。しかし、2号については方形竪穴状遺構を取り込んでいることから、この点を重視して2号掘立柱建物跡を方形竪穴状遺構として取り扱った。

方形竪穴状遺構（旧2号掘立柱建物跡　図版34　第74図）

H4区に所在し、5号溝に切られる。桁行1間（2.9m）、梁行1間（2.8m）の東西棟の建物跡である。柱掘りかたは円形を呈し、径0.3～0.6m、深さ0.5mを測るが、柱痕は確認し得ていない。桁行方位はN-79°-Eを示す。また、柱掘りかたの中には方形竪穴が存在するが、それと切り合うことなく納まっていることから建物の付属施設と考えられる。方形竪穴は一辺2.3mの隅丸方形を呈し、深さは0.5mを測り、底面は平坦である。埋土は黒褐色土であり、柱掘りかた及び方形竪穴埋土中から土器が出土している。

土器（第76図1～11）1～9は甕で、1・3～7が口縁部、2・8・9は底部の破片である。3



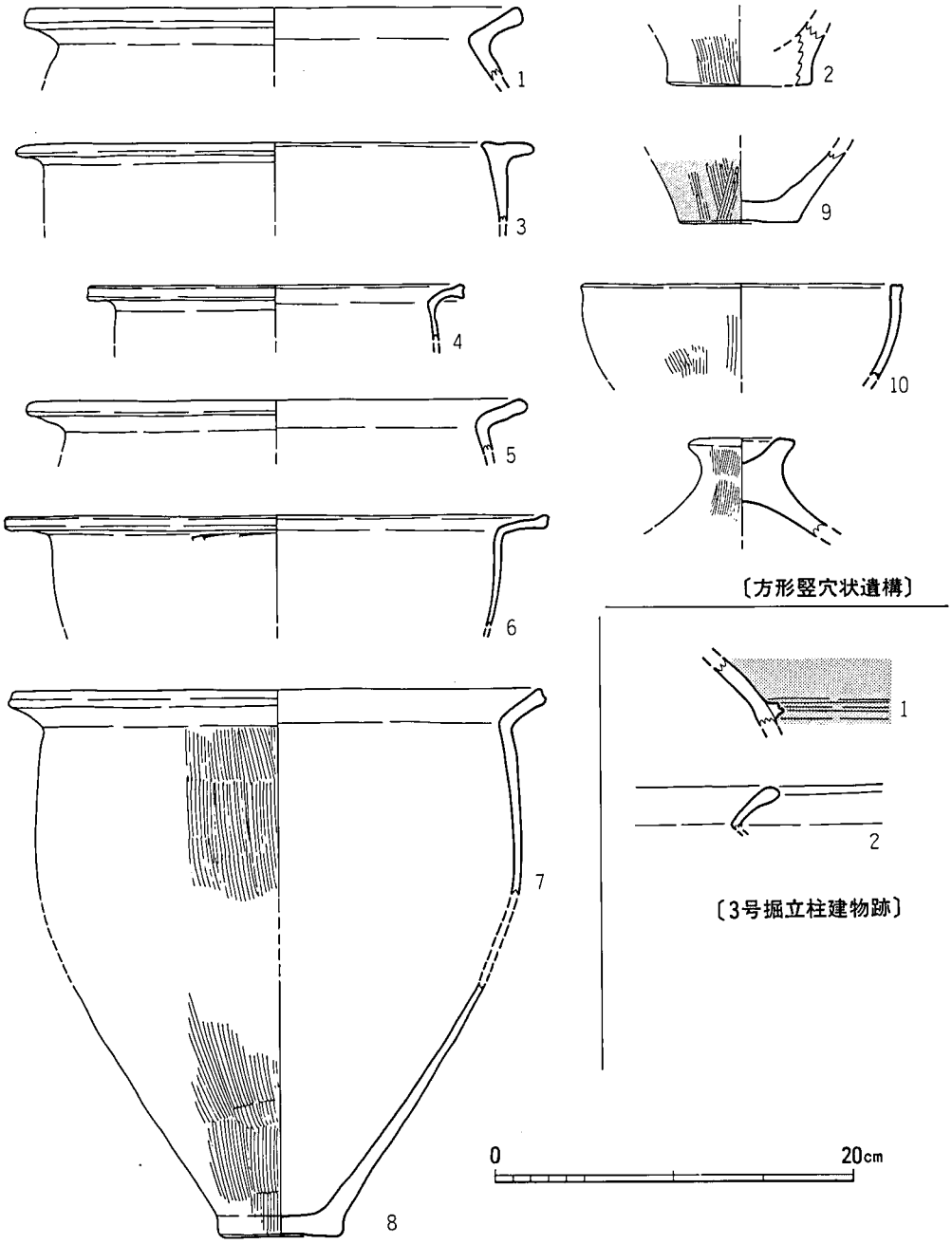
第75図　3号掘立柱建物跡実測図（1/60）

は逆「L」字形口縁で、口径は29cmに復原した。1・4・5・7は「く」字形口縁で、1・5の口唇部は丸く納めているが、4・7は口唇部が若干窪む。6は口縁部が水平に開き、口縁端部を上方に跳ね上げている。口径は4が21cm、7は30cmに復原した。8・9は平底で、8は7と同一個体。器面調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ナデによる。10は鉢の口縁部破片で、復原口径18cmを測る。口縁部を強くヨコナデし、上面がやや窪む。11は体部の開き具合からして蓋になろう。摘み部は内窪みで、摘み部径5.9cmを測る。1・2は柱掘りかたP1の出土で、他は方形竪穴の出土である。

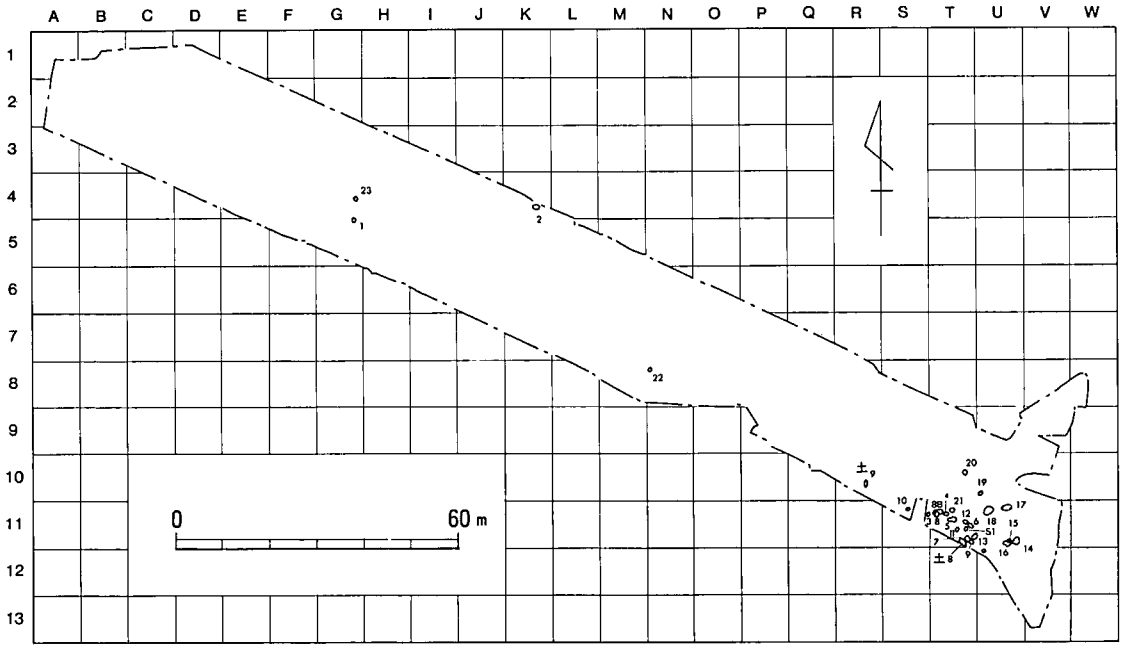
3号掘立柱建物跡（図版34　第75図）

I-J 4区に所在し、古墳時代の36号竪穴住居跡に切られる。桁行2間（4.75m）、梁行1間（3.5m）の東西棟の建物跡である。柱掘りかたは円形を呈し、径65～88cm、深さ50cm前後を測る。テラスを有する柱掘りかたがあることから柱は抜き取られたものと推測される。桁行方位はN-77°-Eを示す。柱掘りかたから土器が出土している。

土器（第76図1・2）1は壺の胴部破片で、「M」字形突帯文を貼付する。外面には丹を塗布している。2は「く」字形口縁甕の小破片で、口唇部は肥厚する。



第76図　方形竪穴状遺構および3号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）



第77図　土壙墓・甕棺墓配置図（1/1,600）

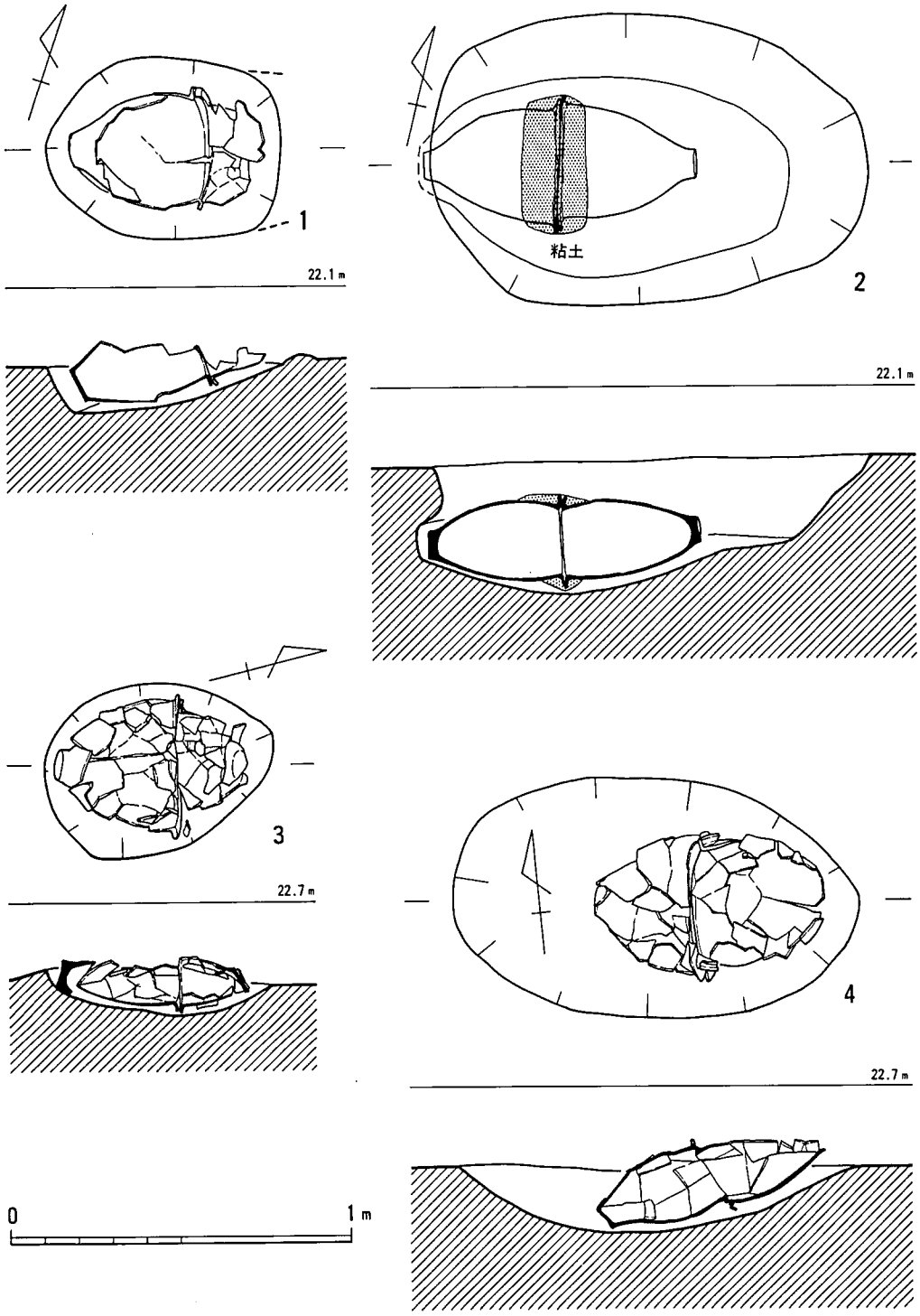
4．甕棺墓

弥生時代の墓地群は甕棺墓24基、土壙墓２基、石棺墓１基より構成される。そのうち１・23号甕棺墓は調査区の西側に並んで、２号甕棺墓は調査区中央北側に単独で、22号甕棺墓は中央部南側に単独で、９号土壙墓は東側に単独で検出された。S10区東側に纏まる３～21号甕棺墓・８号土壙墓・１号石棺墓の20基は一つのグループを構成するが、北側に位置する14号から20号甕棺墓（小児用甕棺墓２基、成人用甕棺墓５基）は間隔を持って直線的に配置され、扇状に集中するその他の南側の一群（小児用甕棺墓５基、成人用甕棺墓８基、土壙墓１基、石棺墓１基の計15基）とは８ｍ以上の空白地を有すことから南北２つのグループに分離される（第77図）。

甕棺墓の内訳は小児用甕棺９基、成人用甕棺15基である。小児用甕棺のうち11・19号が単棺で、成人用甕棺では６・21号が石蓋の単棺、５号は木蓋の痕跡が認められほか17・22号が単棺である。人骨の遺存度は悪く、５・21号甕棺にわずかに残るのみであり、また、副葬品を持たない。

甕棺墓とそれ以外の遺構との新旧関係は次のとおりである（古→新）。

35住→１甕　１円→14・15・16甕　17甕→３円　４円→19甕　21甕→土41



第78図　1～4号甕棺墓実測図（1/20）

1号甕棺墓（図版35　第78図）

調査区西側G5区の35号竪穴住居跡埋土中に検出された小児用甕棺墓で、10m北側に成人用の23号甕棺墓がある。長円形の掘りかたは削平され、上甕の胴部以下は遺存しない。甕と甕の接口式だが粘土の目張りはない。主軸方位はN-68°-E、埋置角度は－17°を測る。

上甕（第79図）胴部下半部は削平のため欠損する。胴部にやや丸みを持つ逆「L」字状口縁の甕で、口唇部は肥厚する。内側の稜線ははっきりしない。外面は縦方向の4段のハケ目を施すが、頸部はナデ消し、内面はナデ。色調は淡橙色を呈し、復原口径33cm。

下甕（第79図）低い「く」字状口縁部に、長めの胴部と厚さ1.3cmと器壁の薄い底部を持つ甕。口唇端部は舌状に丸くなり、内側の稜線は上甕に比べやや明瞭である。外面は頸部以下ハケ目調整で、底部付近は二次的な加熱を受ける。内面はナデ。色調は淡橙色を呈し、復原口径32.5cm、器高36.1cm、底径9.2cmを測る。中期末の時期である。

2号甕棺墓（図版35　第78図）

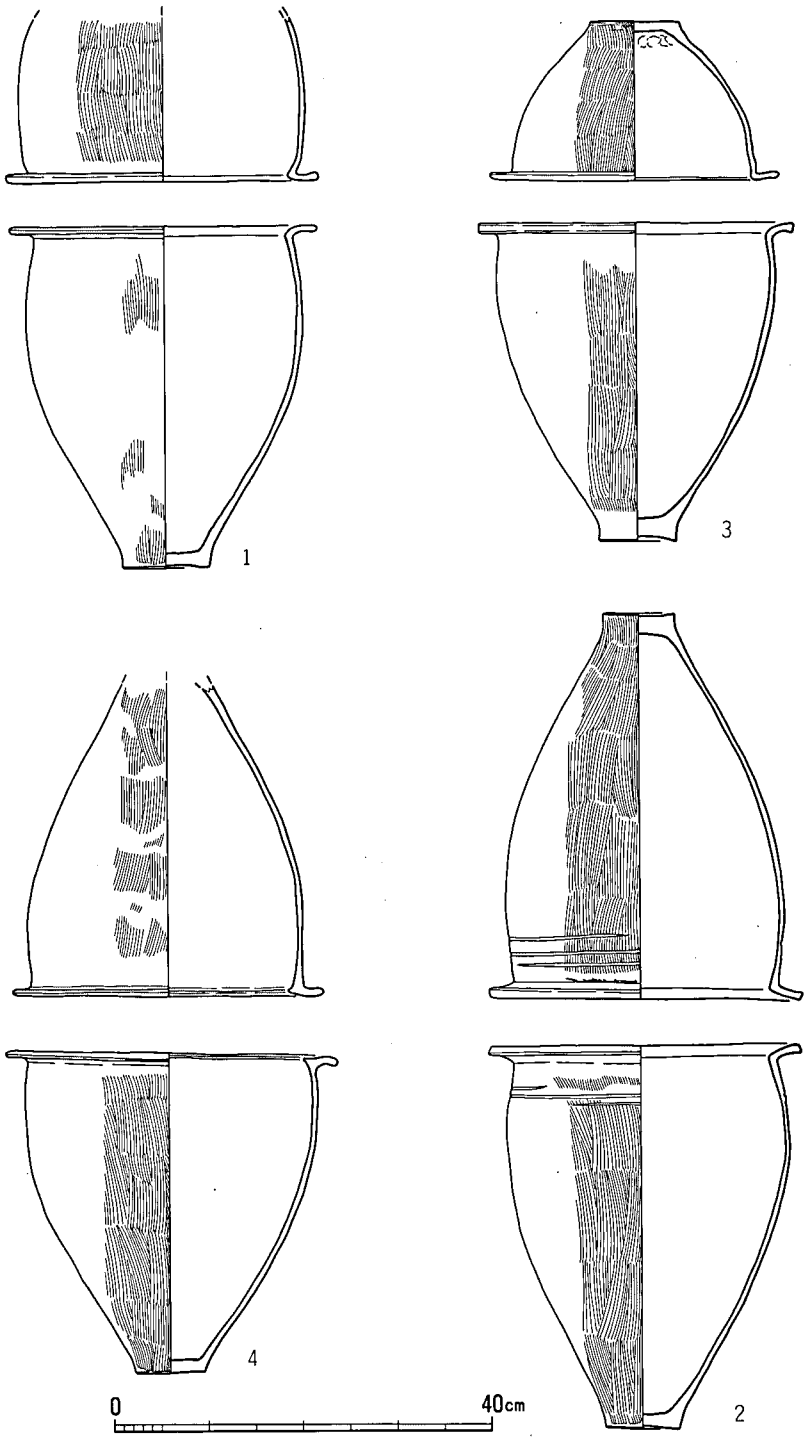
調査区の中央北側K4区に単独で埋葬された小児用甕棺墓。東西1.9m、南北0.85m、深さ38cmの長円形に掘込まれた墓壙は、東側に20cmほどのテラスを有し、下甕は上端より8cm掘込まれた横穴内に収める。甕棺は甕と甕の接口式で、テラスの西側にほぼ水平に埋置され、幅20cm、厚さ4cmの丁寧な粘土目張りを施す。主軸方位はN-77°-E、埋置角度は－3°を測る。

上甕（第79図）低い「く」字状口縁部は平坦に近く延び、口唇端部が直線状になる長胴の甕で、細く締まった底部を持つ。内頸部は1号甕棺の甕よりは稜がはっきりする。頸部下にはハケ目調整の上から幅2mmの螺旋状沈線文が3条巡る。外面頸部をナデ消すほかは全体にハケ目調整、内面はナデ。内外面の底部付近にはススが付着する。口径33.3cm、器高40.7cm、底径7.8cmを測る。

下甕（第79図）やや焼き歪んでいるが、底部の厚さが薄いことを除けば、大きさ・器形・螺旋状沈線の文様等、上甕とほとんど同形の甕である。ススの付着は見られないが、外面底部付近は二次的な加熱を受ける。法量は口径33.1cm、器高41.2cm、底径7.8cmを測る。なお、色調は両者とも淡橙色を呈す。中期末である。

3号甕棺墓（図版36　第78図）

南側の墓地群を構成する小児用甕棺墓で、グループのなかでも西側に位置し、8号甕棺と10号甕棺の中間S11区に検出された。不正円形の掘りかたは深さ13cmしか残らず甕の上部まで削平が及び、甕も破砕されている。甕棺は甕と甕の接口式で、ほぼ水平に埋置される。目張り粘土はない。主軸方位はN-15°-E、埋置角度は0°に近い。



第79図　1～4号甕棺実測図（1/8）

上甕（第79図）やや下にさがる逆「L」字状口縁の甕で、丸みを持って底部に移行する。器高が低いため、鉢に近い器形である。外面は頸部以下ハケ目調整の後にナデ、内面底部は指頭圧痕が残り、それ以外はナデ。色調は淡黄白色を呈す。口径30.6cm、器高16.6cm、底径9.5cmを測る。

下甕（第79図）屈曲度の強い「く」字状口縁部から、張りを持たない胴部にやや厚手で小さく締まる上げ底の底部に移行する甕。口縁部内面の稜線は、不明瞭である。外面の頸部以下にはハケ目調整を施し、底部付近はハケ目の後ナデ。内面はナデ。復原口径33cm、器高33.6cm、底径8.2cmを測る。中期後半の時期。

4号甕棺墓（図版36・37　第78図）

8号甕棺の東側に位置し、南側の墓地群を構成する小児用甕棺墓で、T11区に検出された。東西1.19m、南北0.7m、深さ18cmの長円形の墓壙上部は削平され、上甕の底部は遺存しない。甕と甕の接口式甕棺は墓壙の東側に寄って埋置されるが、目張り粘土は用いない。主軸方位はN-85°-Wで、埋置角度は－22°を測る。

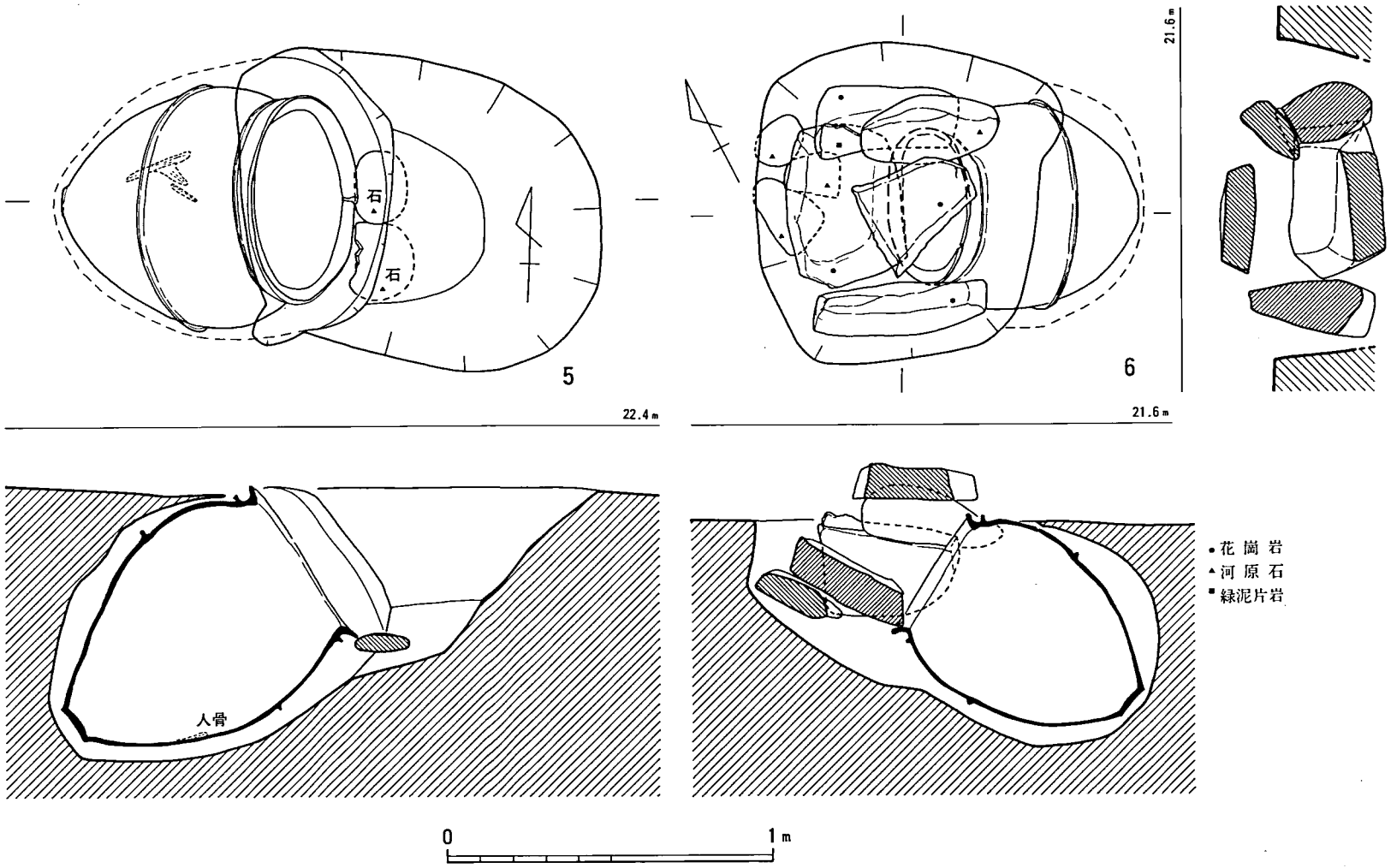
上甕（第79図）内面に突出する逆「L」字状口縁は、やや上がりぎみで、口唇部を丸く収める。胴部の張りはほとんどない器形で、底部は欠損する。外面はハケ目、内面はナデ。口径32.9cm、残存高33cmを測る。

下甕（第79図）口縁部上面がやや窪む逆L字状口縁の甕。胴部上半からすぼまり平底の底部となる。口縁部内側の突出は上甕に比べて細く突き出し、外端部は丸く収める。頸部のハケ目はナデ消されるが、それ以下は全面に残る。色調は淡黄白色を呈す。口径35.2cm、器高34.4cm、底径7.5cmを測る。中期後半の時期である。

5号甕棺墓（図版36～38　第80図）

4号甕棺墓の東南に位置する成人用甕棺墓で、T11区に検出され、南側の墓地群を構成する。甕全体を埋置する深さ83cmの横穴を掘り、東側にテラスを設ける。そのテラスから幅11cmの掘りかたが甕の口縁部に沿って認められるで、木蓋の単棺であることが判る。木蓋の下端テラス上には厚さ6cm、径22～25cmの河原石が2個置かれ、木蓋のずり止めとなる。棺内には大腿骨と思われる骨が風化した状態で残る。主軸方位はN-84°-W、埋置角度は－36°を測る。

甕棺（第81図）短く直線状の「く」字状口縁を有し、頸部やや下位から強い丸みを持つ胴部の最大径は上半にあり、徐々にすぼまりながら上げ底の底部になる。内頸部の稜線はシャープである。頸部直下に1条のだれた突帯文、胴部やや上位には細身で「コ」字に近い突帯文がやはり1条あり、甕の断面に対して直角に付けられる。外面の突帯文部分のナデ調整を除いてハケ目調整、内面は口縁部から頸部にかけては横方向のハケ目、それ以下は斜め方向のハケ目調



第80図　5・6号甕棺墓実測図（1/20）

整を施す。口径62.8cm、器高89cm、底径11.4cm、胴部の突帯文部径は77.1cmを測る。後期前半のKIV a期。

6号甕棺墓（図版36・38・39　第80図）

南側墓地群の中央北側に位置し、12号甕棺の東側掘りかたを切り、南側は1号石棺に接する。T11区に検出された石蓋の単棺墓である。5号甕棺と同様に甕全体を埋置する深さ69cmの横穴を掘り、甕を覆う石材の掘りかたは直に20cm掘り下げてから斜めに掘り進む。石蓋を構成する石材は甕の口縁部両側に長さ44～56cm、厚さ18～32cmの花崗岩を立てかけ、甕の前面には長さ55cm、幅35cm、厚さ13cmの扁平な緑泥片岩を敷く。その下には径20cm、厚さ10cmほどの小さな3個の河原石が置かれ、上部横には長さ44cm、厚さ20cmのやはり河原石を添え、その上部を厚さ10cmの台形状の花崗岩で蓋をする。従って甕の蓋は段状に積まれた石で塞がれる特殊な形態を持つことになる。主軸方位はN-62°-W、埋置角度は－34°を測る。

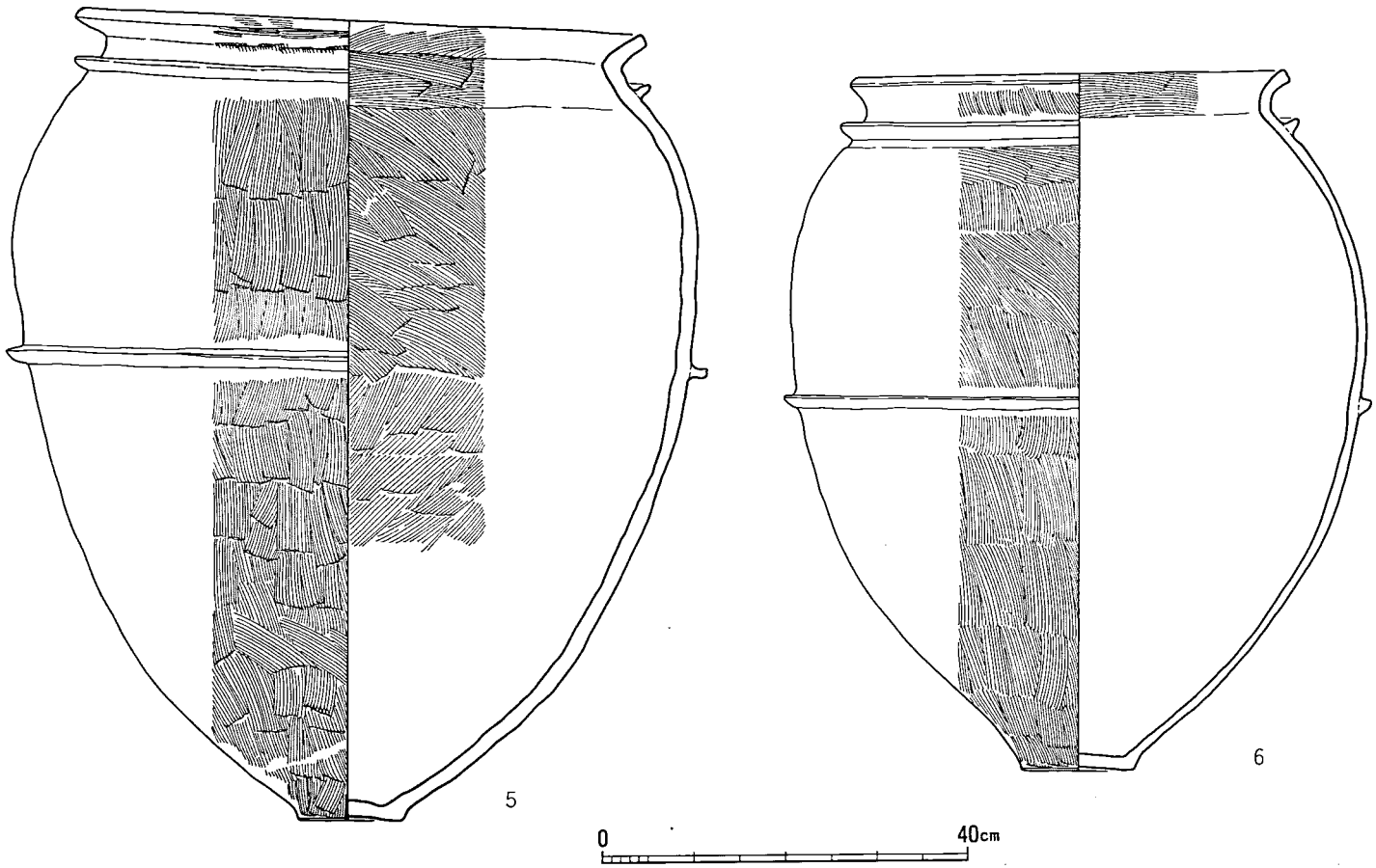
甕棺（第81図）高く、屈曲して立ち上がる「く」字状口縁から丸みのある卵形の胴部を持つが、内頸部の稜線は明瞭ではない。最大径は胴部のやや上位にあり、厚さ1.4cmと華奢な底部を有す。口縁部端部はナデ窪むところが多い。頸部のすぐ下にだれた三角突帯文1条、胴部中位にも1条の「コ」字状突帯文を有す。この胴部突帯文の接合面に沿って線状の沈線が巡り、内側は盛り上がる。外面は突帯文を除いて縦ないし斜め方向のハケ目、内面は口縁部のみに横方向のハケ目調整を施す。色調は淡橙黄色を呈す。口径48.2cm、器高77cm、底径12.2cm、突帯文部径64.4cmを測る。後期前半のKIV a期。

7号甕棺墓（図版40　第82図）

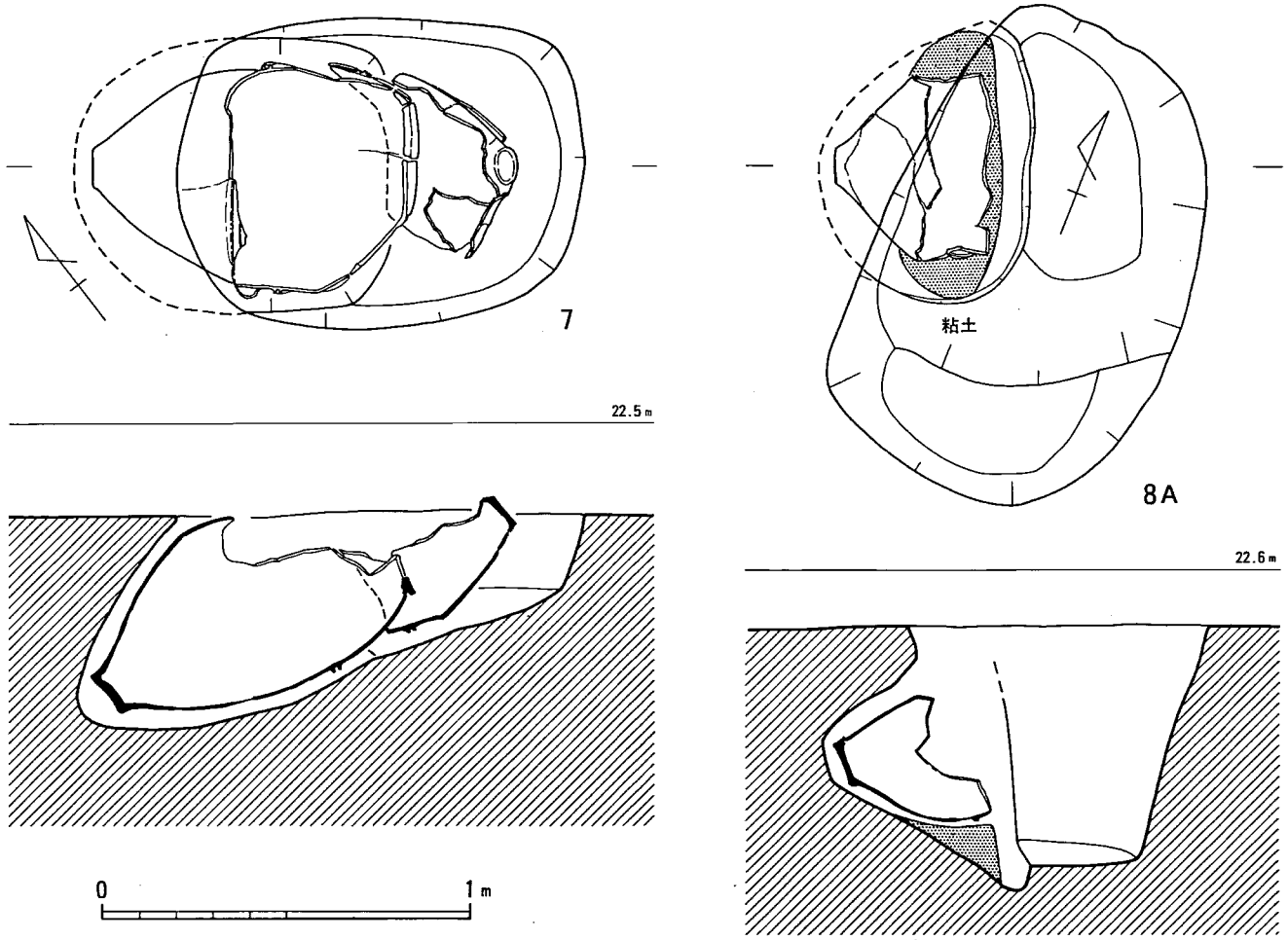
南側墓地群中では東側、8号土坑墓の北側T11区に位置し、9号甕棺墓の墓壙を切る成人棺。墓壙は長さ1.1m、幅85cmの隅丸長方形で、下甕を挿入する横穴を穿ち、上甕を埋置する付近に軽い段を有す。胴部以上を打ち欠く上甕が下甕の下位にあるが本来は接口式で、粘土の目張りはない。主軸方位はN-52°-Eで、隣接する8号土坑墓・9号甕棺墓とほぼ同じ方向を持ち、埋置角度は－31°を測る。

上甕（第83図）胴部上半を打ち欠き、あまり胴部の丸みがない甕。器壁6mmと非常に薄作りの胴部には、2条の三角突帯文を持ち、1cmと薄い底部はやや上げ底。外面は縦方向のハケ目、内面もハケ目調整が胴部に残るが、外面と比べて粗い。色調は淡橙褐色を呈す。残存高47cm、底径10.8cm、突帯文部径56cmを測る。

下甕（第84図）口縁部が内側に突出する逆「L」字状口縁を有し、丸みはあるが、長胴の器形の甕で平底。平坦に近い口縁上部はわずかに内側近くが窪み、端部は凹線状になる。最大径は胴部上半にあり、その下に尖りぎみの三角突帯文を2条持つ。外面は頸部以下ハケ目、内面



第81図　5・6号甕棺実測図（1/8）

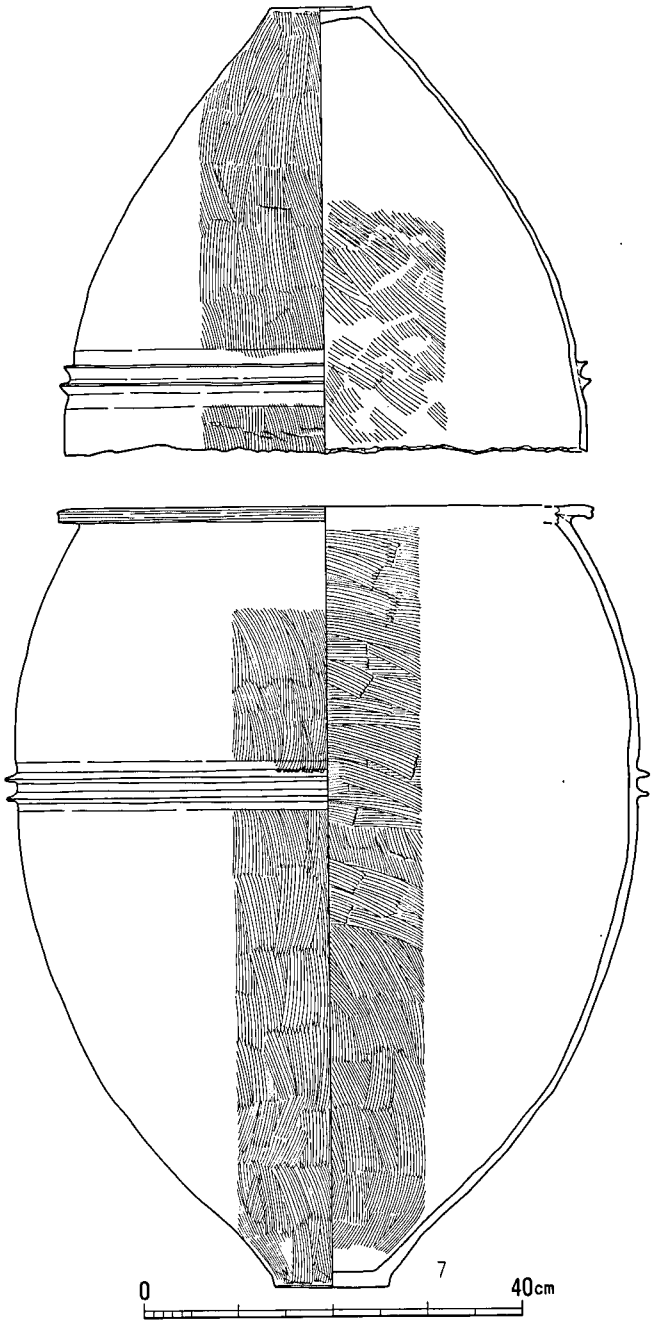


第28図　7・8A号甕棺墓実測図（1/20）

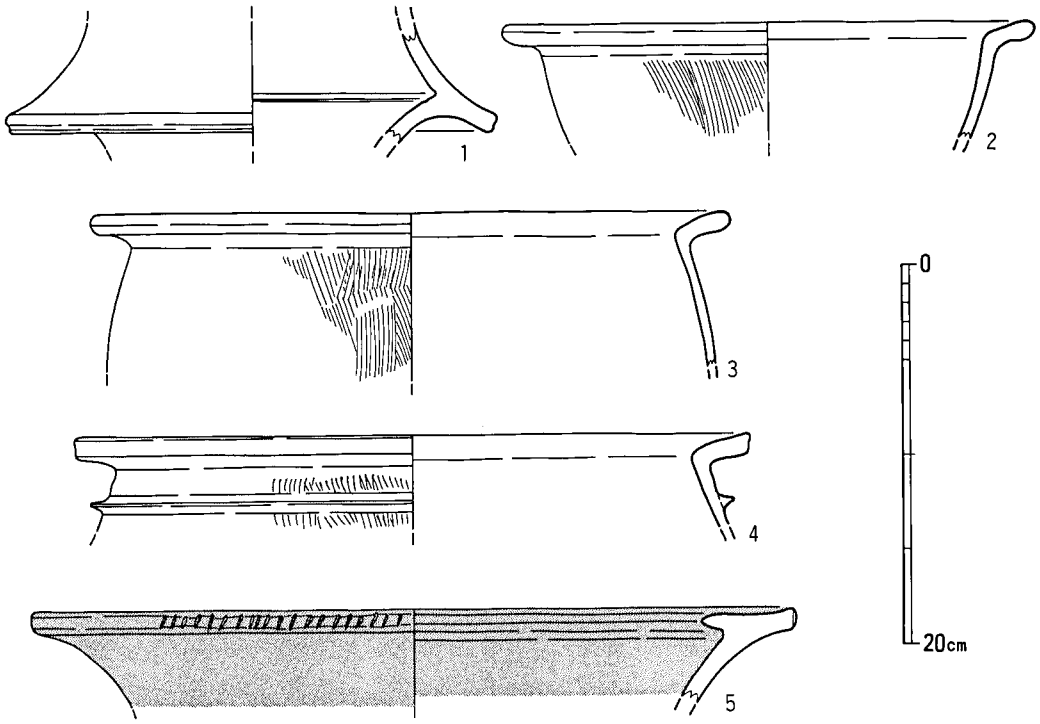
は口縁部を除いた全面にハケ目調整を施す。色調は淡橙黄色を呈す。器壁10・mm前後と薄く、口径56.5cm、器高82.8cm、底径12cm、突帯文部径58cmを測る。中期末の時期であろう。

8A号甕棺墓（図版40・41 第82図）

南側墓地群では西側のT11区に位置し、8B甕棺墓を切る木蓋単甕の成人棺。長さ1.3m、幅85cmの隅丸長方形の墓壙は、南側にテラスを有し、30cmほど掘り下げた下底面の長軸に沿う幅8cm、深さ7cmの溝状掘込みが木蓋の痕跡であろう。下甕は墓壙下底面の西側に穿かれた横穴に埋置されるが、墓壙主軸に対し70°ずれている。下甕は胴部上半を打ち欠いた壺で、壺の下側と掘りかたの間は粘土質の土を置き、掘りかたを調整して埋置している。主軸方位はN-69°-E、埋置角度は－16°を測る。掘りかた内より筒形器台、高坏等が出土した。なお、この墓壙上面には長さ50～70cm、幅30cm前後の2個の河原石が50cmの間隔で並んで検出された（図版40－2）



第83図　7号甕棺実測図（1/8）



第84図　8A号甕棺墓掘りかた内出土土器実測図（1/4）

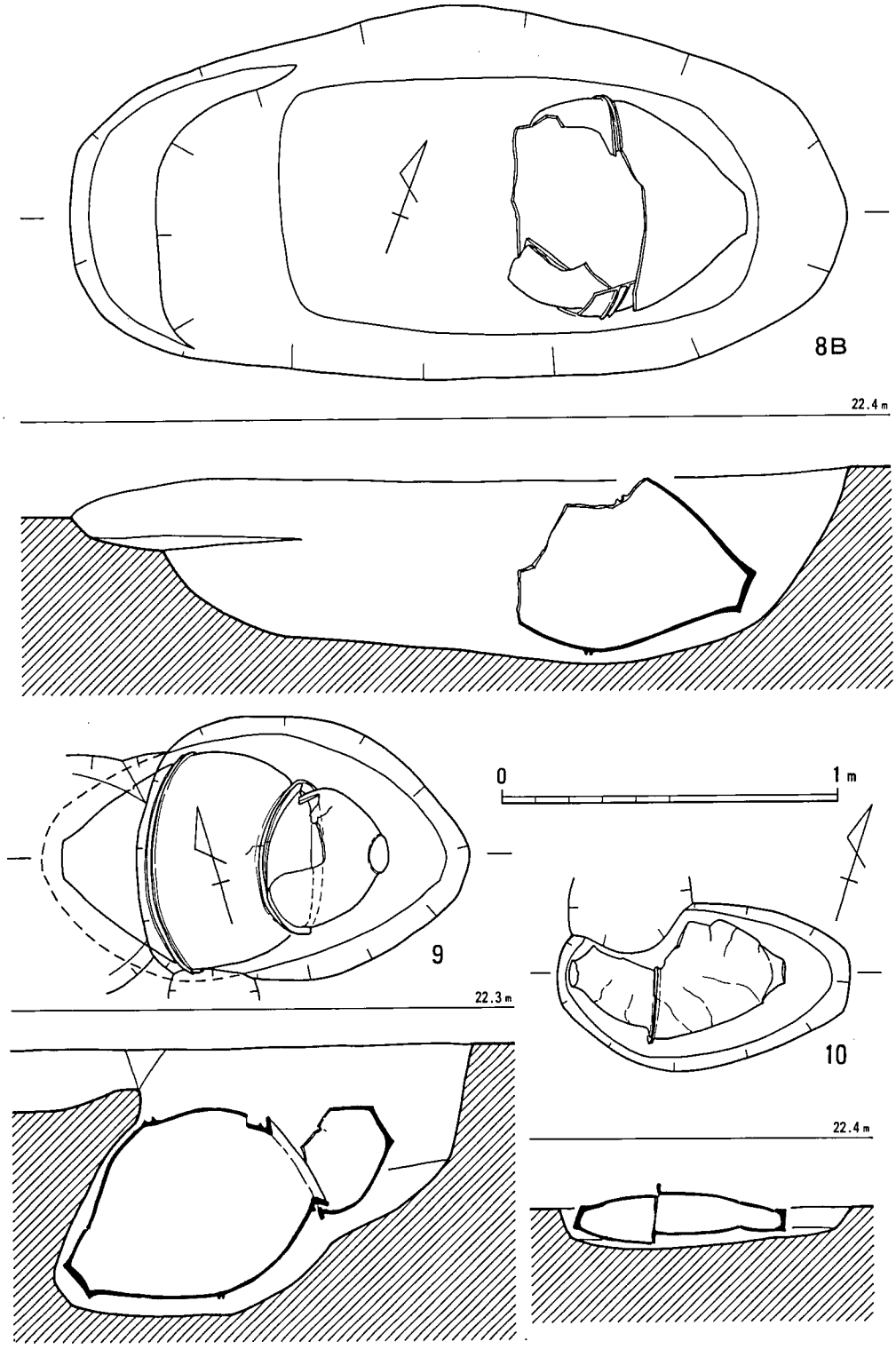
が、これは当棺の標石の可能性がある。

甕棺（第86図）胴部上半を打ち欠いた球形の胴部を有す壺。最大径を突帯文の下に持ち、底部外周部を厚く作る。「M」字状の突帯文1条を持ち、この部分まで丹塗りだが、それ以下には部分的に丹こぼれが見られる。外面の底部付近はハケ目、胴部はハケ目調整の後ナデを施す。内面はナデ。色調は淡橙白色を呈す。残存高35cm、底径10.8cm、突帯文部径48.7cmを測る。時期は中期後半。

土器（第84図）1は筒形器台の顎部片。内面屈曲部に細い沈線を有す。2・3は緩い「く」字状口縁の甕。口唇部は肥厚し、外面ハケ目調整。4は口縁部直下に三角突帯文を持つ。5は内外面とも丹塗りの壺。口唇部には鋭い刻みを施す。

8B号甕棺墓（図版41　第85図）

8A号甕棺墓に西側掘りかたを切られた成人用甕棺。ほぼ東西方向の長円形の墓壙は、長さ2.32m、幅1.12m、深さ53cmを測り、西側にテラスを有す。棺は胴部上半以上を打ち欠いた甕が墓壙東端に残るのみである。広く残る西側墓壙内には甕は遺存しないが、木蓋の痕跡も認められないので、上甕が何らかの理由で取り除かれたと考えざるをえない。なお、目張り粘土の



第85図　8B・9・10号甕棺墓実測図（1/20）

残存はない。主軸方位はN-69°-E、埋置角度は－16°を測る。

甕棺（第86図）胴部上半を打ち欠いた甕で、丸みはあるがやや長胴の器形。最大径は胴部上半に有す。胴部の中央にある２条の突帯文は若干下がりぎみで、上位の三角形に近い突帯文の端部は舌状に丸くなり、下位の突帯文は「コ」字状で、やや端部が凹む。外面は突帯文を除いて縦方向のハケ目調整、内面はナデ。色調内外とも橙黄色を呈し、外面には大きな黒斑が見られる。残存高71.8cm、底径12.2cm、突帯文部径61.8cm、打ち欠き口縁部径44.9cmを測る。中期後半に位置づけられよう。

９号甕棺墓（図版42　第85図）

７号甕棺墓に西側の墓壙掘りかたを切られる成人用甕棺でT11区に検出された。長さ１ｍ、幅77cmの比較的小さな墓壙で、下甕の胴部下半は横穴内に収められ、上甕部の掘りかたは浅い段を有す。日常容器を転用した上甕は下甕の下にずれているが、本来は接口式である。主軸方位はN-74°-W、埋置角度は－32°を測る。

上甕（第86図）緩く屈曲する「く」字状口縁の甕で、内頸部の稜線は目立たない。器高は低いが丸みのある器形で、最大径を胴部上部に有し、広い底部を持つ。口唇部端部は凹線状になる。外面は頸部から底部にかけて縦方向のハケ目調整、頸部はハケ目をナデ消す。内面はナデで、底部は指頭圧痕が残る。復原口径36.5cm、器高30cm、底径12.9cmを測る。

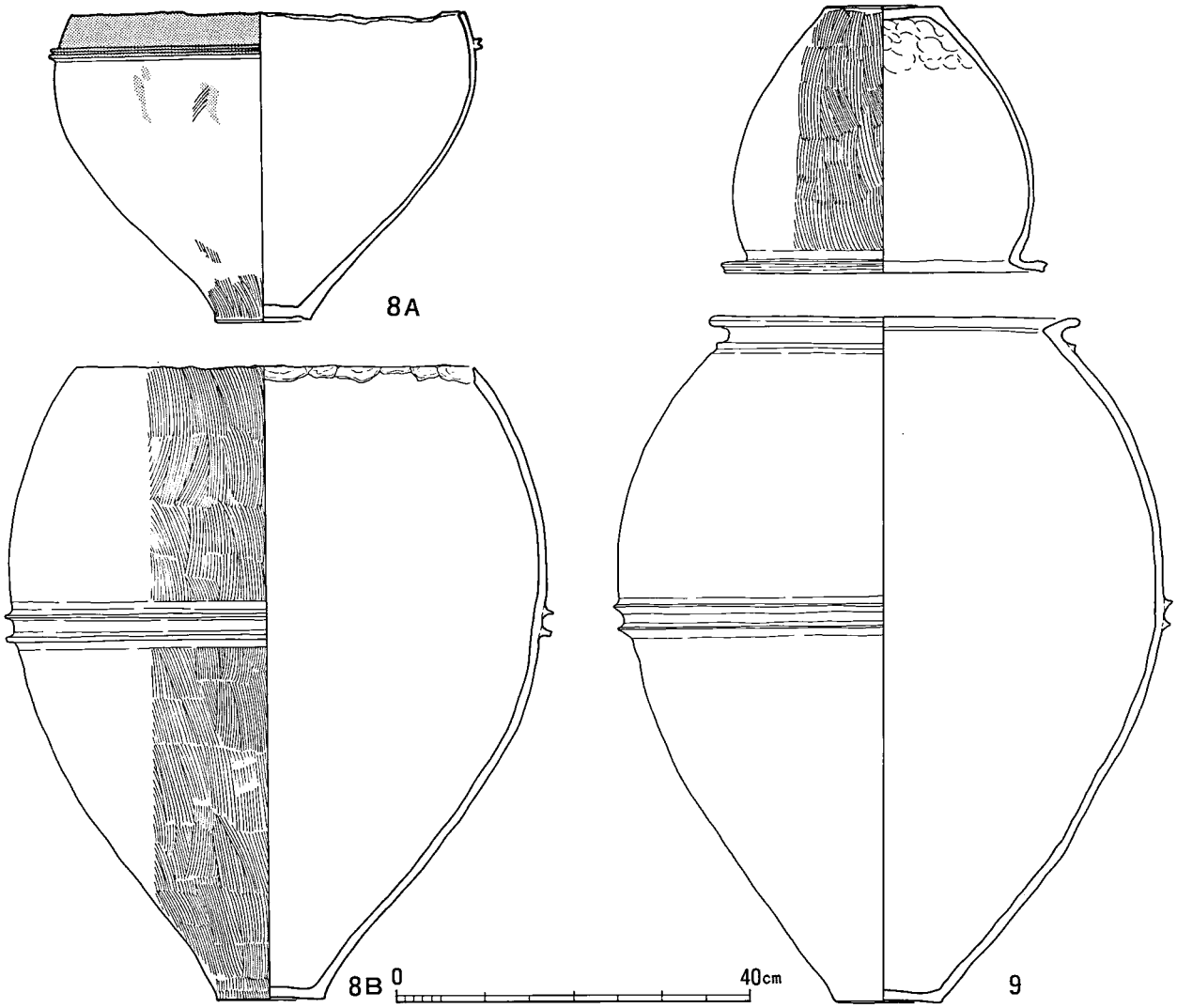
下甕（第86図）短い口縁部が「く」字状になる甕で、卵形の丸い胴部を有す。胴部下半から底部にかけては絞らずに移行する。内頸部の稜線ははっきりせず、口縁端部は丸く収める。突帯文は頸部すぐ下に整った三角突帯文１条、最大径を持つ胴部中央には、やや上向きの三角突帯文２条がある。全体に剝落や磨滅が著しく内外面の調整不明。色調は淡橙黄色を呈し、口径41.6cm、器高77.7cm、底径11.7cm、突帯文部径62.9cmを測る。時期は中期末。

10号甕棺墓（図版42　第85図）

南側墓地群の西端S11区に位置する小児用甕棺。P543に切られた長円形の墓壙内西側に水平に埋置される。長さ88cm、幅50cmの墓壙上部は削平され、14cmしか残らない。下甕の口縁部を打ち欠いて合わせた接口式だが、目張り粘土はない。主軸方位はN-73°-E を測る。

上甕（第87図）内側にやや低く傾斜する逆「L」字状口縁で、細みの胴部からスマートな底部へ移行する。口縁部内側が細く張り出すため、その付近のみが丸みを有す。口縁端部は丸く、底部は外周部１cmが畳付けとなる。外面の胴部上半から口縁部はナデで、それ以下は縦方向のハケ目調整。内面は口縁部下が横方向の粗いハケ目で、以下は斜めないし縦方向のハケ目調整。淡黄白色で、口径33.2cm、器高36.1cm、底径７cmを測る。

下甕（第87図）胴部中ほどから口縁部を打ち欠いた細みの胴部の甕。底部は平底で器壁８mm



第86図　8A・8B・9号甕棺実測図（1/8）

と薄い。外面は縦方向の緻密なハケ目調整を施し、内面はナデ。下半部は二次的な加熱を受け、ススが多く付着する。胎土には多量の角閃石を含み、色調は淡黄褐色を呈す。残存高22.6㎝、底径7.3㎝、打ち欠き部径27㎝を測る。時期は中期後半。

11号甕棺墓（図版43　第88図）

南側墓地群の中央部、T11区に検出された小児用甕棺。長さ84㎝、幅55㎝と小さい墓壙東側に甕がほぼ水平に埋置され、西側墓壙は甕の口縁部より７㎝深く掘込まれることから木蓋単棺であろう。主軸方位はN-41°-E、埋置角度は－2°を測る。

甕棺（第87図）「く」字状口縁の甕で、器高は低く、胴部はやや丸みを持ち、胴部最大径を中位に有す器形。内口縁はやや窪むため端部がはね上げぎみになり、口縁端部は凹線状である。内頸部の稜線は不明瞭である。外面頸部のハケ目はナデ消され、底部には黒斑が残る。色調は淡橙黄色を呈し、口径25.8㎝、器高27.7㎝、底径11.8㎝。器壁は胴部で７㎜、底部は14㎜を測る。時期は中期末であろう。

12号甕棺墓（図版43　第88図）

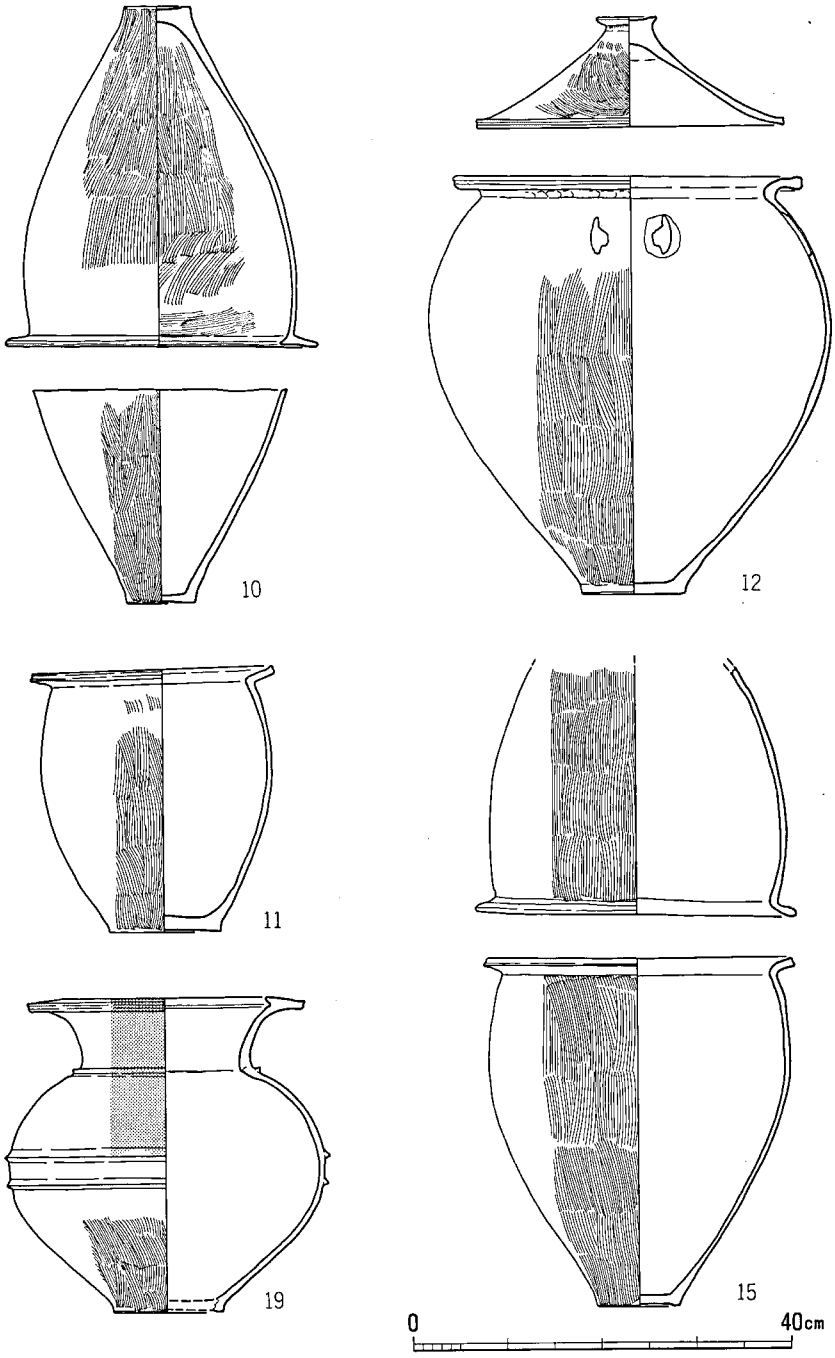
南側墓地群の中央部T11区に位置し、６号甕棺墓に東側の墓壙を切られる小児用甕棺。棺に対し斜めに掘られた長円形の墓壙は、残長1.1ｍ　幅90㎝、深さ56㎝で、下甕の胴部上半を覆い、東側にテラス面を有す。蓋と甕の接口式だが、目張り粘土は認められない。主軸方位はN-68°-E、埋置角度は－42°と急角度である。

上甕（第87図）完形の蓋。上部で横に大きく張り出す摘み部は、中央部が４㎜ほど窪み厚さ2.6㎝。摘み部から口縁部へかけては若干内湾ぎみに拡がり、口縁部付近で外反する。口縁端部はかすかに窪む。外面は内に巻き込むような細かいハケ目調整、内面はナデ。口径32.5㎝、器高11.7㎝、摘み部径6.2㎝を測る。

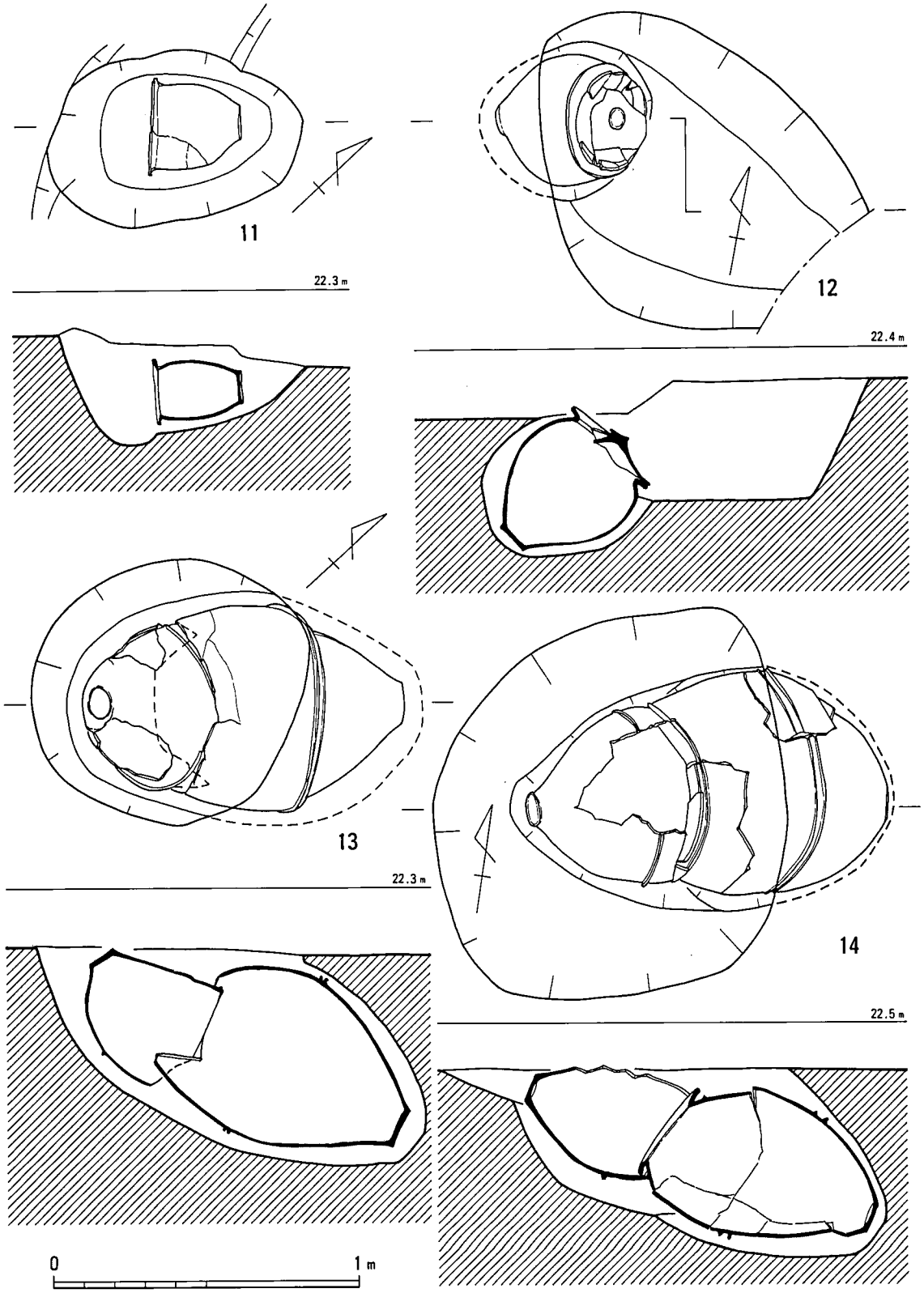
下甕（第87図）外湾した屈曲度の強い「く」字状口縁の甕で、最大径を上から３分の１の位置に持つ。球形に近い胴部は５～７㎜と薄く、底部は平底。口縁部内側は直線状になり、その上下に軽い稜線が走る。口縁部端部をやや肥厚させ、不明瞭な沈線を持つ。頸部下に径５㎝ほどの焼成後穿孔があるが、この穿孔破片は下甕の内部より出土した。これは穿孔の行われた時期が甕棺として使用される段階であったことを物語っている。外面頸部には口縁部と胴部の接合時の指頭圧痕が残り、中位以下はハケ目調整、内面はナデ。色調は淡黄白色を呈し、口径36.9㎝、器高44.3㎝、底径10.9㎝を測る。時期は中期末。

13号甕棺墓（図版44　第88図）

南側墓地群の東側T11区に位置し、南側に隣接する７・９号甕棺墓に直交する墓壙を持つ成



第87図　10～12・15・19号甕棺墓実測図（1/8）

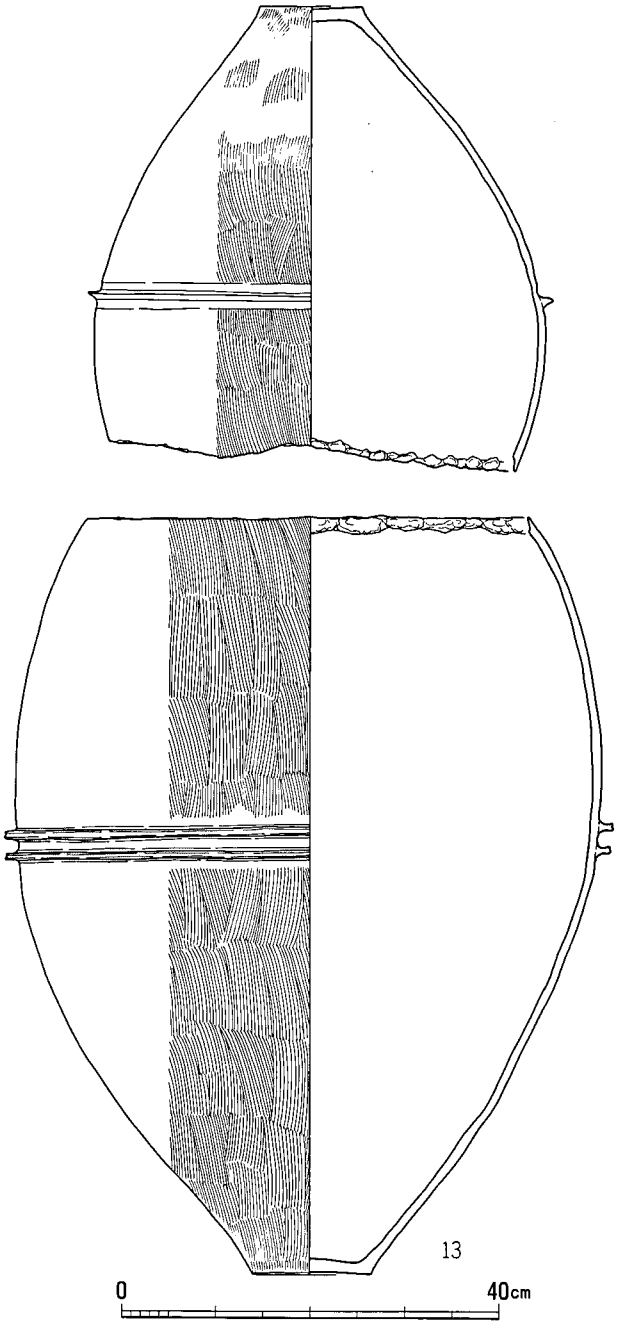


第88図　11～14号甕棺墓実測図（1/20）

人用甕棺。長さ90cmと短い墓壙の東側に、下甕の下半分を収める横穴を穿つ。上下甕とも口縁部を打ち欠いた甕の接口式で、墓壙内にすき間がほとんどない状態で埋置される。主軸方位はN-81°-E、埋置角度は－36°を測る。

上甕（第89図）胴部上半部以上を打ち欠いた甕。卵形の胴部で、最大径は１条のだれた三角突帯文の上位にある。底部は平底に近い。外面は縦方向のハケ目調整で、胴部中央には大きな黒斑が残る。内面はナデ。なお、打ち欠きは口縁部方向から急角度に行われるので、尖った状態で残る。色調は淡橙黄色を呈し、残存高49.2cm、底径10.9cm、打ち欠き部径43cm、突帯文部径49.2cmを測る。

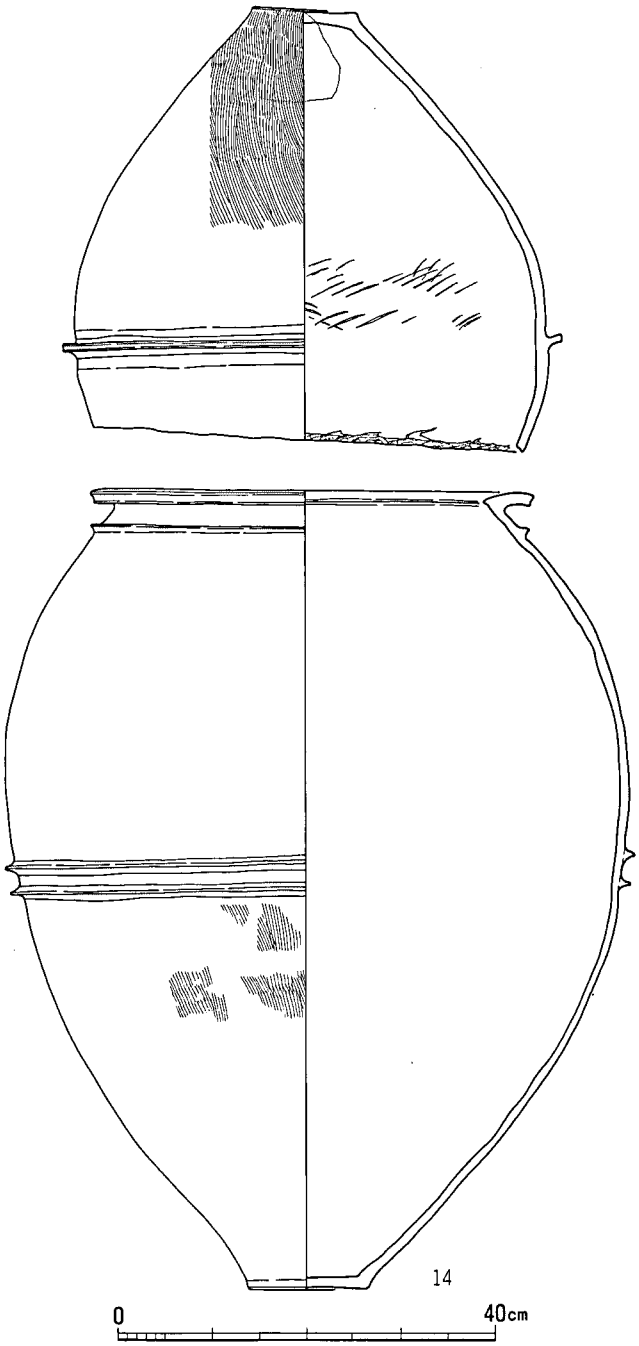
下甕（第89図）やはり胴部上半部以上を口縁部方向から打ち欠いた甕。上甕ほどではないが、丸みのある胴部上半から直線的に底部に移行する。２条の「コ」字状突帯文は細く、高く延び、最大径はこの上位にある。外面全体は縦方向のハケ目が良く残り、大きな黒斑もある。内面はナデ。色調は淡橙褐色を呈し、残存高80.2cm、底径12.6cm、打ち欠き部径55.6cm、突帯文部径64.3cmを測る。時期は中期後半から末。



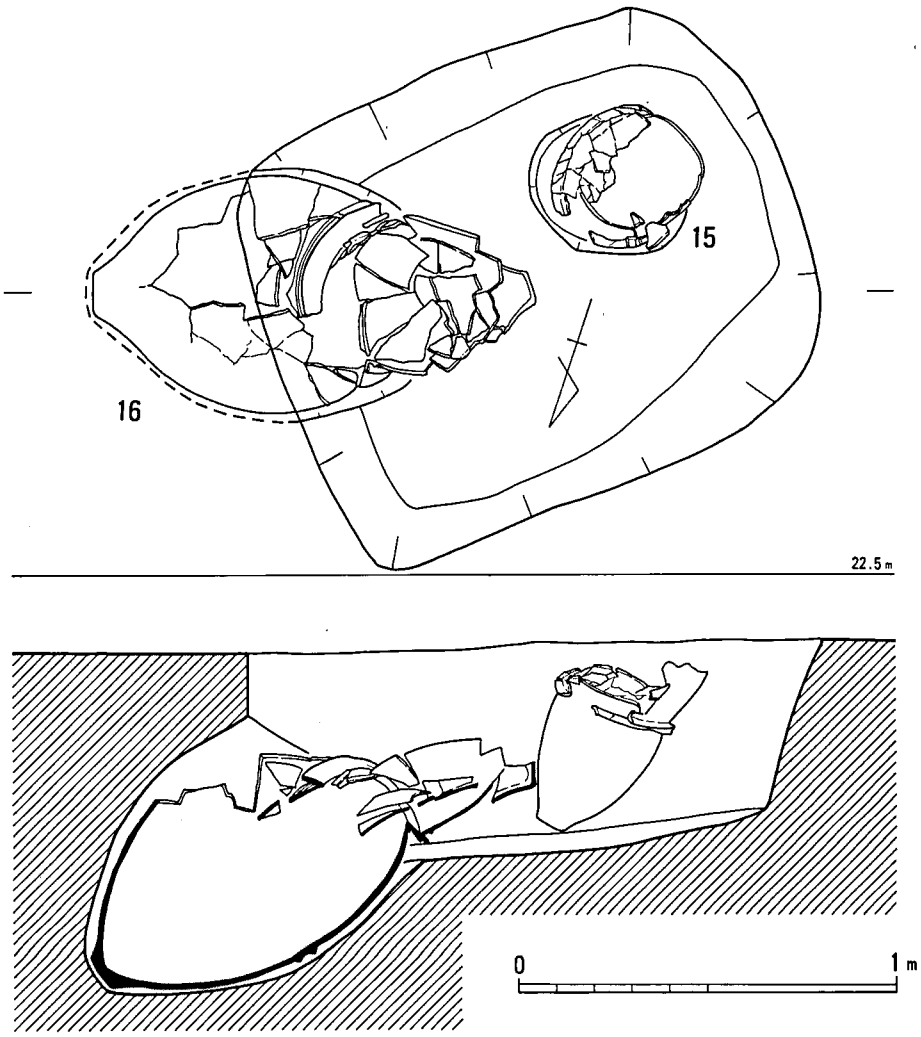
第89図　13号甕棺実測図（1/8）

14号甕棺墓（図版44・45 第88図）

14号甕棺墓はU-V11区で、甕棺墓群の中でも最も東寄りに位置する。1号円形周溝状遺構は切るが、15・16号甕棺墓とは30cmの距離をおいて近接するだけで切り合い関係にはない。上甕も下甕も専用の甕棺を用いる合口甕棺墓で、主軸方位はN-80°-E、埋葬傾斜角度は－67°になる。埋土には墓壙を掘り上げた地山の灰褐色砂をそのまま用いているためか、掘りかたの検出は困難であった。上甕は口縁部と頸部とが打ち欠かれ、下甕の口縁部を覆うように設置されていたが、この部分に目張り粘土は確認できなかった。一部欠損の状態で検出されたが、この部分は土圧等により下位に転落していた。人骨は遺存せず副葬品はなかった。ところで、上甕底部付近の10×9cm四方の破片（赤色部分）が欠損していたが、復原作業を進めている時点で、これが21号甕棺墓の墓壙から出土していることが判明した。摩滅が比較的進行しており、上甕本体とは色調や保存状態が明瞭に異なるが間違いなく接合



第90図　14号甕棺実測図（1/8）



第91図　15・16号甕棺墓実測図（1/20）

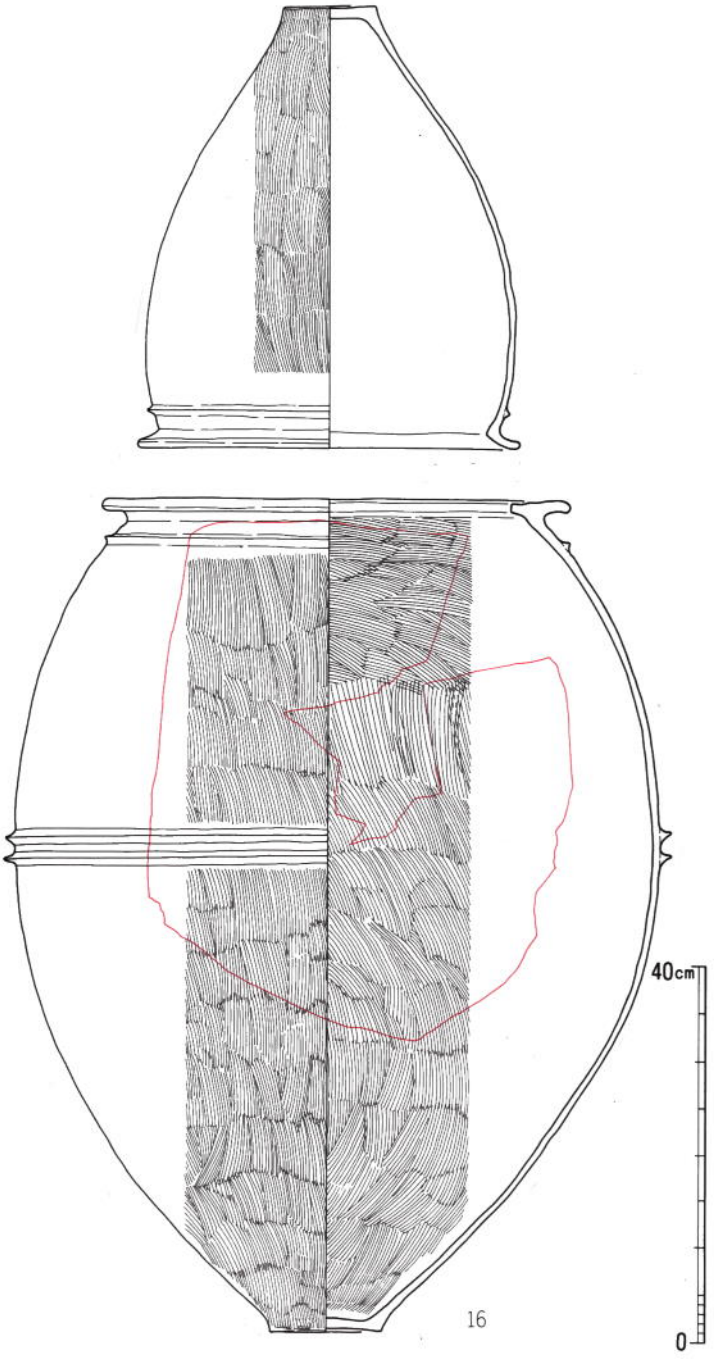
した。偶然の事象とも考えられるが、本遺跡では15号甕棺墓と17号甕棺墓とにおいても同様な現象がみられることから、意図的な行為の可能性も決して少なくはないであろう。

上甕（第90図）欠損部口径45.6cm、突帯文部径52.8cm、残存器高47.2cm、底径11.2cmを測る。口縁部と頸部は打ち欠かれているが、実測図の範囲では完形に復原できた。外面の器面調整はハケであるが、摩滅が著しくそれが確認できるのは底部から25cmの範囲内である。内面はナデられるが、突帯文のやや下位のあたりでは、工具の当たった痕跡が集中して観察される。前述したように、底部付近の破片（赤線部分）は21号甕棺墓の墓壙から出土しているが、色調や保存状態が大きく異なり、両者の遺存環境の違いを明確に表している。

下甕（第90図）下甕は完形品で、口径46.9㎝、突帯文部径66.1㎝、残存器高85.0㎝、底径12.7㎝を測る。口縁端部は凹線状に窪み、頸部下や胴部の突帯文は断面がシャープな三角形を呈する。外面の摩滅は著しく、胴部下半にわずかに器面調整のハケが窺えるが、内面はナデである。器厚は8～10㎜と全体に薄く、底部の厚さも10㎜とやはり薄い。外面には部分的に20㎝程度の範囲で淡く赤褐色に変色しているような部分があり、二次加熱を受けた可能性がある。

15・16号甕棺墓（図版45 第91図）

15・16号甕棺墓はU11区で、甕棺墓群の中でも最も東寄りに位置する。1号円形周溝状遺構は切るが、14号甕棺墓とは30㎝の距離をおいて近接するだけで切り合い関係にはない。15号甕棺墓は16号甕棺墓の142×119×55㎝の墓壙内に同時に埋置されているため掘りかたはなく、上甕の底部付近は削平により遺存しな



第92図　16号甕棺実測図（1/8）

い。上甕・下甕いずれも日常容器の転用品であり、主軸方位はN-74°-E、埋葬傾斜角度は－58°とかなり立つ。合わせ部分に目張り粘土は認められなかった。16号甕棺墓の上甕は日常容器の転用品であるのに対し、下甕は甕棺の専用品である。主軸方位はN-71°-E、埋葬傾斜角度は－37°になる。この16号甕棺墓で注目すべきことは、下甕の口縁部から胴部下半にかけて大きく欠損していた部分（赤線部分）が、17号甕棺墓の甕棺の蓋として転用されていたことである。わざわざ下甕の一部を17号甕棺の蓋に転用する意義は不明であり、またこの行為が16号甕棺墓を埋置する以前のものかあるいは以後のものであるのかも出土状況からは判然としない。破損した状態で検出された上甕はほとんど欠損部なく完形に復原できるが、この破損が下甕の一部を取り出す時に生じたのか、あるいは土圧等によるものかも判然としない。ただし、少なくとも15号甕棺墓を埋置する以前の行為であったと推測さよれよう。いずれにせよ、人骨は遺存せずまた副葬品もなかったため、15・16号甕棺墓と17号甕棺墓との間で行なわれた行為がどのような目的に基づくものなのか、例えば血縁関係に基づく行為であるのかは不明と言わざるを得ない。

15号上甕（第87図）口径33.9cm、最大腹径31.1cm、残存器高26.2cmを測る。器面調整は外面がハケ、内面がナデで、外面には部分的に炭化物の付着が痕跡的に窺える。胎土に雲母が多く含まれるのが特徴的。

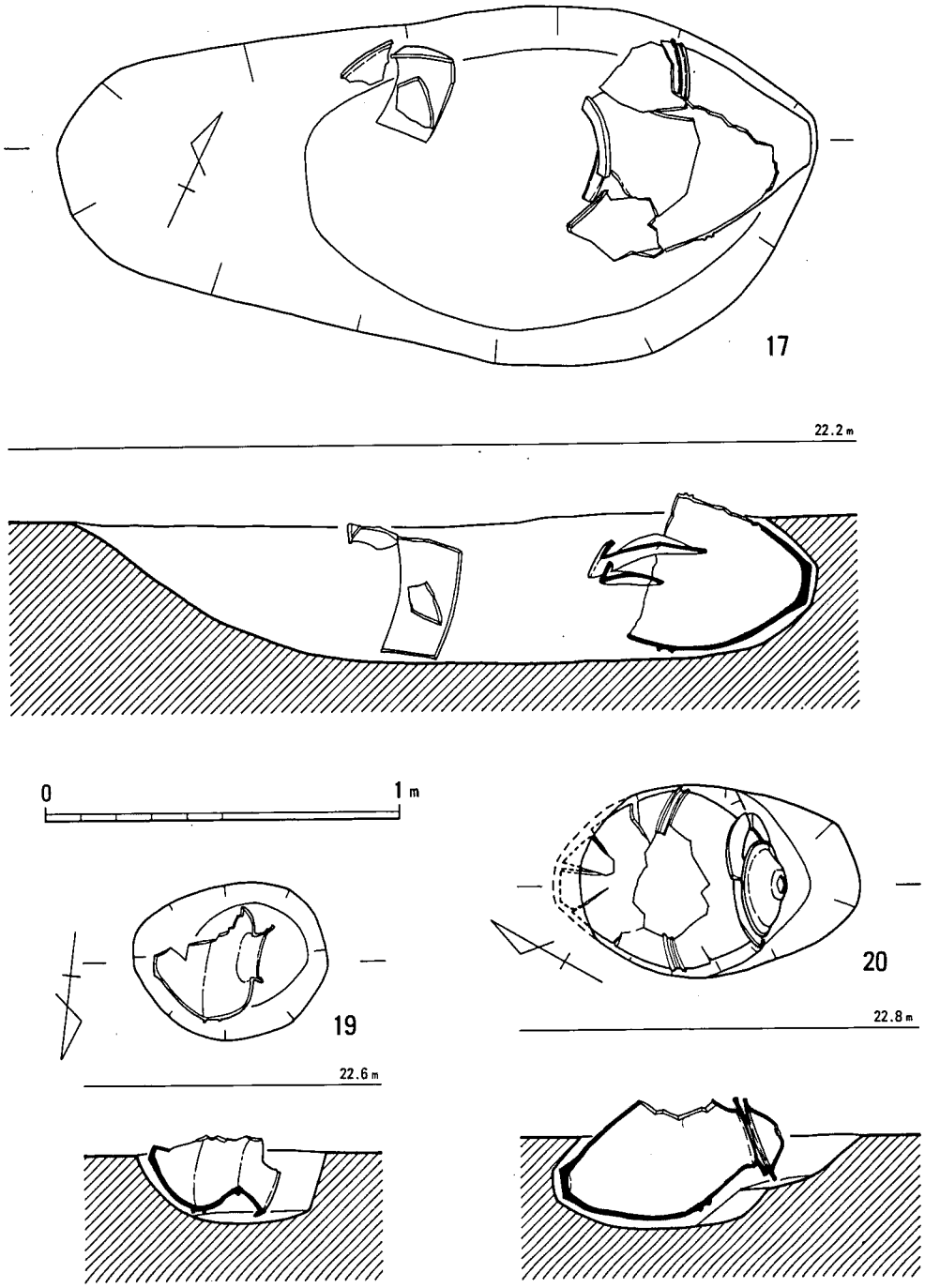
15号下甕（図87図）口径32.8cm、最大腹径36.1cm、器高37.0cm、底径8.8cmを測る。器面調整は外面がハケ、内面がナデで、底部から15cm程度の範囲には、内外面に炭化物の付着が痕跡的に窺える。しかし、二次加熱による器面の変色は見られなかった。

16号上甕（第92図）口径40.3cm、最大腹径39.1cm、器高47.2cm、底径9.8cmを測る完形品。器面調整は外面がハケ、内面がナデで、底部から30cm程度の範囲には、内外面に炭化物の付着が薄く窺える。頸部下の突帯文の断面形態は三角形を呈する。

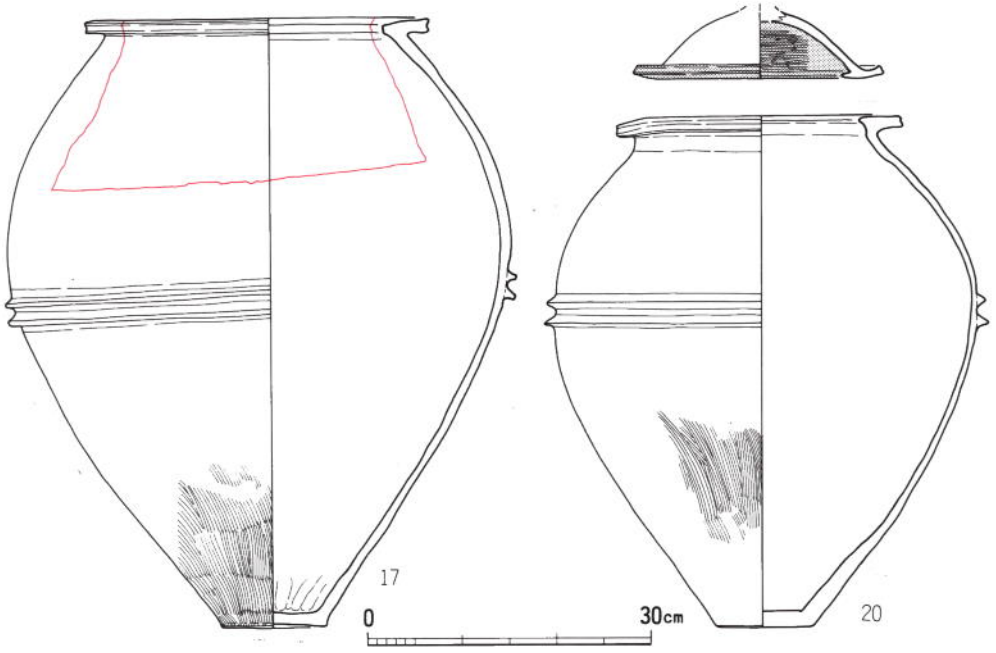
16号下甕（第92図）甕棺の専用品で、口径49.4cm、突帯文径70.2cm、器高88.2cm、底径11.9cmを測る。器面調整としては内外面ともにハケが施される。頸部下や胴部の２本の突帯文の断面形態は三角形を呈する。前述したように、実測図中の赤線部分は欠損していたが、この部分は17号甕棺の蓋として転用されていた。

17号甕棺墓（図版46　第93図）

17号甕棺墓はU10-11区にあり、甕棺墓群の中でも最も北東寄りに位置する。３号円形周溝状遺構に切られており、その北端部底面で検出された。他に近接する甕棺墓としては、南西２mに18号甕棺墓があげられる。主軸方位はS-64°-W、埋葬傾斜角度は－17°。検出時点での墓壙の平面プランは212×101cmの卵形に近い楕円形であり、また深さも最高で42cm、さらにはほぼ１個体分と考えられる甕棺（単棺）がやや散在の状況で出土したことから、３号円形周溝状遺構を掘削する際にこの17号甕棺墓は削平され、甕棺も本来の位置が動いてしまったというよ



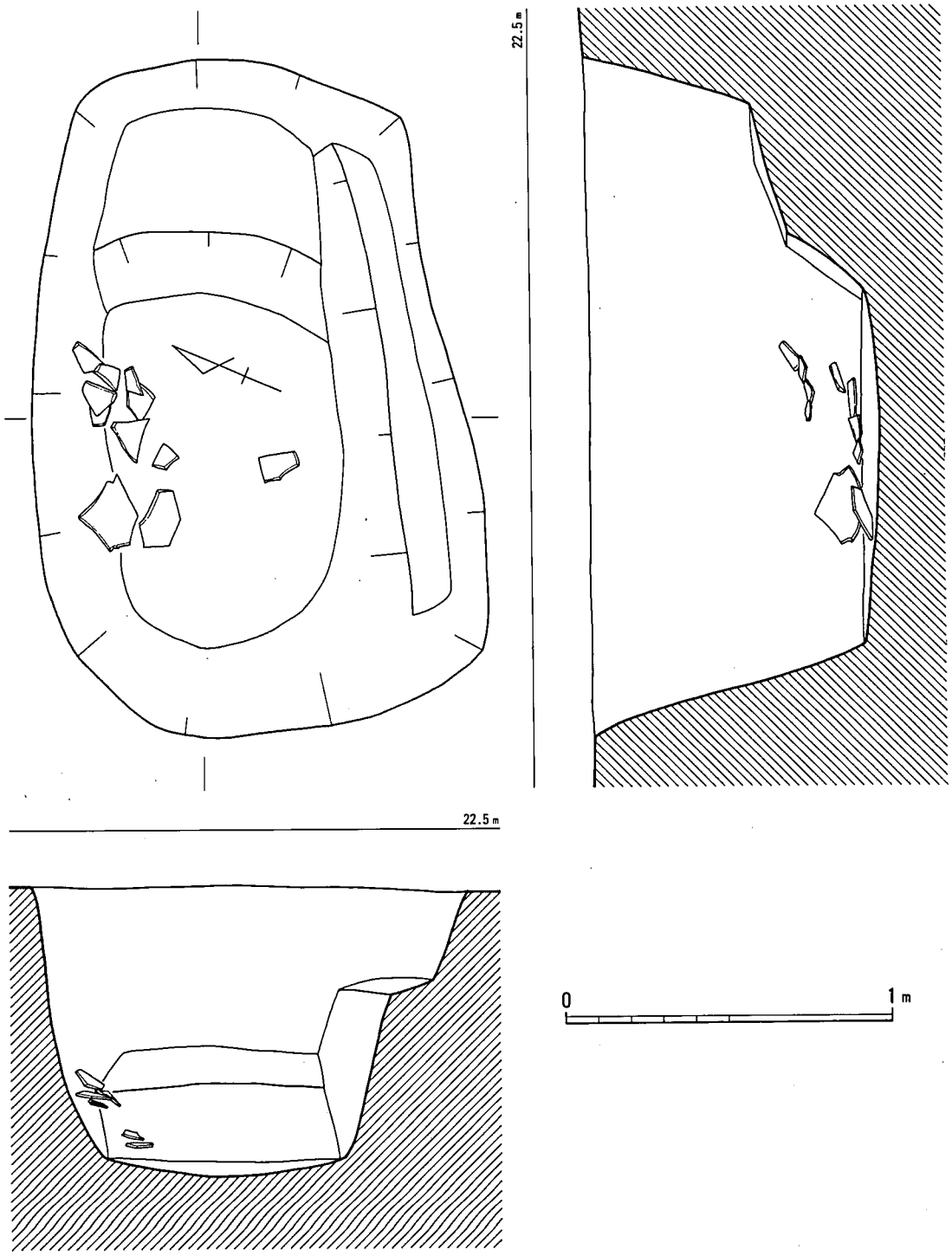
第93図　17・19・20号甕棺墓実測図（1/20）



第94図　17・20号甕棺実測図（1/8）

うに解釈していた。ところが前述したように、17号甕棺を覆うような位置関係にあった甕棺の口縁部から胴部にかけての大きな破片は、16号甕棺墓下甕の一部であったことが、整理・復原作業の過程で判明した。17号甕棺と16号甕棺墓下甕とは型式学的にほとんど差がないことから、16号甕棺墓と17号甕棺墓とに埋葬された人物の人間関係についても注目されるところである。なお、後述するように、17号甕棺は口縁部から胴部上半部にかけて若干欠損するものの、それを除いてはほぼ完全な形に復原できた。すなわち、この口縁部の欠落部分を覆うように16号甕棺墓下甕が置かれていた訳であるが、そうすると17号甕棺の口縁部の破片が甕棺本体から約50㎝ほど離れた位置で出土したことが不可解である。３号円形周溝状遺構掘削に際して動いた可能性も高いが、欠損部を覆っていた16号甕棺墓下甕の位置がほとんど動いていないことから疑問点も残る。本甕棺墓には人骨は遺存せず、また副葬品も存在しない。

甕棺（第94図）単棺で、口径36.3㎝、突帯文径53.9㎝、器高64.2㎝、底径11.0㎝を測る。ほぼ完形に復原できるが、口縁部から胴部上半にかけての41×19㎝の欠損部分（赤線部分）は丁寧に打ち欠かれており、ここに16号甕棺墓下甕の一部が覆われていた。器面調整は内外面ともにナデであるが、外面の底部付近にはナデが施されていないためにそれ以前に施されたハケが窺える。底部自体はわずかに上げ底状で、その内面には縦方向の強いナデが施される。突帯文は頸部にはなく、胴部に２本貼り付けられるが、断面形態は比較的シャープな方形（台形）であり三角形ではない。口縁端部は浅く凹線状に窪む。



第95図　18号甕棺墓実測図（1/20）

18号甕棺墓（図版46　第95図）

18号甕棺墓はU11区に位置し、3号円形周溝状遺構とは東1mに、4号円形周溝状遺構とは西0.5mに近接する。この遺構からは甕棺の胴部下半1/4が破片の状態で出土しているだけであったが、205×132×88cmというサイズの台形に近い隅丸長方形の平面プランや、この一帯が甕棺墓群であることなどから、甕棺墓から甕棺を抜き取った状態の遺構であるという認識に至った。正確な主軸方位はわからないが、おそらくはN-70°-Eぐらいになろう。なお、14号甕棺墓と21号甕棺墓、16号甕棺墓と17号甕棺墓のような接合例があることから、本甕棺の復原においても入念かつ慎重な作業を行なったが、他の遺構から出土した甕棺や他の甕棺墓との接合はなかった。

甕棺（第98図）18号甕棺は胴部下半1/4だけが遺存しており、突帯文の復原径は約69cmであることから本来は大型甕棺であったと推定される。胴部の突帯文は2本あり、断面形態は三角形ではなく台形で、いわゆる「コ」字状を呈する。内外面ともに全体的に丁寧なナデは施されるが、外面の底部付近のみナデが十分でなかったためか、それ以前に施されたハケがわずかに窺える。

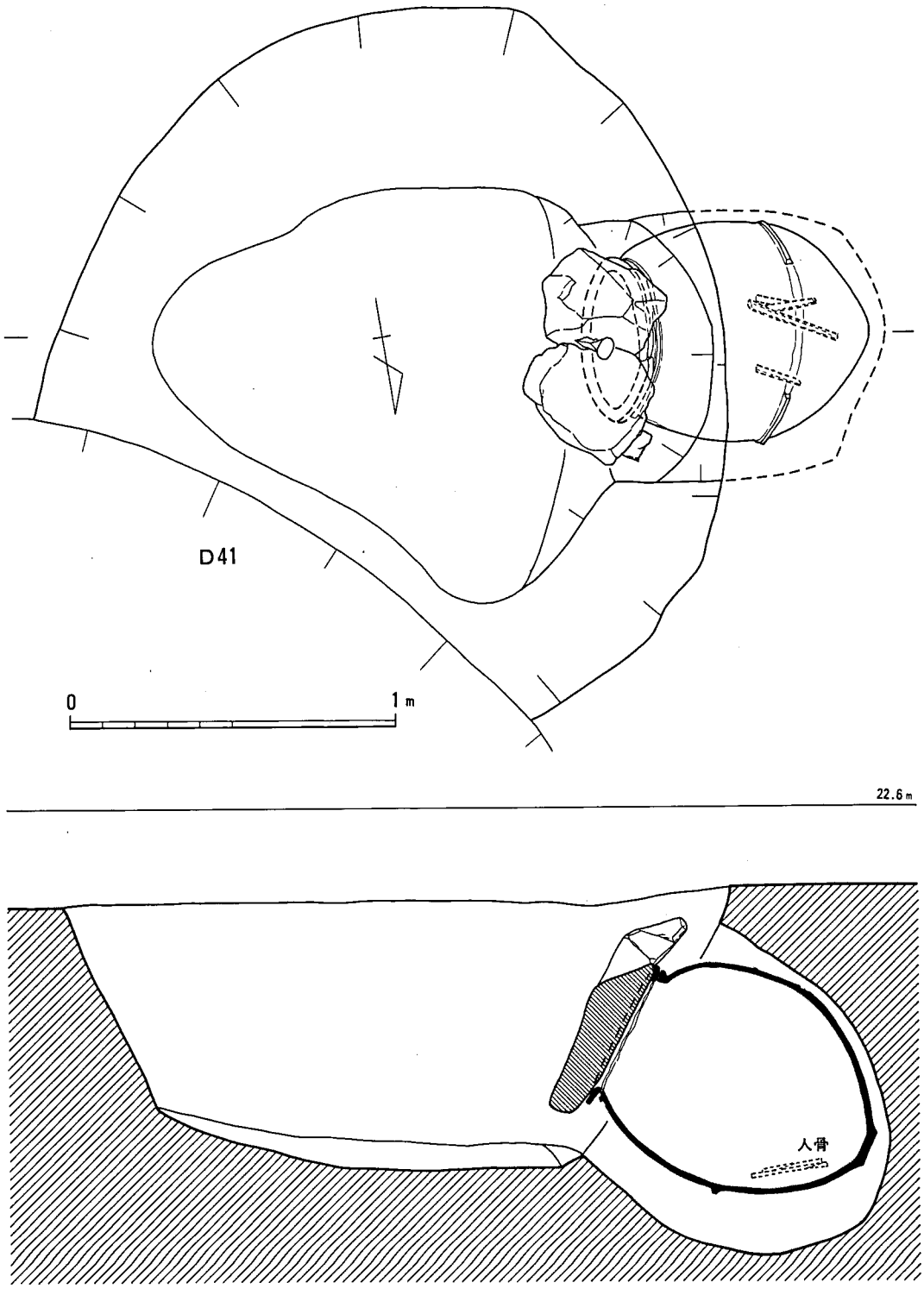
19号甕棺墓（図版47　第93図）

19号甕棺墓はU10区に位置し、4号円形周溝状遺構を切る。近接する遺構としては、南西0.5mの41号土坑があげられる。すでに大きく削平されており遺存状態は良くないが、55×42×21cmの卵形の平面プランの掘りかたに、丹塗の壺が約2/5ほど残存していた。主軸方位はS-83°-W、埋葬傾斜角度は－9°。この埋葬傾斜角度や丹塗の壺が用いられていることに甕棺墓として位置づけることに躊躇を覚えたが、甕棺墓群内に位置することを積極的に評価して敢えて甕棺墓として位置づけた。人骨は遺存せず、副葬品は存在していない。

甕棺（第87図）19号甕棺は全体の2/5ほどしか残存しないが、図面としては口縁部から底部まで復原できた。復原口径30cm、復原突帯文径34cm、復原器高34cm、復原底径12cm。器面調整は内外面ともにナデであるが、外面の底部付近のみハケが施される。口縁端部は凹線文状に浅く窪み、頸部と胴部の境に1本の、胴部最大腹径部に2本の突帯文が貼り付けられるが、これらの断面形態は三角形を呈する。丹塗は口縁部上面から胴部にある2本の突帯文のうち上のものまでに施される。

20号甕棺墓（図版47　第93図）

20号甕棺墓はT10区に位置し、弥生時代の28号土坑は南東30cmに、5号円形周溝状遺構は北西50cmに近接する。当初は28号土坑が本甕棺墓の祭祀土坑ではないかという認識で調査を進めたが、近接するというだけで特にそれらしき根拠は得られなかった。後世の削平により下甕の



第96図　21号甕棺墓実測図（1/20）

一部が損失するが、ほぼ完全な形に復原できた。主軸方位はS-29°-E、埋葬傾斜角度は－18°。掘りかたは主軸方向に2段になる。上甕には丹塗高坏の坏部を転用しており、下甕は甕棺の専用品であるが、そのサイズから中型になろう。

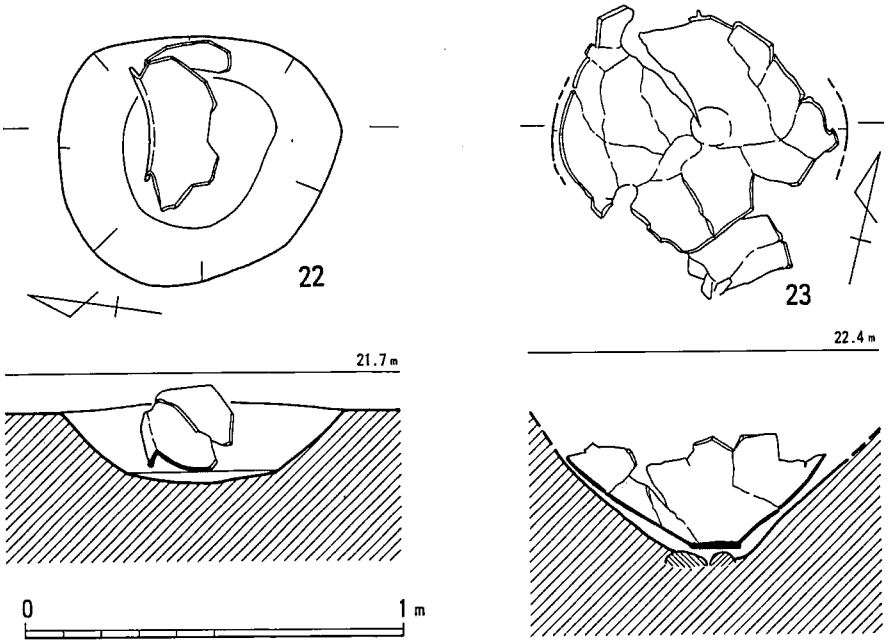
上甕（第94図）丹塗高坏の坏部の転用品で、口径26.6cm、残存器高7.2cmを測る。器面調整としては内外面ともにミガキが施されているが、また丹も内外面に塗られているはずであるが、摩滅により外面についてはいずれも確認できない。脚部はまったく存在しないが、坏部との接合面がわずかに残る。

下甕（第94図）口径30.1cm、突帯文径46.4cm、器高53.8cm、底径10.0cmを測り、そのサイズから中型の専用甕棺と考えられる。器面調整は内外面ともにナデであるが、外面の胴部下半にのみ窺えるハケ目はナデが不十分だったためであろうか。口縁端部は凹線文状に浅く窪み、胴部にのみ断面三角形の突帯文が2本貼り付けられる。復原により胴部上半に径約25cm程度の円形の欠損部ができるが、これは後世の削平によりできたものである。

21号甕棺墓（図版48・49　第96図）

21号甕棺墓はT10-11区に位置し、弥生時代の祭祀土坑と考えられる41号土坑にその墓壙が切られる。ここは甕棺墓が最も密集する墓群の北端にあたり、南1mには5号甕棺墓、南西1.5mには4号甕棺墓と近接する。当初は、41号土坑に切られる2.2×2.1mの大きな円形土坑として掘り進めたが、西壁において甕棺墓の蓋石が検出されたため、甕棺墓の墓壙という認識に変更して精査を行なった。埋土はこの墓壙を掘り上げた土である地山の黄褐色砂質土をそのまま一気に埋めたものであるためか、地山との区別がつけにくく、本来の掘りかたの検出に苦労した。墓壙の深さは最高で83cm、底面は甕棺方向に開く1.3×1.1mの三角形プランになる。遺物は底面で弥生土器が数点出土しただけで、埋土からの出土はまったくない。甕棺は主軸方位はS-81°-E、埋葬傾斜角度は－27°の単甕で、厚さ15cmの2枚の花崗岩を蓋石にしていたが、この蓋石を甕棺に密着させる時に生じたのか、あるいは土圧によって生じたのか、甕棺の頸部は強い力で押されて折れていた。しかし、蓋石が甕棺の口縁部をしっかりと密封していたため、土の甕棺への混入は甕棺の底に8cm程度しか認められず、甕棺内部は空洞のままであった。甕棺の内部には人間の大腿骨等が確認できたが、これらは白褐色を呈しスポンジ状にやや膨れてぼろぼろに腐蝕していたため上手く取り上げることができず、調査時点で図面と写真によって記録するのが精一杯であった。ところで、墓壙の底面から出土した弥生土器の中に、14号甕棺墓上甕の欠損していた底部に相当する破片の出土が、後日の整理・復原作業に際して確認された。16号甕棺墓と17号甕棺墓でも同様の接合例が見られ注目される。

甕棺（第98図）完形の大型甕棺で、口径53.1cm、突帯文径73.3cm、器高87.0cm、底径10.5cmを測る。器面調整は外面にかなり明瞭なハケが、内面にはハケらしき工具痕が残るものの全体



第97図　22・23号甕棺墓実測図（1/20）

にナデが施される。口縁部は「く」字状に丸く屈曲し、口縁端部も丸く仕上げられる。頸部と胴部に断面台形の突帯文がそれぞれ１本ずつ貼り付けられ、外面には大きな黒斑が残る。全体に器壁は厚く12～14㎜であるためか、胴部下半部は重量によりややへちゃげて潰れたような器形になっている。

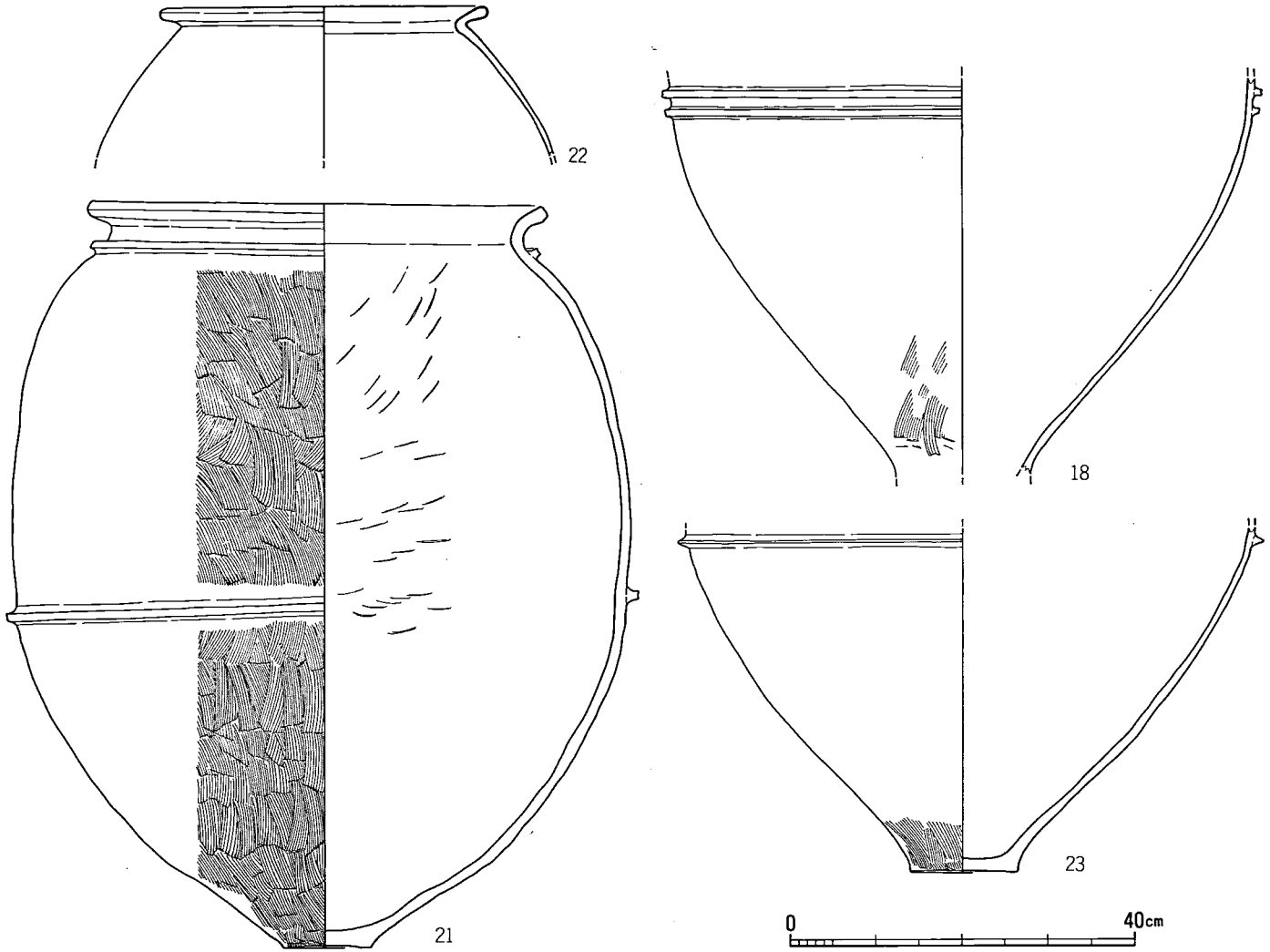
22号甕棺墓（図版50　第97図）

22号甕棺墓は、Ｍ８区に位置する弥生時代の113号竪穴住居跡の床面を除去した時点で検出された。墓壙自体が75×67×22㎝と小さく、甕棺の出土状態が甕棺墓としてはやや不自然であったこと、またこの一帯が甕棺墓群からやや外れていること等から甕棺墓である可能性は低いが、この土器自体は甕棺であることから敢えて甕棺墓の中で位置づけた。主軸方位はN-8°-W、埋葬傾斜角度はほぼ水平。

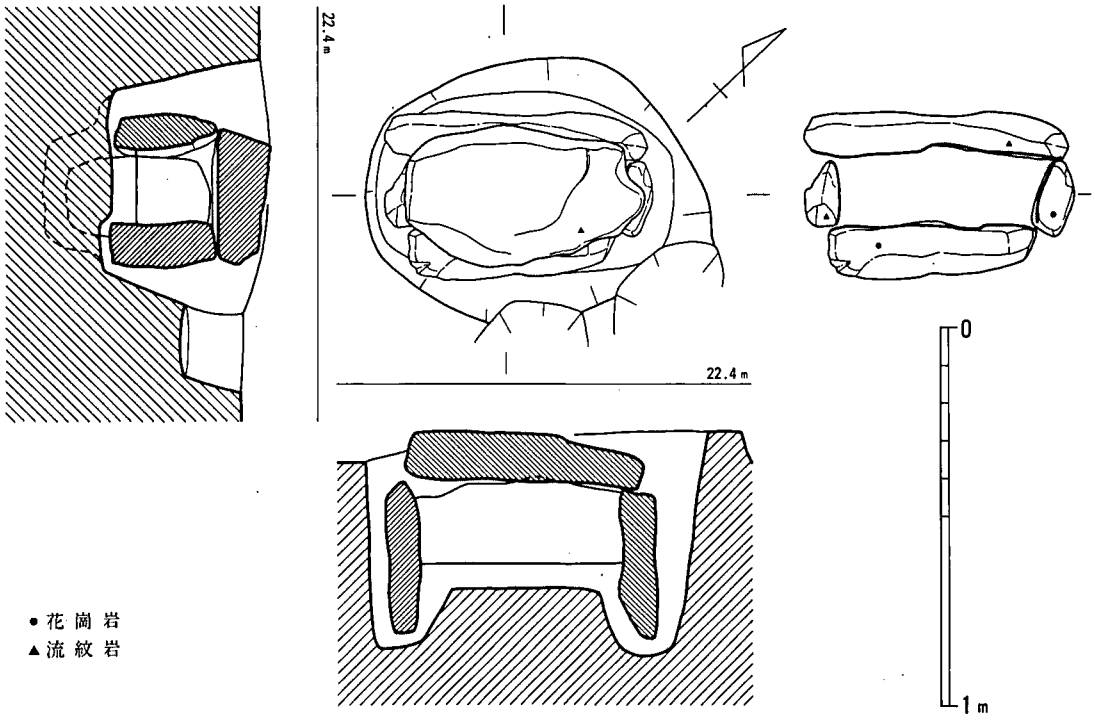
甕棺（第98図）口縁部から胴部上半にかけての約１/３が残存。復原口径は38㎝、残存器高は17㎝。口縁部付近のみナデが窺えるが、それ以外は内外面とも摩滅により器面調整不明。

23号甕棺墓（図版50　第97図）

調査区の西側Ｇ４区に検出され、１号甕棺墓の北側９ｍに位置する。大半が削平され、甕の胴部下半が掘りかた内に直立する。一応、成人棺として扱う。



第98図　18・21～23号甕棺実測図（1/8）



第99図　1号石棺墓実測図（1/20）

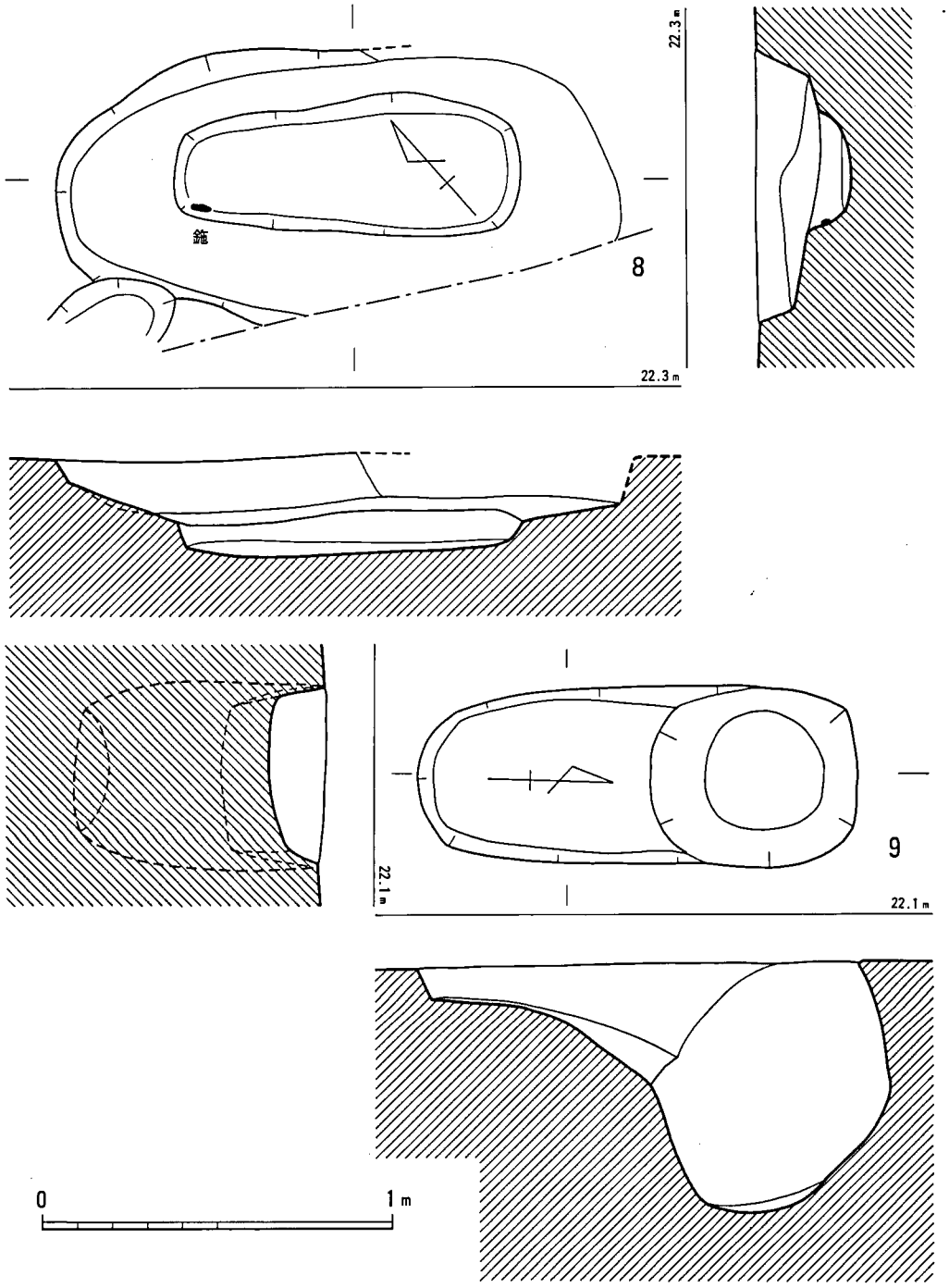
甕棺（第98図）胴部上半部を欠損する甕。胴部やや下半に三角突帯文1条をみるが、本来のものであろう。底部はほとんど平底である。外面は底部付近にハケ目調整が残り、内面はナデ。淡黄褐色を呈し、底径12.5cm、突帯文部径4cmを測る。時期は中期後半であろう。

5．石棺墓

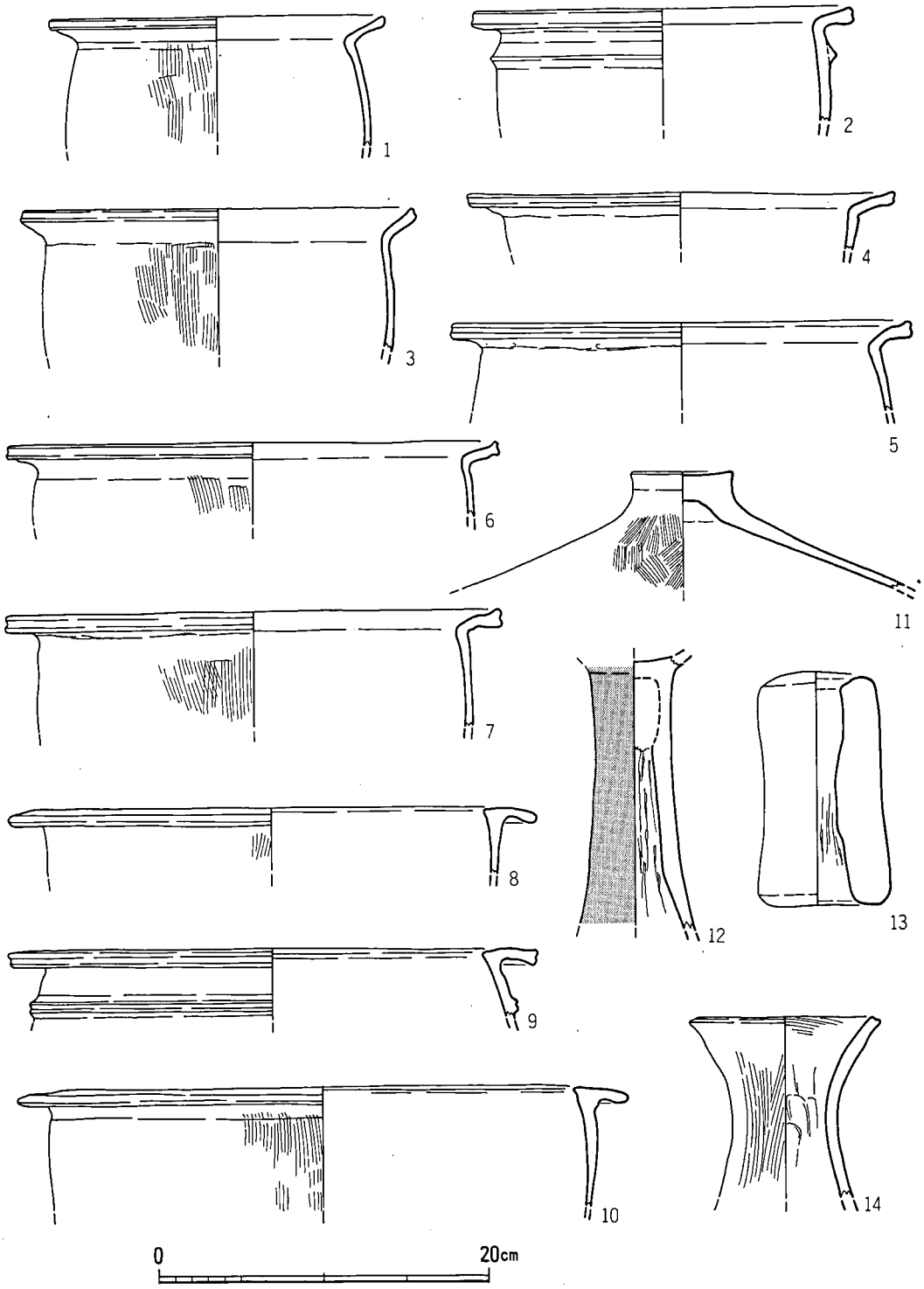
南側墓地群の中央部T11区に1基のみ検出された。

1号石棺墓（図版51　第99図）

6・12号甕棺墓の南側で検出された箱式石棺墓である。長さ90cm、幅72cmの長円形の墓壙内に花崗岩・流紋岩の板石を用いて側石（長55～70cm、幅18～20cm、厚10cm）2石、小口石（長40cm、幅22cm、厚10cm）2石、天井石（長63cm、幅53cm、厚13cm）1石で築かれる。内法は長辺53cm、短辺20cm、天井石まで22cmを測る小児用の石棺である。立てて用いる小口石掘りかたは側石より10cm以上深い。主軸方位はN-43°-Eであるが、内法からでは頭部の位置は判らない。



第100図　8・9号土壙墓実測図（1/20）



第101図　9号土壙墓出土土器実測図（1/4）

6．土壙墓

調査区の東側に２基検出された。そのうち８号土壙墓は甕棺墓13基・石棺墓１基と南側墓地群を構成する。

８号土壙墓（第100図）

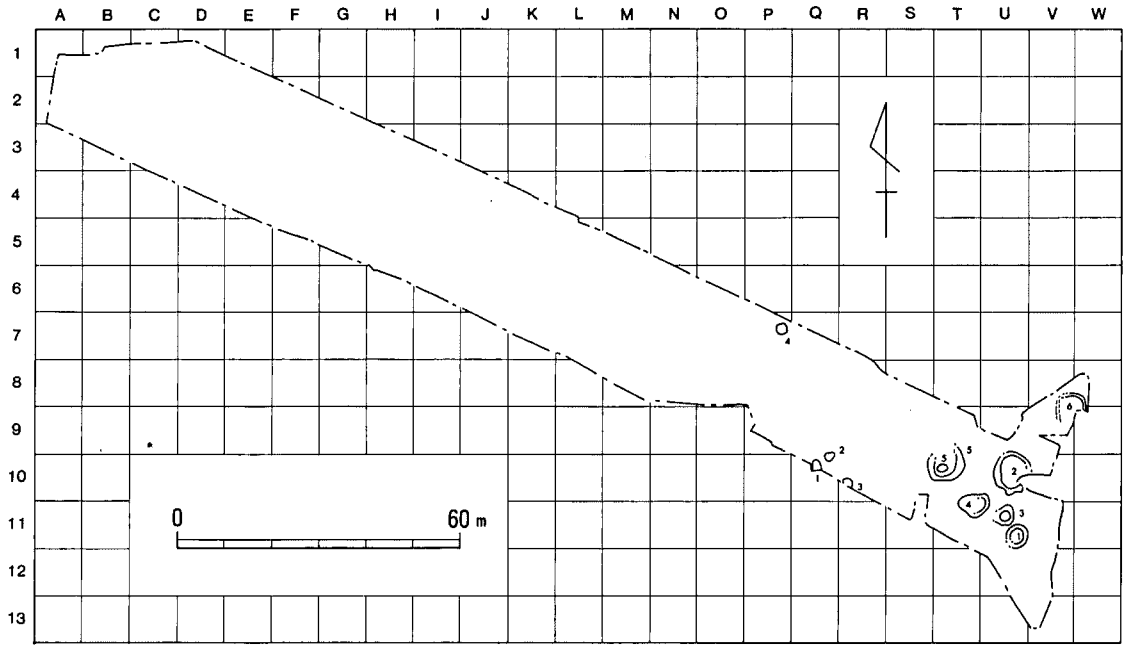
T11区の７号甕棺墓南側に検出された。２段掘で長円形の掘りかただが南辺は調査区外になる。上段は長さ1.6m、幅75cm、深さ18cmを測り、内側に深くなる。下段は隅丸の長方形プランを呈し、掘りかたのやや北側に片寄る。長さ99cm、幅33～40cmで東側に拡がる。深さ12cmで床面は浅い皿状になる。頭部は北に接する甕棺や掘りかたのレベルから推測すれば東側と考えられ、主軸はN-50°-W。副葬品として下段西南端より鉄製鉈が出土。中期後半から後期前半の時期であろう。

鉄器（第171図６）第171図６は８号土壙墓に副葬された完形の鉈で、長さ9.8cm、幅1.1cm、厚さ0.2cmを測る。先端は鋭利で、中央に稜を有する。基部は丸く納めており、裏面は丸く窪む。この他に、８号土壙墓からは鉄滓が出土している。

９号土壙墓（第100図）

R10区で検出された隅丸長方形プランの土壙墓である。この土壙墓は、徐々に北側に下がり北端で急に落ち込むのが特徴的。長さ1.26m、幅51cm。深さは南側で10cmであるが、北側では径60cmの円形に掘込まれ深さ71cmに達する。この落ち込みからのみ多くの土器が出土した。調査段階では同一の遺構と認識していたが円形土坑に切られた土壙墓の可能性が強い。主軸はN-5°-E。

土器（第101図）１～10はいずれも甕の口縁部破片である。「く」字状口縁（１～７）と逆「L」字状口縁（８～10）の２者がある。２は口縁直下に山形突帯文、９は「M」字状突帯文を持つ。口縁端部を肥厚させ、窪ませるものが多い。胎土には赤褐色の砂粒を含む土器が目立つ。１の復原口径24cm、７は30cm、10は37cm。11は径6.2cmの摘み部から端正に拡がる蓋。外面は細かいハケ目調整。12は外面丹塗りで細身の高坏脚部片。13は支脚で部厚な筒状の器形で器高14.3cm、底径８cm。14は器台で復原口径11.6cm。外面および内面上部に荒いハケ目調整、内面は指圧痕が残る。



第102図　貯蔵穴・円形周溝状遺構配置図（1/1,600）

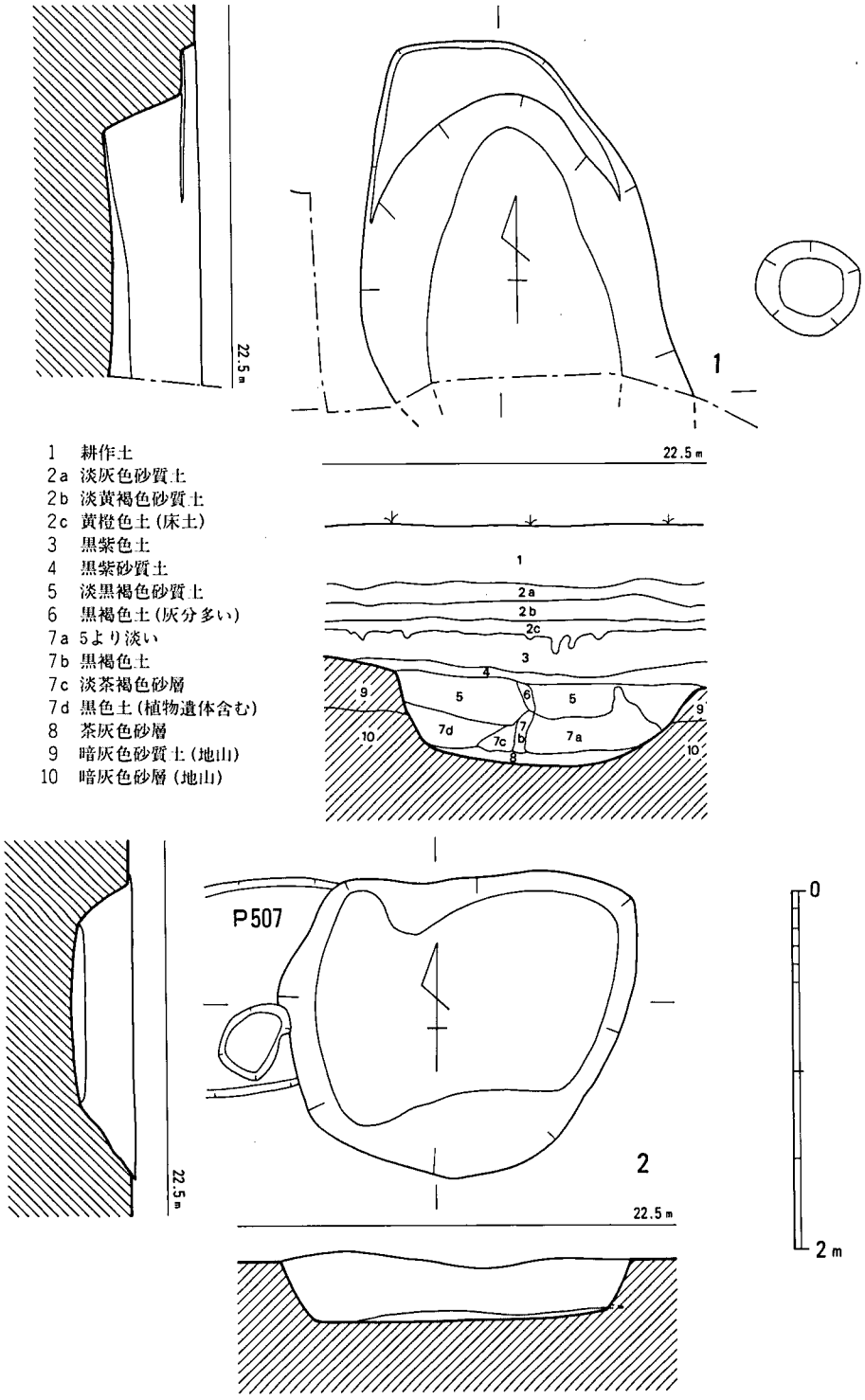
7．貯蔵穴

一辺２ｍ前後の方形プランを基本とし、丸みのある掘込みを持つものを貯蔵穴とした。調査区の東側に５基が検出され、１～３号の３基は纏まるが、４・５号は単独である。４号貯蔵穴からは炭化米が多量に出土した。５基とも中期後半の時期である（第102図）。

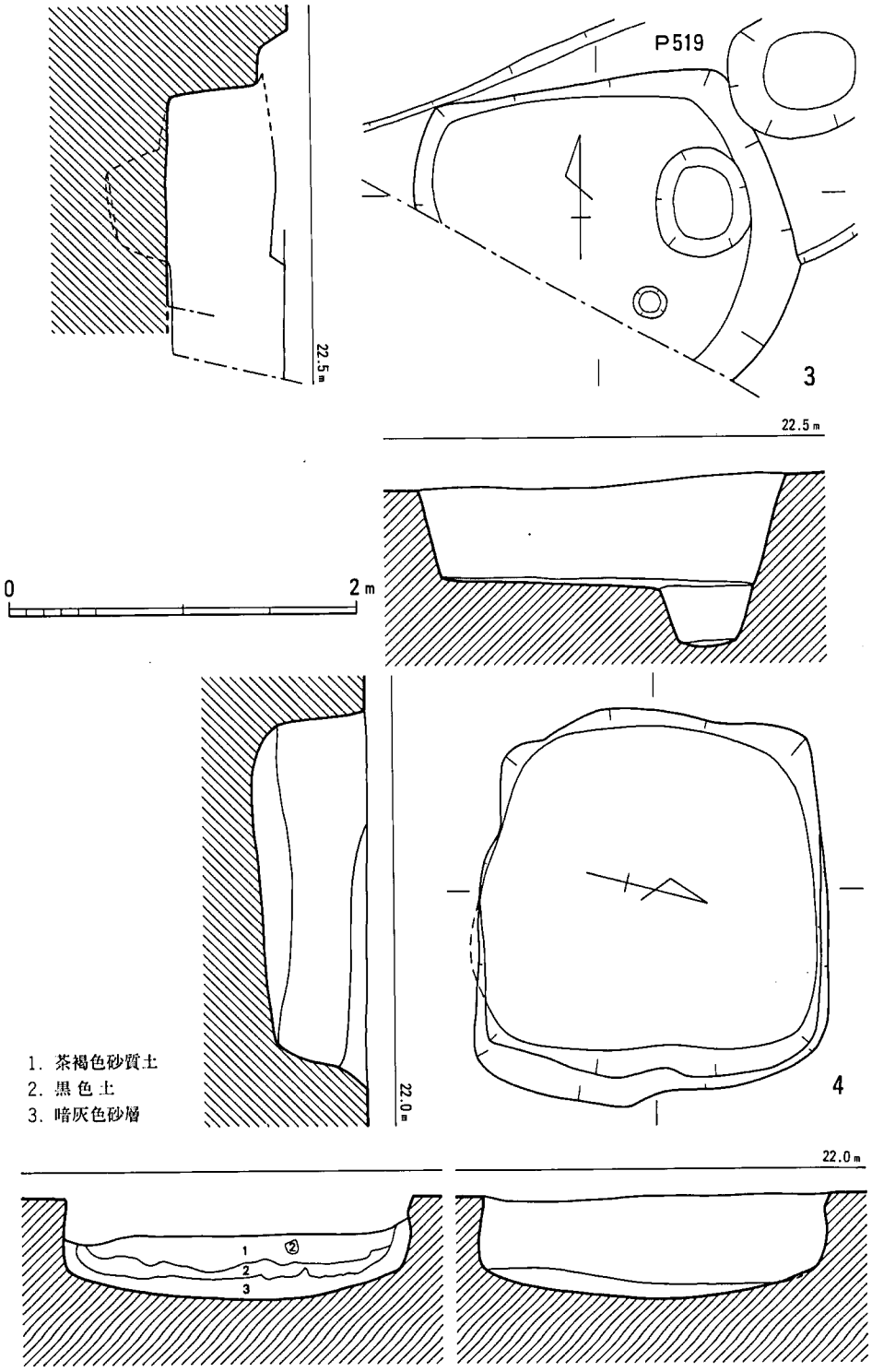
１号貯蔵穴（図版52　第103図）

Q10区に検出され、南側は調査区外にある。北側にテラスを持つ長方形のプランで、東西2.04ｍ以上、南北1.7ｍを測る。底面は緩く窪み、深さ50cm。９層の暗灰色砂質土を掘込み、黒色の７ｄ層には植物遺体が残る。甕・高坏が出土。

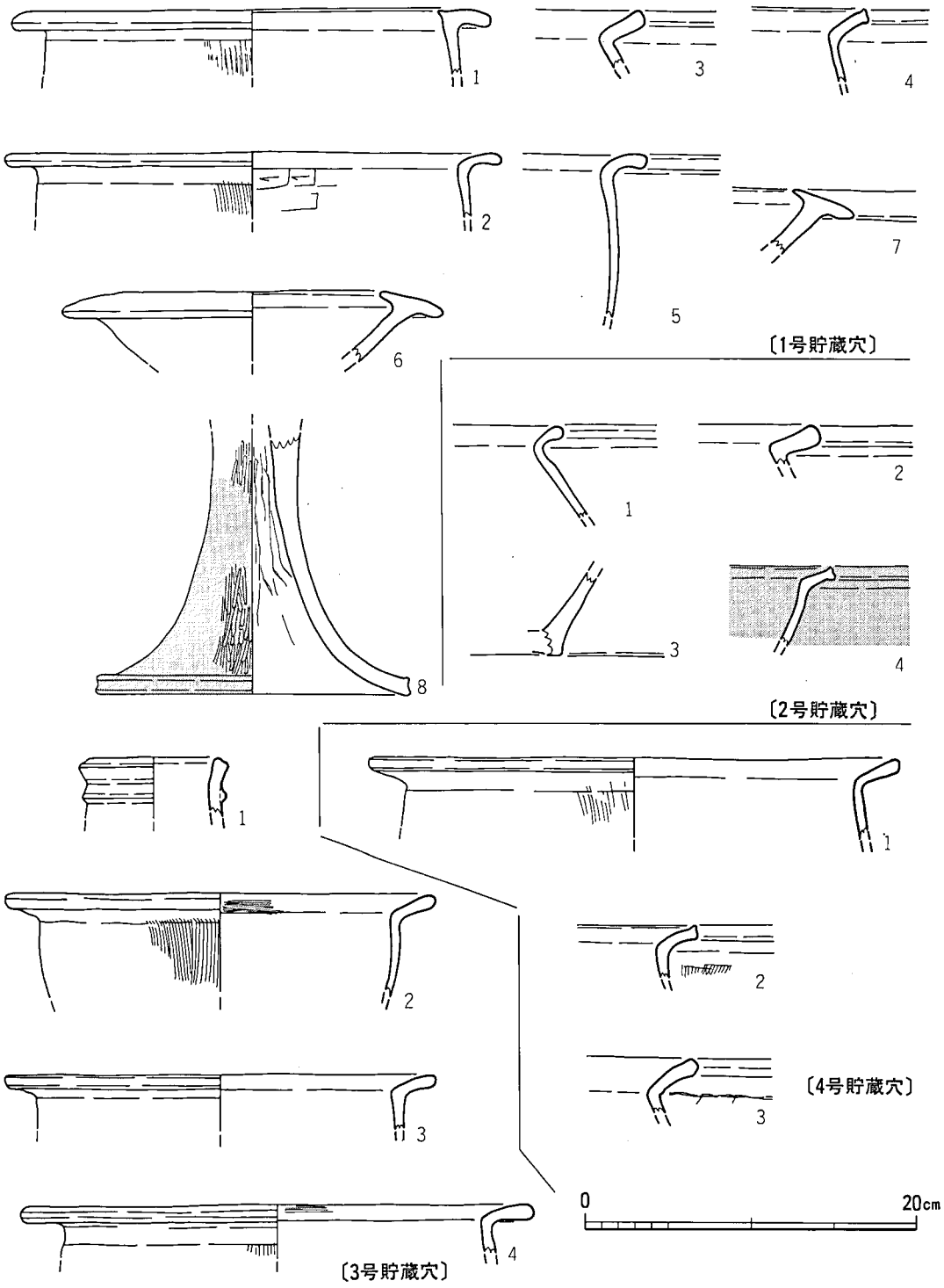
土器（第105図１～８）１は逆「L」字状口縁の甕。口縁部内端部がわずかに突出し、粗いハケ目調整。復原口径29cm。３・４は「く」字状口縁の甕。６・７は鋤先状口縁の高坏坏部。８は高杯の脚部で、細身の脚からスマートな端部へ移行する。外面は丹塗りで縦方向のミガキ、内面には絞り痕が残る。脚部径19cm。下層出土は１・２・４～６・８の土器。



第103図 1・2号貯蔵穴実測図(1/40)



第104図　3・4号貯蔵穴実測図（1/40）



第105図　1～4号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

2号貯蔵穴（図版52　第103図）

1号貯蔵穴の北東5mに位置する東西2m、南北1.65mの不整方形の貯蔵穴。床面は中央付近がすぼまり、深さ30cmと浅い。埋土は1号貯蔵穴と同様に下部に黒色土が堆積する。土器が少量出土したほかに、堅果種子350gが出土。

土器（第105図1～4）1・2は「く」字状口縁の甕で口縁部の小破片で、1の端部は肥厚する。3は甕の底部。4は内外面とも丹塗りの小型甕で、口縁端部は凹状になる。

3号貯蔵穴（図版53　第104図）

1号貯蔵穴の東側R10区に検出されたが、P519に切られ、南側は調査区外になる。東西2.2m、南北1.7m以上の方形プランで東側に径60cm、深さ34cmのピットがある。床面はそのピットの方向に若干傾斜し、深さ61cm。壺・甕が出土した。

土器（第105図1～4）1は上層出土の長頸壺で口縁部直下に山形の突帯文を巡らす。2・3は「く」字状に近い口縁部の甕で、2は胴部張りが無く、鉢に近い器形であろう。外面は縦方向のハケ目、口縁部内面は横方向の細かいハケ目調整を施す。復原口径26cm。4は逆「L」字状口縁の甕で、口唇部は肥厚する。内面のみに化粧土を塗布する。復原口径31cm。

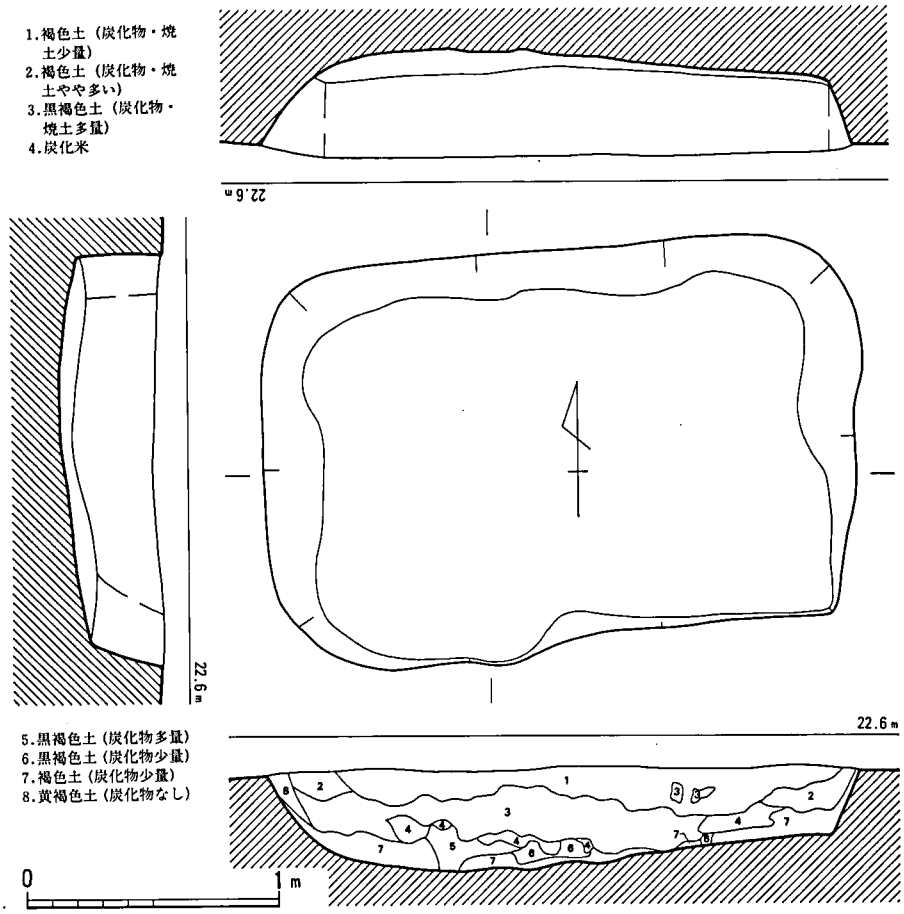
4号貯蔵穴（図版53　第104図）

P7区の古墳時代後期70・71号竪穴住居跡の下層で検出された貯蔵穴で、東西2.3m、南北2mの隅丸方形プラン。やや袋状に掘込まれ下底面との境は丸く、底面もU字状になり、深さ58cm。埋土は3枚あり、1層は茶褐色砂質土、2層は黒色土で10cm内外、最下層の3層は暗灰色砂層で、いずれもレンズ状に堆積する。2層から炭化米が4.1kgと多量に、また少量のアワが出土した。

土器（第105図1～3）いずれも「く」字状口縁の甕の破片で、1層出土。1・3の口唇部は肥厚し、2はやや凹む。1の外面はハケ目調整、復原口径32cm。

5号貯蔵穴（図版54・55　第106図）

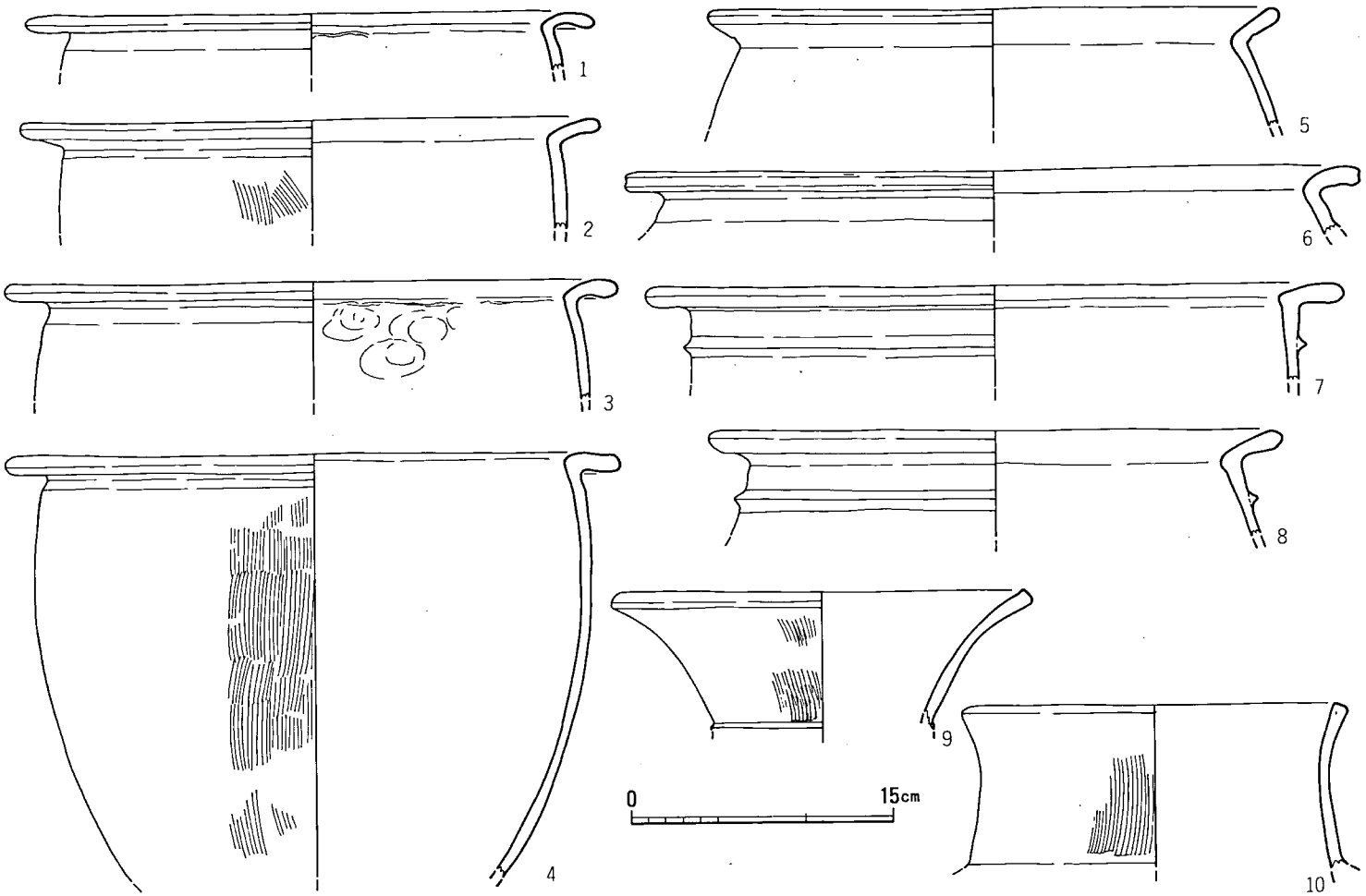
5号貯蔵穴はT10区に位置し、5号円形周溝状遺構の内側にある。この一帯は弥生時代の遺構が密集する地区で、本貯蔵穴の北1mには106号竪穴住居、北西3mには29号土坑、北東4mには38号土坑、東4mには20号甕棺墓や28号土坑等が近接するが、他の貯蔵穴については周辺に存在しない。位置関係から、また出土遺物に年代差がほとんど見られないことから5号円形周溝状遺構との関連性に注意が払われるが、5号円形周溝状遺構の内側でもかなり西端に寄っていることから、両者の有機的な関係については不明と言わざるをえない。平面プランは2.3×1.6mのやや形が崩れる隅丸長方形を呈し、深さは最高で39cm。壁の立ち上がりは直線的にまっすぐ立ち上がる部分もあるが、全体的にはやや緩やかになる。底面には径5cm前後、深さ5～10cmの小穴が



第106図　5号貯蔵穴実測図（1/40）

約20ほど検出されたが、その機能は不明。全体に満遍なく炭化米が包含されるが第1～3層には焼土も含まれ、特に第3層の炭化米と焼土の量はおびただしいものであった。また、第4層は炭化米だけのブロック状の層であり、第5層にも多量の炭化米が含まれるが焼土については皆無であった。本貯蔵穴の埋土をすべて水洗した結果、パンケース2箱分（5.7kg）出土の炭化米が得られた。なお、土器の出土はパンケース半分程度で、その多くは第3層から出土した。

土器（第107図）1～8の甕のうち、多くは摩滅により器面調整不明だが、2・4の外面にはハケが、内面にはナデが施される。3・6は内外面ともにナデで、3については内面頸部下に指頭圧痕が見られる。復原口径は1から順に32cm、33cm、35cm、35cm、33cm、42cm、40cm、33cmを測る。二次加熱による変色は5だけに見られる。9・10はいずれも壺の口縁部になろう。9の復原口径は24cmで、外面はハケ、内面はナデで、頸部になるであろう部分には突帯文がわずかに窺える。10の復原口径22cmで、外面はハケ、内面はナデが施され、頸部の屈曲がわずかに残る。



第107図　5号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

8．土　坑

調査区全域にわたり40基が検出されたが、主に調査区の中央南側から東側に集中する傾向がある。形態は長円形ないし方形を呈するが、東側調査区の一群は方形で、38号のように４ｍと大きい土坑もある。

１号土坑（図版55　第108図）

Ｃ３区の北東隅にあり、５号竪穴住居跡の南から検出された楕円形プランの土坑で、北壁側にテラスを設けている。断面は「U」字状を呈し、埋土から少量ではあるが甕・椀などの弥生土器小片が出土した。規模は1.1×1.0ｍ、深さ77㎝を測る。

土器（第109図）１・２は「T」字状口縁の甕の小破片資料、３は単口縁の椀の破片資料で、復原口径15.2㎝を測る。１・２が口縁部内外をヨコナデ仕上げの他は器面風化のため調整手法は不明である。

２号土坑（図版56　第108図）

Ｄ３区にあり、５号竪穴住居跡の南東から検出された楕円形プランの土坑で、断面はＵ字状をなす。埋土からは少量の炭化物と弥生土器小片が出土した。規模は0.95×0.85ｍ、深さは中央部で60㎝を測る。

土器（第109図）１は甕の底部資料で、底径は7.2㎝を測る。調整は外面ハケ、内面ナデて仕上げた灰黄褐色を呈す焼成良好な土器である。

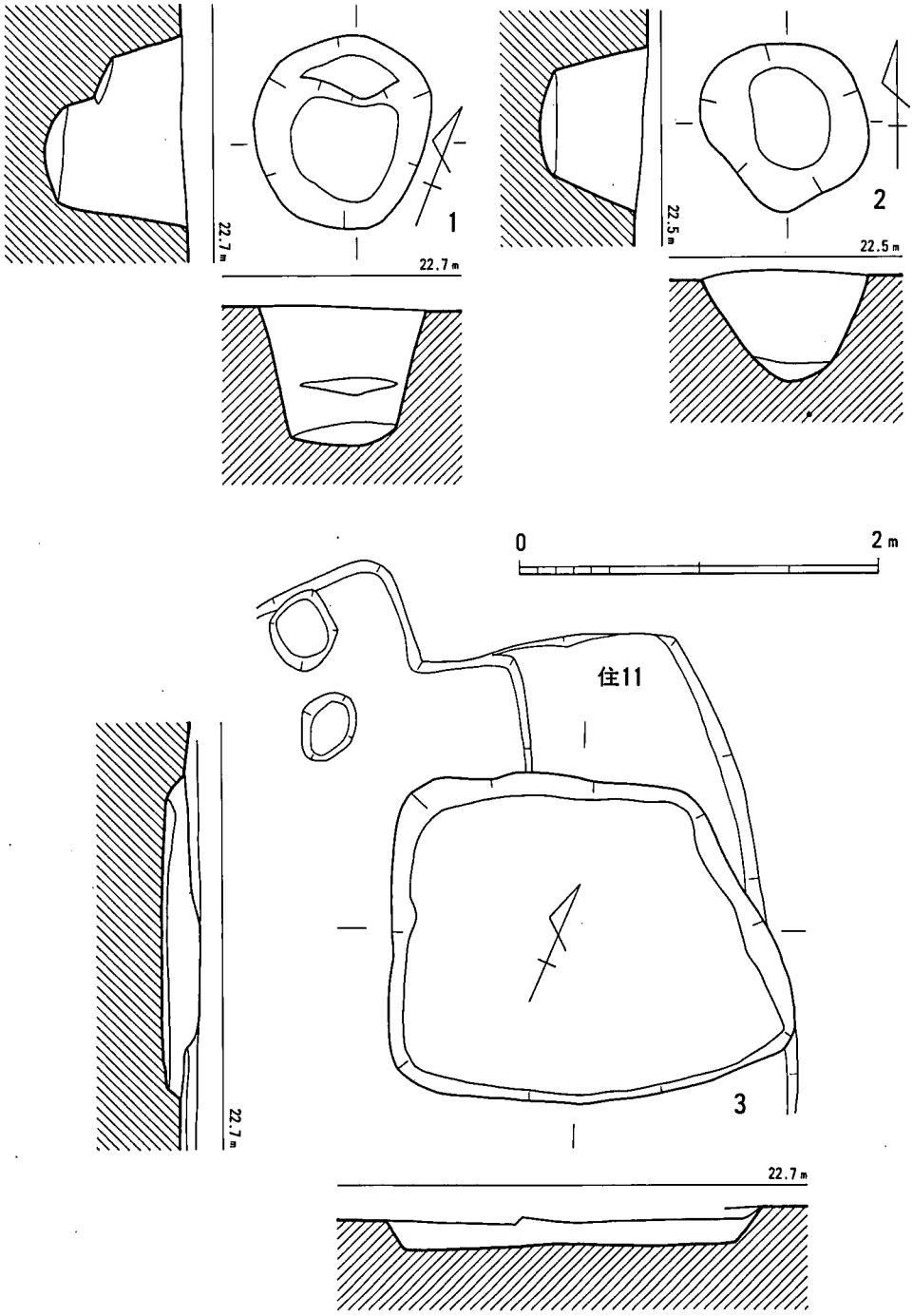
３号土坑（第108図）

Ｂ２−Ｃ２区にわたり、11号竪穴住居跡を切った状態で検出された不整方形プランの土坑である。埋土からは少量の炭化物片と弥生土器小片が出土しただけである。規模は最大部で2.25×1.84ｍ、深さは残りの良い北壁側で18㎝を測る。

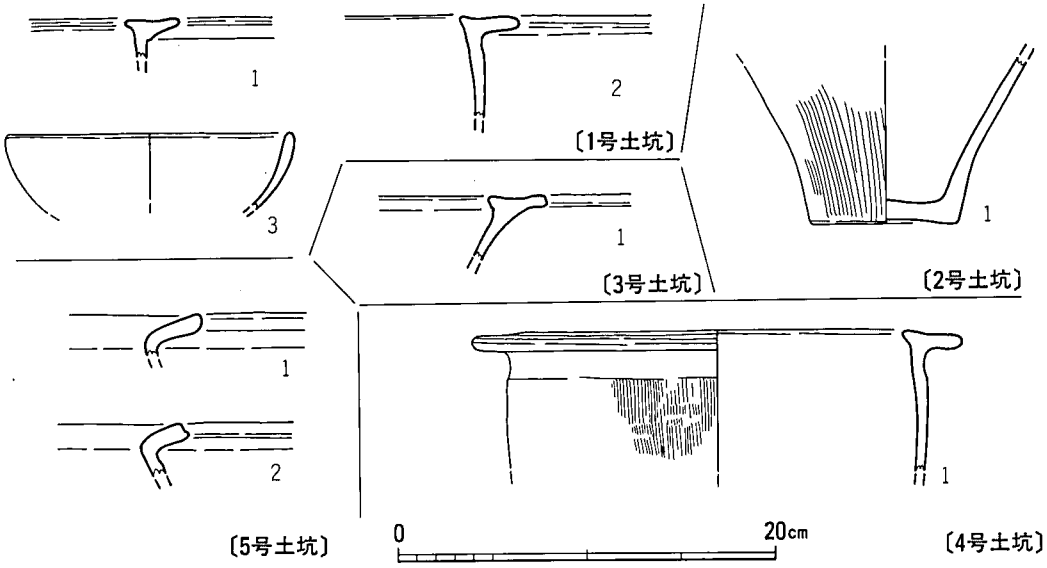
土器（第109図）１は鋤先状口縁の壺の小破片である。調整は器面風化のため不明で、色調は黄橙色を呈し、焼成良好である。

４号土坑（第110図）

Ｄ１区から検出された不整長方形プランの土坑で、北東隅は路線外のため未掘である。北西隅には不整形のピットが穿たれている。埋土からは少量の炭化物と弥生土器片が数点出土しただけである。規模は3.3×2.2ｍを測り、深さ５㎝と浅い。



第108図　1～3号土坑実測図（1/40）



第109図　1～5号土坑出土土器実測図（1/4）

土器（第109図）1は「T」字状口縁の甕の破片資料で、復原口径は26cmを測る。調整は胴部外面ハケ、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は灰黄色を呈し、焼成も良好である。

5号土坑（図版56　第111図）

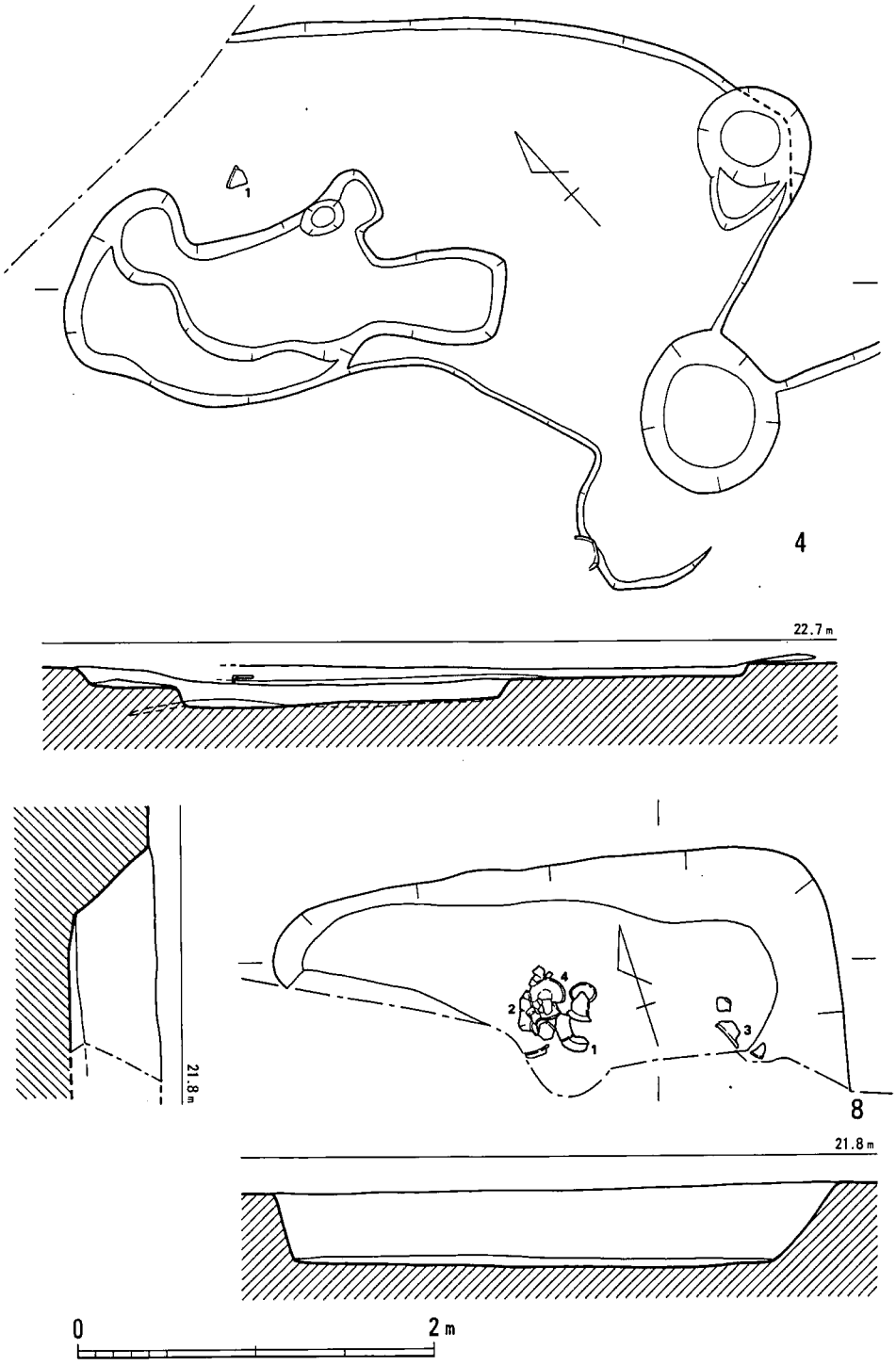
D4区にある不整楕円形プランの土坑で、南壁側にテラスを設けており、断面は「U」字状をなしている。埋土からは弥生土器小片が若干出土しただけである。規模は0.9×0.8m、深さ69cmを測る。

土器（第109図）1・2とも逆「L」字状口縁の甕の口縁部小片である。内外ともヨコナデ仕上げで、1は淡黄白色、2は淡黄褐色を呈し、焼成も良い。

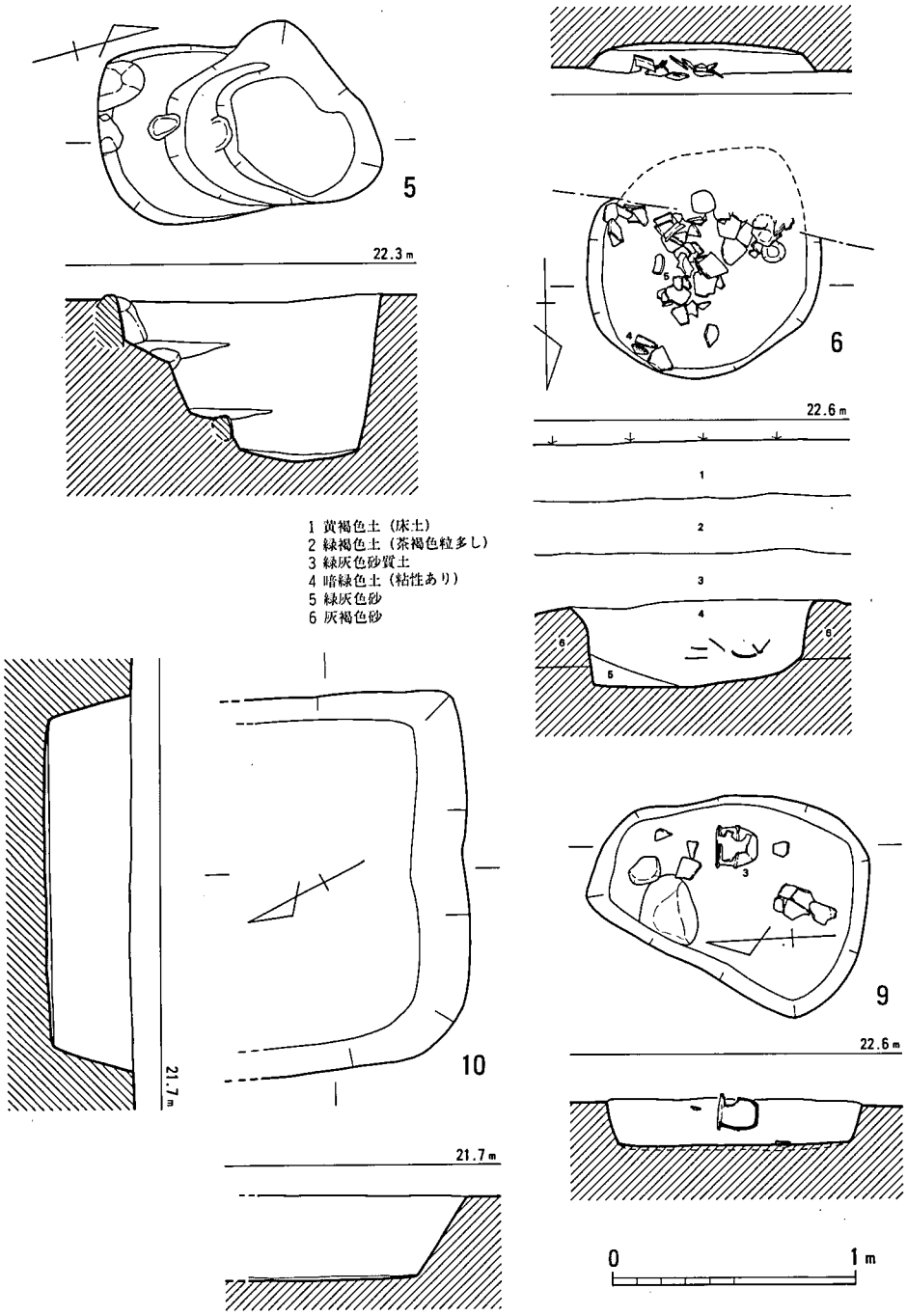
6号土坑（図版57　第111図）

G5区で、34号竪穴住居跡の2.5m南側に位置する。平面形は円形を呈するものと思われるが、南半部は調査し得ていない。径96cm、深さ35cmの遺存状態である。底面は東側に下がっており、10cmほど浮いた状態ではあるが、土器が多量に出土している。また、埋土上位から砥石3点と磨石1点が出土した。

土器（第112～114図1～23）1～5は壺の口縁部破片で、1～3が鋤先状口縁、4・5は広口壺の口縁部である。器面調整は箆ミガキを施し、4の頸部外面には暗文がみられる。5は頸部と胴部が接合しないものの同一個体で、頸部に三角、胴部にコ字形突帯文を貼付している。



第110図　4・8号土坑実測図（1/40）



第111図　5・6・9・10号土坑実測図（1/30）

6は壺の底部破片で、若干の上げ底状をなす。7は逆「L」字形口縁の甕で、口縁部は肥厚し、内面にも突出する。頸部下位に太めの三角突帯文を貼付している。8～15・19・20は「く」字形口縁の甕で、口径により大（15・20）、中（9～14・19）、小（8）に分けられる。口縁端部の形状は丸く納めたもの（9～11・15・20）と口唇部が若干窪むもの（8・12～14・19）とがある。また、9・12・13・20は頸部のやや下位に箆描沈線を施し、14・15は三角突帯文を貼付している。器面調整は何れも口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目による。16・17は甕の底部破片で、平底を呈する。21～23は逆「L」字形口縁の甕で、21は内面にも突出する。23は頸部のやや下位に「M」字形突帯文を貼付しており、残存部位の内外面ともに丹を塗布している。口径は21が30cm、22は35cm、23は36cmに復原した。18は高坏の坏部破片で、口唇部は肥厚する逆「L」字形を呈する。復原口径は20cm。

石器（第169図1～3・8）いずれも片岩系の砥石で、欠損が著しく全体の形態がわかるものはない。1については欠損後に二次加熱を受けており、全体的に赤褐色に変色している。8は平坦な両面が使用された磨石で、全体的に二次加熱を受け、淡い赤褐色に変色している。

7号土坑（付図）

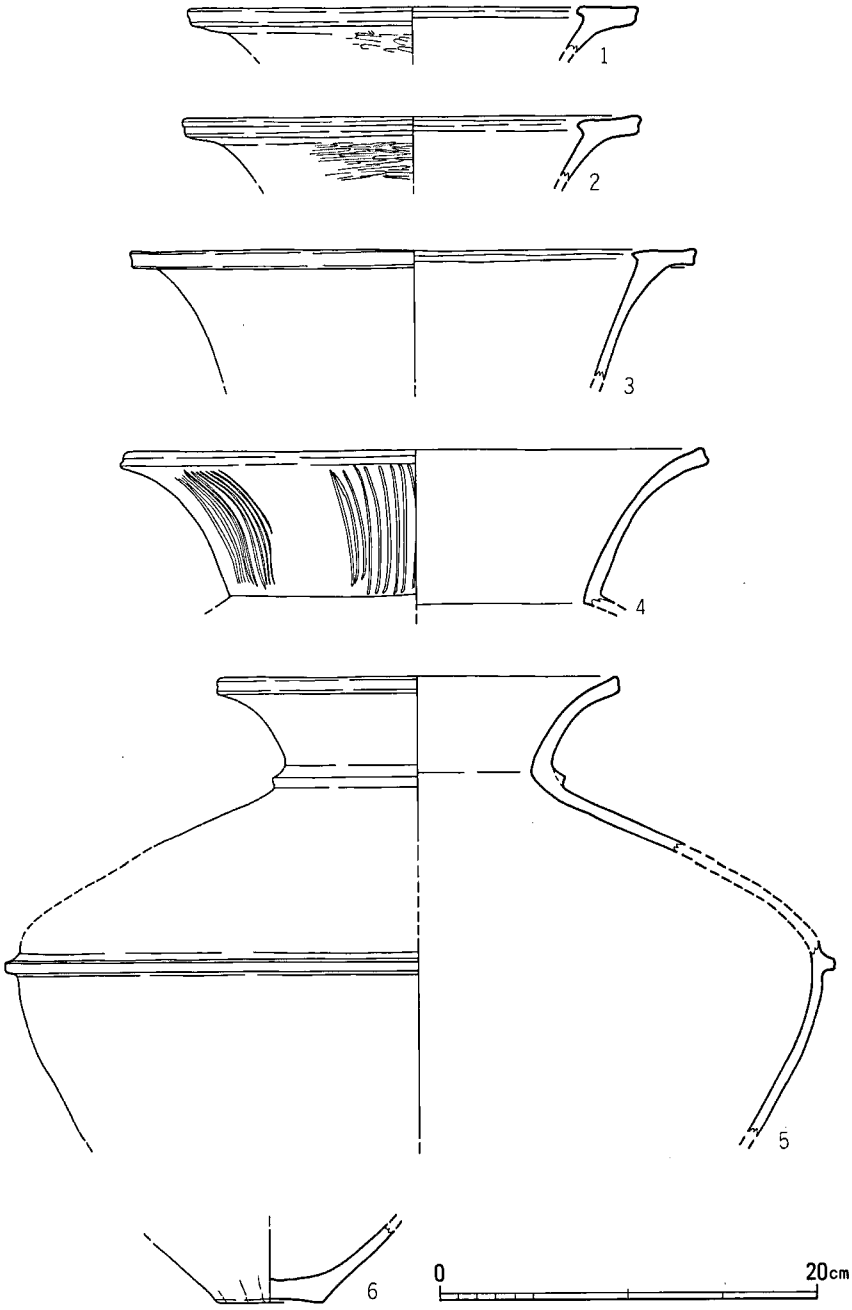
J4区37号竪穴住居跡の東側で検出した土坑であるが、不手際により図化を怠っており、詳細は不明となってしまった。埋土中から土器が出土している。

土器（第114図1・2）1は広口壺の口縁部破片で、口径は36cmに復原した。口縁部はヨコナデにより、口唇部がやや窪んでいる。内面は横方向の丁寧な箆ミガキ、外面は磨滅しているが箆ミガキであろう。2は逆「L」字形口縁の甕で、復原口径は32cmを測る。口縁部平坦面は水平で、内面にも突出している。

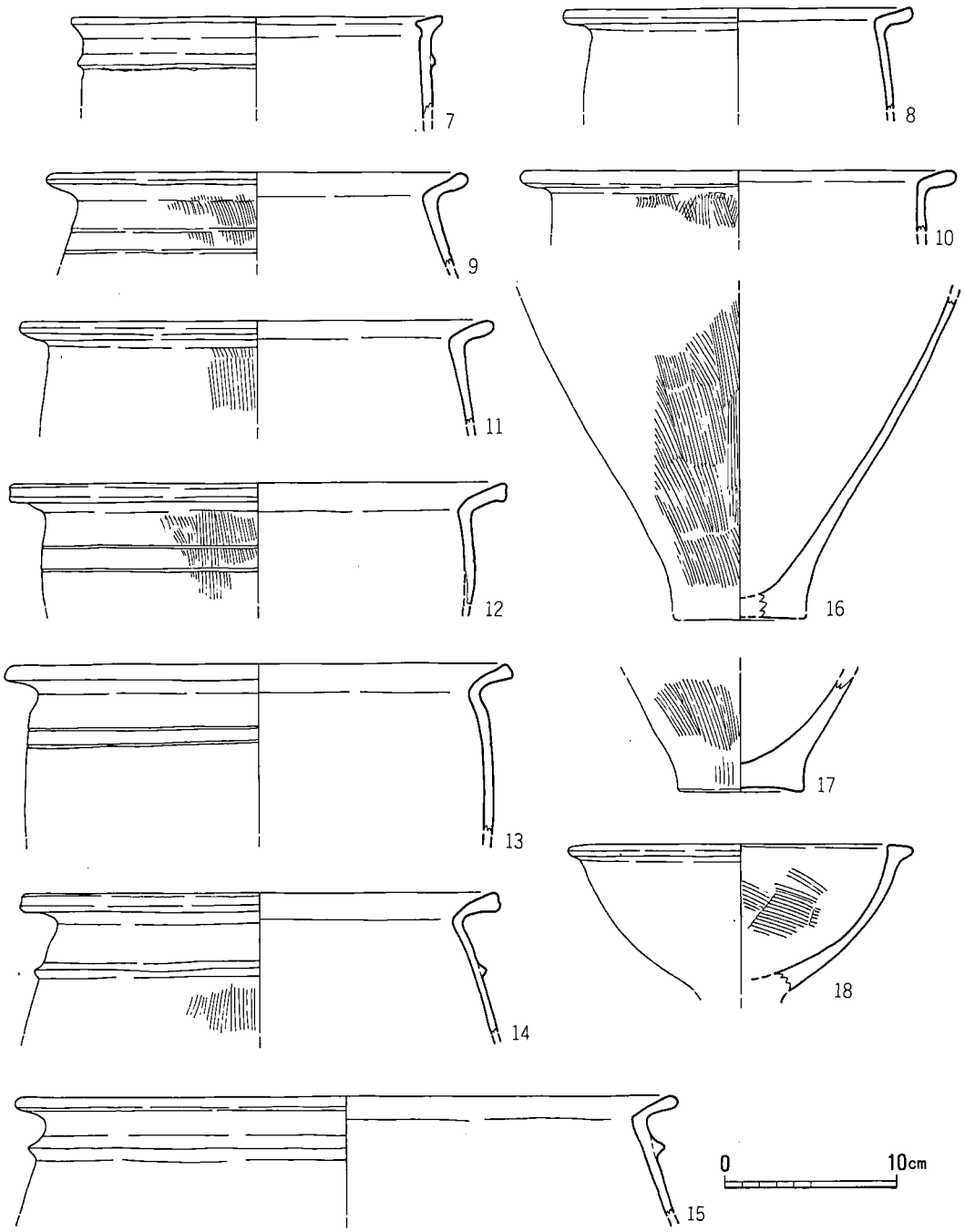
8号土坑（図版57　第110図）

H6区に位置し、南半部は調査区外に伸びる。北壁部分の検出であるが、平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものであろう。北壁長3.15m、深さ43cmの遺存状態である。底面はほぼ水平である。埋土中から土器が出土している。

土器（第115図1～4）1は広口壺の口縁部破片で、口径は37cmに復原した。口縁部は大きく外反し、端部は上方に立つ。2は無形壺で、器高17cm、復原口径17.5cm、底径8.8cmを測る。口縁部は「く」字形に屈曲し、よく張った胴部から上底気味の底部に移行する。器面調整は口縁部ヨコナデ、外面箆ミガキ、内面ナデにより、頸部内面から外面にかけて丹を塗布している。3は「く」字形口縁甕であるが、屈曲の度合いは弱い。口径は32cmに復原した。4は高坏で、口唇部を丸く納めている。器高14.8cm、口径18.8cm、脚径12.8cmを測る。器面は磨滅しているが、坏部内面から脚部外面にかけて丹を塗布している。



第112図　6号土坑出土土器実測図.1（1/4）



第113図　6号土坑出土土器実測図.2（1/4）

9号土坑（図版58 第111図）

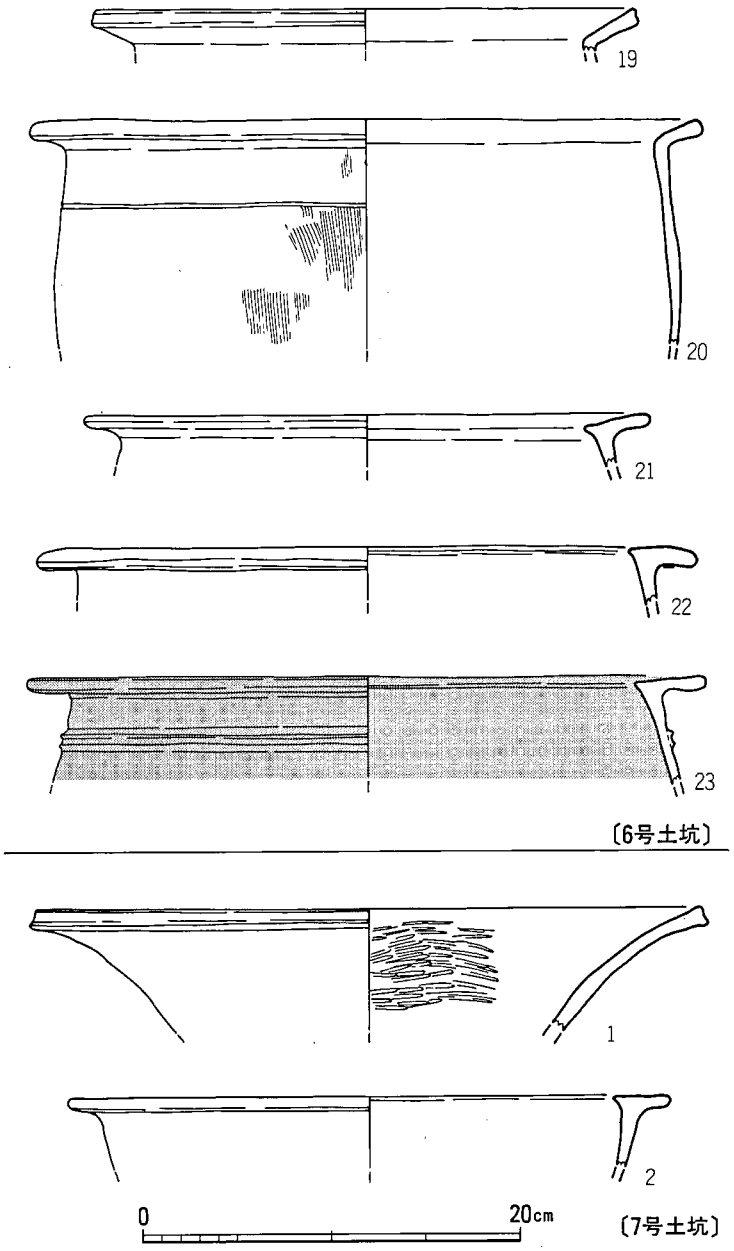
K5区で、53号竪穴住居跡の1m西側に位置する。不整円形を呈し、長軸1.13m、短軸0.82m、深さ19cmを測り、底面は水平である。小型の割には割合多くの土器が出土した。

土器（第115図1～3）

1・2は「く」字形口縁の甕で、1の口唇部は丸く納めている。2の口縁端部は上方に立つ。頸部のやや下位に三角突帯文を1条貼付している。口径は1が27.8cm、2は25.4cmに復原した。3は樽形の鉢で、器高15.9cm、口径15.4cm、底径8cmを測る。口縁部は逆「L」字形を呈し、口唇部は丸く納めている。胴部は張りをみせ、中位に「M」字形突帯文を貼付している。

10号土坑（第111図）

I-J6区で、64号竪穴住居跡の1.5m東側に位置する。本来隅丸



第114図　6・7号土坑出土土器実測図（1/4）

長方形を呈していたものと思われるが、調査工程の都合上北側は未検出となってしまった。南辺長1.5m、深さ33cmを測る。底面はほぼ水平である。埋土中から僅かながら土器が出土している。

土器（第115図1・2）1・2は逆「L」字形口縁甕で、口縁部は肥厚することなく水平に折れる。口径は1が29.8cm、2は32cmに復原した。

11号土坑（第116図）

I6区で、弥生時代の64号竪穴住居跡の0.5m西側に位置する。方形を呈し、長軸2.48m、短軸2.22m、深さ25cmの規模である。底面は平坦であるが、南側に傾斜している。埋土中から土器片が出土している。

土器（第117図1）逆「L」字形口縁の甕であるが、口縁部は肥厚せずに水平に開く。口径は35cmに復原した。

12号土坑

I6区に位置し、弥生時代の63号竪穴住居跡に切られる。北壁の一部を残すのみで、大半が調査区外に伸びるため詳細は不明。遺物は磨製石剣の基部1点のみ出土。

石器（第166図2）輝緑凝灰岩製と考えられる磨製石剣の基部。石材が粗悪なためか、全面に気泡状の穴が無数にあり、摩滅も著しい。残存長11.4cm、最大幅4.2cm、最大厚1.7cm。

13号土坑（第116図）

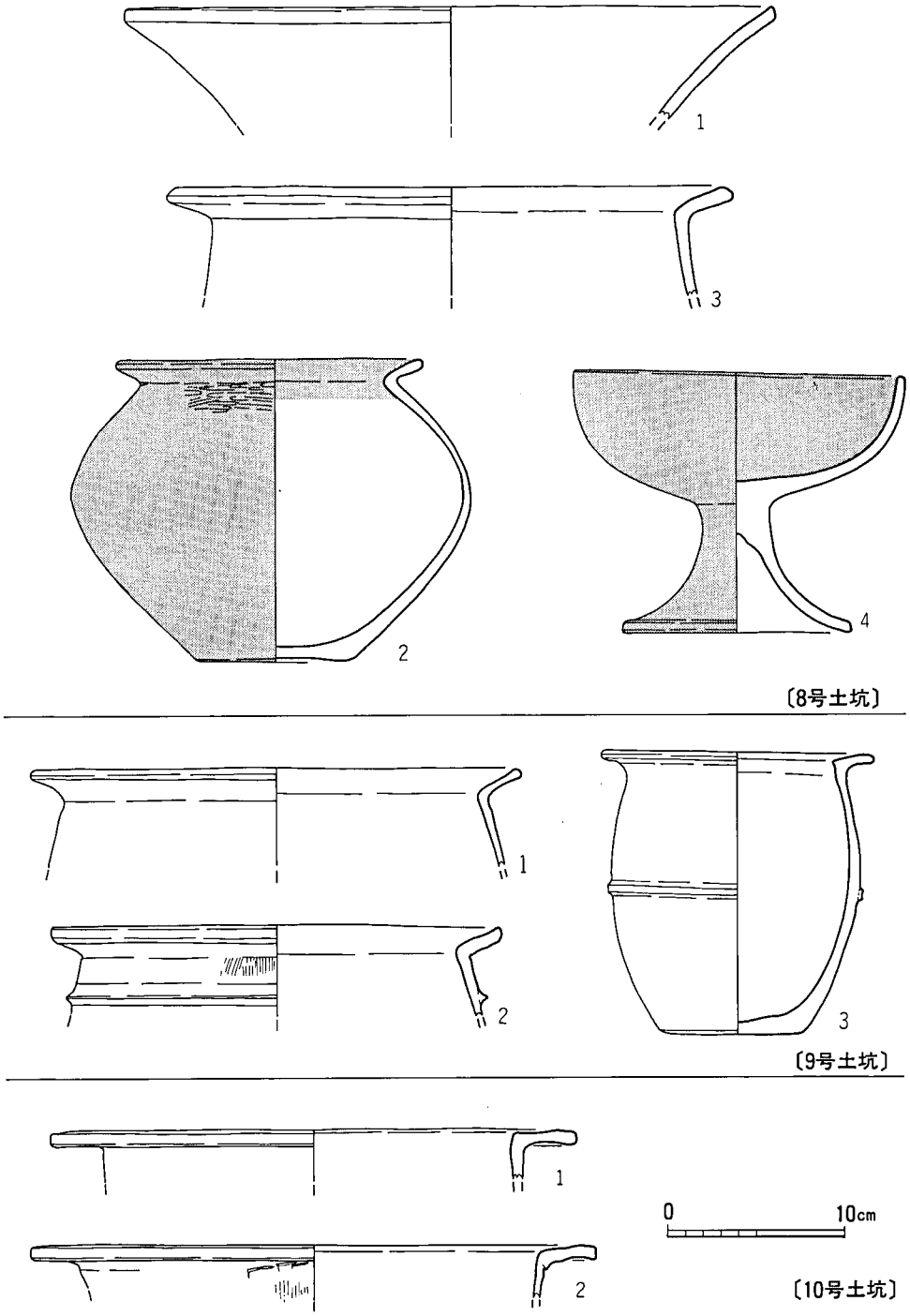
J7区に位置し、東接して14号土坑がある。北壁のみの検出で、南半部は調査区外に伸びる。不整形を呈し、東西長2.02mを測る。残存高は63cmと深めである。

土器（第117図1）1は高坏の坏部破片で、口縁部は肥厚することなく外方に傾斜している。口径は25cmに復原した。

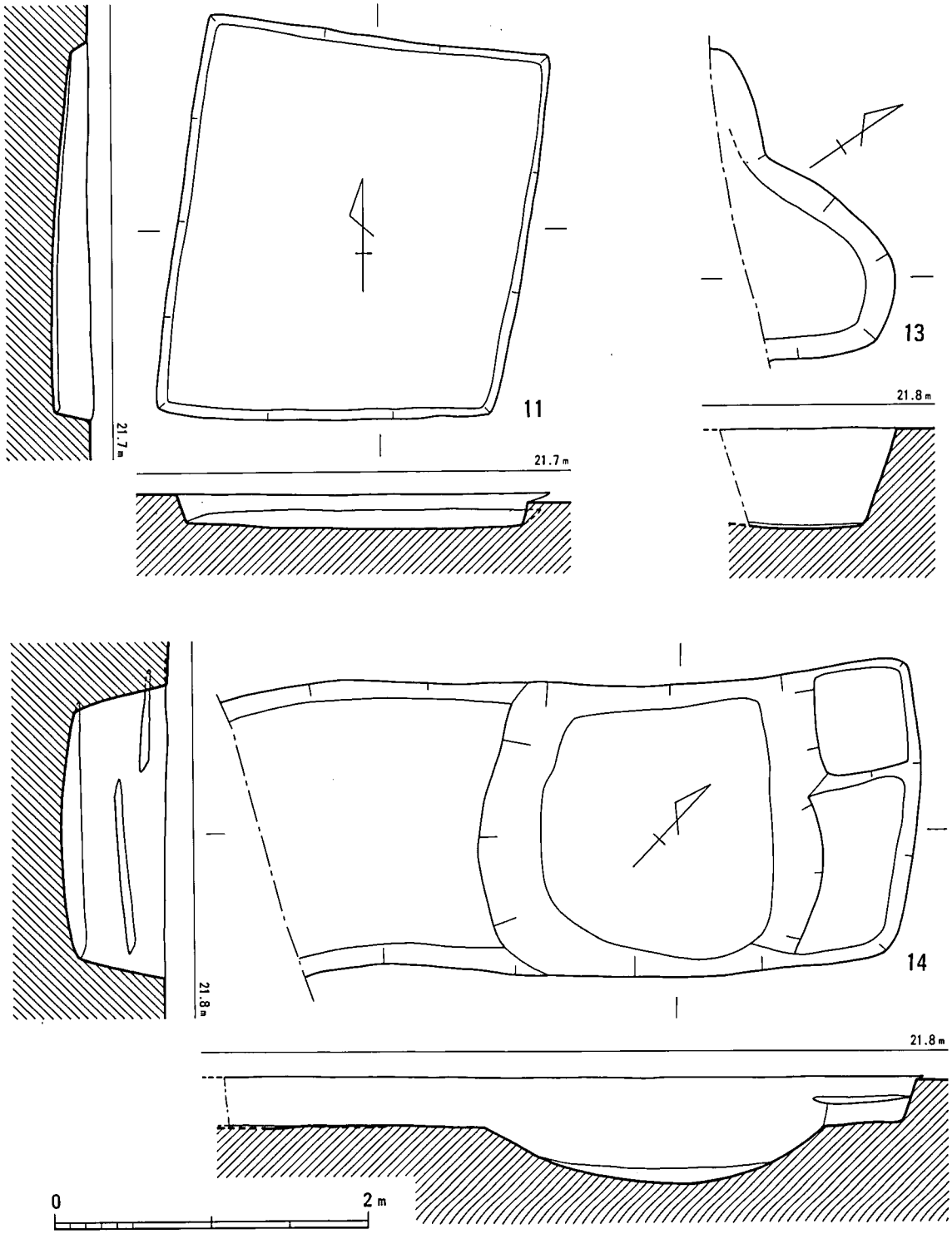
14号土坑（第116図）

J-K7区で、調査区南側中央に位置する。長方形を呈し、残存長4.2m、幅1.86mで、中央部での深さ68cmを測る。中央部が底面より35cm深めに掘られている。埋土中からは土器の他に石庖丁が出土している。

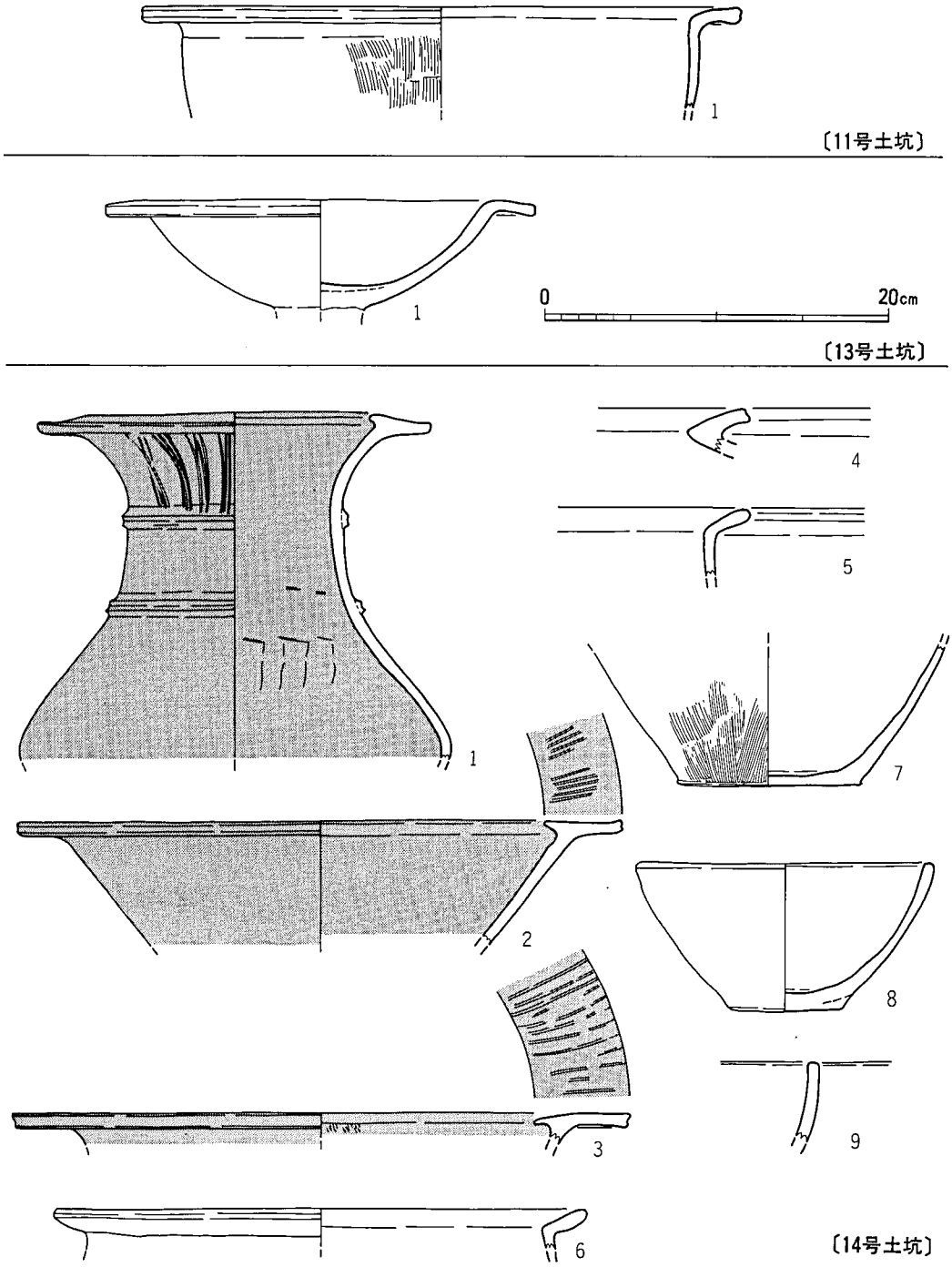
土器（第117図1～9）1～3は鋤先状口縁壺である。1の口縁部は外方に傾斜し、胴部はS字形に屈曲する。頸部の上位と下位に「M」字形突帯文を貼付している。器面調整は箆ミガキにより、口縁部平坦面及び1の頸部外面には暗文がみられる。またいずれも丹を塗布している。1の口径は22.8cmに復原した。4は口縁部小片であるが、傾きからして無形壺になるかと思われる。5・6は「く」字形口縁の甕である。口縁部は肥厚せずに、端部を丸く納める。7は底



第115図　8～10号土坑出土土器実測図（1/4）



第116図　11・13・14号土坑実測図（1/40）



第117図　11・13・14号土坑出土土器実測図（1/4）

径が10.8cmと大きいことから鉢の底部になろう。肉薄の平底である。8・9は鉢で、口縁部は丸く納めている。8は器高8.5cmで、口径は17.4cm、底径は6.7cmに復原した。

石器（第167図13）輝緑凝灰岩製の石庖丁で、欠損後の研ぎ直しは見られない。

15号土坑（第118図）

K7区で、14号土坑の2m南東側に位置する。北壁部の検出で、残存長1.75m、幅2.05m、深さ10cmを測る。底面はフラットである。北壁依りにピットが存するが、当土坑に関連するかは不明。遺物は出土していない。

16号土坑（118図）

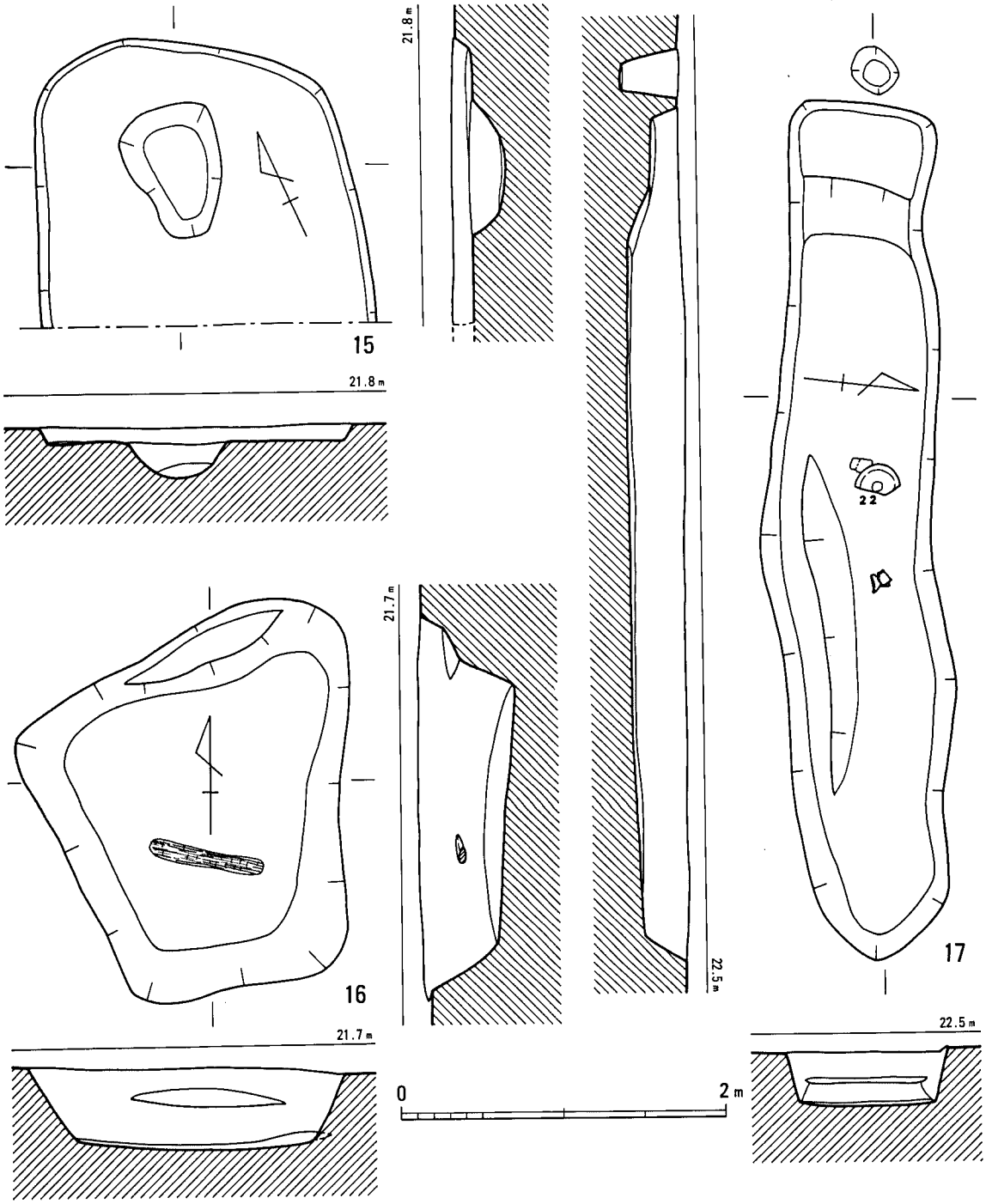
K7区で、15号土坑の0.5m東側に位置する。平面形は不整方形を呈し、長軸2.34m、短軸2.15m、深さ52cmを測る。北壁にテラスを有し、底面は北側に傾斜している。また、底面から25cm程浮いた状態で炭化材が出土している。

土器（第119図1・2）1は逆「L」字形口縁の甕で、内面にも突出する。口縁部は肥厚しない。2は復原底径が11.6cmと甕にしては大きいことから鉢の底部になろう。調整は1・2とも外面ハケ目、内面ナデによる。

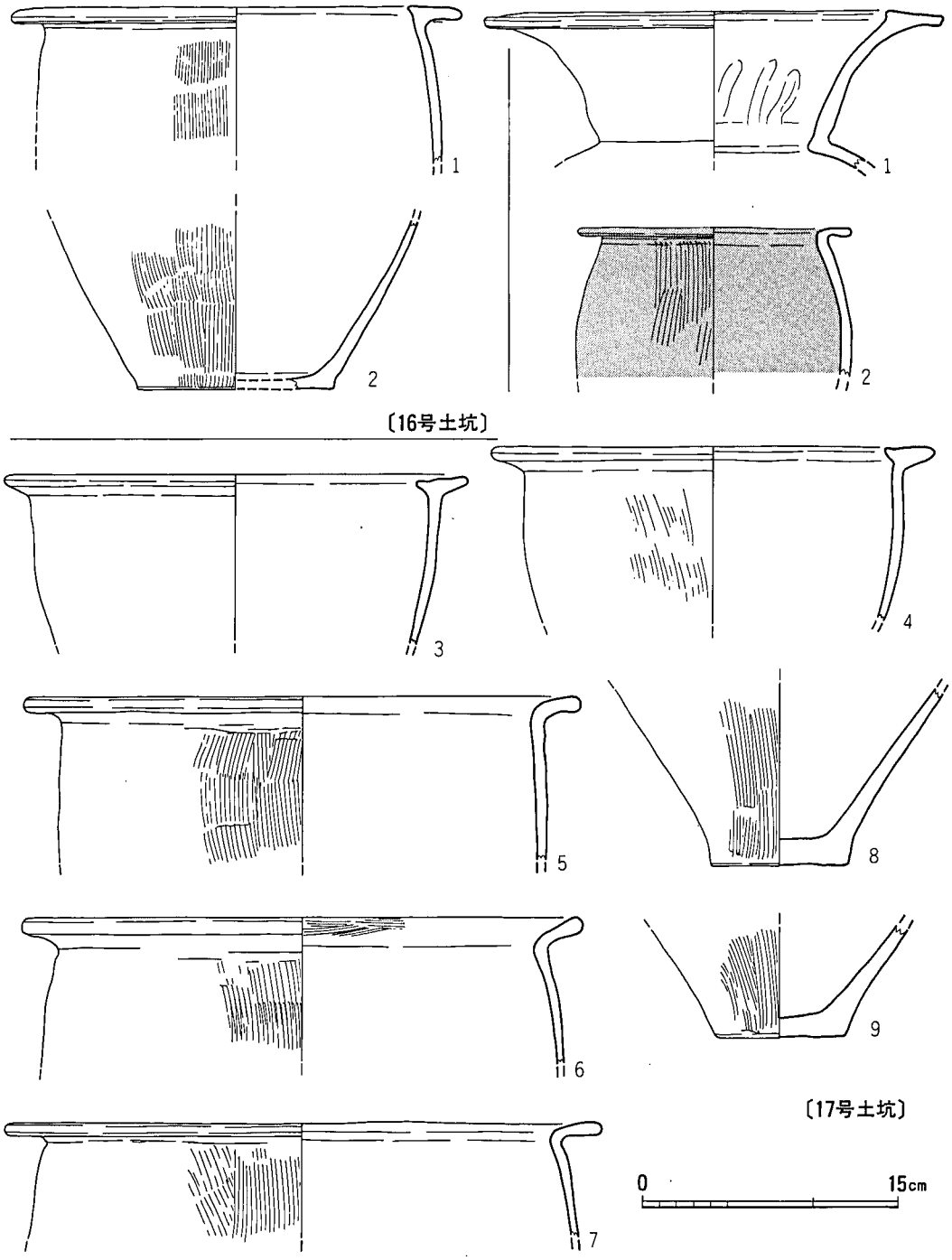
17号土坑（図版58　第118図）

R-S10区で、0.5m北側に67号竪穴住居跡が位置する。溝状を呈し、長軸5.27m、短軸1.06m、深さ34cmを測る。底面はほぼ水平で、西側にテラスを有する。埋土中からは多量の土器が出土している。

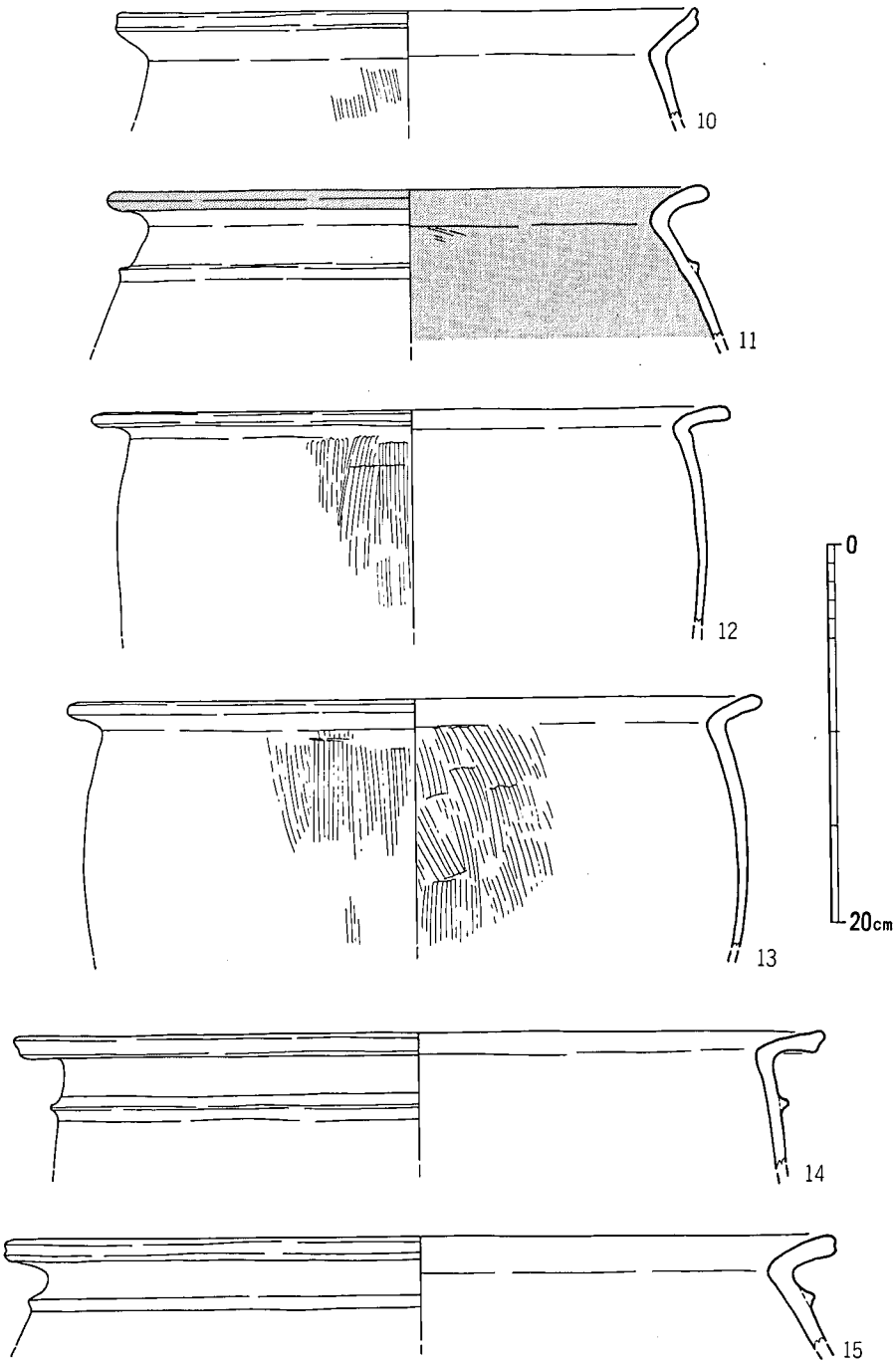
土器（第119～121図）1は鋤先状口縁壺で、頸部から「く」字形に大きく開く。口径は27cmに復原した。2は無形壺で、口縁部は水平に開いている。3～15は甕である。3・4は内側への突出が著しく、「T」字形を呈する。5・7は口縁部が水平に屈曲するもので、端部は丸く納めている。6・10～15は「く」字形口縁の甕で、口唇部を丸く納めるもの（6・11～13）と口唇部が内窪みのもの（10・14・15）がある。また、14・15は頸部のやや下位に三角突帯文を貼付している。8・9は底部破片で、平底を呈する。16は鉢で、口縁部は丸く納める。底部を欠くが、平底をなすものであろう。17～20は高坏で、17～19は坏部で、20は脚部の破片である。17～19の口縁部は鋤先状を呈し、口縁部平坦面は外方に傾いている。器面調整は箆ミガキにより、18・19は内外面に丹を塗布している。口径は17が22.2cm、18は26.4cm、19は26.8cmに復原した。21は鼓形器台で、器高17.5cm、口径13.8cm、底径13.6cmに復原した。22は蓋で、富士山形を呈する。器高13.5cm、口径42cm、摘み部径7.7cmを測る。器面調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ナデによる。



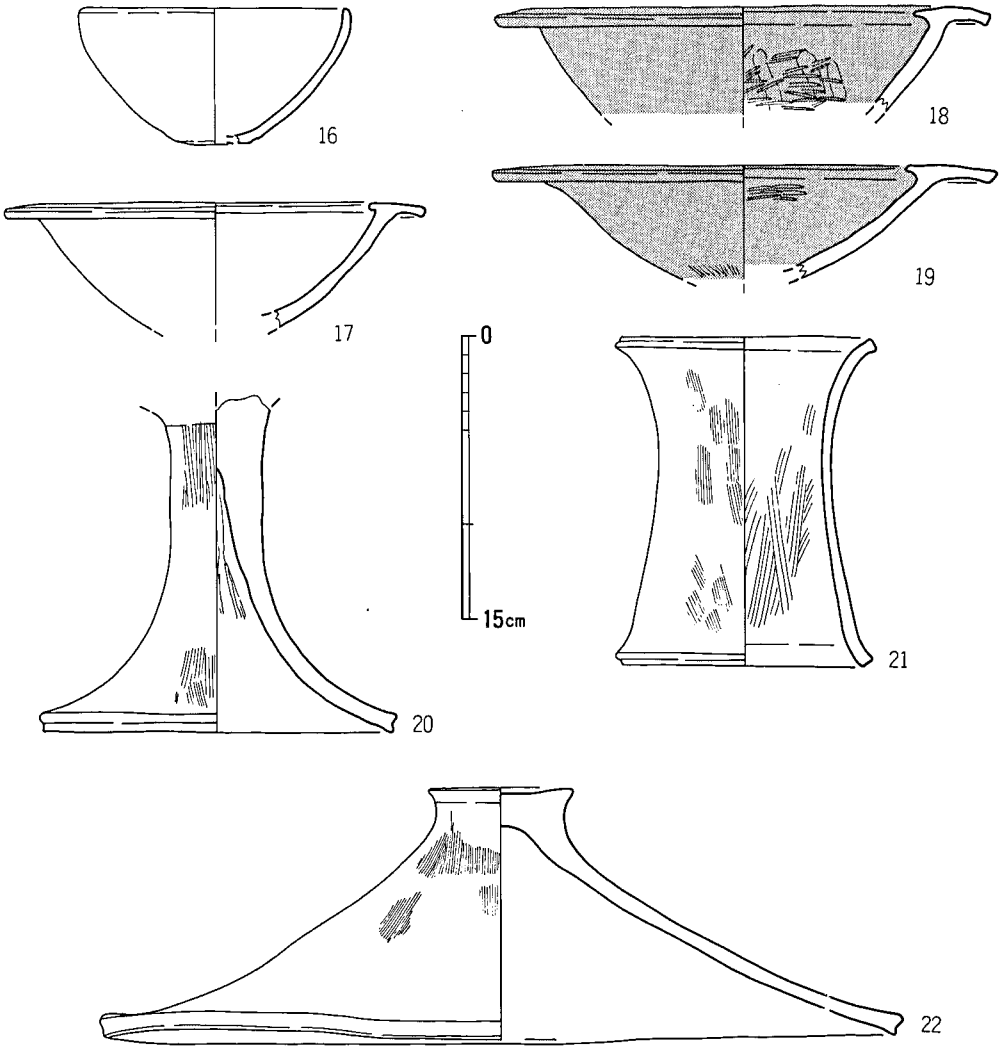
第118図　15～17号土坑実測図（1/40）



第119図　16・17号土坑出土土器実測図（1/4）



第120図　17号土坑出土土器実測図.1（1/4）

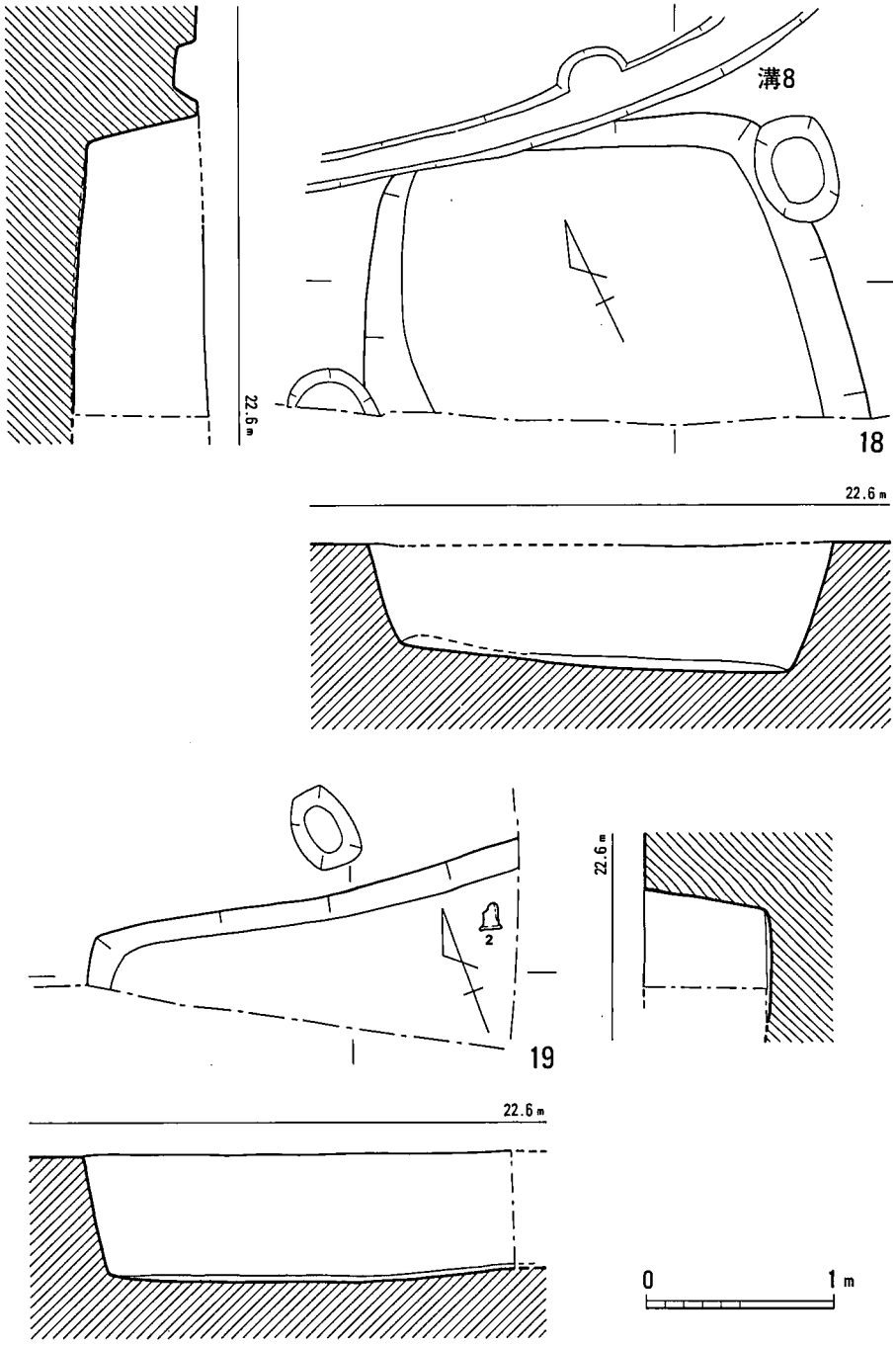


第121図　17号土坑出土土器実測図.2（1/4）

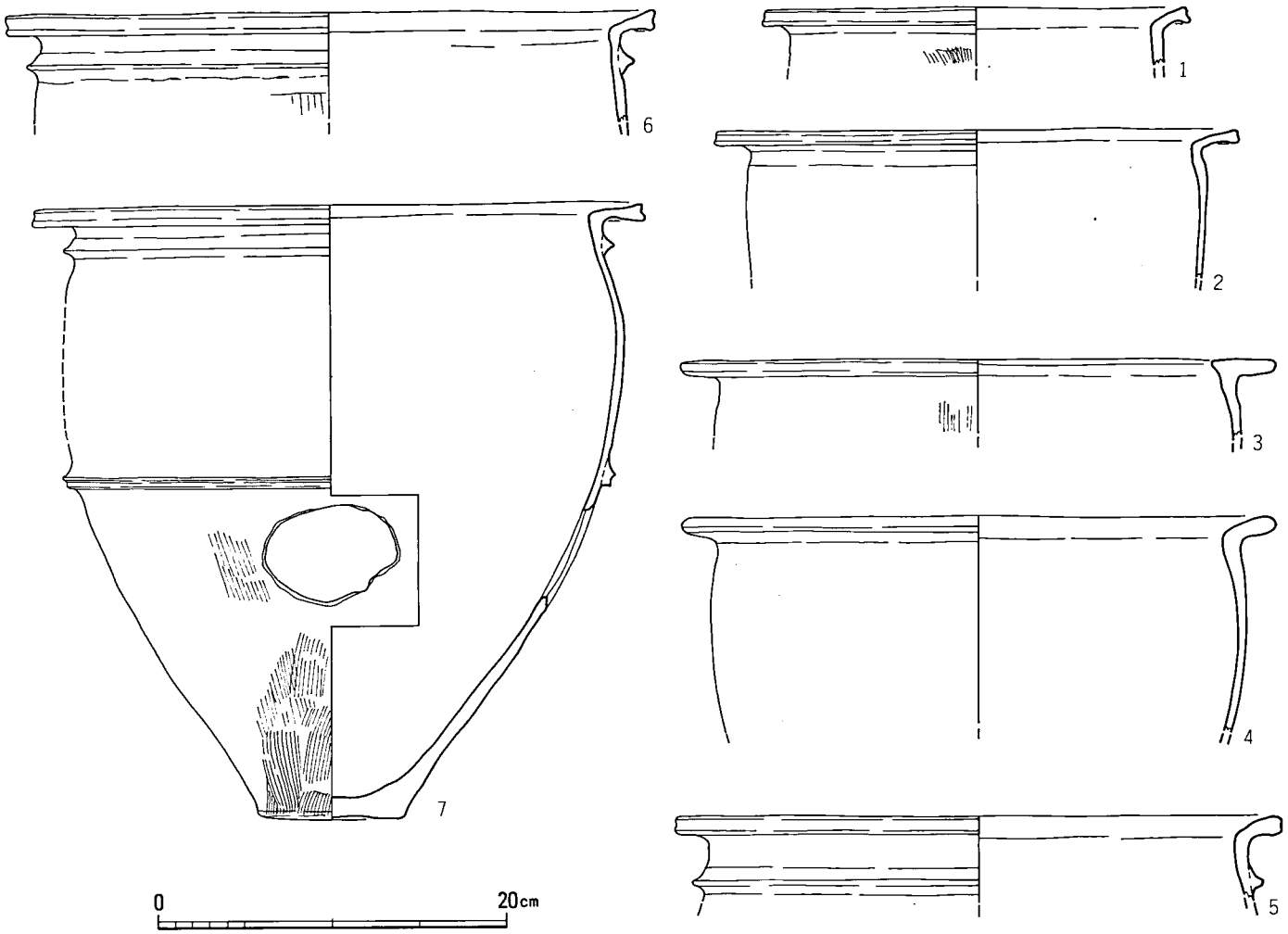
18号土坑（図版59　第122図）

調査区東側のS11区で検出された土坑で、南側半分は区域外になる。8号溝に北辺を切られるが、一辺2.55mの方形プランである。70度近くと急角度に掘込まれ、床は南、東側にやや低くなり50～70cm。甕・壺等の土器が上層より割合多く出土した。

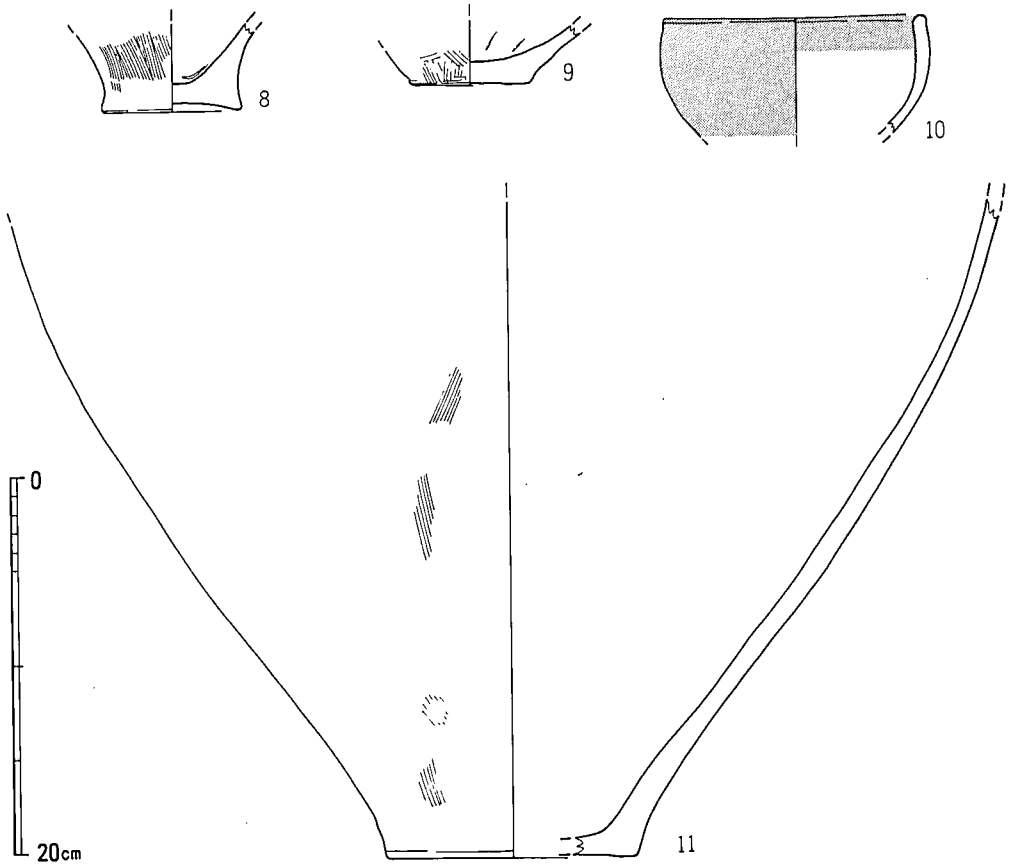
土器（第122～124図）1～7は甕で、緩い「く」字状口縁（1・2・4～6）と逆「L」字状口縁（3・7）を呈すものがある。また、5～7は口縁部直下に三角突帯文を、7は胴部中央にも「M」字状突帯文を有す。1の復原口径24cm、5は34.4cm。7はほぼ完形の甕で、胴部突



第122図　18・19号土坑実測図（1/40）



第123図　18号土坑出土土器実測図.1（1/4）



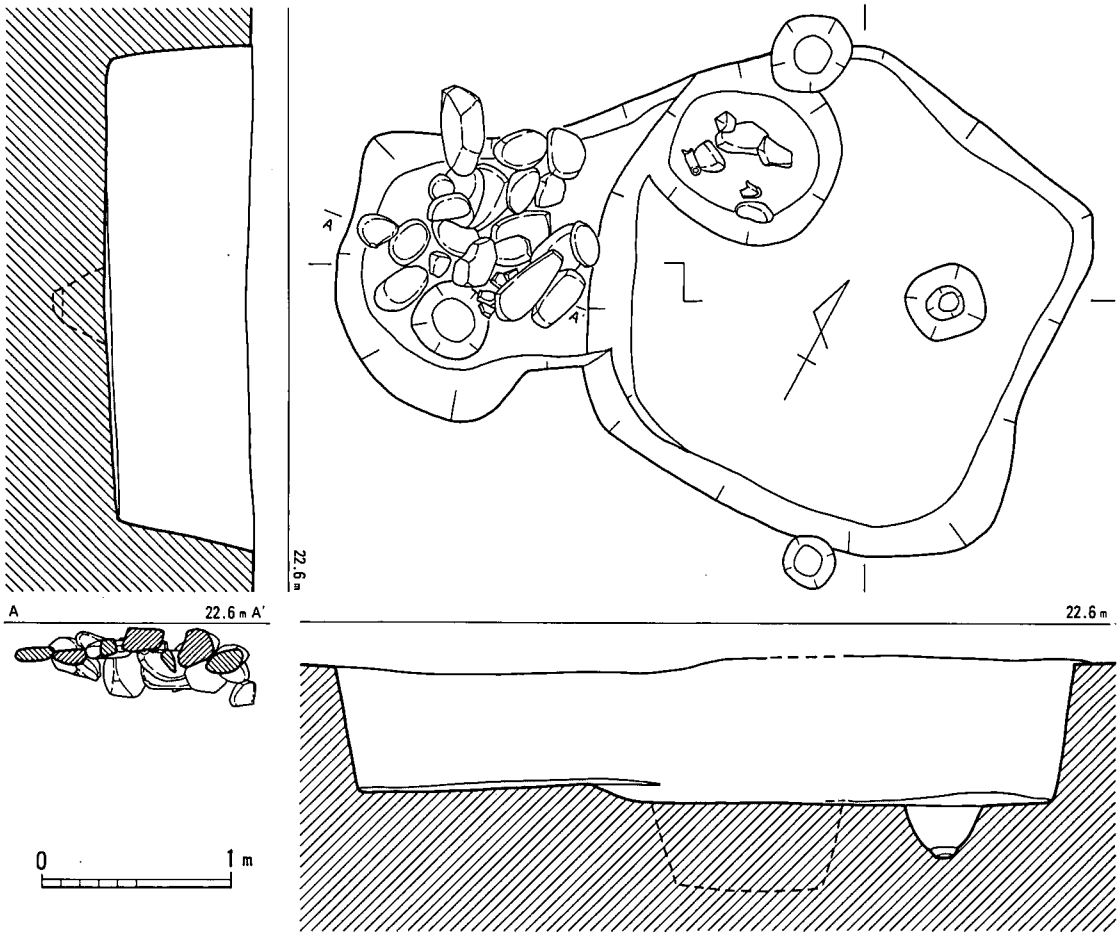
第124図　18号土坑出土土器実測図.2（1/4）

帯文の下部に大きな二次的穿孔がある。胴部下半にはハケ目調整が残るが、上位はナデ消される。口径35cm、器高35.3cm、底径8.4cm。8は上げ底の底部破片、9は壺の底部であろう。10は内湾度が強い丹塗りの椀。復原口径14cm。11は大型の甕の胴部下半から底部で底径13.6cmを測る。甕棺の一部であろう。中期後半の時期である。

19号土坑（図版59　第122図）

18号土坑の東隣に位置し、その大部分は調査区外にある。隅丸の方形プランで東西辺は2.4m以上。80度と直角に近くに掘込まれ、深さ65cm。土坑内床面から器台、上層より鉢・甕棺片が出土した。

土器（第127図1～3）1は小さな底部から大きく拡がる器形の鉢で、口縁部の内湾はほとんどない。内外面とも指圧痕が残る。復原口径13.8cm、器高7cm、底径4.5cm。2の器台は上部でラッパ状に拡がり、下部はやや内湾ぎみにすぼまる器形。外面は縦方向のハケ目、内面上



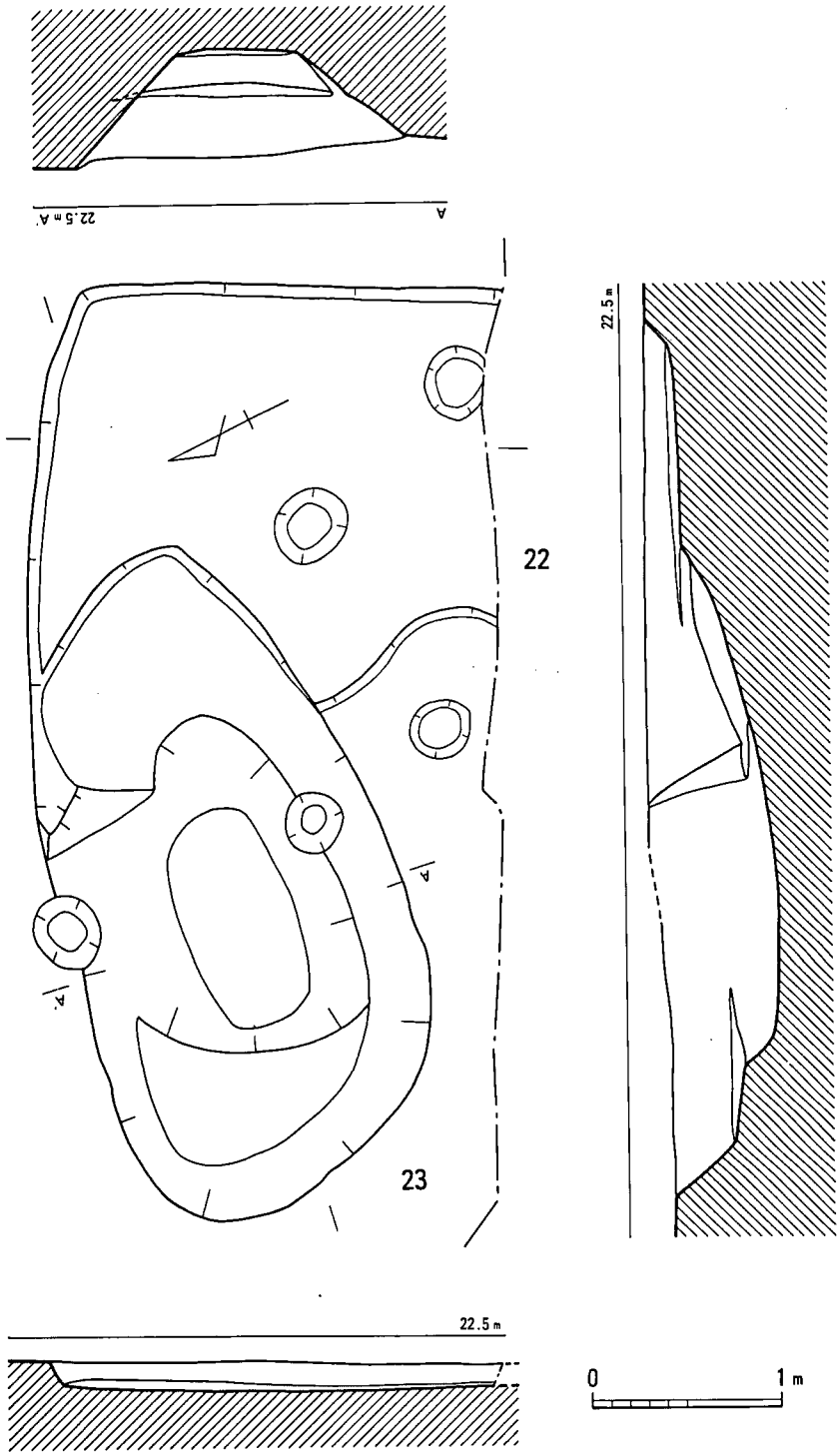
第125図　20号土坑実測図（1/40）

部は横、下位は縦方向のハケ目調整を施す。3は口径39cmを測る甕の口縁部片で、直下に三角突帯文を持つ。甕棺が破棄されたものであろう。なお、検出された甕棺とは接合しない。

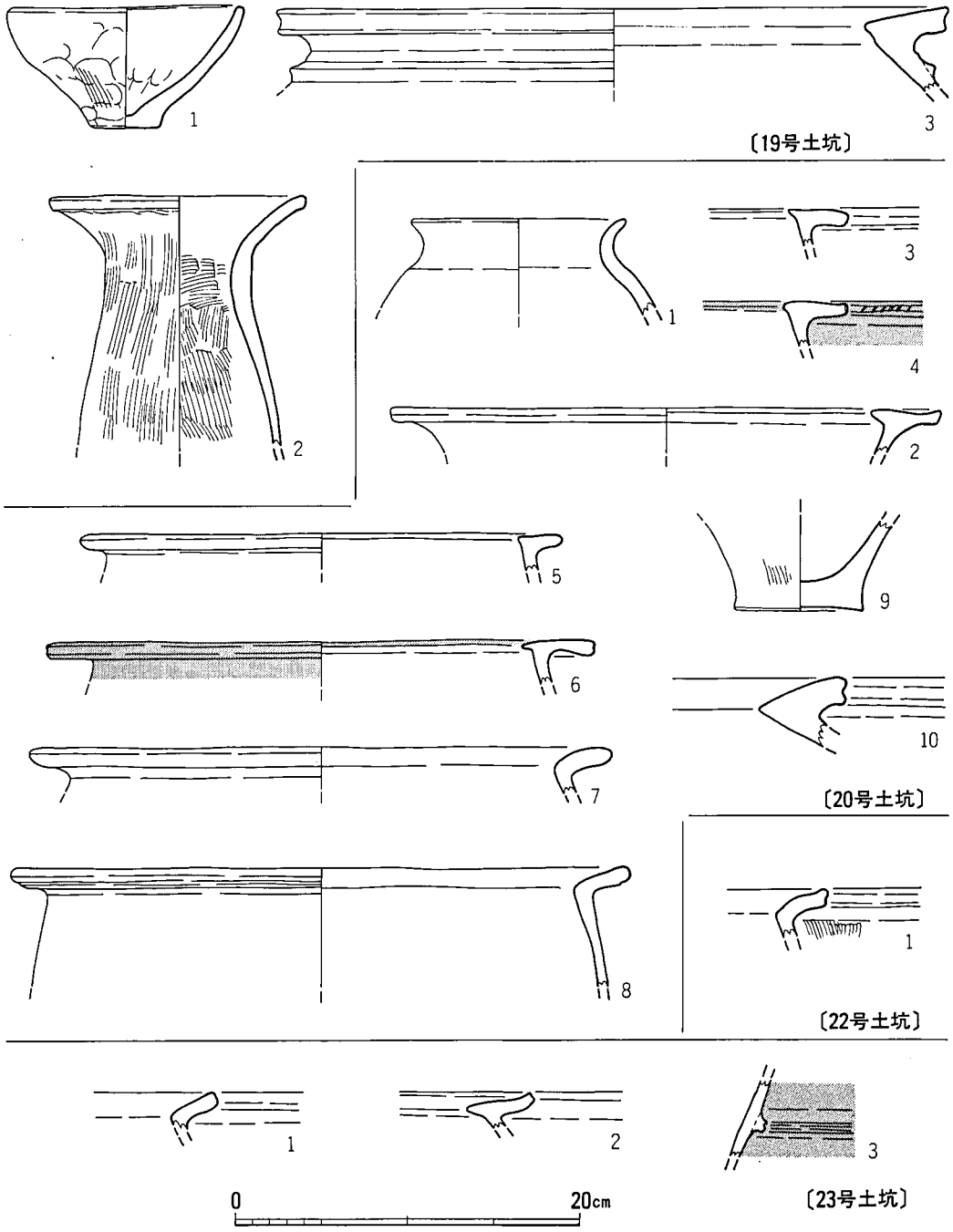
20号土坑（図版59　第125図）

18・19号土坑の北側S10区で検出された二段掘りの土坑である。上段部は1.5mの方形で深さ63cm。その上位は径20～40cm大の河原石に覆われる。下段部は上段部より8cmほど低く掘込まれ、軸はやや東に傾むいているが、一辺2.45mの隅丸方形プランである。床面の北西壁に接して径1m、深さ45cmのピットがあり、この中にも河原石が見られる。遺物は上段の集石中から土器や投弾状土製品が出土した。

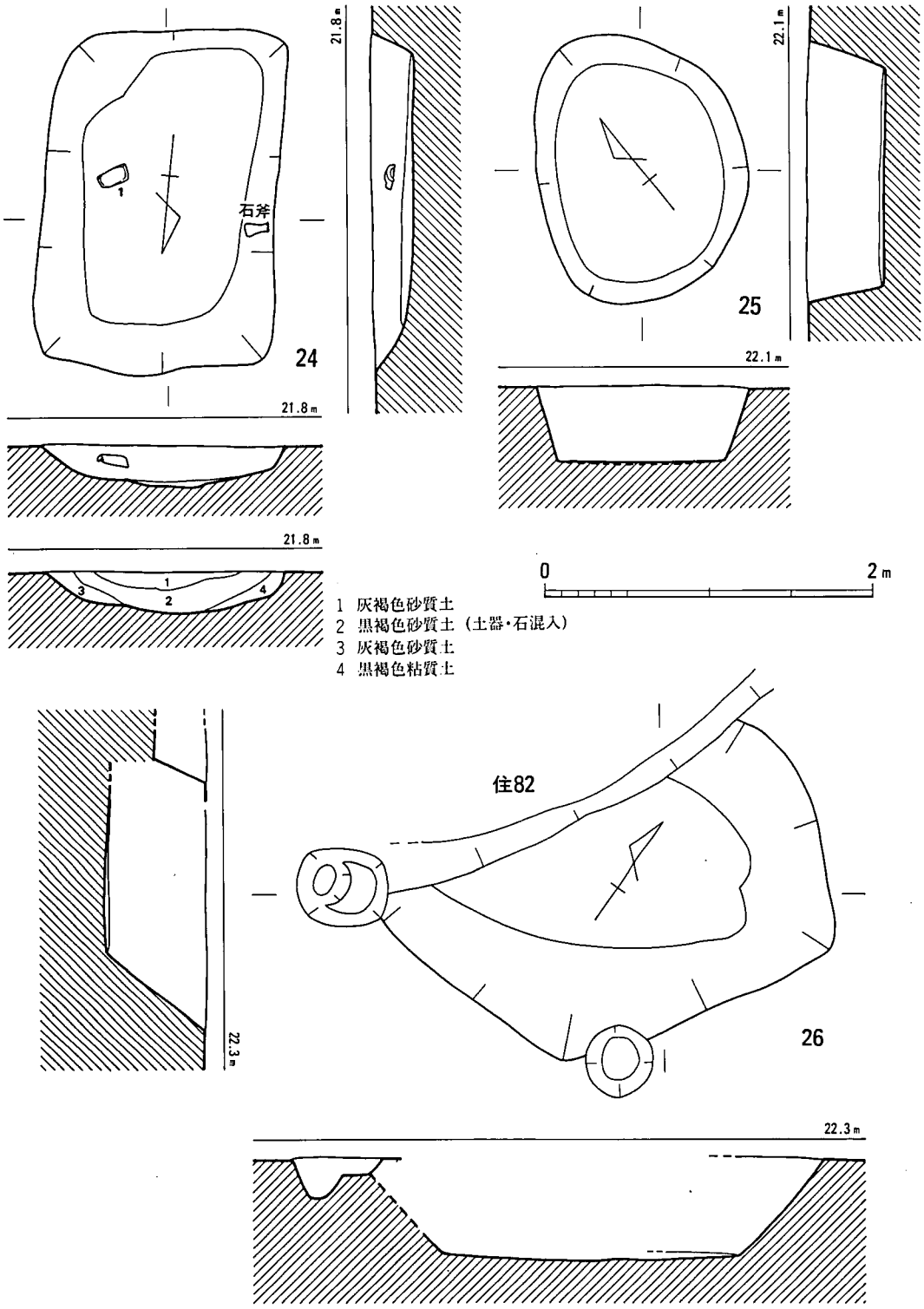
土器（第127図1～10）1は口径12cmの壺。2は鋤先状口縁の壺で復原口径32cm。3～5は



第126図　22・23号土坑実測図（1/40）



第127図　19・20・22・23号土坑出土土器実測図（1/4）



第128図　24～26号土坑実測図（1/40）

逆「L」字状口縁の甕でやや口縁内端が内側に張り出す。4は丹塗りで口唇部には刻み目を施す。6は鋤先状口縁の甕で外面丹塗り。7・8は「く」字状口縁の甕で、8の口唇部下端が窪む。9は甕の底部で径7.5cm。10は強い屈曲を持つ大型の甕の口縁部破片である。

土製品（第165図78）投弾状土製品で小型の完形品。上端部はやや斜めに整形し、下端部は丸く収める。褐色を呈し、長4.1cm、径2.1cm、重さ14gを測る。

22号土坑（第126図）

調査区の東側T12区で検出された土坑で、西側は23号土坑に切られ、南側は調査区外になる。一辺が2.2m以上の方形プランで、深さ20cm前後。床面は中央にやや深くなるがほぼ平坦である。遺物は下層より甕の小破片が出土したのみである。

土器（第127図1）「く」字状口縁の甕で、内頸部に明瞭な稜線を持つ。口唇部ははね上げ、端部はやや窪む。頸部にハケ目調整が残る。

23号土坑（図版59　第126図）

22号土坑の西側を切り、東西にテラスを持つ二段掘り土坑で、東西3.45m、南北1.75mの長円形を呈す。西側のテラスは深さ30cm、底面のプランは1.17m×0.6mの長円形で上辺からの深さは65cmを測り、南北の断面は逆台形を呈す。甕の小破片、砥石が出土した。

土器（第127図1～3）1は「く」の字状口縁の甕。2は鋤先状口縁の甕で、口縁部上部はやや窪む。3は丹塗り甕の胴部破片で、「M」字状の突帯文を持つ。

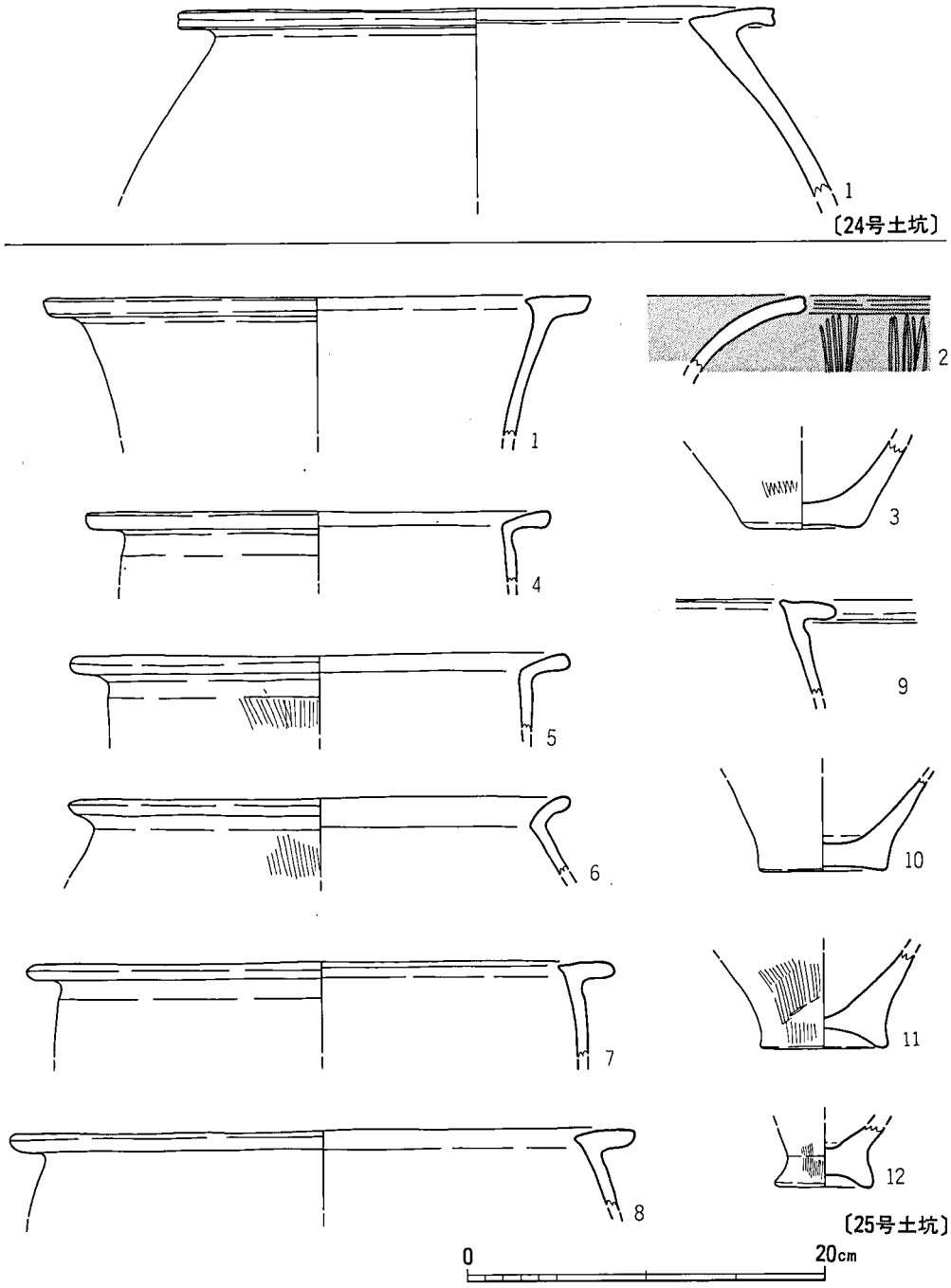
石器（第169図4）頁岩製の砥石で、端部および欠損部以外の4面はすべてかなり使用されている。

24号土坑（図版60　第128図）

M8区の84号竪穴住居跡内上層で検出された。長軸をほぼ南北にとる隅丸長方形のプランで、長辺2.08m、短辺1.4m、深さ24cmを測る。底面は南東側でやや不整形になり、中央部が若干窪む。土坑内の埋土は4枚からなりレンズ状に堆積する。1層は灰褐色砂質土、2層は黒褐色砂質土で、厚さ15cm内外。器台・高杯等の土器が出土したが現在所在不明である。3層は灰褐色砂質土。4層は黒褐色粘質土。埋土より扁平打製石斧が出土。

土器（第129図1）逆「L」字状口縁の大型の甕で、胴部が球形に近く、口縁端部は凹線状になる。復原口径31cmを測り、接合しないが13号甕棺上甕の打ち欠いた甕と同一個体である。

石器（第166図3）結晶片岩製の扁平打製石斧で、剥離したためかなり薄くなっている。一部に自然面も残し、刃部には使用による不定形な剥離が多く見られる。



第129図　24・25号土坑出土土器実測図（1/4）

25号土坑（図版61　第128図）

Ｏ８区で検出された土坑で、長径1.63ｍ、短径1.3ｍの長円形を呈す。深さ47㎝の床面はほぼ平坦で、断面台形である。壺・甕等のほか炭化米75ｇが出土した。

土器（第129図１～12）１は鋤先に近い広口口縁の壺。口縁上端は平坦で、やや厚め。復原口径30.6㎝。２は口縁部がラッパ状に拡がる丹塗りの壺で、縦方向の暗文を施す。３は壺の底部で、径5.9㎝。４～９は甕で、「く」字状口縁と（４～６）、逆「L」字状口縁の２者がある。逆Ｌ字状口縁の内端は張り出す。４の口径26㎝、８は35㎝を測る。10～12は甕の底部で11・12は上げ底。時期は中期後半。

26号土坑（図版61　第128図）

調査区東側の北端、Ｒ７－８区に検出され、82号竪穴住居跡に西辺を切られている。一辺2.5ｍの方形プランを呈し、深さ72㎝を測る。甕・器台の小破片が出土した。

土器（第130図１～４）１・２とも「く」の字状口縁の甕。２は肥厚する。３は甕の底部片で、ハケ目調整が残る。４は器台の下端部で、二次的な加熱を受けている。時期は中期末であろう。

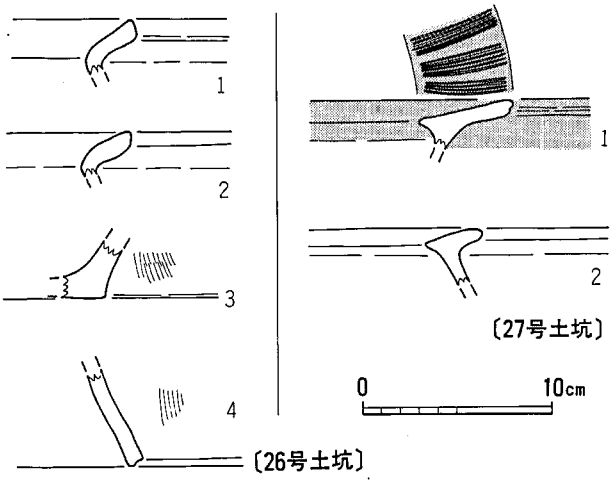
27号土坑（図版62　第131図）

82号竪穴住居跡の西側、Ｑ７区に検出された土坑で、長辺2.34ｍ、短辺1.4ｍの隅丸長方形を呈す。深さ1.4ｍと急角度に掘込まれ、中ほどに稜を持つ。壺・甕が出土した。

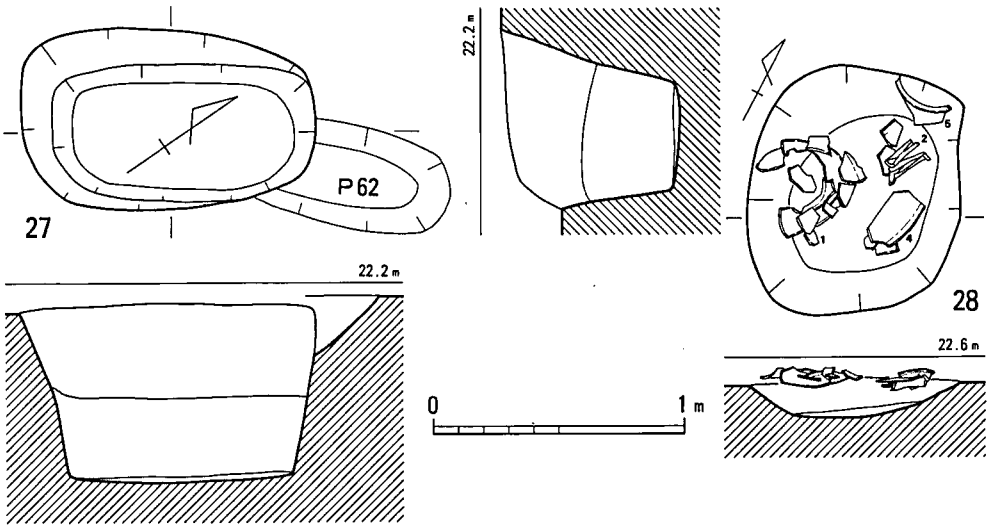
土器（第130図１・２）１は鋤先状口縁の壺で、４～６条単位の暗文を施す丹塗り土器。２は「く」字状口縁の甕。中期後半の時期である。

28号土坑（図版62・63　第131図）

28号土坑はT10区に位置し、20号甕棺墓とは北西30㎝に近接する。この一帯は弥生時代の遺構が最も密集する地区で、中でも円形周溝状遺構については、本土坑の北西1.5ｍに５号が、東６ｍには２号が、南東５ｍには４号がそれぞれ近接している。当初、20号土坑とのかなりの近接により両者の関連性を想定したが、近接すること以外には特にその関連性を示すよう



第130図　26・27号土坑出土土器実測図（1/4）



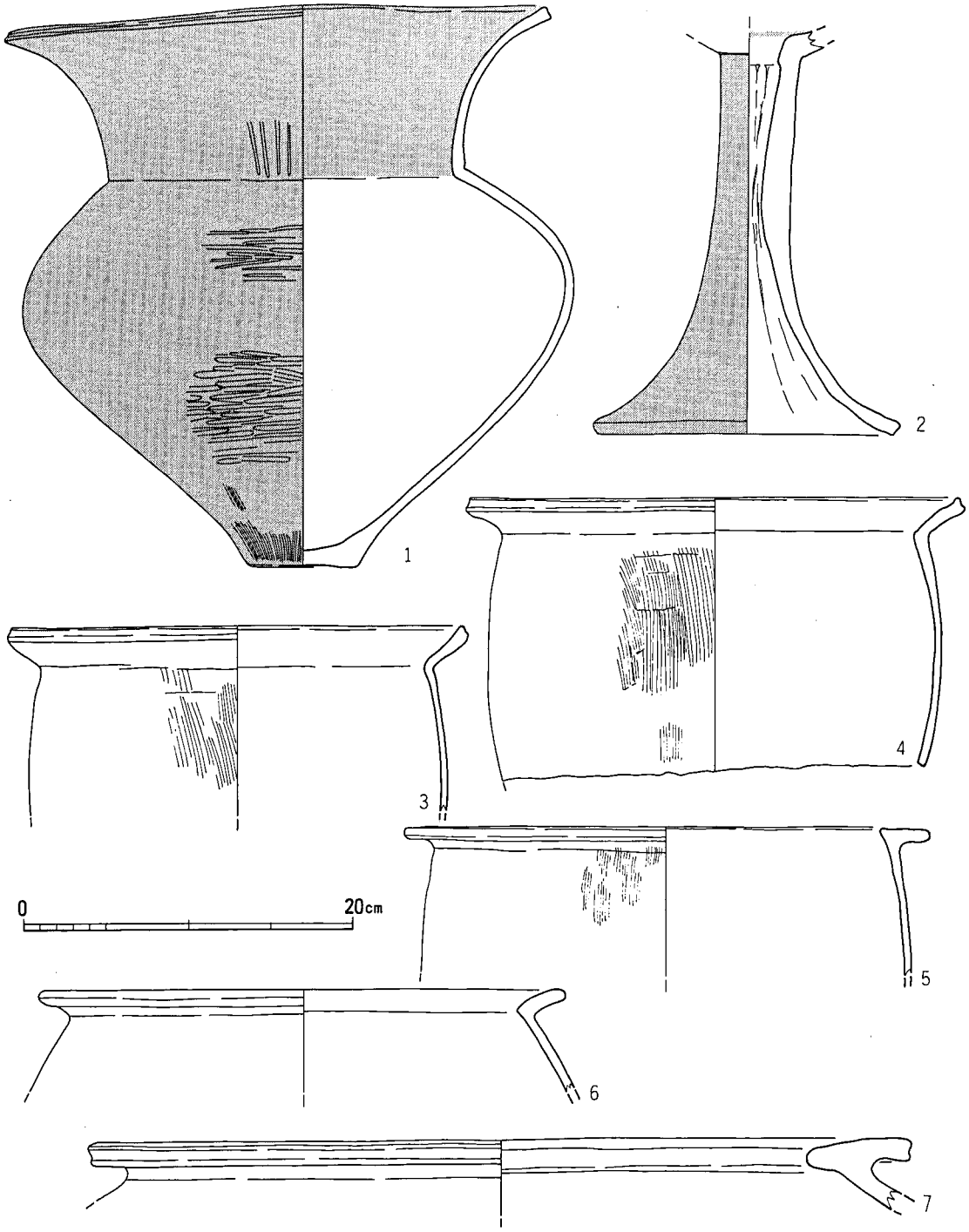
第131図　27・28号土坑実測図（1/30）

な状況は窺えなかったので、28号土坑として個別に取り扱うことにした。98×84×15cmのやや歪んだ楕円形を平面プランとし、壁の立ち上がりは緩やかで断面形態は擂鉢状になる。埋土は茶褐色の砂質土で、ほとんどの遺物は本土坑の上面に存在する。遺物量自体はパンケース半分程度であるが、いずれも破片は大きく、中には完形近くまで復原することのできるものもあった。

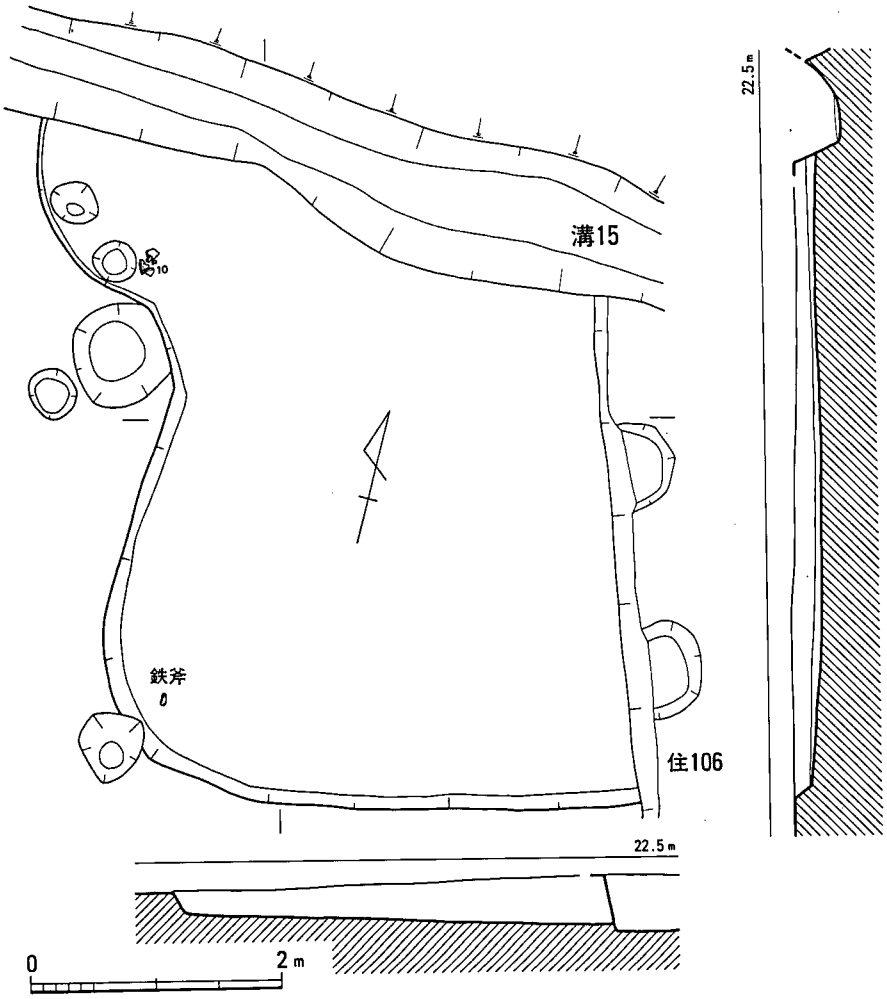
土器（第132図）1はほぼ完形近くまで復原できる丹塗の壺で、口径33.2cm、最大腹径33.8cm、器高34.1cm、底径6.4cmを測る。丹は外面全体と、内面の頸部と胴部の境まで塗られる。外面胴部の器面調整は横方向のミガキで、ミガキの施されない底部付近にはハケ目が窺える。頸部のミガキは暗文状に縦方向に施される。2は高坏脚部で、外面とわずかに残る坏部内面とに丹が塗られる。全体的に摩滅が著しく器面調整もはっきりしないが、内面にはしぼり痕が残る。3～6の甕のうち、3・5・6の外面は器面調整がハケで、内面がナデ。6は摩滅により調整不明。3は口縁端部をやや肥厚させ、緩やかに内湾するのが特徴的。復原口径28cmで、外面は二次加熱を受けて淡赤褐色に変色する。4が胴部上半がほぼ完全に残る。口径は30.4cmで、口縁端部ははね上げる。胴部下半の欠損部は意図的に打ち欠かれており、またこの周辺の内外面は二次加熱により変色していることから、何等かの用途に転用したものと考えられる。5・6の復原口径は32cm。7は甕棺の口縁部で、復原口径は50cm。口縁端部は凹線状に窪む。

29号土坑（第133図）

29号土坑はS9区に位置し、現代の水路や古墳時代の15号溝をはじめ、弥生時代の106号竪穴住居跡にも大きく切られ、全体の平面プランや規模については判然としない。現状での平面プランは不定形といってもいいような隅丸方形で、南北方向に最高で5.4m、東西方向には最高



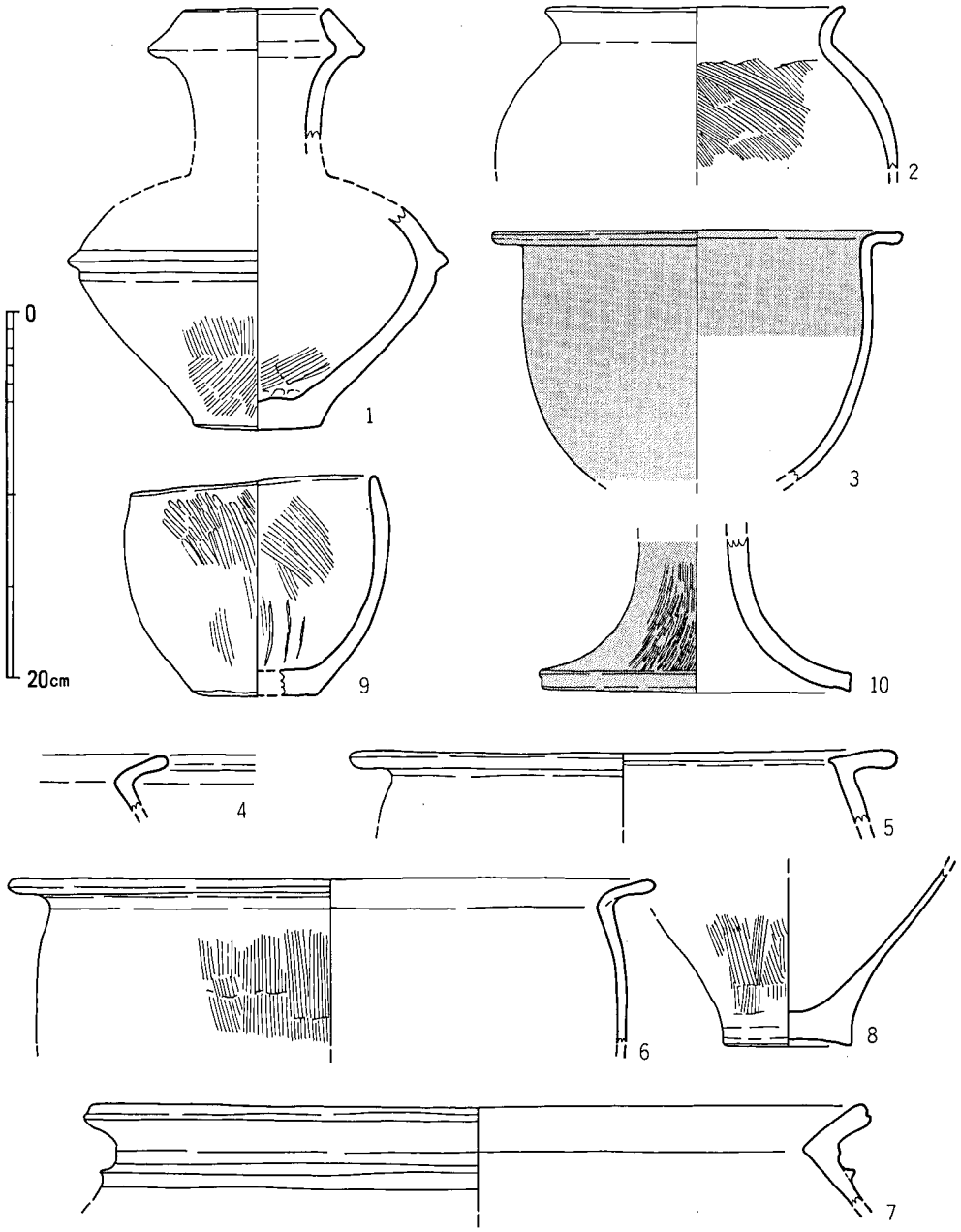
第132図　28号土坑出土土器実測図（1/4）



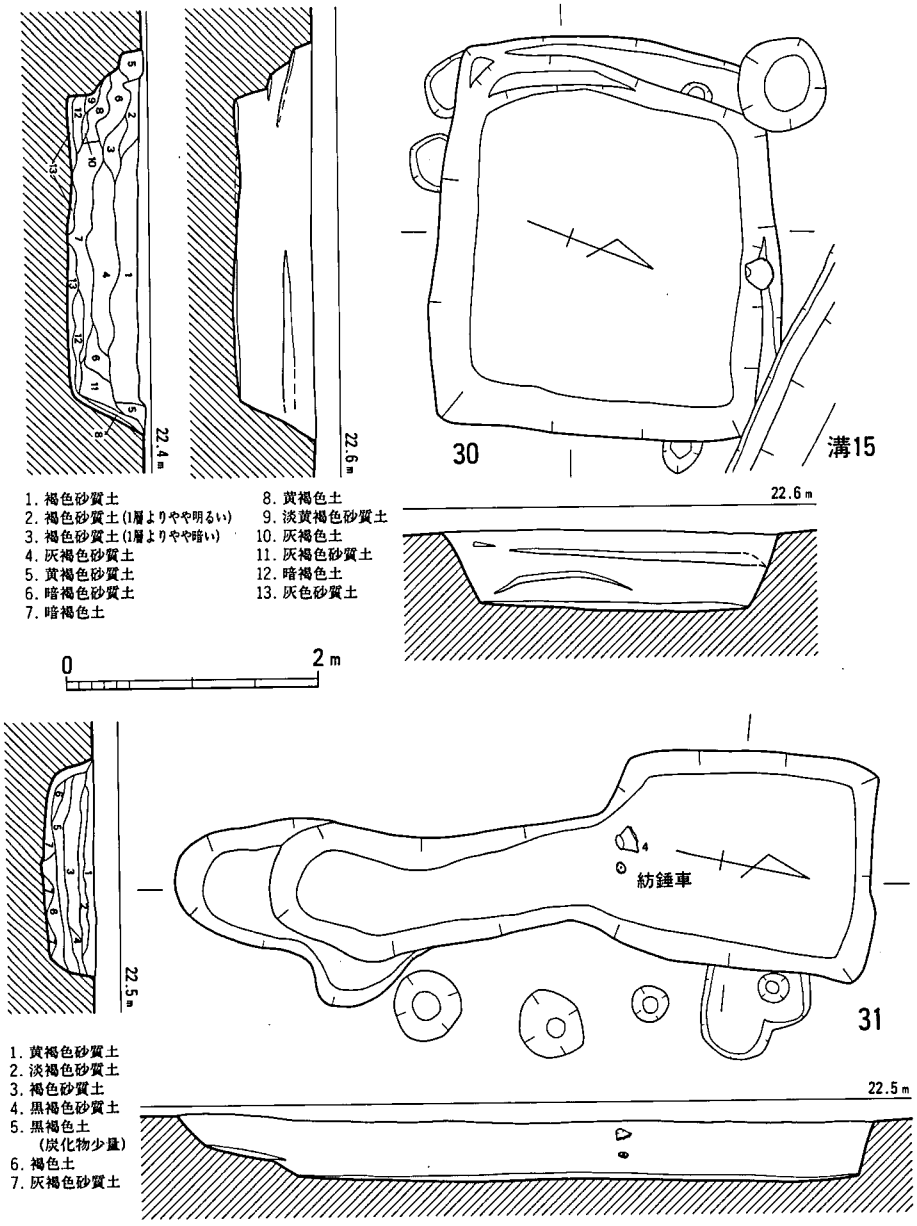
第133図　29号土坑実測図（1/40）

で4.3mまで測ることができる。壁の立ち上がりは緩やかで、壁高も最高で12cmほどであるが、南西から北西方向へ床面は緩やかに傾斜して、最も深いところで38cmを測る。埋土には若干の炭化物を含むものの、床面の緩やかな傾斜や柱穴が存在しないこと、また平面プランが不定形なことなどから、土坑というよりも自然な落ち込み状遺構として性格づけたほうが適当かもしれない。調査時の所見としては、40号土坑と同様な性格の遺構と考えられる。遺物はパンケース1箱程度と本遺跡としてはやや多いが、遺存状態の良好なものは少ない。第171図2の鉄器も出土。

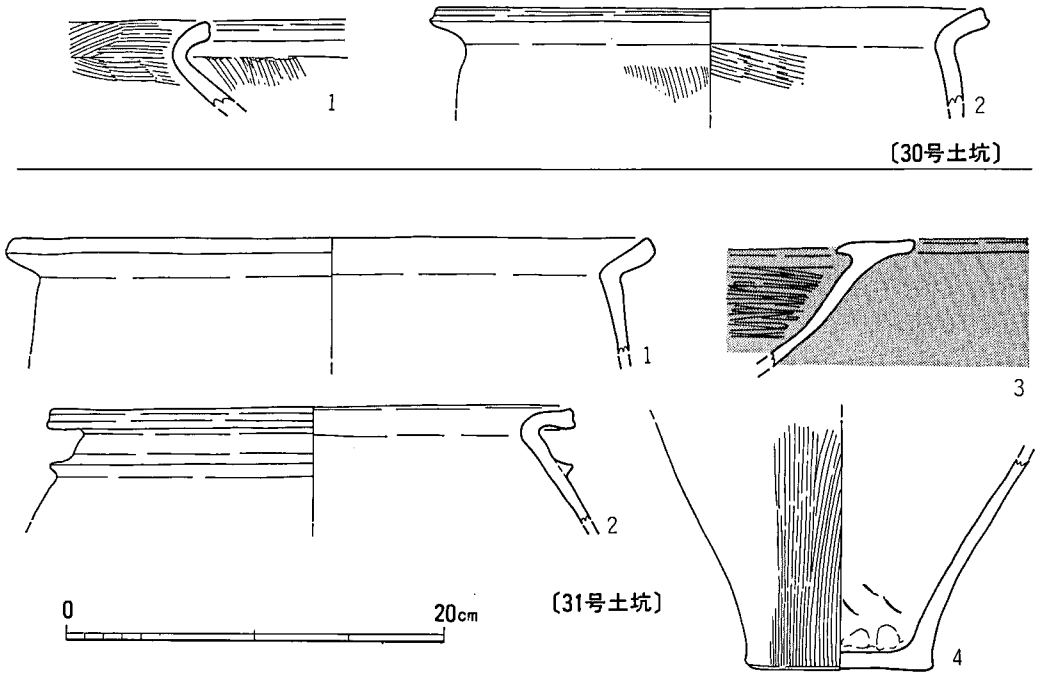
土器（第134図）1は小型の壺で、復原口径は8cm、復原器高は21cm。器面調整は全体的にナデであるが、底部付近のみ内外面ともにハケ目が窺え、底部内面にはかなりの指頭圧痕が残る。胴部に1本の突帯文が施されていることから、頸部と胴部の境の屈曲部にも突帯文が施さ



第134図　29号土坑出土土器実測図（1/4）



第135図　30・31号土坑実測図（1/60）



第136図　30・31号土坑出土土器実測図（1/4）

れていた可能性は高い。口縁部だけは二次加熱を受けて赤褐色に変色する。2は復原口径16cmで、外面はナデ、内面にはハケが施される。3～5の甕は摩滅により器面調整不明。それでも復原口径23cmの3については、外面全体と内面胴部上半にわずかではあるが丹塗の痕跡が窺える。6は復原口径36cmの甕で、全体に二次加熱は受けて変色しているが、外面にはハケ目が明瞭に窺える。7は甕棺の口縁部で、復原口径は43cm。8は復原底径7cmの甕底部で、二次加熱を受け赤褐色に変色するが、外面にはハケ目が明瞭に窺える。9は底部付近がやや欠損するものの、比較的遺存状態の良好な小型鉢。口径は13.4cm、器高は12.0cm、復原底径は8cmを測る。内外面ともにハケが施され、内面底部付近にはハケ工具痕が残る。10は高坏脚部で、裾部径は17.1cm。外面には細かいミガキと丹が施される。

鉄器（第171図2）小型の袋状鉄斧である。銹化が著しいため正確な計測はできないが、長さ6.5cm、刃部幅2.5cm、袋部幅1.9cmほどである。袋部の長さは判り難いが、中程でくびれることから4cmほどであろう。

30号土坑（図版63・64　第135図）

30号土坑はR-S9区に位置し、古墳時代の15号溝にごく一部を切られるが、それ以外には主な遺構との切り合い関係はない。近接する遺構としては、東4mに弥生時代の29号土坑が、

南西４ｍにやはり弥生時代の31号土坑が、南４ｍに古墳時代の67号竪穴住居跡がある。3.2×2.8ｍのほぼ正方形に近い平面プランで、深さは最高64㎝。北壁と西壁には幅15～25㎝のテラスが見られるが、壁の立ち上がりは比較的直線的である。土層断面の観察からは自然に埋没していった状況が想定され、第４・6～8層には炭化米が少量含まれていた。第11・13層はは地山の崩落土であろう。遺物はポリ袋１枚程度と少なく、しかも小片で摩滅も著しい。本土坑の形態から貯蔵穴としての機能も想定したが、他に明瞭な根拠がないため、ここでは敢えて一般的な土坑として位置づけた。

土器（第136図１・2）前述したように遺物は少なく、図示できたのは２点だけである。第136図１は短頸壺の口縁部で、内外面ともにハケ目が施され、口縁端部は凹線状にわずかに窪む。２は復原口径30㎝の甕の口縁部で、内外面友ともにハケが施される。いずれも二次加熱の痕跡はない。

31号土坑（図版64　第135図）

31号土坑はＲ９区に位置する。他の遺構との切り合いはないが、北東２ｍには弥生時代の30号土坑が、南西３ｍにはやはり弥生時代の２号貯蔵穴が、南３ｍにも弥生時代の３号貯蔵穴が近接する。平面プランは2.2×1.7ｍの長方形に、3.4×0.8～1.3ｍの細長い溝状の遺構が組み合わさって特徴的な鍵状を呈する。当初は２つの遺構が切り合っていることを想定しながら掘り進めたが、埋土に差がないことや床面のレベルが揃うことから、１つの遺構という認識に至った。南端には階段状のテラスが付き、北側へ床面が緩やかに傾斜しているため、南側が入口のような感じになる。土層断面の観察から、床面には地山の崩落土が堆積している様子が窺え、また第５層にのみ炭化米が少量含まれる。本土坑の周辺には貯蔵穴が密集する地区なので、貯蔵穴的機能も想定したが、他にそれを積極的に証明する根拠もなかったため、ここでは取りあえず一般的な土坑として取り扱った。遺物はポリ袋１枚程度と少なく、いずれも埋土からの出土である。第163図６の土製紡錘車は下部からの出土である。

土器（第136図１～４）１は復原口径34㎝の甕で、摩滅により器面調整不明。２は復原口径28㎝の甕で、口縁端部には凹線が施され、強く屈曲する頸部のやや下には１本の突帯文が貼り付けられる。３は高坏坏部の口縁部で、内外面ともに丹塗の痕跡が窺える。外面は摩滅が著しいが、内面にはミガキが窺える。４は甕の底部で、炭化物が付着する外面にはハケが、内面にはナデが施される。

土製品（第163図６）周縁部がやや盛り上がる茶褐色の紡錘車で、土坑床面近くから出土。上部は整形時の指頭圧痕が明瞭に残るが、下面は平坦に整える。径5.25㎝、厚さ0.96㎝、孔径0.45㎝、重さ35.1ｇ。土器片の転用品ではない。

33号土坑（図版65　第137図）

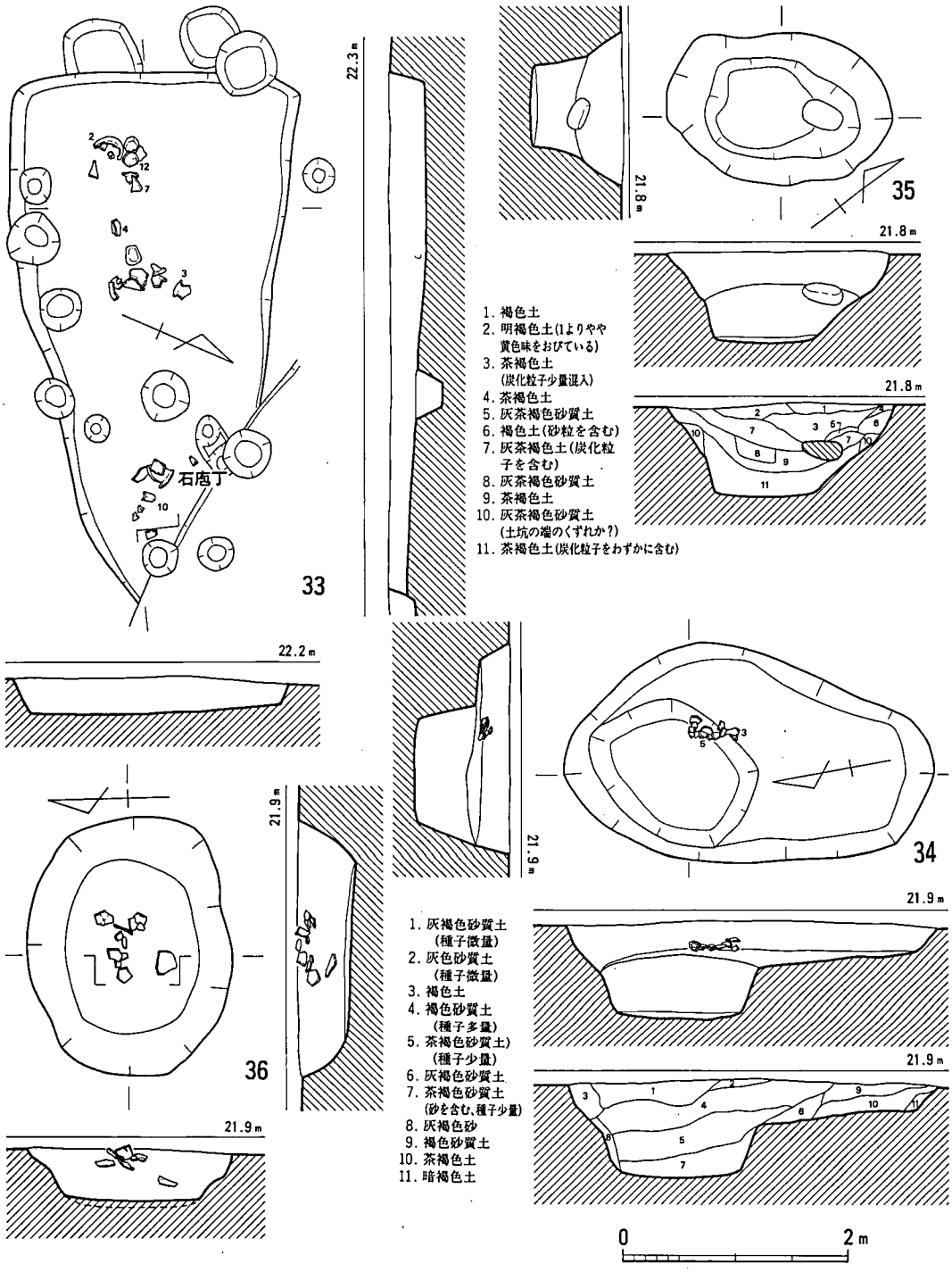
33号土坑はＰ７区に位置し、古墳時代の69・73号竪穴住居跡に切られる。そのため全体的な平面プランや規模は明確でないが、南北方向については2.5ｍが、東西方向については4.7ｍまで測れることから、東西方向に細長い土坑であることはわかる。壁の立ち上がりは緩やかで、深さは最高で33cm。底面において検出されたピットもいくつかあるが、その性格は不明。遺物はパンケース１箱程度と、遺構の規模の割りには比較的多いが、いずれも底面から浮いた状態での出土であり、完形になるものはない。13点を図示したが、ほとんど器形は甕である。第167図16の石庖丁が１点出土している。

土器（第138図）11の高坏を除いてすべて甕。１の復原口径は28cmで、摩滅により器面調整不明。２は復原口径23cmで、外面は二次加熱により赤褐色に変色する。３は復原口径26cmで外面は二次加熱により赤褐色に変色するが、摩滅により器面調整は不明。４は復原口径29cmで、摩滅により器面調整は不明。５は復原口径30cmで、口縁端部には凹線が施される。外面のハケ目は明瞭に残る。６は復原口径32cmで、屈折した口縁部は細長く延びる。７は全体の１/３程度にしか遺存していないが、図としては完形に復原できる。復原口径は27cm、器高25cm、底径８cm。外面全体にハケが施され、その底部付近は二次加熱により赤褐色に変色する。８・９は頸部下に１本の突帯文を有する甕で、８の復原口径は27cm、９の復原口径は34cmを測る。10は復原口径17cmの小型の甕で、内外面ともに丹が塗られる。外面には器面調整としてミガキが施され、内面には指頭圧痕が多く残る。11は復原口径27cmの高坏坏部で、摩滅が著しく器面調整は不明であるが全面に丹が塗られ、口縁部上面には暗文状のミガキが痕跡的に窺える。12・13は甕の底部で、いずれも外面にはハケが施され、二次加熱を受けて赤褐色に変色している。12の復原底径は８cm、13は５cmと小型でやや上げ底状になる。

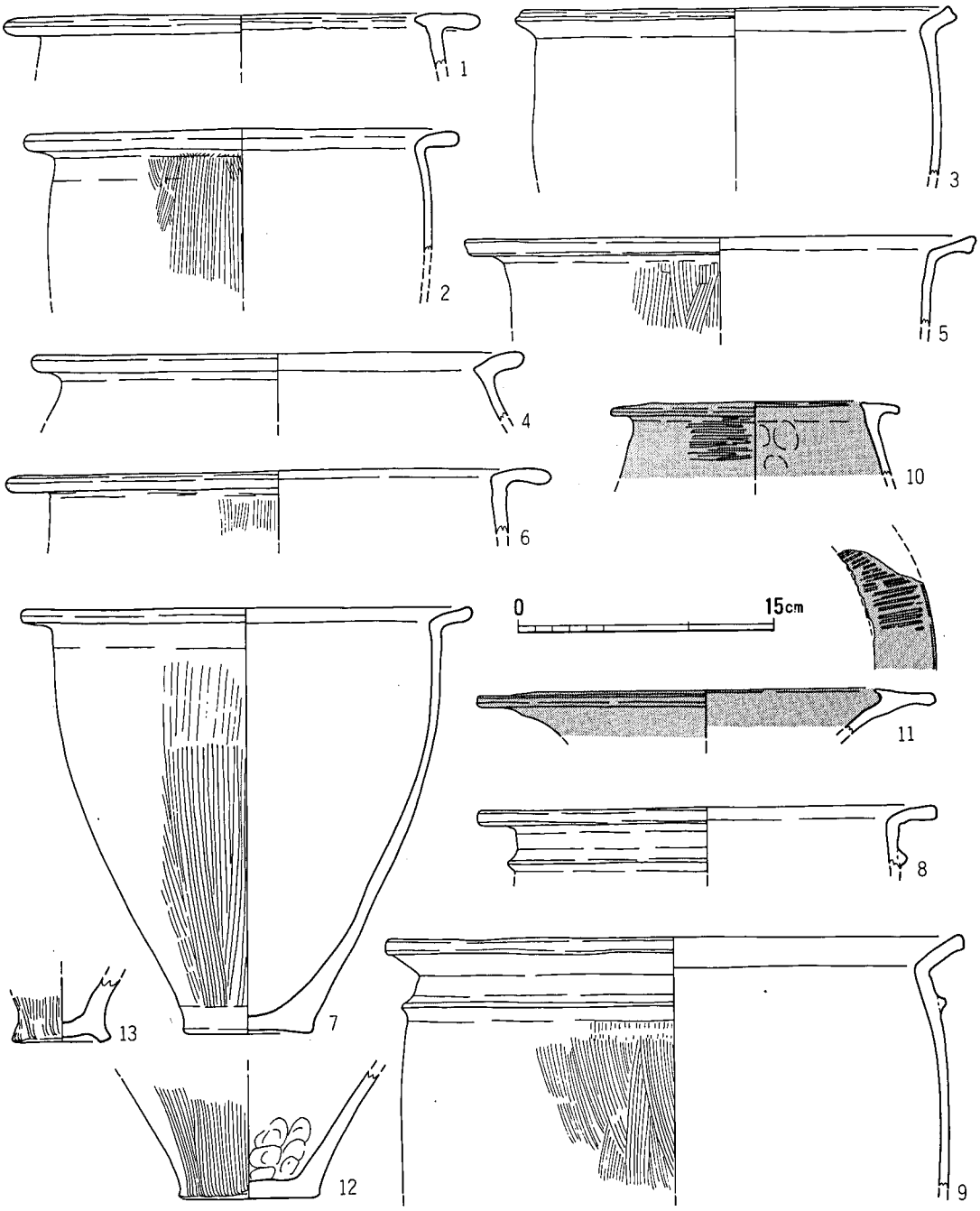
石器（第167図16）輝緑凝灰岩製の石庖丁で、およそ１/２残存。端部は丸く仕上げられ、形態的には半月形ではなく、隅丸長方形状になる。使用による細かい刃毀れが窺える。

34号土坑（図版66・67　第137図）

34号土坑はＭ７区に位置する。この地区の10ｍの範囲には、弥生時代の34～37号土坑が密集する。近接する遺構としては、南２ｍに弥生時代の113号竪穴住居跡が、南西３ｍにはやはり弥生時代の115号竪穴住居跡が、東１ｍには古墳時代の112号竪穴住居跡がある。3.3×2.0ｍの卵形楕円形で、北側が1.5×1.1ｍの範囲で１段深くなる。浅い部分は20～25cm程度の壁高で、１段深いところはそこからさらに50cmほど落ちる。本土坑では湧水が著しく、作業に困難をきたした。埋土の上部に相当する第１・２・４・５・７層には炭化した種子が含まれるが、この中でも第４層のそれは比較的多かった。貯蔵穴の機能も想定されたが、埋土上部にしか種子が出土しなかったこと、また本土坑の南側から流れ込むような堆積状況であったことから、ここでは



第137図　33～36号土坑実測図（1/60）



第138図　33号土坑出土土器実測図（1/4）

一般的な土坑として取り扱った。1段深くなるところで土器が纏まって出土したが、これらは同一個体の破片ではなく、数個体分の破片からなる。この土器の纏まりを含めても、遺物はポリ袋2枚程度とそれほど多くはなく、そのほとんどは種子と同様に第4層に含まれていた。破片ではあるが、第165図79の投弾が1点出土している。種子の総量は140ｇ。

土器（第141図1～5）1は復原口径26cmの甕で、器面調整はナデ。2は復原口径28cmの甕で、摩滅により器面調整不明。口縁端部は凹線状に窪む。3は復原口径30cm、4は復原口径3cmの甕で、いずれも外面にハケ目が窺える。5は復原口径15cm、器高7.3cmの小型鉢で、外面にはハケ目が、内面には指頭圧痕が観察される。

土製品（第165図79）残長4.7cm、径2.6cmを測る大型の投弾状土製品で表裏を欠損する。黄灰色を呈すが、全体の磨滅が著しい。他に小破片が出土した。

35号土坑（図版67　第137図）

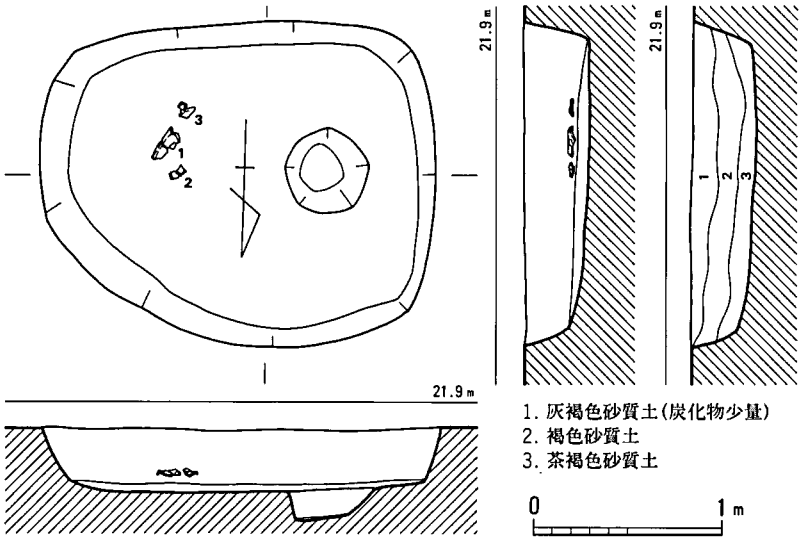
35号土坑はＭ7区に位置する。この地区の10ｍの範囲には、弥生時代の34～37号土坑が密集する。近接する弥生時代の遺構としては、北3ｍに36・37号土坑が、南東3ｍには34号土坑が、南4ｍには115号竪穴住居跡が上げられる。平面プランは2.0×1.4ｍの楕円形で、深さは83cm。本土坑でも湧水は著しく、発掘作業はかなり困難であった。埋土のうち第3・7・11層には炭化した種子が含まれるが、いずれも量的には少なく散在の状況であったため、意図的な貯蔵ではなく流れ込みによるものと考えられる。したがって、ここでは一般的な土坑として取り扱った。土坑中位付近に30cmほどの人頭大程度の自然礫があったが用途は不明。遺物は小さなポリ袋1枚ほどで破片も小さく、図示できるものがなかった。

36号土坑（図版68　第137図）

36号土坑はＭ6区に位置する。この地区の10ｍの範囲には、弥生時代の34～37号土坑が密集する。近接する遺構としては、西1ｍに弥生時代の37号土坑、南3ｍに同じく弥生時代の35号土坑、東1ｍに古墳時代の114号竪穴住居跡が上げられる。平面プランは2.3×1.8ｍの楕円形で、西から東へ緩やかに傾斜する底面までの深さは最高で52cm。本土坑の上部において甕棺の胴部破片が纏まって出土したが、あまり接合せず反転復原もできなかったことからここでは図示していない。このほかの遺物は小さなポリ袋1枚ほどで破片も小さく、やはり図示できるものがなかった。

37号土坑（図版69　第139図）

37号土坑はＭ6区に位置する。この地区の10ｍの範囲には、弥生時代の34～37号土坑が密集する。近接する遺構としては、東1ｍに弥生時代の36号土坑、南3ｍに同じく弥生時代の35号土坑、西1ｍに古墳時代の123号竪穴住居跡が上げられる。2.1×1.7ｍの卵形に近い楕円形で、平坦な



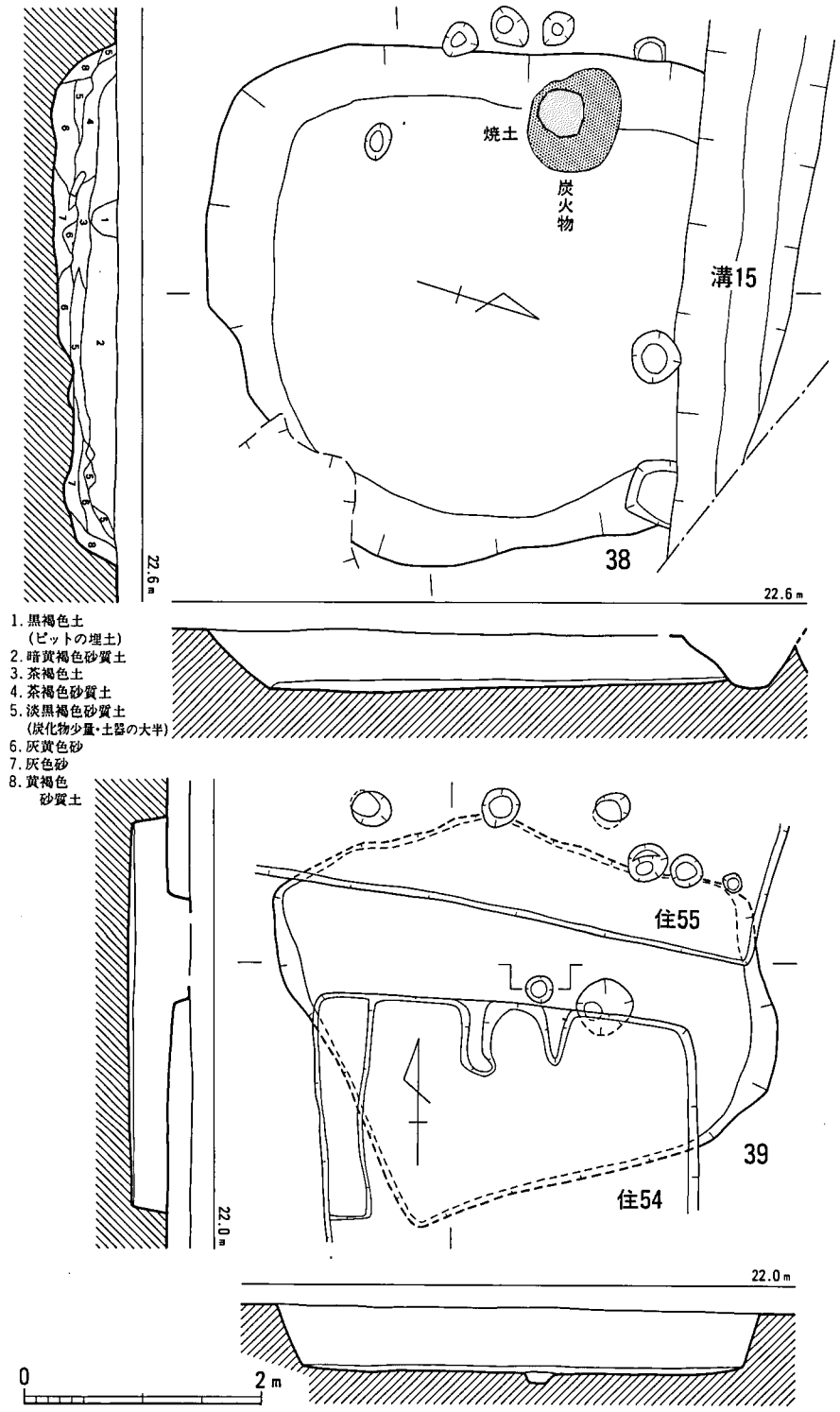
第139図　37号土坑実測図（1/40）

底面までは34cmを測る。埋土は全体的に砂質土で、第1層にのみ炭化物が少量含まれる。遺物はポリ袋1枚程度と少ないが、底面付近からは比較的大きく復原できる甕や丹塗土器が出土した。

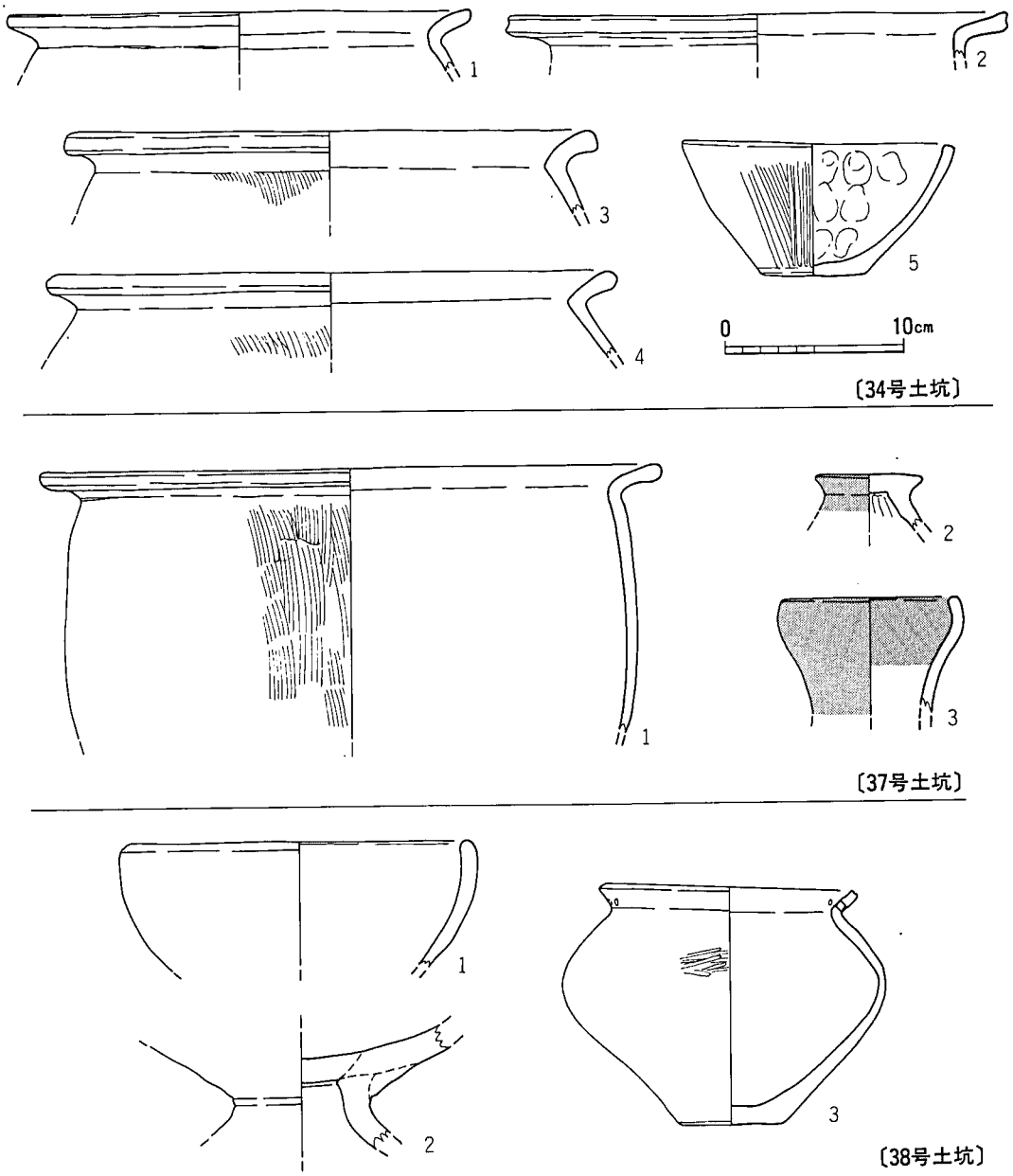
土器（第141図1～3）1は復原口径35cmの甕で、内面にはナデが、炭化物の付着する外面にはハケが施される。2は蓋のツマミの部分で、外面には丹が塗られる。3は復原口径10cmの長頸壺の口縁部で、外面全体と内面3.5cmのところまで丹が塗られる。

38号土坑（図版70　第140図）

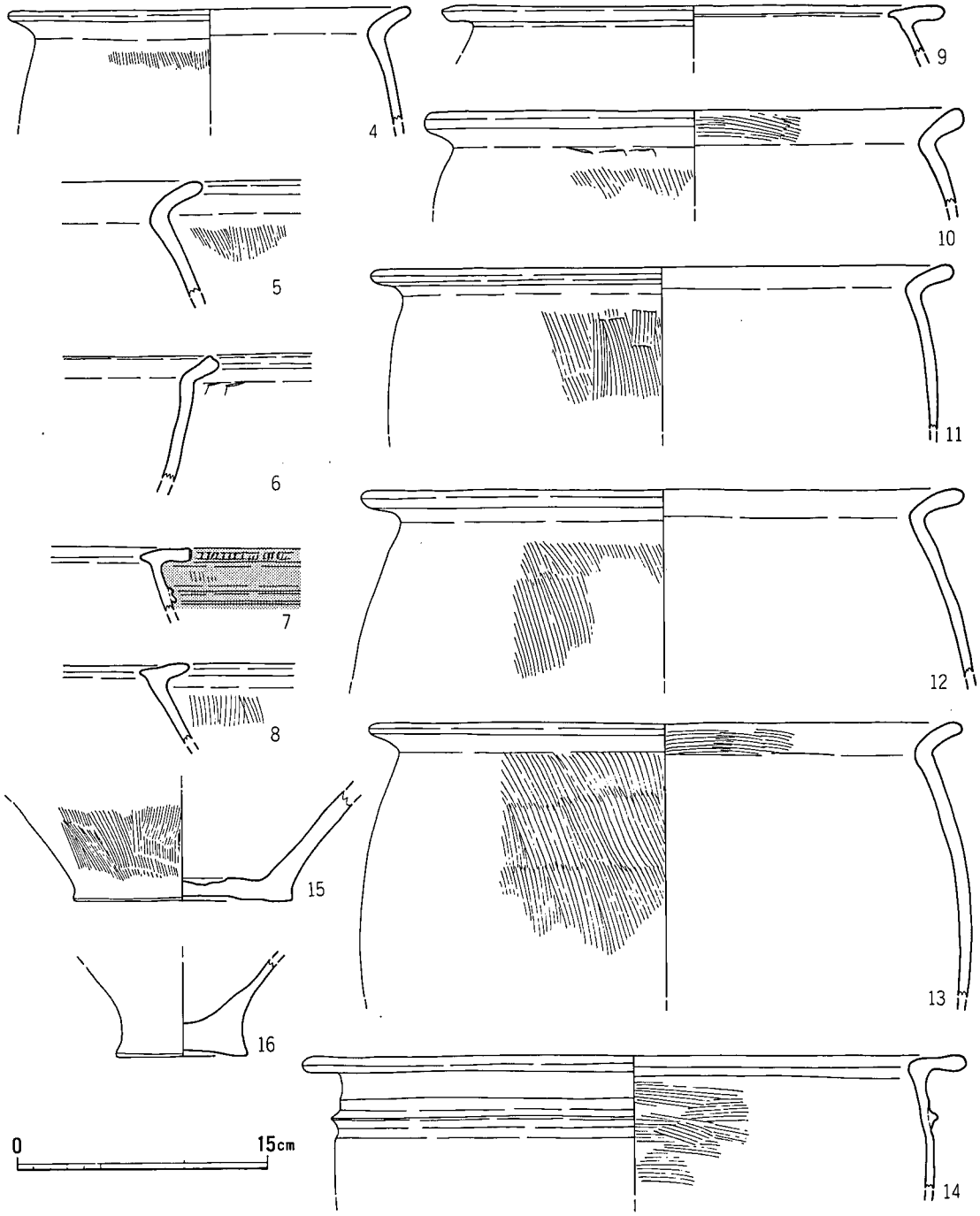
38号土坑はU9区に位置する。この一帯は弥生時代の遺構が比較的集中する地区で、南東1mには2号円形周溝状遺構が、南西3mには5号円形周溝状遺構が近接する。本土坑自体は現代の水路や古墳時代の15号溝に北壁付近が削平されているため、正確な平面プランや規模はわからない。しかし、東西方向については4.3mが、南北方向については4.0mまでが測れ、おそらくは円形に近い隅丸方形あるいは隅丸長方形という平面プランを呈していたと考えられる。深さは最高で55cm。本土坑は検出時点において、その平面プランや規模から竪穴住居の可能性も想定したが、埋土が暗黄褐色砂質土であったことや壁が緩やかに傾斜すること、炉跡や主柱穴が検出されなかったことなどから、土坑という認識に至った。パンケース1箱程度の遺物の大半は、土層断面の炭化物が少量含まれる第5層から出土する。この第5層は本土坑のほぼ全面に広がり、西壁中央部やや北寄りの場所では、この第5層の上面でなおかつ西壁に貼り付くように、径40cm、厚さ5cmの焼土と、それを取り巻く径80cm、厚さ3cmの炭化物が広がる。竪穴住居の炉と似たような焼土と炭化物の広がりであるため、ここで火を焚いたことは間違いないが、これ以外に特筆すべき特徴は見られずその性格は不明。前述したように、遺物の大半は



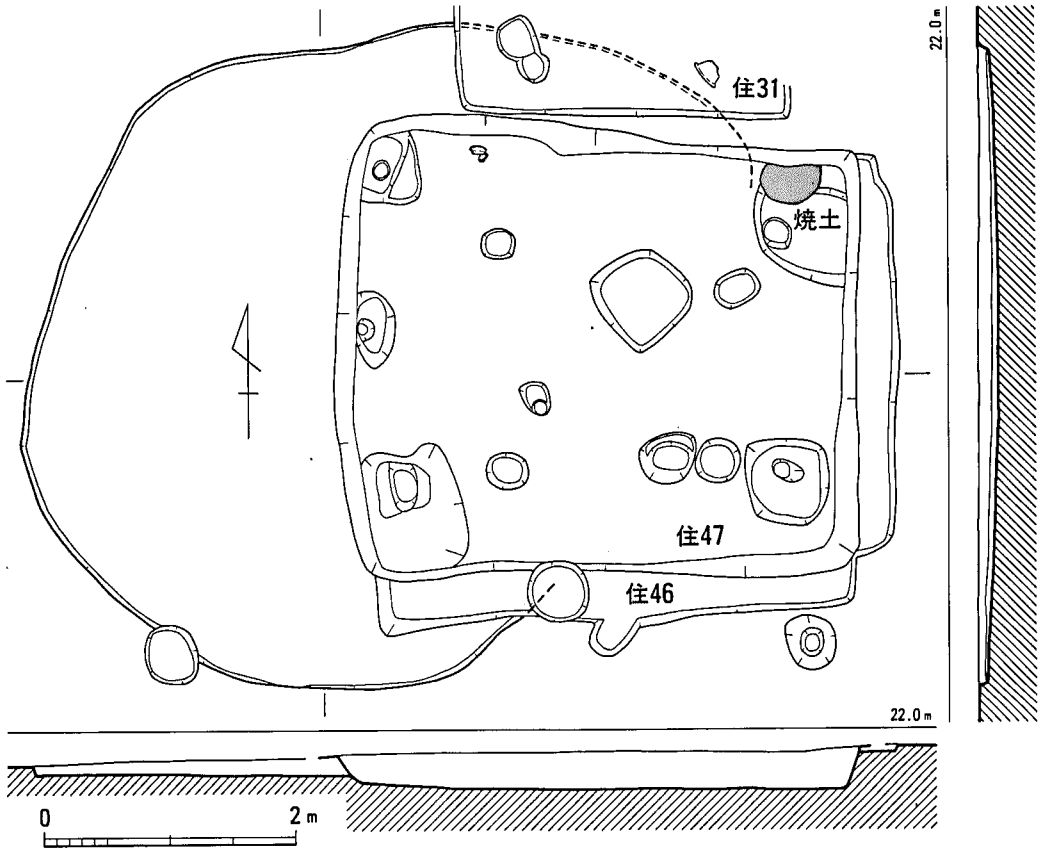
第140図　38・39号土坑実測図（1/40）



第141図　34・37・38号土坑出土土器実測図（1/4）



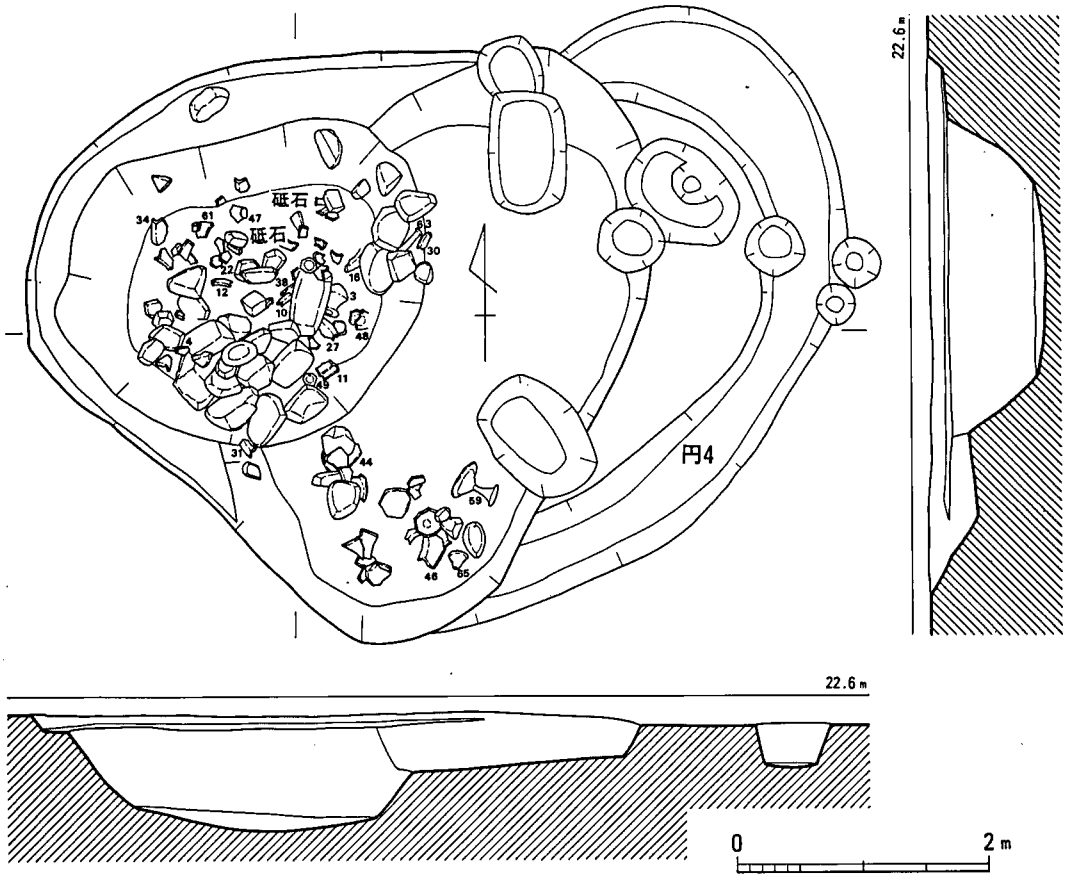
第142図　38号土坑出土土器実測図（1/4）



第143図　40号土坑実測図（1/60）

土坑中位の第５層に含まれており、ここでは第141・142図に16点を図示した。

土器（第141図１～３　第142図４～16）第141図１は復原口径20cmのボウル状の鉢で、摩滅により器面調整不明。２は台付きの鉢あるいは皿になろうか。坏部と台部の接合部の復原径は８cm。摩滅により器面調整不明。３は小型の鉢で、復原口径14cm、器高13cm。全体的に摩滅が著しいが、胴部外面に一部ミガキが残る。焼成前に穿孔された穴が１つだけあるが、本来は対向した反対側にも同様の穴が存在するのであろ。第142図４は復原口径24cmで、外面にわずかにハケ目が窺える。５～８は反転復原ができないほどの小破片で、５・８の外面にはハケ目が施される。６の外面頸部には工具痕が窺えるように、ハケからナデという順で器面調整が施されたと考えられる。７は丹塗で、口縁端部には刻目が施され、頸部下には「コ」字状の突帯文が貼り付けられる。９～14までの復原口径は順に、30cm、32cm、35cm、36cm、35cm、40cmとなる。外面はハケ、内面はナデという器面調整が一般的だが、頸部下に突帯文の付く14では内面にハケが施される。二次加熱を受けて変色しているのは11だけ。15は底径15.2cmの壺の底部で、外面



第144図　41号土坑実測図（1/60）

はハケ調整。16はかなり摩滅して器面調整は不明だが、強い二次加熱により赤褐色に変色する。

39号土坑（図版71　第140図）

39号土坑はK６区に位置し、古墳時代の55・56号竪穴住居跡に大きく切られる。この一帯は弥生時代の遺構が最も希薄な地区である。本土坑の南隅と西隅は比較的明瞭にコーナーが確認できたが、北隅と東隅は不明瞭で、平面プランは不定形な方形としか言いようがない。南北3.4m、東西4.4mで、深さは55cm。底面中央部付近でピットを２つ検出したがいずれも浅い。埋土には拳大から人頭大までの礫が多量に含まれるのが特徴的。遺物は小さめのポリ袋１枚程度と非常に少なく、また小片で摩滅も著しい。口縁部や胴部の破片もなく、図示できるものがなかった。

40号土坑（図版72　第143図）

40号土坑はH４－５区に位置し、古墳時代の31・47号竪穴住居跡に大きく切られる。この一

帯は弥生時代の遺構が最も希薄な地区である。31・47号住居跡による削平により全体の2/5が失われるが、おそらくは6.3×5.0mの楕円形であったと考えられる。ピットなど何も存在しない底面は中央部へ向けてわずかに傾斜していくようで、深さは最高で15cm、埋土は黒褐色砂質土。29号土坑と同様で、人為的に掘り込んだ土坑というよりも、浅い落ち込み状遺構として位置づけたほうが適当かもしれない。遺物はパンケース半分ぐらいで、局部的に集中することなく、本土坑の全体に亘って出土した。

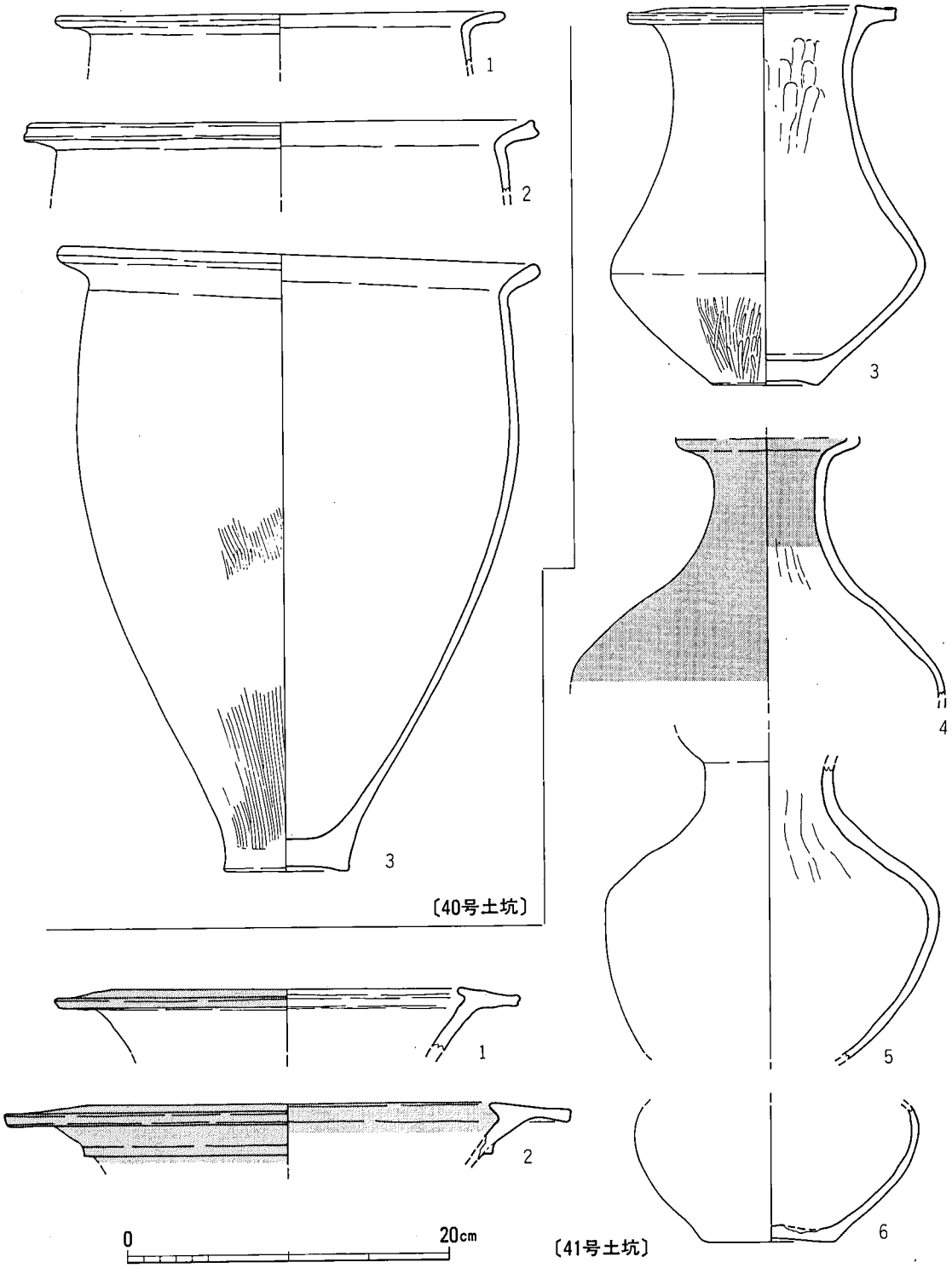
土器（第145図1～3）1～3はいずれも甕。1・2は摩滅が著しく器面調整不明で、復原口径は1が28cm、2が32cm。3は図上でなんとか完形に復原できる資料で、復原口径30cm、器高38cm。外面はハケ、内面はナデ。

土製品（第163図4）紡錘車で周縁は欠損する。赤褐色を呈し、内外面に指圧痕が残る。残存径3.8cm、厚さ0.85cm、孔径0.45cm、重さ14gを測る。

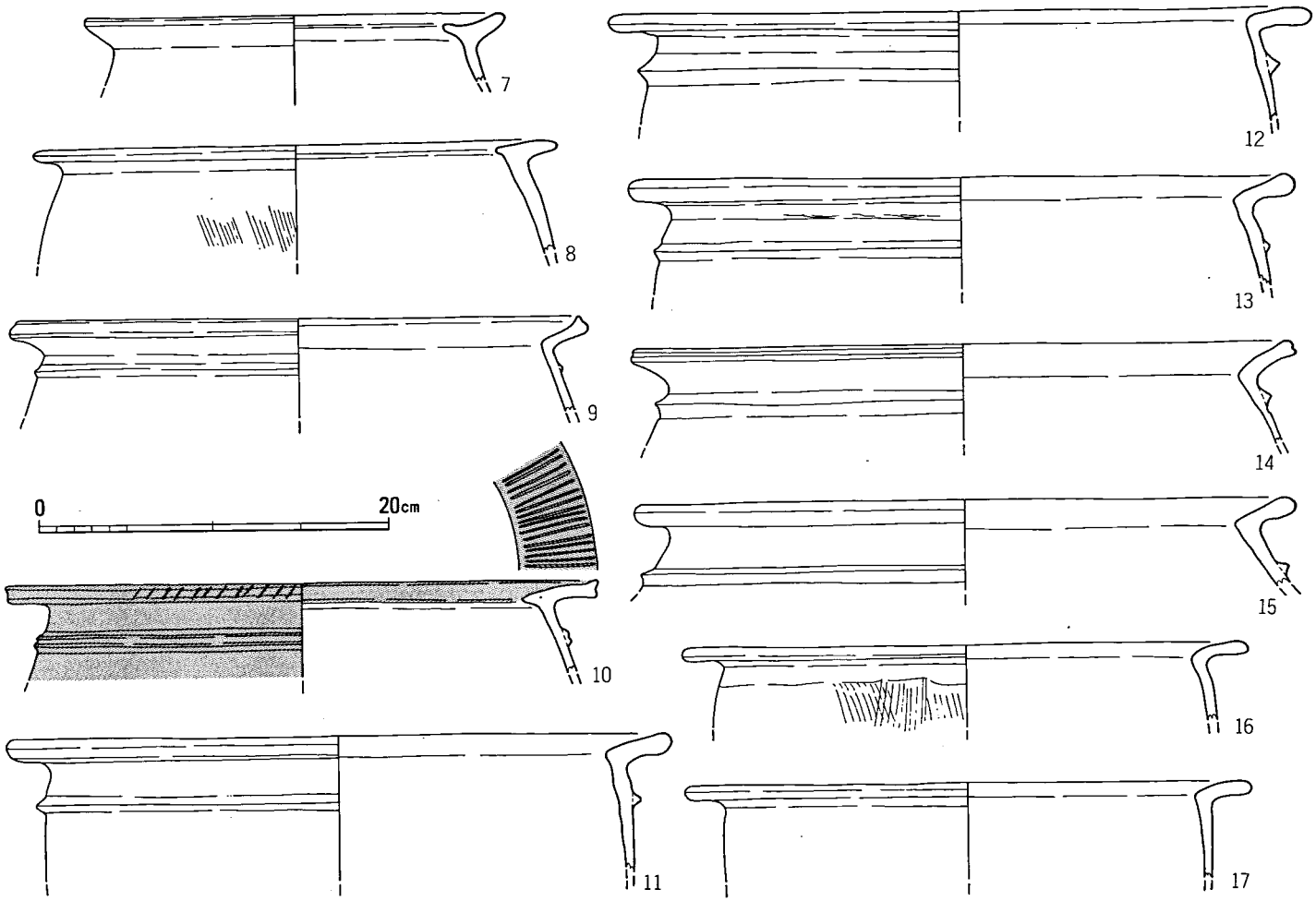
41号土坑（図版72・73　第144図）

41号土坑はT-U10-11区に位置し、弥生時代の4号円形周溝状遺構や21号甕棺墓を切る。この一帯は弥生時代の遺構が密集する地区で、特に列状をなす甕棺墓群や円形周溝状遺構群の中にある。したがって、多くの甕棺墓や円形周溝状遺構と近接する。平面プランは4.9×4.8mの隅丸三角形状を呈する。底面は西側で1段低くなり、深さは90cm。東側の浅いテラスまでの深さは40cm。埋土は焼土や炭化物を全体に含む黒褐色土で、多量の遺物や拳大から人頭大までの礫が、あたかも西側の深い部分へ目掛けて投棄したような状態で出土した。礫には加熱により赤褐色に変色したものも見られた。土器には丹塗が目立つが、甕棺墓群や円形周溝状遺構群の中に位置する本土坑の性格を彷彿させる出土状況、すなわち祭祀的要素の強い遺構としての性格が想定されよう。土器はパンケース10箱分にものぼり、このほかにも石庖丁・砥石・刀子も出土している。

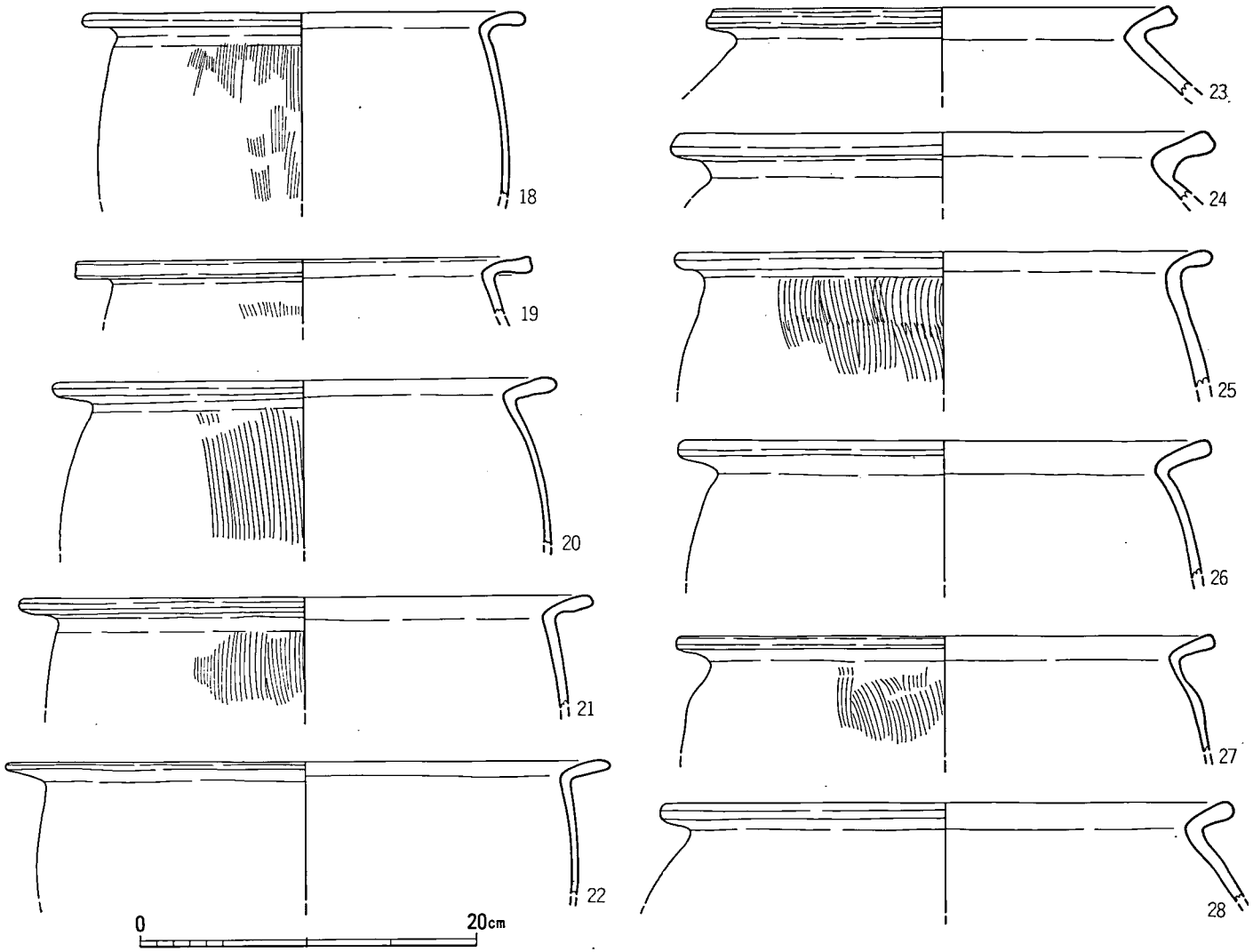
土器（第145～151図1～65）第145図1～6は壺。1・2は丹塗壺の口縁部で、復原口径は1が29cm、2が25cm。摩滅により器面調整は不明だが、2の頸部には1本の突帯文が貼り付けられる。3は最大腹径部がかなり下位にくる頸部の長いほぼ完形の壺で、口径は16.8cm、器高は23.3cm。全体に摩滅しているが、底部付近にはミガキが見られる。4は口縁部が内側へ屈曲する壺で、外面全体と内面の頸部まで丹が塗られる。摩滅により器面調整不明。5も4とほぼ同様の器形か。最大腹径は21cmで、摩滅により器面調整不明。6も摩滅により器面調整は不明の壺底部。第146図7から第149図54までの図示した48点はすべて甕。摩滅により器面調整のわからないものも多いが、外面はハケ、内面はナデというのがこの時期の甕の一般的な器面調整。その例外的な存在として、第148図38、第149図40・41・44～46の内面のハケ目があげられる。口縁部形態から見る限りでは、逆「L」字状にほぼ直角に屈折して胴部の張らないもの、やや胴部が張り屈折部の内側が突出するもの、「く」字状に屈折するものの、大きく3類型に分か



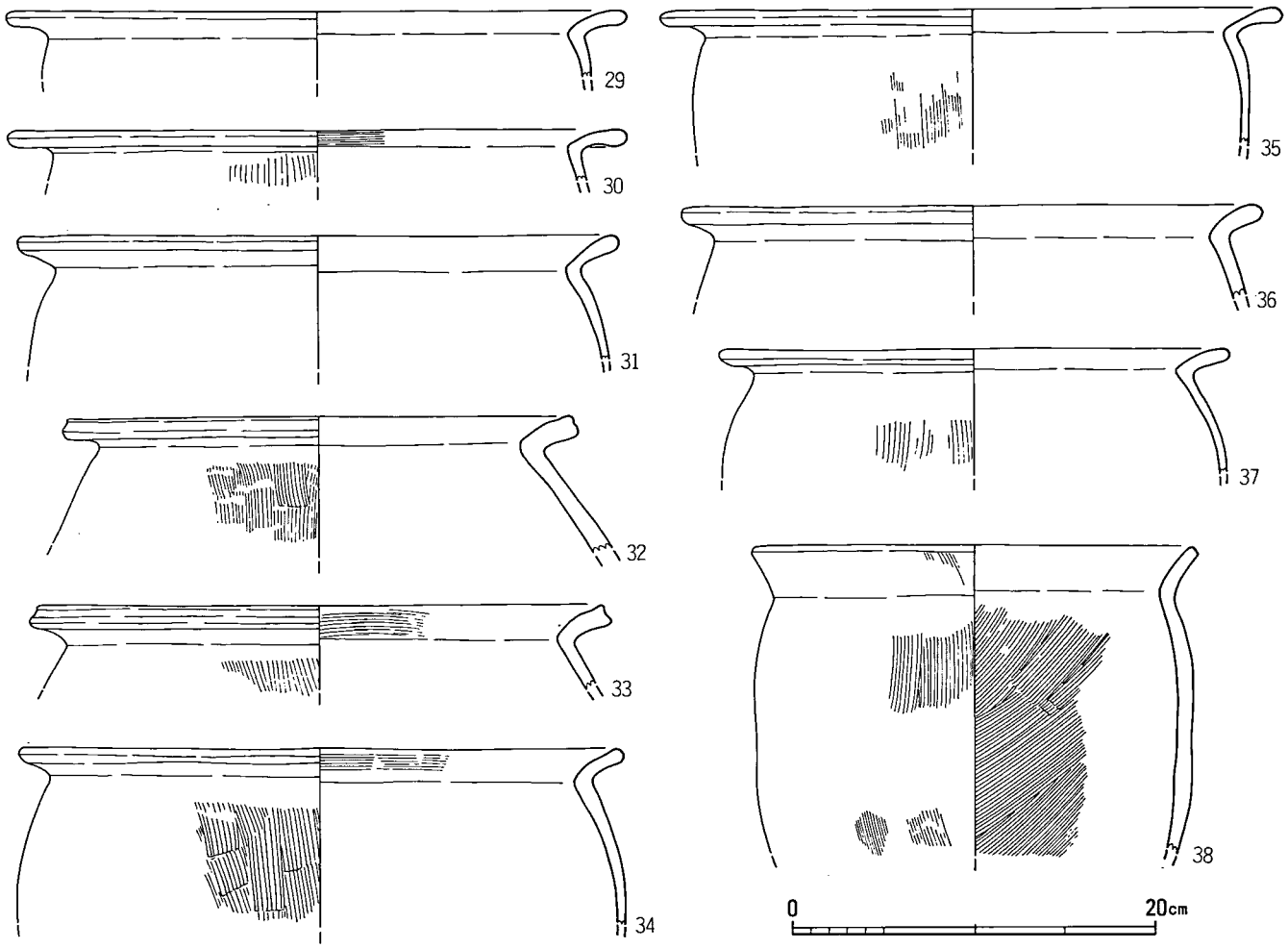
第145図　40・41号土坑出土土器実測図（1/4）



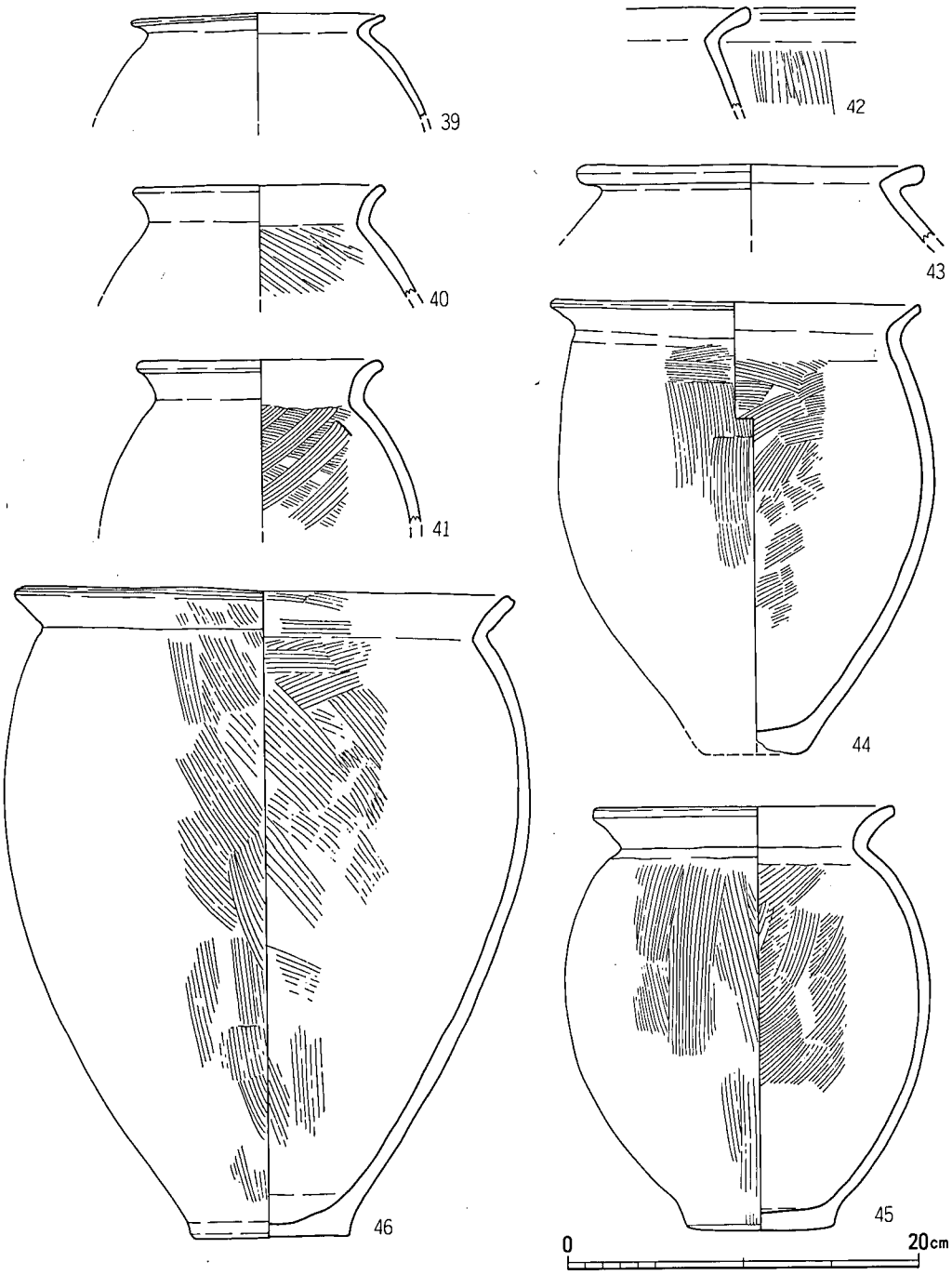
第146図　41号土坑出土土器実測図.1（1/4）



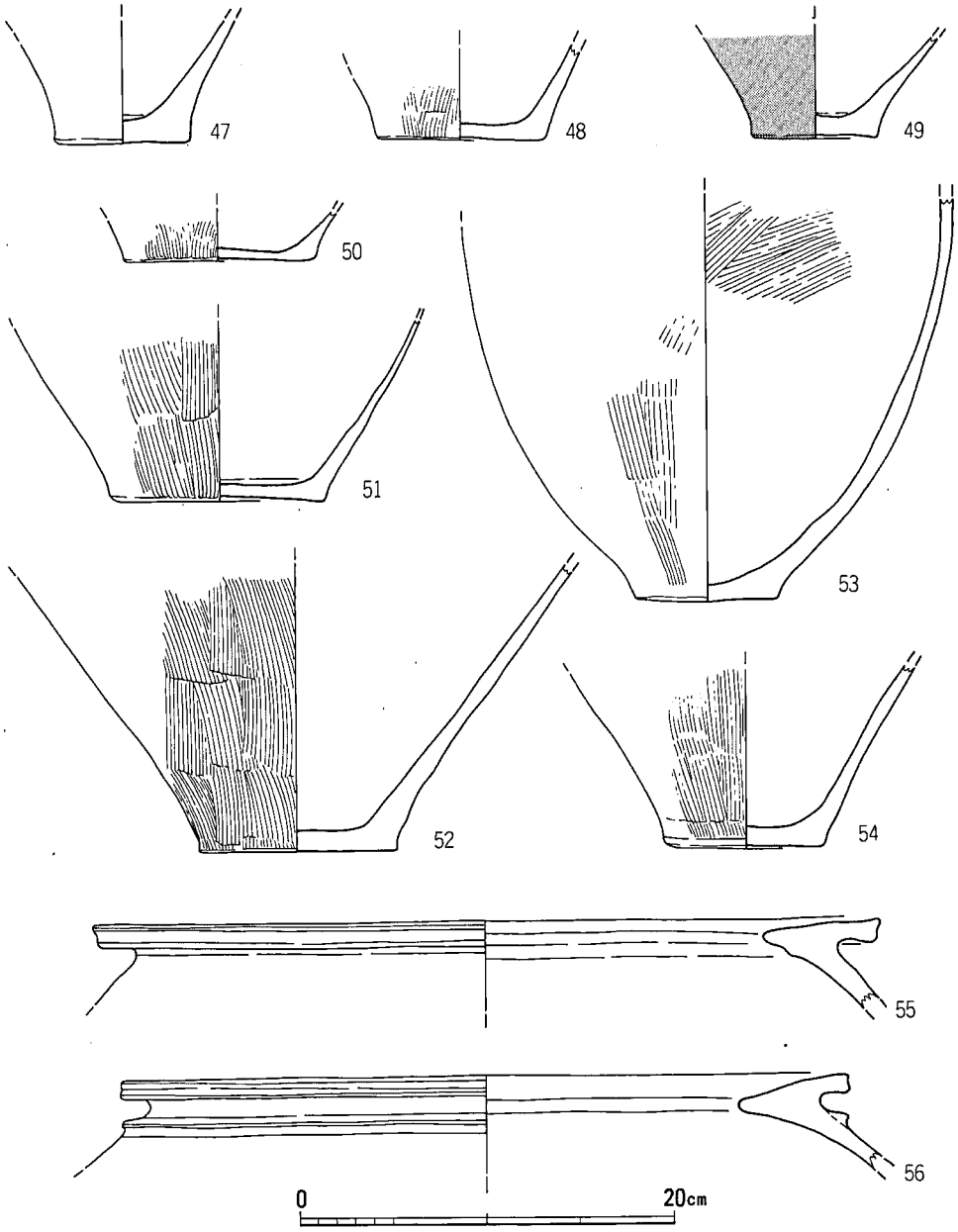
第147図　41号土坑出土土器実測図.2（1/4）



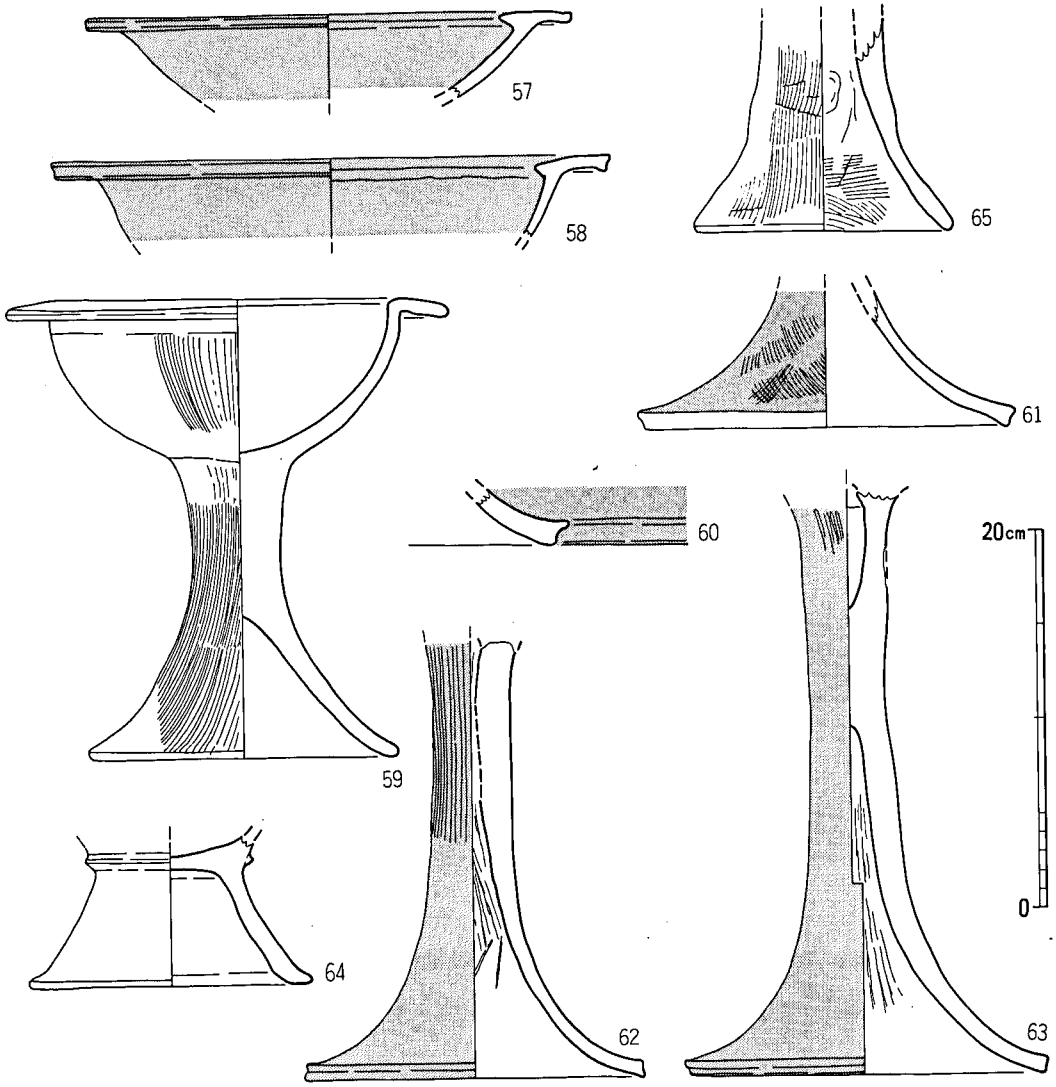
第148図　41号土坑出土土器実測図.3（1/4）



第149図　41号土坑出土土器実測図.4 (1/4)

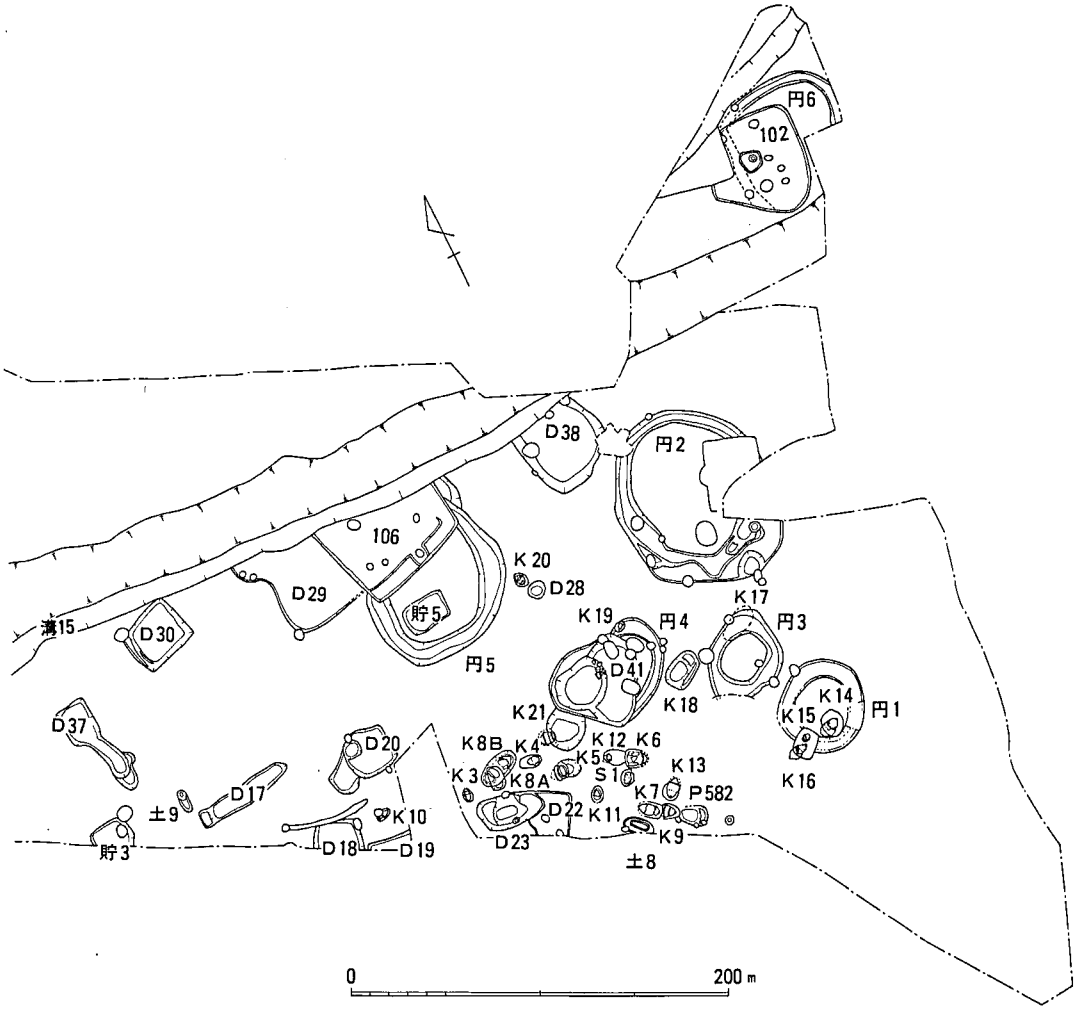


第150図　41号土坑出土土器実測図.5（1/4）



第151図　41号土坑出土土器実測図.6（1/4）

れるが、この類型は年代差である可能性が高い。口径については、28～34cmのものが圧倒的に多く、20～24cm、36～38cmの大きくやはり3類型に分かれるが、これは年代差ではなく用途の差であろう。頸部下に1本突帯文を貼り付けるものが量的には少ないが、口縁部形態やサイズに関係なく普遍的に存在する。丹塗の甕は量的には多いと考えられるが、ここで図示できたのは第146図10の口縁部と第150図49の底部だけである。第146図10は復原口径34cmで、口縁端部は刻まれ、頸部下の突帯文は断面形態が「コ」字状になるが、丹塗甕の多くはこのタイプ。そ



第152図　鷹取五反田遺跡調査区東端部遺構配置図（1/400）

して口縁部の上面には暗文状のミガキが施される。第150図47～54の中にも壺の底部が含まれる可能性も否定しないが、器面調整からそのすべては甕の底部としたい。第150図55・56は甕棺の口縁部で、復原口径は55が42cm、56が39cm。第151図57～64のうち、57～62は高坏、64は台付き鉢、63は器台である。高坏７点のうち、59を除いてすべて丹塗である。59は口縁部が逆「L」字状に屈折するボウル状に丸い坏部と、比較的短い脚部が特徴的。ミガキは見られず器面調整はハケ。この特異な器形が丹塗でない理由であろうか。脚部の内面にはしぼり痕が見られるが、62にはそれをヘラ状工具でナデ消そうとしているようである。脚部の裾端部は凹線状

に窪む。65は内外面ともにハケが施される器台の裾部で、強い二次加熱により赤褐色に変色する。

石器（第167図14・15　第169図5・6）第167図14は片岩系の、15は粘板岩製の石庖丁。いずれも折れた後に使用した痕跡はない。第169図5・6はともに頁岩製の砥石。使用痕の観察から、いずれも欠損後も使用していることがわかる。

鉄器（第171図7・8）7は刀子で、長さ9.2cm、身の長さ6.1cm、関部幅1.7cm、茎先端幅0.7cmを測る。8は先端部の破片であるが、下側が尖っており、刃部と認められることから刀の鋒部分になろう。残存長4.2cm。いずれも埋土上部の出土。

9．円形周溝状遺構

円形周溝状遺構は調査区東端部において、6基が集中して検出された。甕棺墓や土坑との切り合い関係から、また出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられるものもあれば、同様の理由で弥生時代後期に属するものもある。いずれにせよ、これら6基の円形周溝状遺構が、時間的な変遷の中においても、本調査区の東端部に連綿と構築された事実は注目されよう。切り合い関係は以下のとおりである。

円1→甕15・16→甕17→円3　4円→41土・19甕

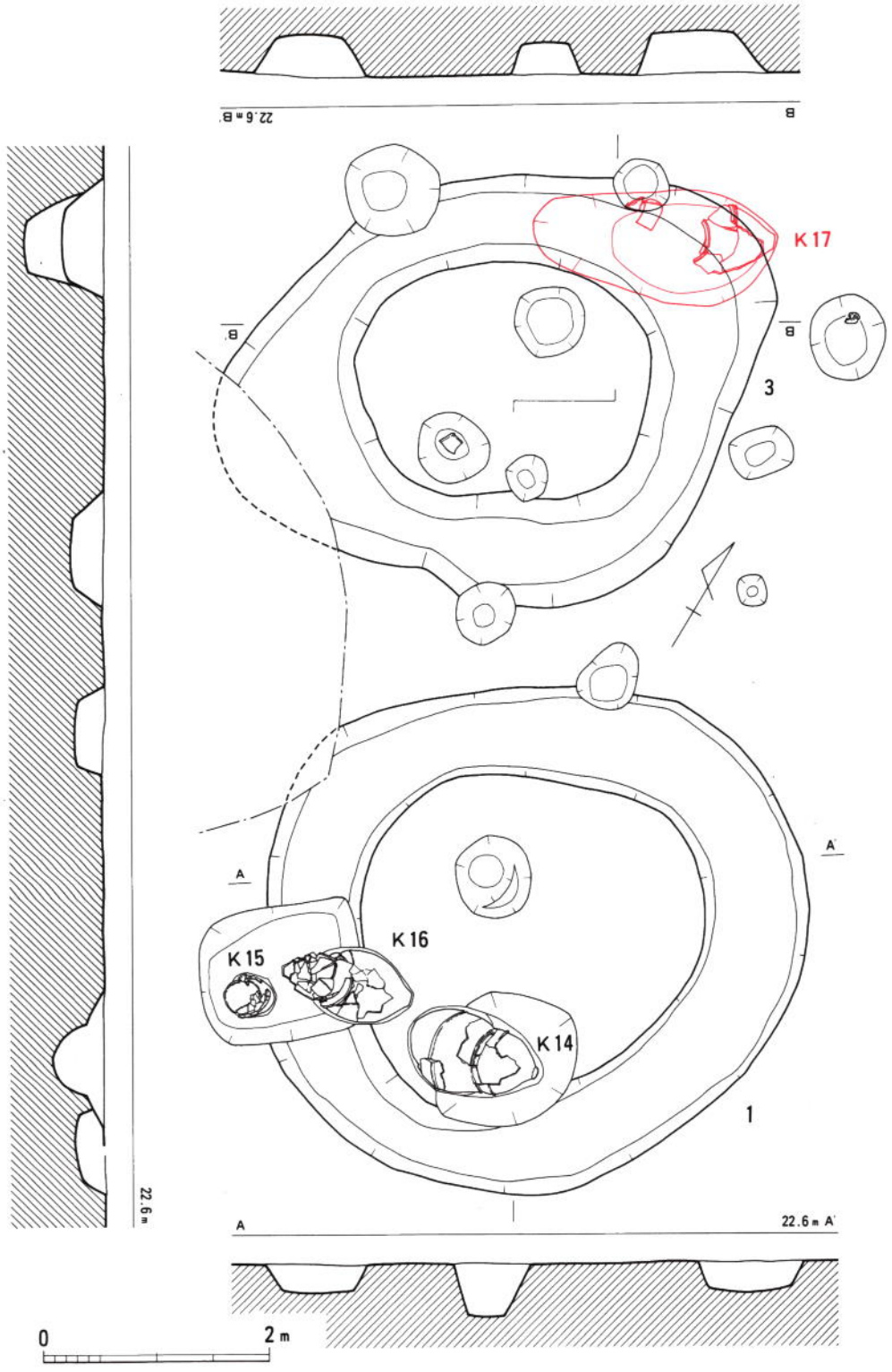
1号円形周溝状遺構（図版75　第153図）

1号円形周溝状遺構はU-V11区に位置し、14～16号甕棺墓に切られる。3号円形周溝状遺構とは北西70cmの距離をおいて近接する。平面プランは4.7×4.5mのほぼ正円に近いドーナツ状を呈し、断面U字状の周溝の幅は75～95cmで、深さは25cm前後にほぼ統一される。埋土は暗黄褐色砂質土で、遺物はポリ袋1枚程度と少なく、またいずれも摩滅して小片ばかりであった。16・17号甕棺墓の項目でも述べたように、この1号円形周溝状遺構を切る16号甕棺墓の下甕の一部が、3号円形周溝状遺構によって切られる17号甕棺墓の欠損部の補修あるいは蓋として転用されている。16・17号の甕棺墓間には型式学的にも若干の年代差が存在しており、また3号円形周溝状遺構から出土する土器は弥生時代後期でも比較的新しい要素を有していることから、遺構の切り合いによる先後関係と遺物の型式学的先後関係は整合性を見せており、1号円形周溝状遺構→15・16号甕棺墓→17号甕棺墓→3号円形周溝状遺構という序列は確かなものと言えよう。

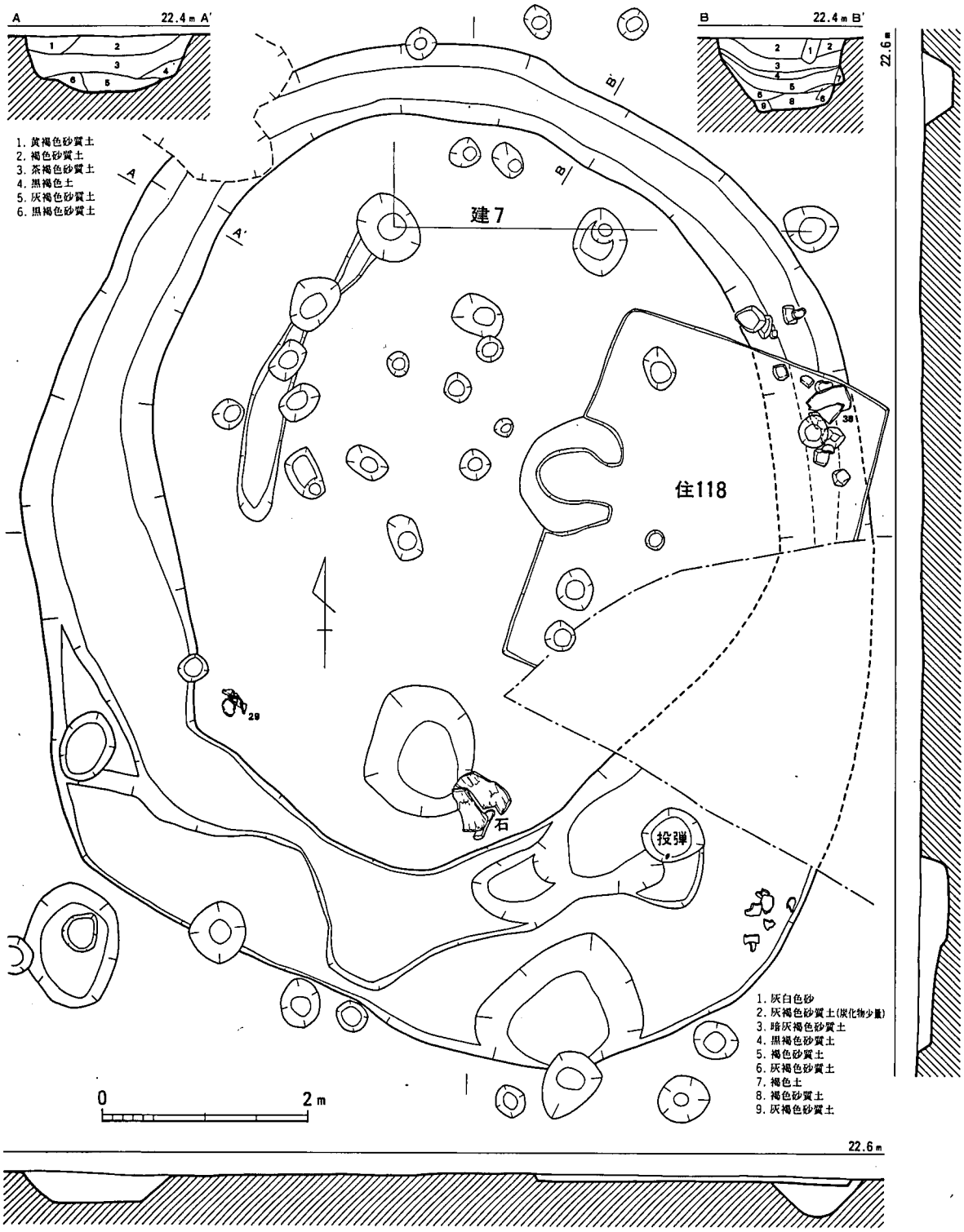
土器（第155図）1は復原口径18cmの比較的小さい甕の口縁部で、内外面には器面調整としてハケが施される。口縁端部はわずかに凹線文状に窪む。

2号円形周溝状遺構（図版74～76　第154図）

2号円形周溝状遺構はU-V9-10区に位置し、古墳時代の118号竪穴住居跡や7号掘立柱建物



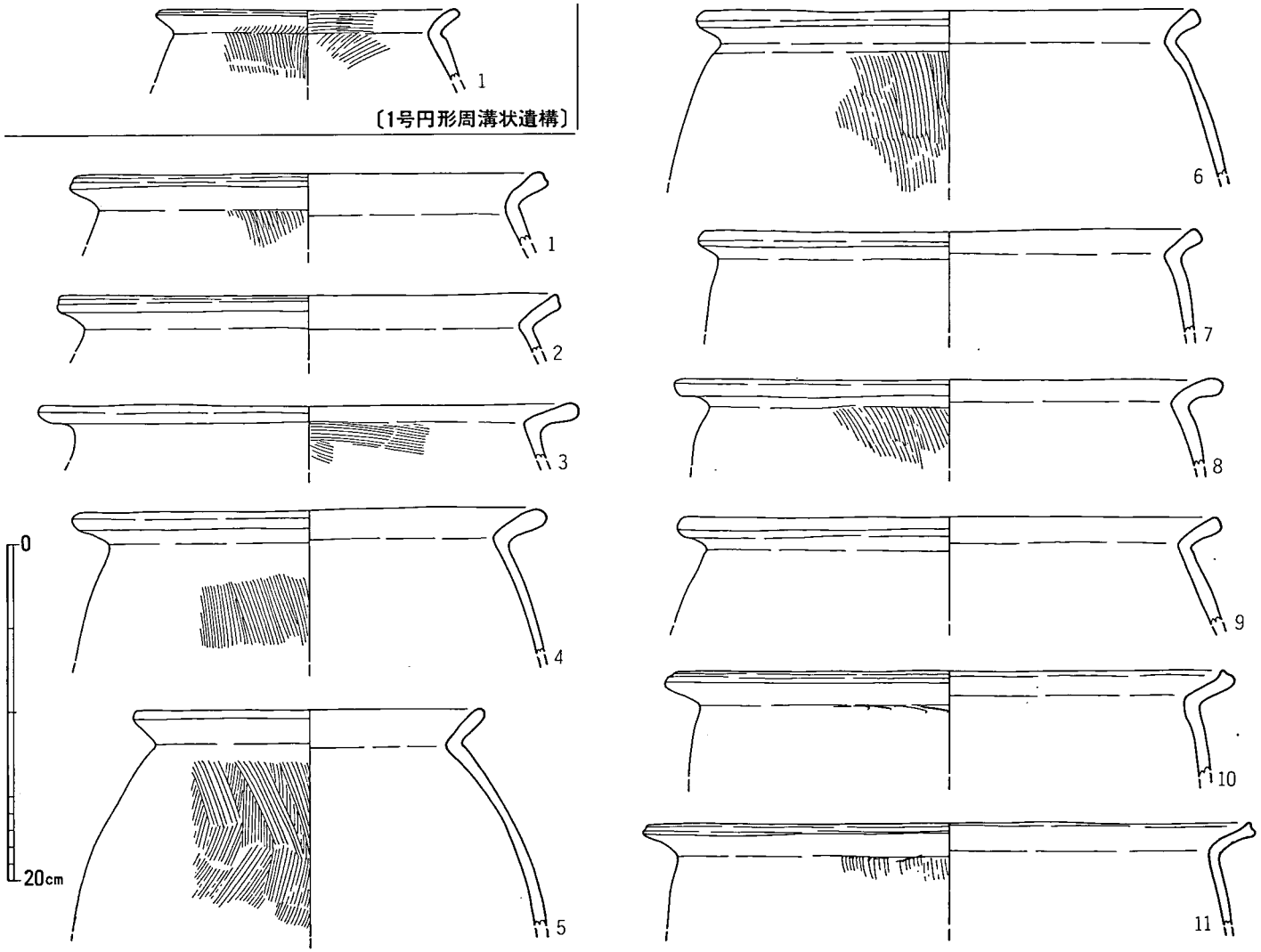
第153図　1・3号円形周溝状遺構実測図（1/60）



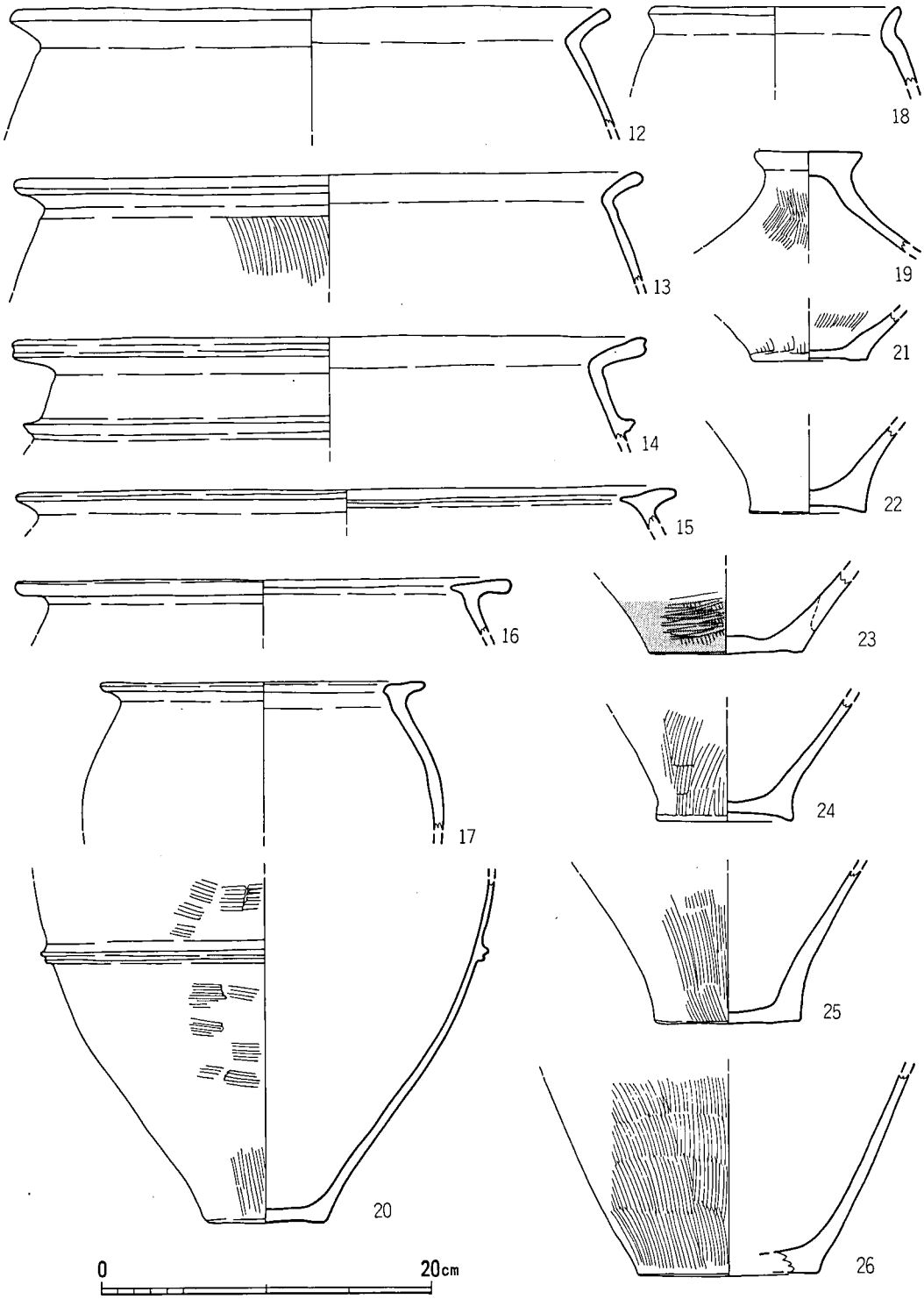
第154図　2号円形周溝状遺構実測図（1/60）

跡には切られるが、弥生時代の遺構とは切り合い関係を有さない。ただし、北西１ｍには38号土坑と、南２ｍには３号円形周溝状遺構と、南西３ｍには４号円形周溝状遺構と、西６ｍには５号円形周溝状遺構といったように、弥生時代の遺構、特に円形周溝状遺構とはかなり近接して群をなしている。平面プランは9.9×7.7ｍの南北に長い楕円形を呈する。北側半分については断面形態が「U」字状の幅65～80㎝、深さ25～30㎝の比較的整然とした周溝が巡るが、南側半分については最大幅2.4ｍの範囲内で浅いテラスを有する２段の周溝になったり、あるいはその２段目の周溝が幅30～120㎝と波打つようになったり、また深さも南端に近づくにつれて浅くなったりと、かなり不安定かつ不規則な状態で巡っている。周溝内への埋土の堆積状況を確認するため、北東部と北西部において２カ所の土層断面（第154図）を設定したが、いずれも砂質土を中心に円形周溝状遺構の内側から外側へ自然に堆積していった状況が観察された。円形周溝状遺構の構造や性格を想定するうえで、注目すべき事実である。遺物は全体に満遍なく出土するが、東端部では拳大～人頭大の礫が埋土中位より纏まって出土している。出土土器は弥生時代中期後半～後期前半のものがパンケース３箱ほどになるが、第158図３の１点だけは弥生時代終末期のものが含まれる。この甕の胴部下半の資料は、本遺構の東端部を検出している時点で出土したもの、すなわち最上部で出土したものであり、あるいは本遺構を切る何等かの遺構に所属するものである可能性が高いと考える。このことは、他の円形周溝状遺構をはじめ本遺跡全体においても当該期の資料がこれ以外にまったく存在しないことからも言えよう。

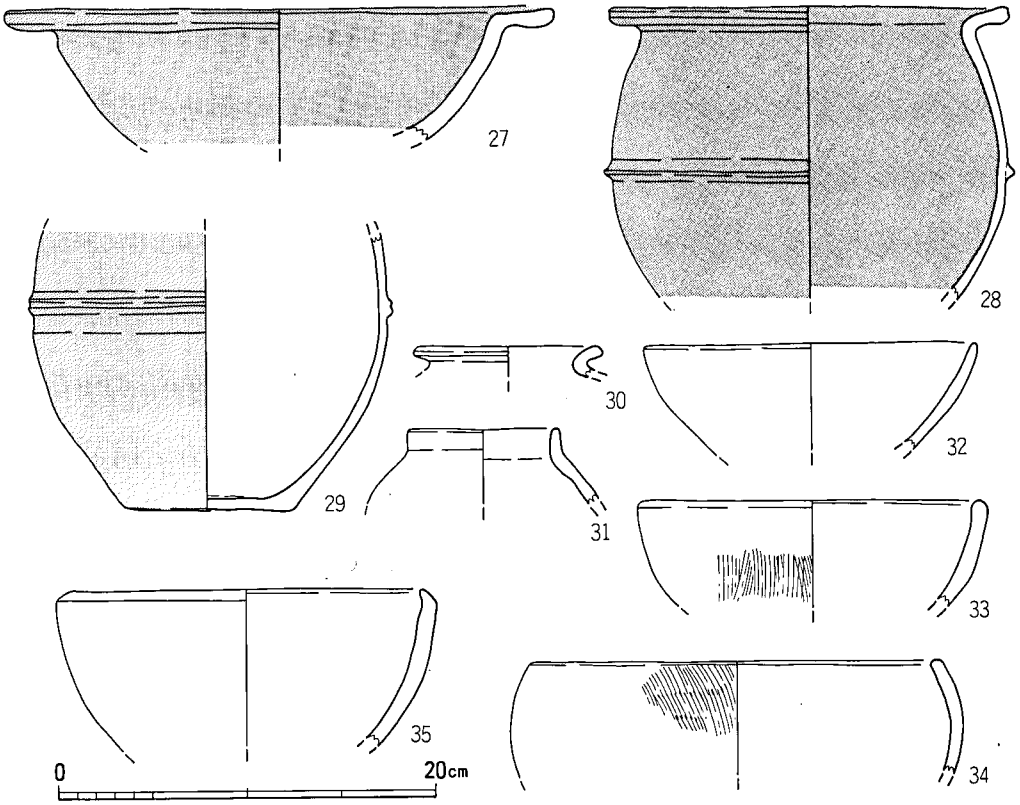
土器（第155～158図１～38）土器はパンケース３箱になり、かなり大きく復原できるものもある。また遺存状態は比較的良好で、摩滅により器面調整が不明なものも少ない。第155図１～11と第156図12～16は復原口径28～40㎝の甕で、多くの場合器面調整は外面がハケで、内面がナデになる。摩滅により器面調整が不明なのは第155図９と第156図12ぐらいで、ハケがナデ消されるものも少なくない。口縁部の形態から年代差も存在するが、第155図１・２・11や第156図14のように口縁端部が凹線状に浅く窪むものもあれば、第155図10のように端部をはね上げるものもある。第156図17・18は復原口径19㎝と15㎝の比較的小型の甕で、摩滅により器面調整は不明。前者については、二次加熱により全体が赤褐色に変色している。第156図19は甕の蓋で、外面はハケ、内面はナデ。第156図20は甕の胴部下半で、外面にはミガキが痕跡的に窺える。中心部に沈線（凹線）が施される突帯文の復原径は27㎝で、器厚は５㎜と薄い。第156図21～26の底部のうち、21は壺のその他は甕のものであるが、26は胴部がビヤダルのように丸く緩やかに張る器形になろう。22～25はいずれも二次加熱を受け赤褐色に変色するが、23の外面にはハケ後にミガキが施され、さらにその後に丹が塗られる。第157図27は復原口径29㎝の高坏坏部で、内外面に丹が塗られる。28・29は胴部が緩やかに丸く張る甕で、28については内外面に、29については外面のみ丹が塗られる。28の復原口径は21㎝、突帯文の復原径は22㎝。29の突帯文の復原径は19㎝で、中心に沈線（凹線）が施される。第157図30は復原口径10㎝のミニチュア壺、31は復原口径８㎝のミ



第155図　1・2号円形周溝状遺構出土土器実測図（Ⅰ/4）



第156図　2号円形周溝状遺構出土土器実測図.1（1/4）



第157図　2号円形周溝状遺構出土土器実測図.2（1/4）

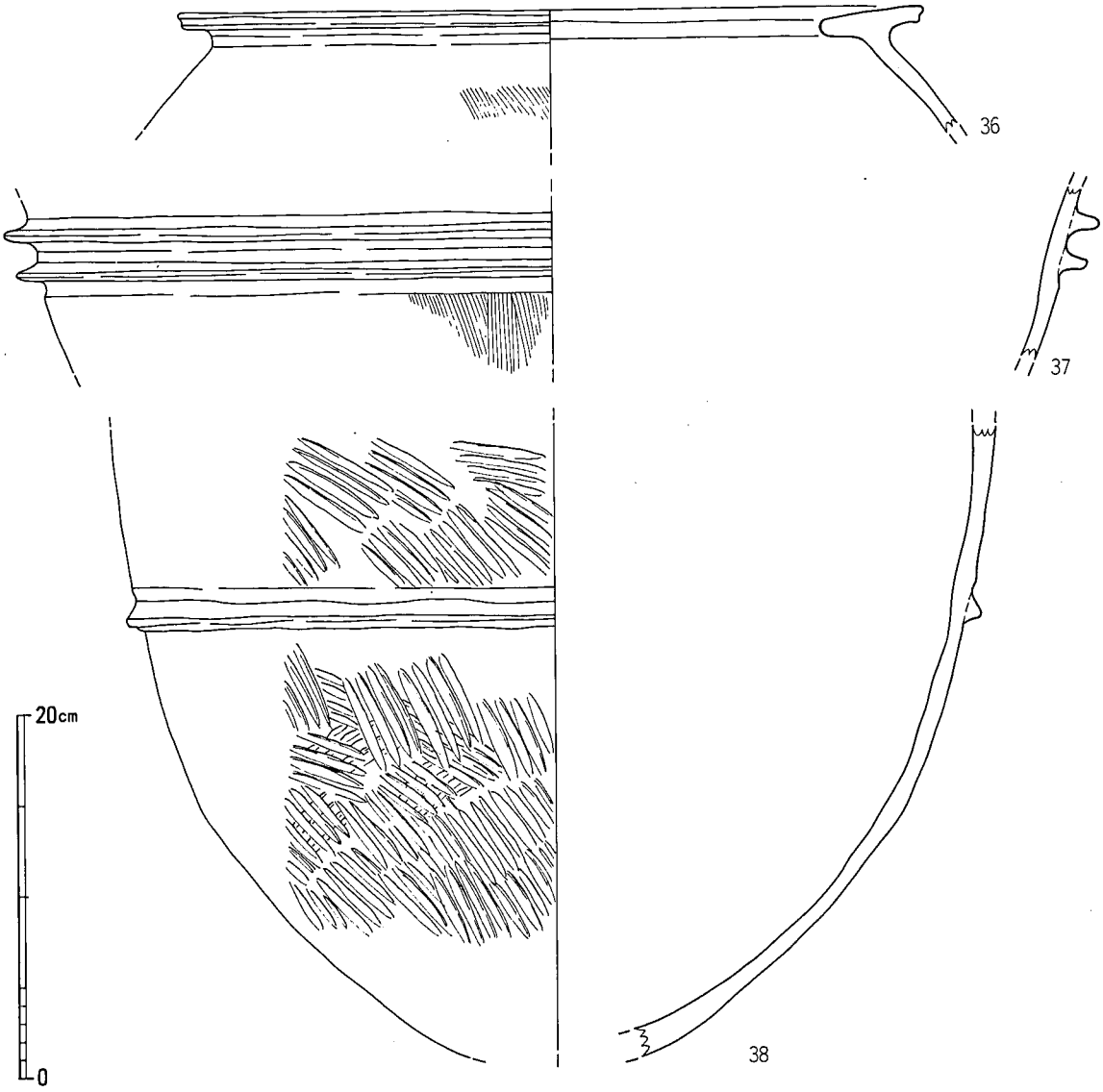
ニチュア甕になろうか。第157図32～34は復原口径18～22cmのボウル状鉢で、7と8の外面にハケが窺えるほかはすべてナデ。いずれも二次加熱を受けた痕跡はない。第158図36・37はいずれも甕棺。36は復原口径41cmの口縁部付近で、外面にはハケが窺える。37の2本の突帯文の断面形態は細長くて丸い三角形で、この部分の復原径は50cm。外面にはハケが、内面にはナデが器面調整として施される。第158図38は復原突帯文径47cmの甕棺（？）で、外面にはタタキが、内面にはナデが施される。突帯文の断面形態は丸みのある三角形で、全体に波打ち整然さがない。底部は欠損しているが、おそらくは丸底か、平底であってもかなり小さく丸底に近い形態になろう。弥生時代終末期に属するもので、本遺跡においては唯一例である。

石器（第167図17）粘板岩製の石庖丁の破片。研ぎ直しの痕跡はない。

土製品（第165図80）投弾形土製品の完形品。両端部が尖り、ほぼラクビーボール状を呈す。淡灰褐色の色調で、長4.85cm、径2.6cm、重さ23.2gを測る。

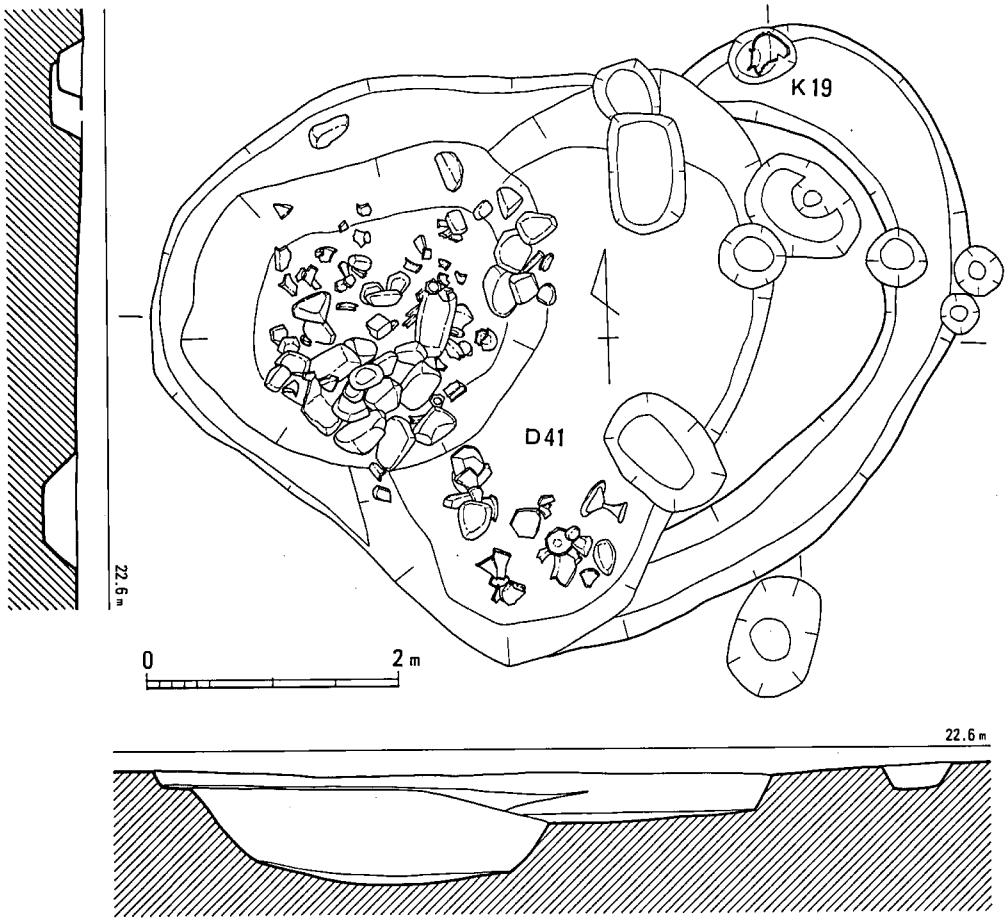
3号円形周溝状遺構（図版74・77　第153図）

3号円形周溝状遺構はU10-11区に位置し、17号甕棺墓を切る。1号円形周溝状遺構とは南



第158図　2号円形周溝状遺構出土土器実測図.3（1/4）

東70cmに、2号円形周溝状遺構とは北2mに、4号円形周溝状遺構とは北西2mに、18号甕棺墓とは北西0.5mにそれぞれ近接する。平面プランは5.1×3.9mの卵形に近いドーナツ状を呈し、断面U字状の周溝の幅は長軸両端部では110～130cmとやや広いが、短軸両端部では75～85cmと狭くなる。深さは25～30cm前後にほぼ統一され、底面は全体的に平坦になる。埋土は暗黄褐色砂質土で、遺物はパンケース半分程度と少ないが、完形近くまで復原できるものもあった。16・17号甕棺墓の項目でも述べたように、1号円形周溝状遺構を切る16号甕棺墓の下甕の一部



第159図　4号円形周溝状遺構実測図（1/60）

が、この3号円形周溝状遺構によって切られる17号甕棺墓の欠損部の補修あるいは蓋として転用されている。16・17号の甕棺墓間には型式学的にも若干の年代差が存在しており、また3号円形周溝状遺構から出土する土器は弥生時代後期でも比較的新しい要素を有していることから、遺構の切り合いによる先後関係と遺物の型式学的先後関係は整合性を見せており、1号円形周溝状遺構→15・16号甕棺墓→17号甕棺墓→3号円形周溝状遺構という序列は確かなものと言えよう。

土器（第162図1～4）1は復原口径32cmの高坏坏部で、摩滅が著しく器面調整は不明だが、内外面ともに丹塗の痕跡が窺える。屈曲部の破損部には接合面が見られる。2～4の甕はいずれも口縁部が緩やかに外反しながら「く」字状に屈曲するのが特徴。2は復原口径20cmの甕で、外面にはナデが、内面にはハケが施される。3は復原口径16cmの小型の甕で、内外面には口縁部まで丁寧にハケが施される。4は復原口径16cm、器高21.5cm、底径7.5cmの甕で、内外面ともにハケが施され、底部は端部はシャープであるが、やや厚い丸底状になる。

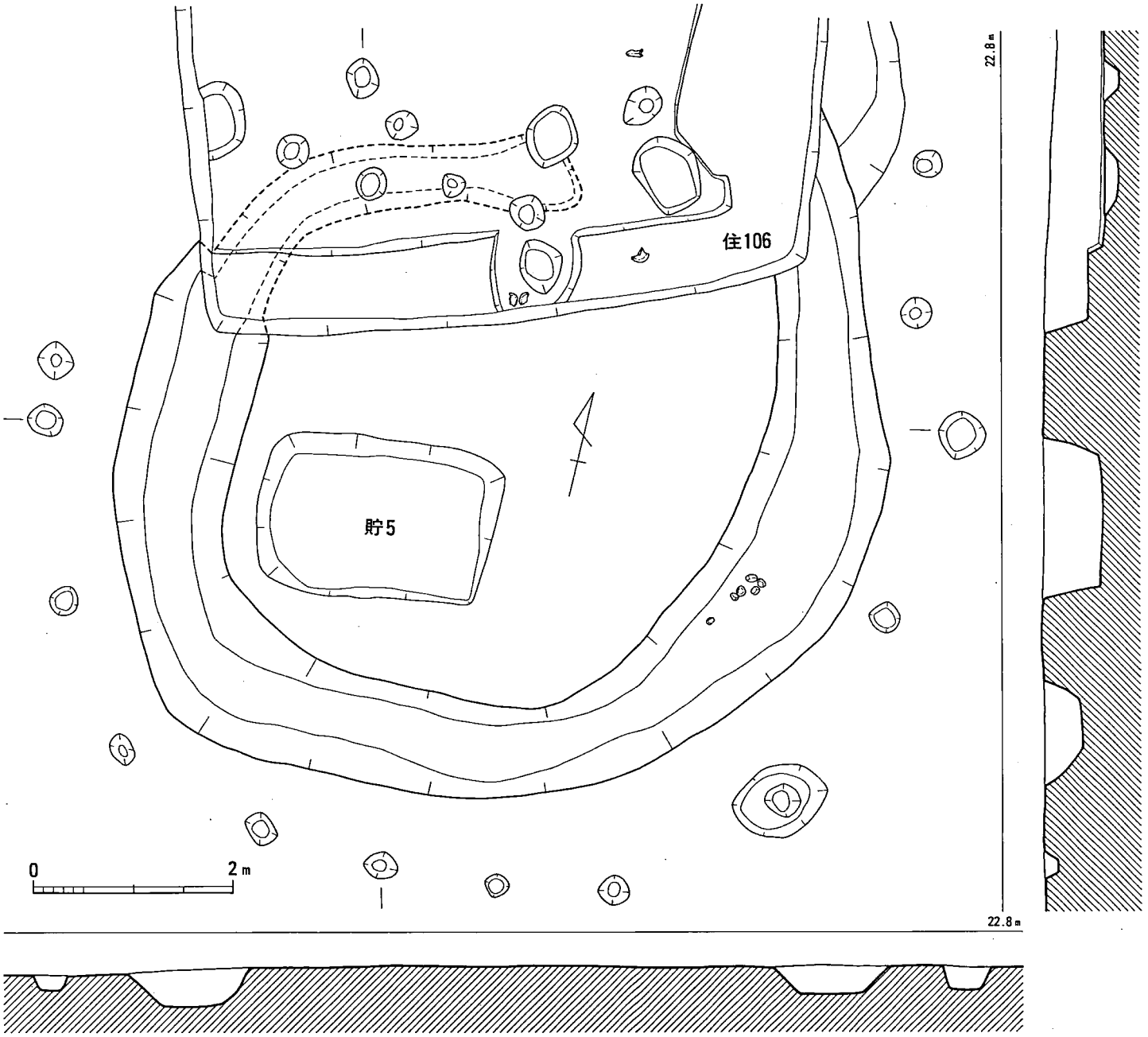
4号円形周溝状遺構（図版74　第159図）

4号円形周溝状遺構はU10-11区に位置し、41号土坑や19号甕棺墓に切られる。東2mには3号円形周溝状遺構と、北東3mには2号円形周溝状遺構と、北西5mには5号円形周溝状遺構とそれぞれに近接するように、ここは円形周溝状遺構が密集する地区である。41号土坑に大きく削平されるため全体像は不明であるが、南北方向に5.2m以上、東西方向に3.4m以上の長楕円形を呈する平面プランになろう。周溝の幅は長軸端部が85cmであるのに対し、短軸端部は50cmとかなり差がある。深さは北側から南側へ向けて、20cmほどであったのが35cmほどに徐々に深くなっていく。遺物は弥生土器の小片が小さいポリ袋1枚ほどが出土したが、図示できるものはなかった。当初、この遺構は41号土坑に大きく削平され全体像がわからないこと、かなりの長楕円形になるかあるいは円形にならず「の」字状になるかもしれないこと、底面のレベルが一定しないこと等から、円形周溝状遺構という位置づけに躊躇を覚えるものであった。しかし、5号円形周溝状遺構でも比較的類似した特徴が見られることから、敢えて円形周溝状遺構という認識で取り扱うことにした。

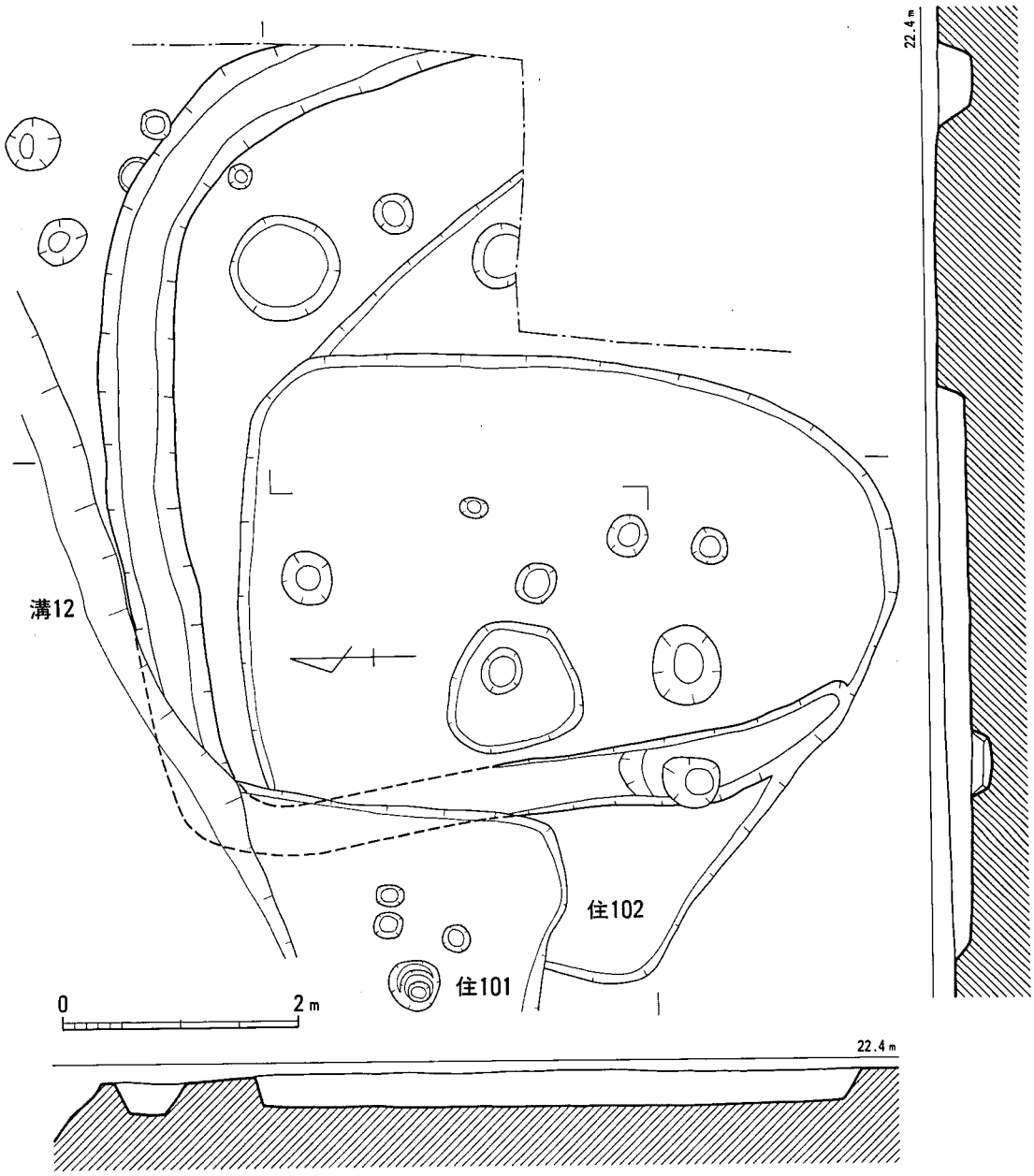
5号円形周溝状遺構（図版78　第160図）

5号円形周溝状遺構はT9-10区に位置し、弥生時代の106号竪穴住居跡に切られる。東7mには2号円形周溝状遺構と、南東7mには4号円形周溝状遺構と近接するが、密集する円形周溝状遺構群の中にあっては最も西寄りに位置する。第160図の実測図でもわかるように、本遺構は厳密な意味では円形周溝状遺構ではなく、逆「の」字周溝状遺構ということになろうか。東西方向には7.7mが測れるが、南北方向には北端部が106号竪穴住居跡に削平されているため6.6mまでしか測れない。周溝の幅は80～140cm程度と差があって一定せず、全体的に波打っている。問題は深さで、北端部付近では20cm程度しかなかったのに、逆「の」字の中心部へ向かって徐々に深くなっていき、106号竪穴住居跡の中心部付近の終点部では70cmほどになる。底面自体には全体的に凹凸がなく平坦な面を作る。周溝が円形をなさず、端部が存在して逆「の」字状になる平面プランは特異であり、さらに逆「の」字状の中央部へ向けて徐々に深くなるという特徴は注目されよう。また、この周溝から30～90cm外側に周溝に沿うように、90～130cmの間隔で径30～40cm深さ15～20cmの小さいピットが巡る。本遺構の構造（例えば壁や屋根の存在を想定させる）に大きく関係するものとしてこれも多いに注目されよう。周溝内には出土遺物から判断する限りではそれほど年代差のない5号貯蔵穴が存在するが、かなり西端によっており本遺構との関連性はないものと考えられる。遺物はパンケース半分程度で、大きな土器片はなかった。

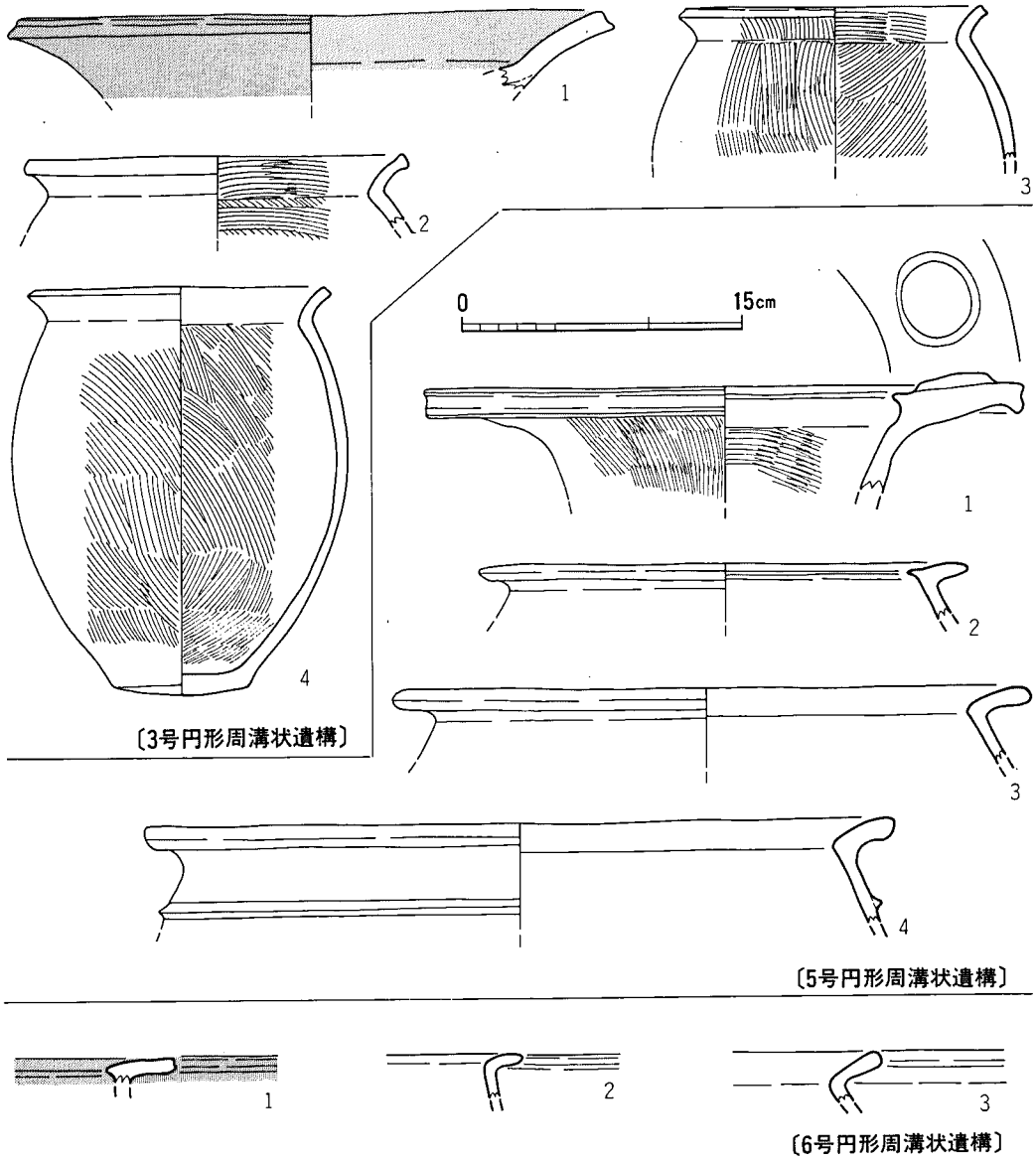
土器（第162図1～4）1は復原口径32cmの壺で、内外面共にハケが施される。水平口縁の端部には浅い凹線により窪み、内側には強いナデが施され、上面には径4.5cmの円形浮文が貼



第160図　5号円形周溝状遺構実測図（1/60）

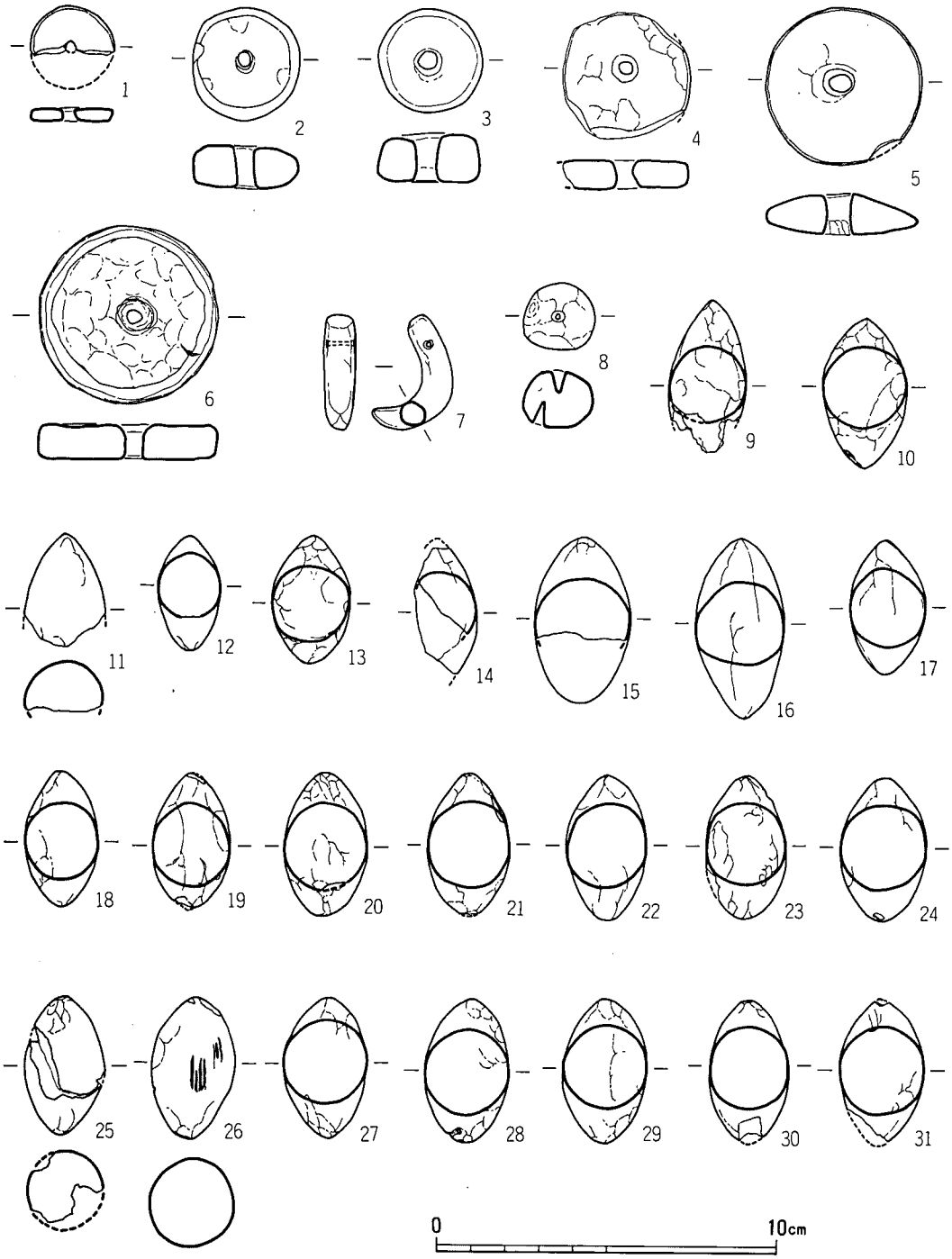


第161図　6号円形周溝状遺構実測図（1/60）

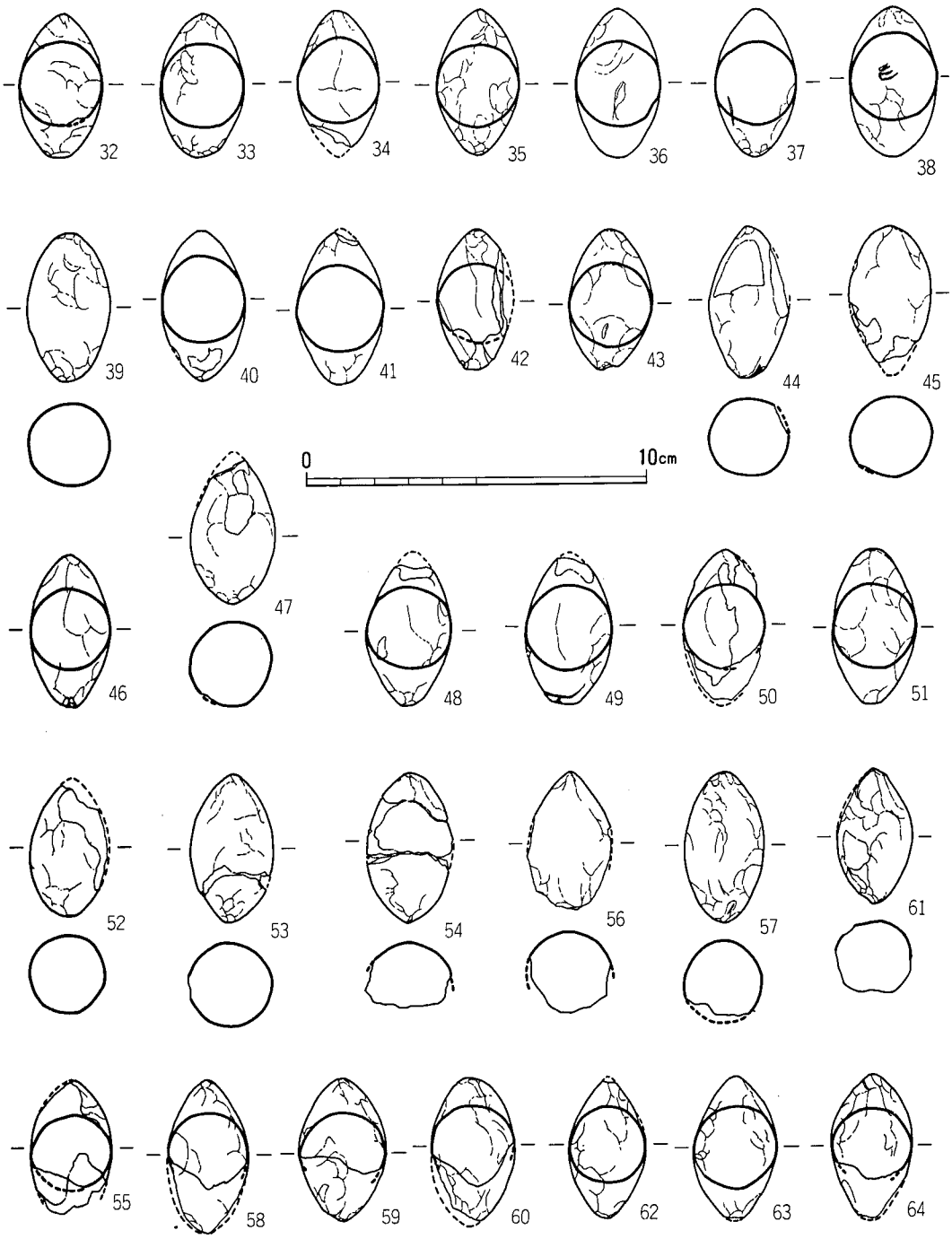


第162図　3・5・6号円形周溝状遺構出土土器実測図（1/4）

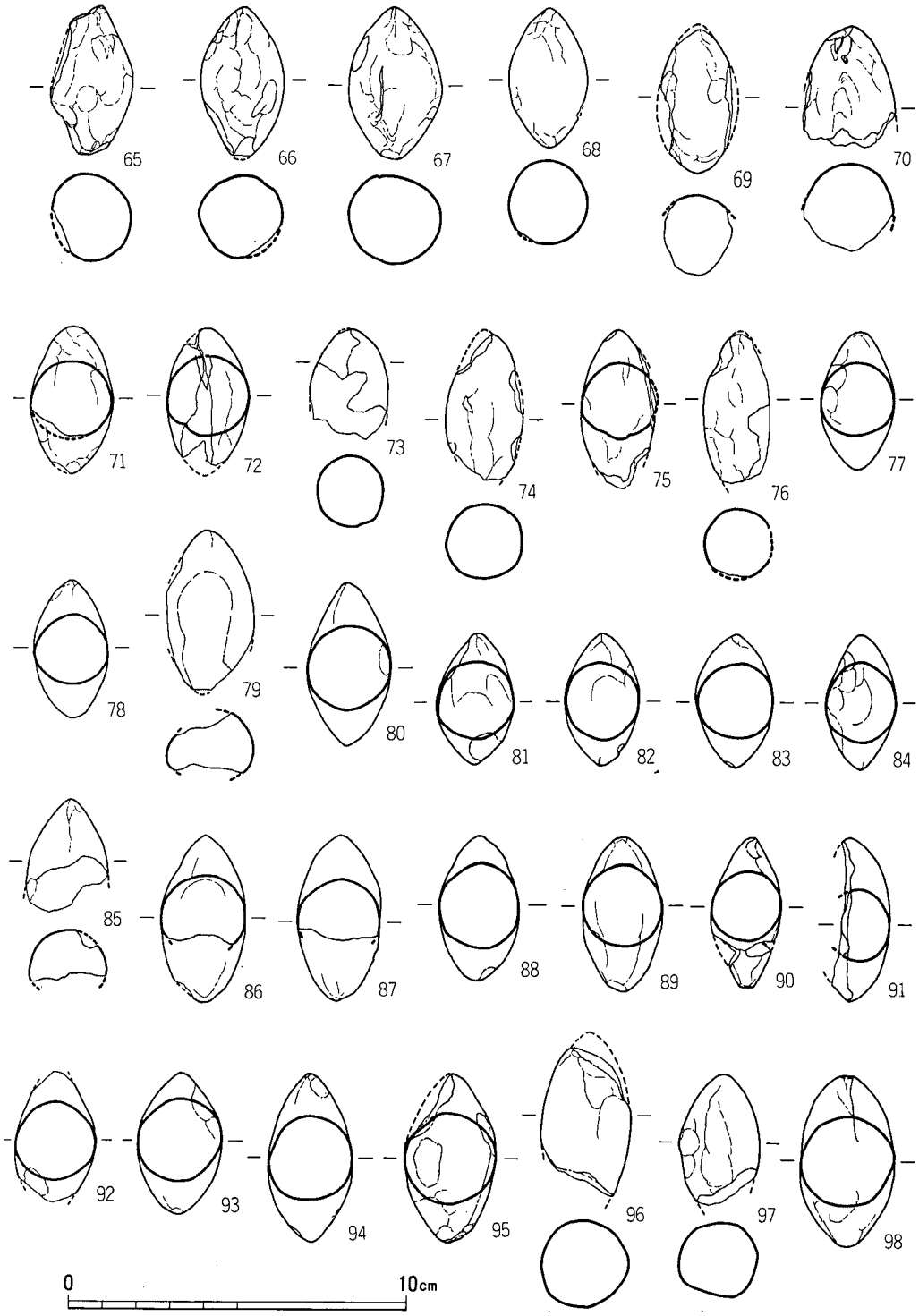
り付けられる。2は復原口径26cm、3は34cmの甕で、摩滅によりいずれも器面調整は不明。4は復原口径40cmの甕で、器面調整は内外面ともにナデ。頸部下に貼り付けらる突帯文の断面形態は三角形を呈する。



第163図　土製品実測図.1（1/2）



第164図　土製品実測図.2 (1/2)



第165図　土製品実測図.3（1/2）

番号	群	長さ	径	重さ	色調	備考	挿図
1	No.1	39	2.25	14.1	暗赤褐色	完形	第163図18
2	No.1	(3.8)	2.3	16	黒灰色	一部欠	第163図19
3	No.1	4.15	2.5	20.1	黒灰色	完形	第163図20
4	No.1	4.1	2.55	20.5	茶灰色	完形	第163図21
5	No.1	4.25	2.45	20.3	黒灰色	完形	第163図22
6	No.1	4.1	2.45	19.3	黒灰色	一部欠	第163図23
7	No.1	4.2	2.6	21.1	黒灰色	完形	第163図24
8	No.1	4.1	2.4	(15.7)	黒灰色	一部欠	第163図25
9	No.1	4.2	2.5	20.1	黒灰色	完形　ハケ目	第163図26
10	No.1	4.2	2.5	20.3	黒灰色	完形	第163図27
11	No.1	4.25	2.55	21.4	淡黒灰色	完形	第163図28
12	No.1	4.3	2.55	20.9	黒灰色	完形	第163図29
13	No.1	(4.2)	2.5	(20.3)	黒灰色	一部欠	第163図30
14	No.1	(4.2)	2.55	(20.9)	黒灰色	両端欠	第163図31
15	No.1	4.3	2.55	21.2	黒灰色	完形	第164図32
16	No.1	4.3	2.55	21.4	黒灰色	完形	第164図33
17	No.1	(4.0)	2.5	(18.7)	黒灰色	一部欠	第164図34
18	No.1	4.3	2.5	20.9	黒灰色	完形	第164図35
19	No.1	4.45	2.5	21.8	黒灰色	完形	第164図36
20	No.1	4.4	2.55	21.7	黒灰色	完形　条線	第164図37
21	No.1	4.45	2.5	22	黒灰色	完形　工具痕	第164図38
22	No.1	4.35	2.55	21.8	黒灰色	完形	第164図39
23	No.1	4.35	2.55	21.8	黒灰色	完形	第164図40
24	No.1	(4.5)	2.6	22.6	黒灰色	一部欠	第164図41
25	No.1	4.3	2.45	(19.4)	黒灰色	表皮欠	
26	No.1	4.2	2.55	(20.7)	黒灰色	ほぼ完形	
27	No.1	4.4	2.55	21.4	黒灰色	ほぼ完形	
28	No.1	(4.35)	2.55	(20.7)	黒灰色	一部欠	
29	No.1	(4.1)	2.5	(19.6)	黒灰色	一部欠	
30	No.1	(4.05)	2.55	(20.9)	黒灰色	片端欠	
31	No.1	(4.2)	2.5	(18.9)	黒灰色	片端欠	
32	No.1	(3.7)	2.6	(16.5)	黒灰色	片端、中央欠	
33	No.1	(3.8)	(2.45)	(12.1)	黒灰色	3分の1残	
34	No.1	4.35	2.45	(18.3)	黒灰色	一部欠	
35	No.1	4.1	2.6	20.6	黒灰色	ほぼ完形	
36	No.1	4.3	2.45	20.2	黒灰色	ほぼ完形	
37	No.1	(4.25)	2.4	(20.2)	黒灰色	片端欠	
38	No.1	4.25	2.55	21.4	黒灰色	完形	
39	No.1	(4.3)	2.45	(20.7)	黒灰色	片端欠	
40	No.1	4.35	2.65	(23.1)	黒灰色	一部欠	
41	No.1				黒灰色	小破片	
42	No.2	4.15	2.4	(16.6)	黒灰色	中央欠	第164図42
43	No.2	4.15	2.5	19.6	黒灰色	完形　斜め整形	第164図43
44	No.2	4.4	(2.35)	(17.6)	黒灰色	一部欠　ハケ目	第164図44
45	No.2	(4　)	2.45	(18.3)	黒灰色	片端欠	第164図45
46	No.2	4.5	2.45	20.4	黒灰色	完形　斜め整形	第164図46
47	No.2	(4.2)	2.55	(20.4)	黒灰色	片端欠	第164図47
48	No.2	(4.15)	2.6	(21.3)	黒灰色	片端欠	第164図48
49	No.2	(4.4)	2.6	(23.7)	黒灰色	片端欠	第164図49
50	No.2	(4.35)	(2.4)	(21.1)	黒灰色	両端欠	第164図50
51	No.2	4.6	2.55	23.2	黒灰色	完形	第164図51
52	No.2	(3.7)	(2.4)	(9.7)	黒灰色	3分の1残	
53	No.2	(2.5)	(2.1)	(10.3)	黒灰色	6分の1残	
54	No.2			(13　)	黒灰色	小破片　4点	
55	No.2			(15.9)	黒灰色	小破片　5点	
56	No.2	(4.2)	(2.5)	(16.8)	黒灰色	両端欠	
57	No.2	(4.4)	(2.55)	(18.8)	黒灰色	片端欠	
58	No.2	(4.35)	(2.4)	(18.9)	黒灰色	片端欠	
59	No.2	(4　)	(2.4)	(18.5)	黒灰色	片端欠	
60	No.2	(4.2)	(2.35)	(16　)	黒灰色	2分の1残	
61	No.2	(3.7)	(2.5)	(18　)	黒灰色	両端欠	
62	No.2	(3.2)	2.55	(16.1)	黒灰色	2分の1残	
63	No.2	4.7	2.55	(20.7)	黒灰色	ほぼ完形	
64	No.2	(3.3)	(2.4)	(9.7)	黒灰色	片端欠	
65	No.2	(3.8)	(2.45)	(13.2)	黒灰色	両端欠　脆い	
66	No.2	(3.8)	2.5	(17.7)	黒灰色	片端欠	
67	No.2	(4　)	2.45	(16.7)	黒灰色	片端欠	
68	No.2	(3.8)	2.45	(16.3)	黒灰色	両端欠	
69	No.2	(4.1)	2.45	(17.6)	黒灰色	片端欠　扁平	
70	No.2	(3.85)	2.55	(18.9)	黒灰色	片端欠	
71	No.3	(3.9)	2.4	(16.5)	黒灰色	片端欠	第164図52
72	No.3	4.4	2.55	21.8	黒灰色	ほぼ完形	第164図53
73	No.3	4.45	(2.5)	(18.7)	黒灰色	4分の1欠	第164図54
74	No.3	(3.9)	2.4	(15.3)	黒灰色	4分の1欠	第164図55
75	No.3	(3.3)	(2.3)	(12.2)	黒灰色	胴部片	
76	No.3	(3.9)	(2.25)	(12.3)	黒灰色	端部残　3点	
77	No.3	(3.7)	(2.2)	(9.8)	黒灰色	胴部片	
78	No.3	(3.6)	(2.35)	(12.8)	黒灰色	胴部片	
79	No.4	(4.1)	(2.45)	(17.4)	黒灰色	片端欠	第164図56
80	No.4	4.5	2.35	(18.6)	黒灰色	一部欠	第164図57
81	No.4	4.5	2.5	(17.8)	黒灰色	一部欠	第164図58
82	No.4	4.2	2.6	(16.8)	黒灰色	3分の1欠	第164図59
83	No.4	(4.2)	2.5	(17.2)	黒灰色	3分の1欠	第164図60
84	No.4	(3.7)	(2.4)	(14.9)	黒灰色	2分の1欠	
85	No.4	(4.1)	2.4	(15.4)	黒灰色	両端欠	
86	No.4	(4.2)	(2.25)	(16.2)	黒灰色	片端欠	
87	No.4	(3.9)	(2.35)	(15.2)	黒灰色	両端欠	
88	No.4	(3.75)	2.5	(15.3)	黒灰色	両端欠	
89	No.4	(3.9)	(2.3)	(13　)	黒灰色	片から胴部欠	
90	No.4	(2.6)	(2.4)	(14.9)	黒灰色	片端欠	
91	No.5	4	(2.3)	(14.3)	黒灰色	斜め整形	第164図61
92	No.5	(4.2)	2.35	(15　)	黒灰色	ほぼ完形	第164図62
93	No.5	(4.2)	2.55	(19.1)	黒灰色	ほぼ完形	第164図63
94	No.5	(4.2)	2.4	(16.5)	黒灰色	一部欠	第164図64
95	No.5	4.4	2.75	(20.2)	黒灰色	一部欠　瘤状	第165図65
96	No.5	(4.4)	2.6	(19.1)	黒灰色	片端欠	第165図66
97	No.5	4.5	2.8	22.4	黒灰色	完形　沈線	第165図67
98	No.5	(3.6)	(2.2)	(12.6)	黒灰色	2分の1残	
99	No.5	(4.6)	(2.2)	(17.2)	黒灰色	破片3点	
100	No.5	(3.9)	(2.4)	(13.1)	黒灰色	両端欠	
101	No.5	(3.7)	(2.1)	(18　)	黒灰色	片端欠	
102	No.5	(4.6)	(2.2)	(19.9)	黒灰色	破片5点	
103	No.5	(3.7)	(2.3)	(10.6)	黒灰色	胴～片端欠	
104	No.5	(3.9)	(2.6)	(15.4)	黒灰色	両端欠	
105	No.5	(4.1)	(2.4)	(15.9)	黒灰色	片端欠	
106	No.6	4.15	2.45	19.9	黒灰色	完形	第165図68
107	No.6	(4.3)	(2.5)	(19.8)	黒灰色	5分の1欠	第165図69
108	No.6	4.35	2.4	(19.8)	黒灰色	一部欠	第165図70
109	No.6	(3.5)	(2.7)	(17　)	黒灰色	2分に1欠	第165図71
110	No.6	(3.9)	2.6	(13.8)	黒灰色	両端欠	
111	No.6	(3.1)	2.45	(13.6)	黒灰色	2分の1残	
112	No.6	(3.5)	(2.3)	(12.4)	黒灰色	3分の1欠	
113	No.6	(3.1)	(2.65)	(14.5)	黒灰色	3分の1欠	
114	No.6	(3.6)	(2.4)	(9.8)	黒灰色	3分の1残	
115	No.6	(2.5)	2.5	(10.7)	黒灰色	3分の1残	
116	No.6	4.6	(2.2)	(12　)	黒灰色	中央部欠　2点	
117	No.6	(2.7)	(2.3)	(9.6)	黒灰色	3分の1残	
118	No.6	(4.5)	(2.1)	(12.8)	黒灰色	2点　接合せず	
119	No.6	(3.3)	(2.6)	(13.9)	黒灰色	中央部欠	
120	No.6	(3.5)	(2.45)	(12.1)	黒灰色	中央部欠	
121	床面	(3.9)	2.5	(15.8)	黒灰色	2分の1残	
122	床面	(4　)	(2.1)		黒灰色	2分の1残	
123	床面	4.45	2.55	(15.8)	黒灰色	周縁欠	
124	床面				黒灰色	小破片	
125	床面				黒灰色	小破片	
126	床面				黒灰色	小破片	
127	床面				黒灰色	小破片	
128	床面				黒灰色	小破片	
129	床面				黒灰色	小破片	

単位（cm、g）（　）は残存値

第2表　92号竪穴住居跡出土投弾形土製品観察表

6号円形周溝状遺構（第161図）

6号円形周溝状遺構はV-W 8－9区に位置し、弥生時代の102号竪穴住居跡や古墳時代の101号竪穴住居跡に切られる。密集する円形周溝状遺構群とはやや離れており、最も近接した2号円形周溝状遺構とも南西12mの距離がある。各種遺構に削平されまた調査区外にも延びていっていることから、現在確認できる規模は南北方向6.2m、東西方向6.7mまでで、平面プランは隅丸方形になりそうである。周溝の幅は50～70cm、深さは20～30cmの範囲に収まる。本遺構も周溝の端部が確認されており、あるいは5号円形周溝状遺構と同様に「の」字状のタイプになるかもしれない。遺物は少なくポリ袋1枚程度で、3点だけ図示した。

土器（第162図1～3）1は壺の口縁部になろうか。摩滅が著しいが、内外面に丹塗が痕跡的に窺える。口縁端部は凹線状にわずかに窪む。2・3は甕の口縁部で、摩滅により器面調整はいずれも不明。

10. 谷　部

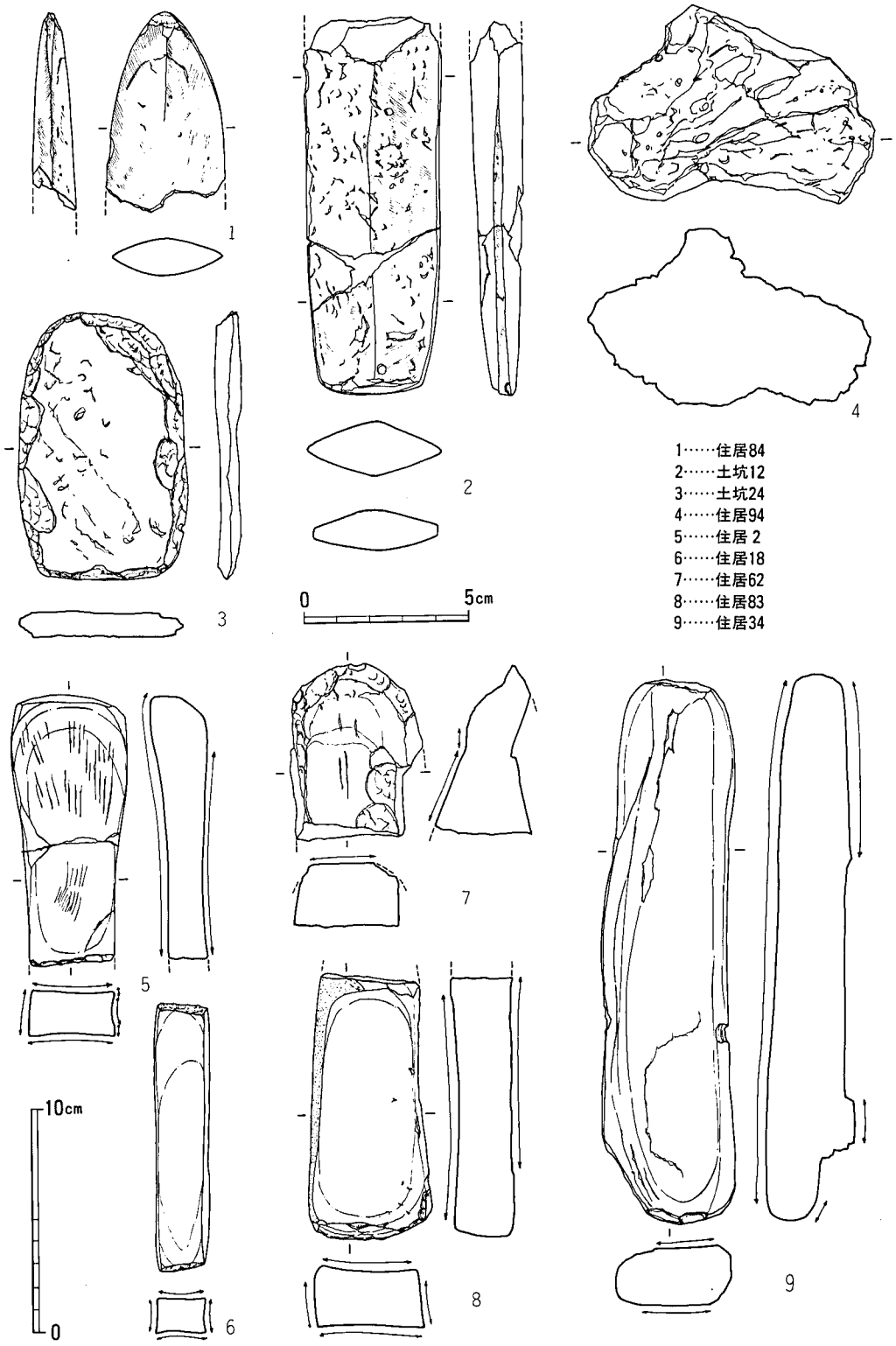
A-B・1－2区にわたって検出された段落ちで、北西に流れる美津留川に並行しており、川の方向に底面も傾斜して谷部を形成している。北西隅が最深部で深さ88cmを測る。現在の段丘部とは50mも東に寄っており、古い時期の河岸段丘の先端を示している。時期としては明確ではないが集落の形成状況からみれば、弥生時代中期にまで遡る可能性のある段丘といえるかもしれない。現美津留川との距離は150mを測る。確認できた範囲は南北20m、東西9.5mである。

11. その他の遺物

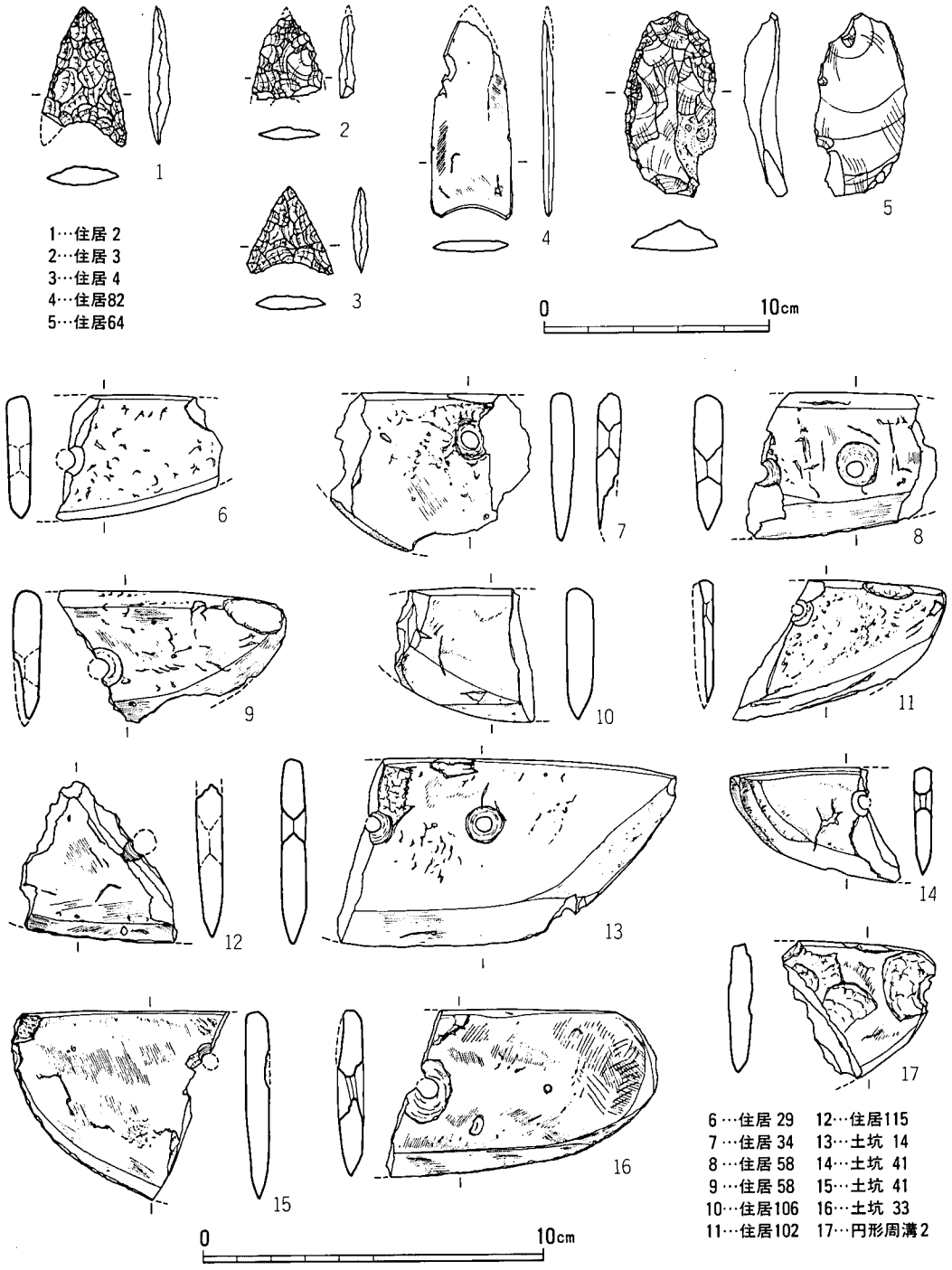
本書は鷹取五反田遺跡－弥生時代遺構編－であり、古墳時代以降の遺構から出土した弥生時代の遺物、および弥生時代のピットと包含層から出土した遺物を除外して報告するものであるが、土製品については投弾が多量に出土しているため、敢えて本書において報告する次第である。

土製品（第163図1、12～14、第165図81～84、87～98）

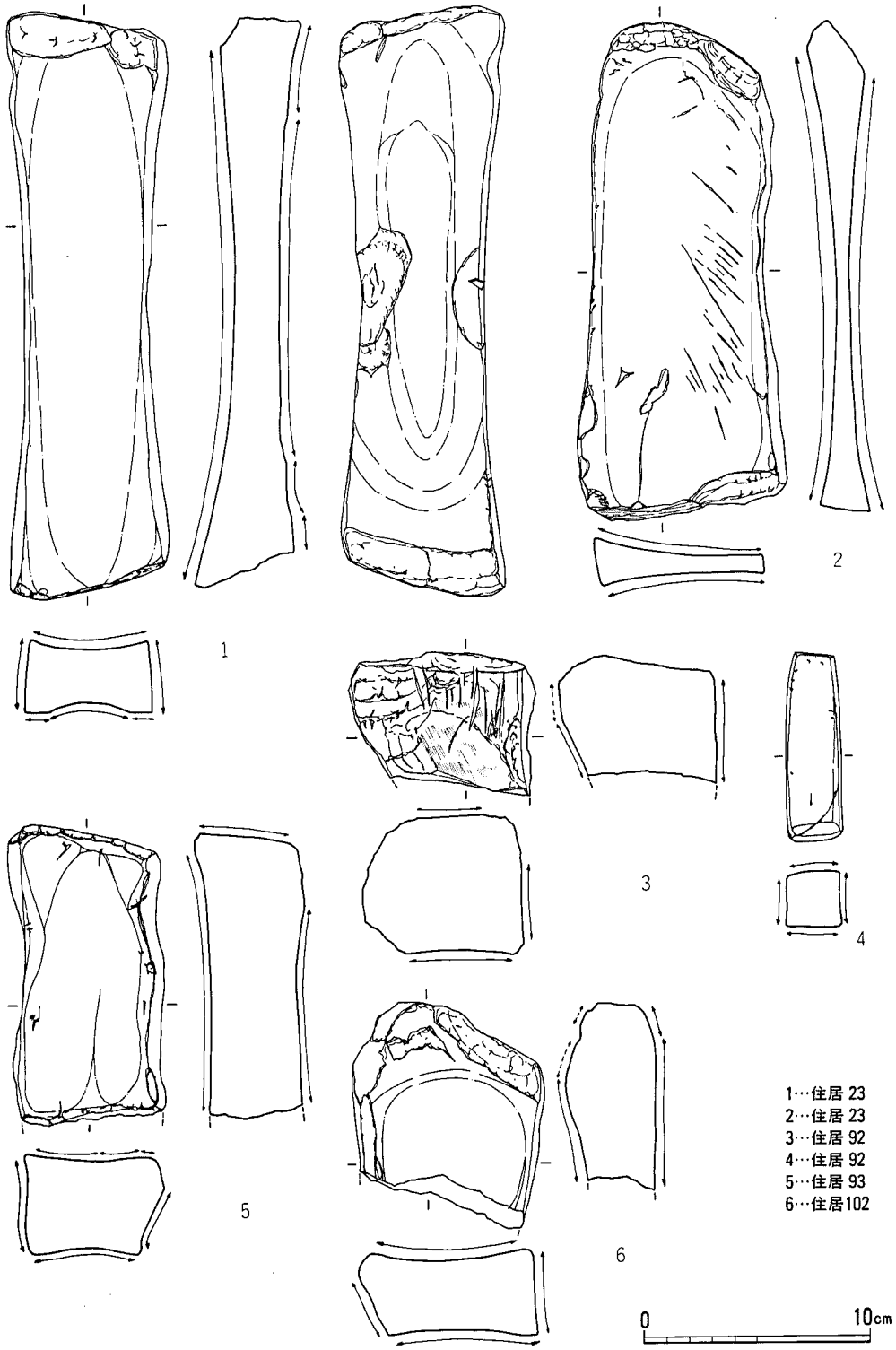
1は扁平な円形有孔土製品の半欠品で、径2.43cm、厚さ0.42cm、孔径0.28cmを測る。古墳時代の46号竪穴住居跡の埋土出土。12～14、81～84、87～98は投弾状土製品。12は古墳時代の55号竪穴住居跡埋土出土で、小型の完形品。淡褐色を呈し、長3.3cm、径1.9cm、重さ8.9gを測る。13・14はやはり古墳時代の74号竪穴住居跡埋土出土で、13は整形時の痕跡が良く残る。長3.65cm、径2.2～2.4cm、重さ14.4g。14は両端部を欠損する資料。81・82はQ8区P1108出土。小型品で、両者とも指による整形痕がわずかに残る。81は長3.85cm、径2.35cm、重さ15.8gで、



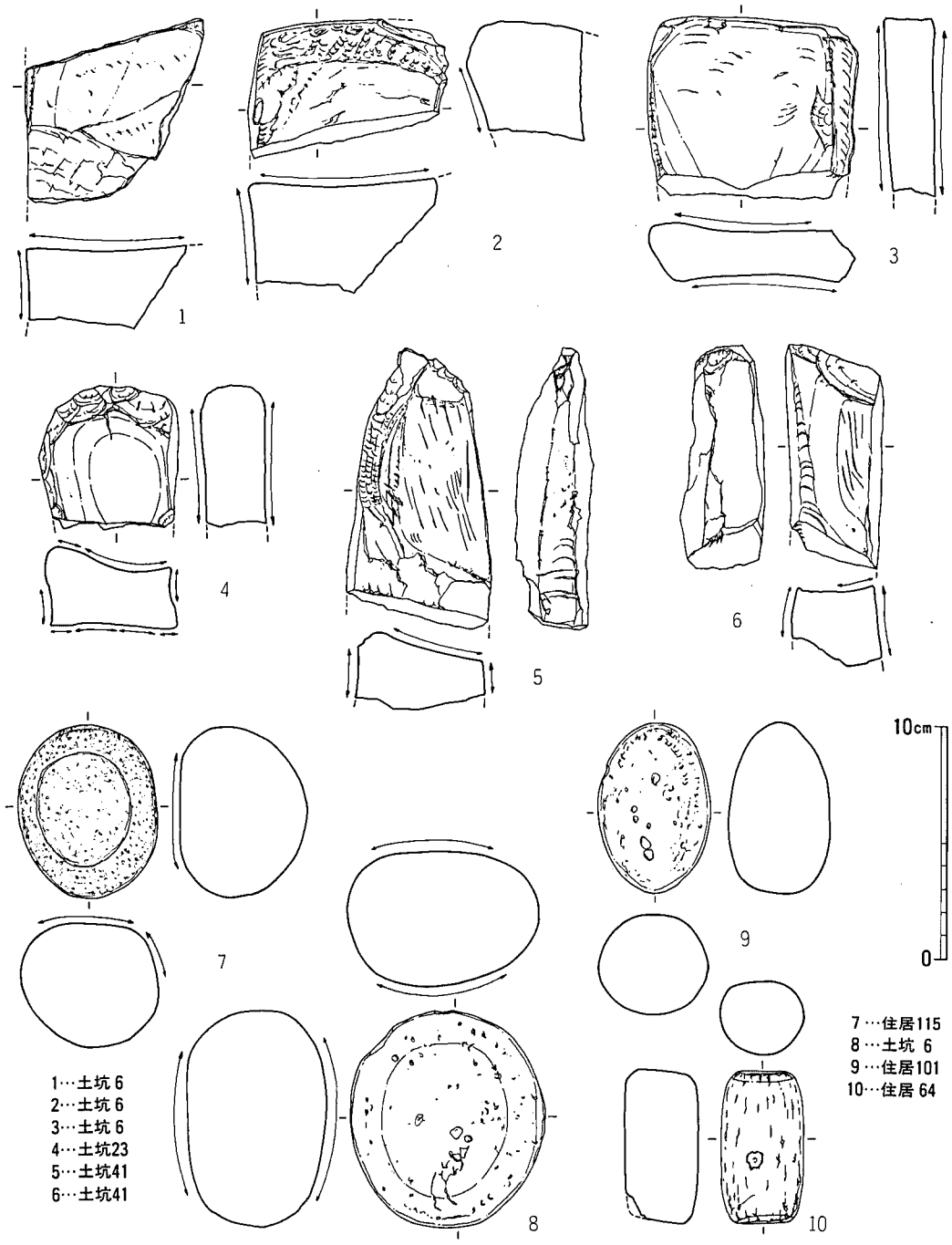
第166図　弥生時代の石器実測図.1（1～5は1/2　6～10は1/3）



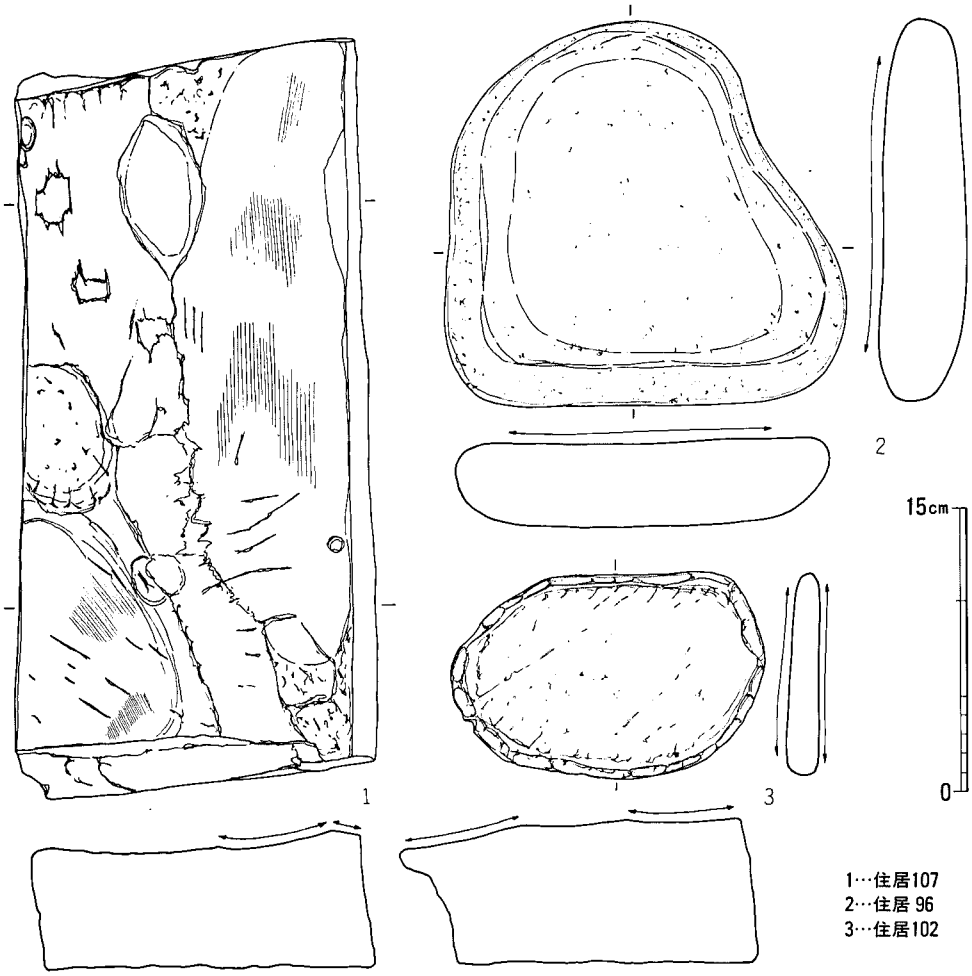
第167図　弥生時代の石器実測図.2（1～5は2/3　6～17は1/2）



第168図　弥生時代の石器実測図.3（1/3）

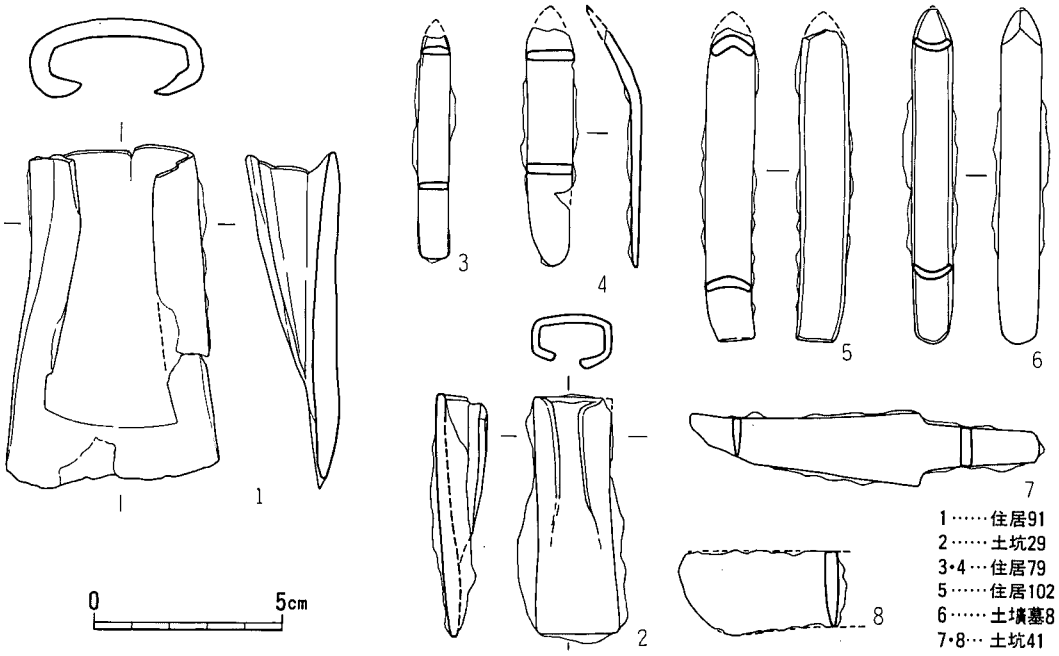


第169図　弥生時代の石器実測図.4（1/3）



第170図　弥生時代の石器実測図.5（1/4）

黒灰色。82は完形品で、長3.9cm、径2.25cm、重さ16.4ｇ。83はＰ６区103号竪穴住居跡東側出土の完形品で下端部を斜めに整形する。褐色を呈し、長3.95cm、径2.3cm、重さ15.7ｇ。84はＲ８区の遺構検出面出土だが82号竪穴住居跡に伴う可能性が強い。淡黄灰色を呈す小型の完形品で、左側縁はやや凹む。長４cm、径2.15～2.3cm、重さ13.3ｇ。87は15号溝状遺構の埋土から出土。長4.85cm、径2.5cm、重さ17.4ｇを測る大型品。88はＦ５区P334出土の完形品。断面はやや扁平である。長4.25cm、径2.3cm、重さ20.2ｇ。89はＰ６区103号竪穴住居跡東側出土の完形品。下端部を斜めに整え、断面も正円に近い。長4.6cm、径2.4cm、重さ19.4ｇ。90はＬ５区P430出土。細身で両先端部を絞る。黒灰色の色調で、長4.4cm、径2.1cm、重さ12.2ｇ。91はＣ４区P18出土。半欠品で、長4.8cm、径2.2cmを測る。92はＭ８区の弥生時代遺構検出面



第171図　竪穴住居跡および土坑出土鉄器実測図（1/2）

出土で、両端を欠損する。上右縁は若干凹む。残長3.8cm、径2.35cm。93～97はＣ７区の94号竪穴住居跡下層より纏まって出土した。径が2.5cm～2.7cmと大きいタイプの一群で、95の下端部は斜めに整え、94の下端部はやや平坦になる。97の左側面には指圧痕が顕著に残る。色調は94が褐色を呈す以外は黒灰色である。93は小型で、長4.1cm、径2.45～2.6cm、重さ19.4ｇ。94は長4.95cm、径2.55cm、重さ21.9ｇ。95は長4.9cm、径2.7cm、重さ25.5ｇ＋α。96は残長4.3cm、径2.65cm、重さ23ｇ＋α。97は残長3.75cm、径2.2～2.45cm、重さ15.5ｇ＋α。93～97の一群は92号竪穴住居跡出土の投弾群と形態、色調がよく類似する。98はＣ７区出土の完形品。上端部はやや平坦になる。長5.15cmと当遺跡出土の投弾状土製品では最大である。径2.65～2.75cm、重さ27.3ｇを測る。

報告書抄録

ふ り が な	たかとりごたんだ　いなざき
書　　名	鷹取五反田遺跡Ⅰ　稲崎A・B遺跡
副 書 名	福岡県浮羽郡吉井町大字鷹取・新治所在遺跡の調査
巻　　次	Ⅰ
シ リ ー ズ 名	一般国道210号　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第9集
編 著 者 名	水ノ江和同・小池史哲
編 集 機 関	福岡県教育委員会
所　在　地	〒812-8575　福岡県福岡市博多区東公園7－7　TEL (092)651-1111
発 行 年 月 日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たかとりごたんだ 鷹取五反田	ふくおかけんうきはぐんよしいまち 福岡県浮羽郡吉井町 おおあざたかとりあざごたんだ 大字鷹取字五反田 318・328・343番地 および字中ノ坪349 番地外	40481	630120	33°20′50″	130°43′40″	1990. 4.15 1990.11.28 1993.10.26 1993.12.10 1994. 5.26 1994.10.26	7,420㎡	道路 (一般国道210号浮羽バイパス建設に伴う事前調査)
いなざき 稲崎A	福岡県浮羽郡吉井町 大字新治字塚本	40481	630132	33°22′39″	130°45′00″	1987. 4.18	1,300㎡	
いなざき 稲崎B	たかはた 字高畑	40481	630133	33°22′39″	130°44′48″	1987. 5.28	530㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 跡	主 な 遺 物	特 記 事 項
鷹取五反田	集落 墓地	弥生中期後半 弥生後期前半	竪穴住居跡　47軒 堀立柱建物跡　2棟 甕棺墓　24基 石棺墓　1基 土壙墓　2基 貯蔵穴　5基 土坑　40基 円形周溝状遺構　6基 谷部	弥生土器・石器・鉄器 投弾形土製品多量	同時期の集落と墓地によって構成される。92号住居跡からは多量の投弾形土製品が出土。91号住居跡からは二次加熱により黒班の消えた弥生土器が出土。
稲崎A	集落	縄文晩期 古墳時代初頭期	包含層 大溝・大溝支流・土坑　1基	縄文土器 古式土師器	古墳時代初頭期の集落遺跡。
稲崎B	集落	古墳時代初頭期	住居状遺構　1軒 小溝　2本	古式土師器	

福岡県行政資料

分類番号　ＪＨ	所属コード　2133051
登録年度　9	登録番号　18

一般国道210号　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第９集

鷹取五反田遺跡Ⅰ

福岡県浮羽郡吉井町大字鷹取所在遺跡の調査

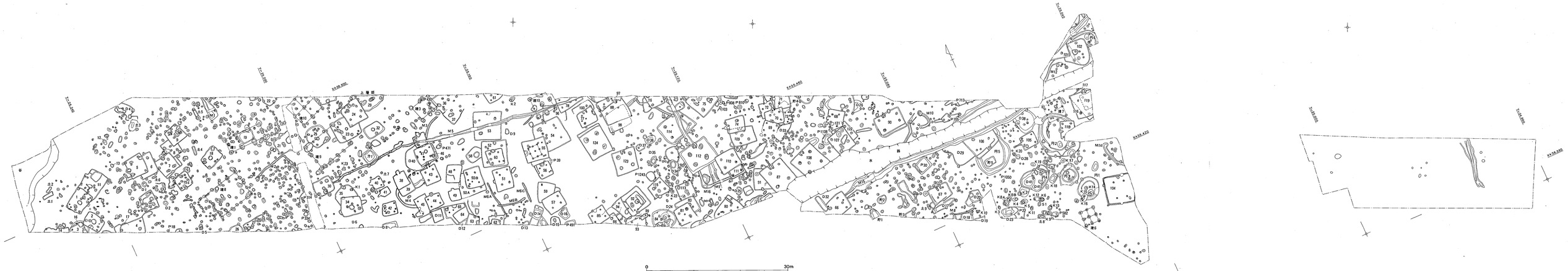
稲崎Ａ・Ｂ遺跡

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

平成10（1998）年３月31日

発行　福岡県教育委員会
〒812-8575　福岡市博多区東公園７番７号
電話（092）651-1111

印刷　株式会社　川島弘文社
〒812-0051　福岡市東区箱崎ふ頭６丁目４番４号



付図　鹿取五反田遺跡遺構配置図（1／300）